

痴人の愛

谷崎潤一郎

青空文庫

一

私はこれから、あまり世間に類例がないだろうと思われる私達夫婦の間柄に就いて、出来るだけ正直に、ざつくばらんに、有りのままの事実を書いて見ようと思います。それは私自身に取って忘れがたない貴い記録であると同時に、恐らくは読者諸君に取っても、きつと何かの参考資料となるに違いない。殊にこの頃のように日本もだんだん国際的に顔が広くなつて来て、内地人と外国人とが盛んに交際する、いろんな主義やら思想やらが這入^{はい}つて来る、男は勿論女もどしどしハイカラになる、と云うような時勢になつて来ると、今まであまり類例のなかつた私たちの如き夫婦関係も、追ひ追ひ諸方に生じるだろうと思われますから。

考えて見ると、私たち夫婦は既にその成り立ちから變つていました。私が始めて現在の私の妻に会つたのは、ちょうど足かけ八年前のことになります。尤も何月の何日だったか、委しいことは覚えていませんが、とにかくその時分、彼女は浅草の雷門の近くにあるカフエエ・ダイヤモンドと云う店の、給仕女をしていたのです。彼女の歳はやつと数え歳の十

五でした。だから私が知った時はまだそのカフエエへ奉公に来たばかりの、ほんの新米だったので、一人前の女給ではなく、その見習い、——まあ云って見れば、ウエイトレスの卵に過ぎなかつたのです。

そんな子供をもうその時は二十八にもなっていた私が何で眼をつけたかと云うと、それは自分でもハッキリとは分りませんが、多分最初は、その児の名前が気に入ったからなのでしょう。彼女はみんなから「直ちゃん」と呼ばれていましたけれど、或るとき私が聞いて見ると、本名は奈緒美なむみと云うのでした。この「奈緒美」という名前が、大変私の好奇心に投じました。「奈緒美」は素敵だ、NAOMIと書くときまるで西洋人のようだと、そう思ったのが始まりで、それから次第に彼女に注意し出したのです。不思議なもので名前がハイカラだとなると、顔だちなども何処どこか西洋人臭く、そうして大そう伶俐りこうそうに見え、

「こんな所の女給にして置くのは惜しいものだ」と考えるようになったのです。

実際ナオミの顔だちは、（断つて置きますが、私はこれから彼女の名前を片仮名で書くことにします。どうもそうしないと感じが出ないのです）活動女優のメリー・ピクフオードに似たところがあって、確かに西洋人じみていました。これは決して私のひいき眼ではありません。私の妻となつてゐる現在でも多くの人がそう云うのですから、事実には違ひない

のです。そして顔だちばかりでなく、彼女を素っ裸にして見ると、その体つきが一層西洋人臭いのですが、それは勿論後になってから分ったことで、その時分には私もそこまでは知りませんでした。ただおぼろげに、きつとああ云うスタイルなら手足の恰好かつこうも悪くはなからうと、着物の着こなし工合から想像していただけでした。

一体十五六の少女の気持と云うものは、肉親の親か姉妹でもなければ、なかなか分りにくいものです。だからカフエエにいた頃のナオミの性質がどんなだったかと云われると、どうも私には明瞭めいりょうな答えが出来ません。恐らくナオミ自身にしたって、あの頃はただ何事も夢中で過したと云うだけでしよう。が、ハタから見た感じを云えば、孰方どっちかと云うと、陰鬱いんうつな、無口な児のように思えました。顔色なども少し青みを帯びていて、譬えたとばこう、無色透明な板ガラスを何枚も重ねたような、深く沈んだ色合をしていて、健康そうではありませんでした。これは一つにはまだ奉公に來たてだったので、外の女給のようにお白粉しろこもつけず、お客や朋輩ほうばいにも馴染なじみがうすく、隅の方に小さくなって黙ってチヨコチヨコ働いていたものだから、そんな風に見えたのでしょう。そして彼女が慥巧しやうこうそうに感ぜられたのも、やっぱりそのせいだったかも知れません。

ここで私は、私自身の経歴を説明して置く必要がありますが、私は当時月給百五十円を貰もら

っている、或る電気会社の技師でした。私の生れは栃木県の宇都宮在で、国の中学校を卒業すると東京へ来て蔵^{くら}前^{まえ}の高等工業へ這入り、そこを出てから間もなく技師になったのです。そして日曜を除く外は、毎日芝口の下宿屋から大井町の会社へ通っていました。

一人で下宿住居^{すまい}をしていて、百五十円の月給を貰っていたのですから、私の生活は可成り楽でした。それに私は、総領息子ではありませんでしたが、郷里の方の親やきょうだいへ仕送りをする義務はありませんでした。と云うのは、実家は相当に大きく農業を営んでいて、もう父親は居ませんでした。が、年老いた母親と、忠実な叔父夫婦とが、万事を切り盛りしてくれたので、私は全く自由な境涯にあつたのです。が、さればと云つて道楽をするのではありませんでした。先ず模範的なサラリー・マン、——質素で、真面目^{まじめ}で、あんまり曲がなさ過ぎるほど凡庸で、何の不平も不満もなく日々の仕事を勤めている、——
——当時の私は大方そんな風だったでしょう。「河合讓治君」と云えば、会社の中でも「君子^{くんし}」という評判があつたくらいですから。

それで私の娯楽と云つたら、夕方から活動写真を見に行くとか、銀座通りを散歩するとか、たまたま奮発して帝劇へ出かけるとか、せいぜいそんなものだったのです。尤も私も結婚前の青年でしたから、若い女性に接触することは無論嫌いではありませんでした。元来が

田舎育ちの無骨者^{ぶこつもの}なので、人づきあい^{ます}が拙く、従つて異性との交際などは一つもなく、まあそのために「君子」にさせられた形だつたでもありませんが、しかし表面が君子であるだけ、心の中はなかなか油断なく、往來を歩く時でも毎朝電車に乗る時でも、女に對しては絶えず注意を配っていました。あたかもそう云う時期^おに於いて、たまたまナオミと云う者が私の眼の前に現れて來たのです。

けれど私は、その当時、ナオミ以上の美人はないときめていた訳では決してありません。電車の中や、帝劇の廊下や、銀座通りや、そう云う場所で擦れ違ふ令嬢のうちには、云うまでもなくナオミ以上に美しい人が沢山あつた。ナオミの器量^{きりやう}がよくなるかどうかは將來の問題で、十五やそこの小娘ではこれから先が楽しみでもあり、心配でもあつた。ですから最初の私の計画は、とにかくこの児を引き取つて世話をしてやろう。そして望みがあ^さりそうなら、大いに教育してやつて、自分の妻に貰^{もら}い受けても差^さ支^しえ^{つか}ない。——と、云うくらいな程度だつたのです。これは一面から云うと、彼女に同情した結果なのですが、他の一面には私自身のあまりに平凡な、あまりに單調なその日暮らしに、多少の変化を与えて見たかつたからでもあるのです。正直のところ、私は長年の下宿住居に飽きていたのだ、何とかして、この殺風景な生活に一点の色彩を添え、温かみを加えて見たいと思つて

あの時分、若しも私が結婚したいなら候補者は大勢あつたでしょう。田舎者ではありませんけれども、体格は頑丈だし、品行は方正だし、そう云つては可笑しいが男前も普通であるし、会社の信用もあつたのですから、誰でも喜んで世話をしてくれたでしょう。が、実のところ、この「世話をされる」と云う事がイヤなのだから、仕方がありませんでした。たとい如何なる美人があつても、一度や二度の見合いでもつて、お互の意気や性質が分る筈はない。「まあ、あれならば」とか、「ちよつときれいだ」とか云うくらいな、ほんの一時の心持で一生の伴侶を定めるなんて、そんな馬鹿なことが出来るものじゃない。それから思えばナオミのような少女を家に引き取つて、徐にその成長を見届けてから、氣に入つたらば妻に貰うと云う方法が一番いい。何も私は財産家の娘だの、教育のある偉い女が欲しい訳ではないのですから、それで沢山なのでした。

のみならず、一人の少女を友達にして、朝夕彼女の発育のさまを眺めながら、明るく晴れやかに、云わば遊びのような氣分で、一軒の家に住むと云うことは、正式の家庭を作るのとは違つた、又格別な興味があるように思えました。つまり私とナオミでたわいのないままごとをする。「世帯を持つ」と云うようなシチ面倒臭い意味でなしに、呑氣なシンブル・ライフを送る。——これが私の望みでした。實際今の日本の「家庭」は、やれ筆笥だ

とか、長火鉢だとか、座布団ざぶとんだとか云う物が、あるべき所に必ずなければいけなかったり、主人と細君と下女との仕事がいやにキチンと分れていたり、近所隣りや親類同士の付き合いがうるさかったりするので、その為ために余計な入費も懸はるし、簡単に済ませることが煩わづら雑ざつになり、窮屈になるし、年の若いサラリー・マンには決して愉快なことでもなく、いいことでもありません。その点に於いて私の計画は、たしかに一種の思いつきだと信じました。

私がナオミにこのことを話したのは、始めて彼女を知ってから二た月ぐらい立った時分だったでしょう。その間、私は始終、暇さえあればカフエエ・ダイヤモンドへ行つて、出来るだけ彼女に親しむ機会を作ったものでした。ナオミは大変活動写真が好きでしたから、公休日には私と一緒に公園の館を覗のぞきに行ったり、その帰りにはちよつとした洋食屋だの、蕎麦屋そばやだのへ寄つたりしました。無口な彼女はそんな場合にもいたって言葉数が少い方で、嬉しいうれいのかつまらないのか、いつも大概はむつとりとしています。そのくせ私が誘うときは、決して「いや」とは云いませんでした。「ええ、行つてもいいわ」と、素直に答えて、何処へでも附いて行くのでした。

一体私をどう云う人間と思つていいのか、どう云うつもりで附いて来るのか、それは分り

ませんでした、まだほんとうの子供なので、彼女は「男」と云う者に疑いの眼を向けようとしなさい。この「伯父さん」は好きな活動へ連れて行って、ときどき御馳走ちそうをしてくれるから、一緒に遊びに行くのだと云うだけの、極く単純な、無邪気な心持でいるのだろうと、私は想像していました。私にしたって、全く子供のお相手になり、優しい親切な「伯父さん」となる以上のことは、当時の彼女に望みもしなければ、素振りにも見せはしなかつたのです。あの時分の、淡い、夢のような月日のことを考え出すと、お伽ときばなし 噺の世界にでも住んでいたようで、もう一度ああ云う罪のない二人になって見たいと、今でも私はそう思わずにはいられません。

「どうだね、ナオミちゃん、よく見えるかね？」

と、活動小屋が満員で、空いた席がない時など、うしろの方に並んで立ちながら、私はよくそんな風に云ったものです。するとナオミは、

「いいえ、ちつとも見えないわ」

と云いながら一生懸命に背伸びをして、前のお客の首と首の間から覗こうとする。

「そんなにしたって見えやしないよ。この木の上へ乗っかって、私の肩に掴つかまって御覧」
そう云って私は、彼女を下から押し上げてやって、高い手すりの横木の上へ腰をかけさせ

る。彼女は両足をぶらんぶらんさせながら、片手を私の肩にあてがって、やっと満足したように、息を凝らして絵の方を視^みつめる。

「面白いかい？」

と云^いえば、

「面白いわ」

と云うだけで、手を叩^{たた}いて愉快がったり、跳び上って喜んだりするようなことはないのですが、賢い犬が遠い物音を聞き澄ましているように、黙って、伶俐^{うなず}そうな眼をパツチ開いて見物している顔つきは、余程写真が好きなのだと領^{うなず}かれました。

「ナオミちゃん、お前^{なか}お腹が減^なつてやしないか？」

そう云つても、

「いいえ、なんにも喰^たべたくない」

と云うこともありますが、減っている時は遠慮なく「ええ」と云うのが常でした。そして洋食なら洋食、お蕎麦ならお蕎麦と、尋ねられればハッキリと喰^たべたい物を答えました。

「ナオミちゃん、お前の顔はメリー・ピックフォードに似ているね」

と、いつのことでしたか、ちょうどその女優の映画を見てから、帰りにとある洋食屋へ寄った晩に、それが話題に上ったことがありました。

「そう」

と云つて、彼女は別にうれしそうな表情もしないで、突然そんなことを言い出した私の顔を不思議そうに見ただけでしたが、

「お前はそうは思わないかね」

と、重ねて聞くと、

「似ているかどうか分らないけれど、でもみんなが私のことを混血児あいのこみたいだつてそう云うわよ」

と、彼女は済まして答えるのです。

「そりやそうだろう、第一お前の名前からして変っているもの、ナオミなんてハイカラな名前を、誰がつけたんだね」

「誰がつけたか知らないわ」

「お父^{とつ}つ あんかねおッ母^かさんかね、——」

「誰^だか、——」

「じゃあ、ナオミちゃんのお父^{とつ}つ あんは何の商売^{しょうばい}をしてるんだい」

「お父^{とつ}つ あんはもう居^ゐないの」

「おッ母^かさんは？」

「おッ母^かさんは居^ゐるけれど、——」

「じゃ、兄弟^{けいだい}は？」

「兄弟^{けいだい}は大勢^{おほい}あるわ、兄^{あに}さんだの、姉^{あね}さんだの、妹^{いもうと}だの、——」

それから後もこんな話はたびたび出たことがありますけれど、いつも彼女は、自分の家庭の事情を聞かれると、ちよつと不愉快な顔つきをして、言葉^{ことば}を濁^{にご}してしまうのでした。で、一緒に遊びに行くときは大概^{たいてい}前の日に約束^{やくそく}をして、きめた時間^{じかん}に公園^{こうえん}のベンチとか、観音^{くわんおん}様^{さま}のお堂^{どう}の前^{まえ}とかで待ち合わせることにしたのですが、彼女は決して時間^{じかん}を違^{ちが}えたり、約束^{やくそく}をすつぽかしたりしたことはありませんでした。何かの都合^{ごうごん}で私^{わたし}の方が遅^{おそ}れたりして、「あんまり待^{まち}たせ過ぎ^{すご}ぎたから、もう帰^{かえ}ってしまったかな」と、案^{あん}じながら行^いって見^みると、矢張^{やじやう}キチンと其^{そこ}処^こに待^{まち}っています。そして私^{わたし}の姿^{すがた}に氣^きが付^つくと、ふいと立ち上^たってつかつ

か此方へ歩いて来るのです。

「御免よ、ナオミちゃん、大分長いこと待っただろう」

私がそう云うと、

「ええ、待ったわ」

と云うだけで、別に不平そうな様子もなく、怒っているらしくもないのでした。或る時などはベンチに待っている約束だったのが、急に雨が降り出したので、どうしているかと思ひながら出かけて行くと、あの、池の側にある何様だかの小さい祠の軒下にしゃがんで、それでもちゃんと待っていたのには、ひどくいじらしい気がしたことがありました。

そう云う折の彼女の服装は、多分姉さんのお譲りらしい古ぼけた銘仙の衣類を着て、めりんす友禅の帯をしめて、髪も日本風の桃割れに結い、うすくお白粉を塗っていました。そしていつでも、継ぎはあたっていましたけれど、小さな足にピツチリと簞まった、恰好のいい白足袋を穿いていました。どういう訳で休みの日だけ日本髪にするのかと聞いて見ても「内でそうしろと云うもんだから」と、彼女は相変らず委しい説明はしませんでした。 「今夜はおそくなったから、家の前まで送って上げよう」

私は再々、そう云ったこともありましたが、

「いいわ、直き近所だから独りで帰れるわ」

と云つて、花屋敷の角まで来ると、きつとナオミは「左様なら」と云い捨てながら、
東町くの横丁の方へバタバタ駆け込んでしまうのでした。 千せんぞ

そうです、——あの頃のことを余りくどくど記す必要はありませんが、一度私は、やや打ち解けて、彼女とゆつくり話をした折がありましたつけ。

それは何でもしとくと春雨の降る、生暖い四月の末の宵だったでしょう。ちようどその晩はカフエエが暇で、大そう静かだったので、私は長いことテーブルに構えて、ちびちび酒を飲んでいました。——こう云うとひどく酒飲みのようですけれど、実は私は甚だ下戸この方なので、時間つぶしに、女の飲むような甘いコクテルを拵こしらえて貰もらつて、それをホンの一と口ずつ、舐なめるように啜すっていたのに過ぎないのですが、そこへ彼女が料理を運んで来てくれたので、

「ナオミちゃん、まあちよつと此処ここへおかけ」

と、いくらか酔つた勢でそう云いました。

「なあに」

と云つて、ナオミは大人しく私の側へ腰をおろし、私がポケットから敷島を出すと、すぐ

にマツチを擦ってくれました。

「まあ、いいだろう、此処で少うししゃべって行つても。——今夜はあまり忙しくもなさそうだから」

「ええ、こんなことはめつたにありはしないのよ」

「いつもそんなに忙しいかい？」

「忙しいわ、朝から晩まで、——本を読む暇もありやしないわ」

「じゃあナオミちゃんは、本を読むのが好きなんだね」

「ええ、好きだわ」

「一体どんな物を読むのさ」

「いろいろな雑誌を見るわ、読む物なら何でもいいの」

「そりや感心だ、そんなに本が読みたかったら、女学校へでも行けばいいのに」

私はわざとそう云つて、ナオミの顔を覗き込むと、彼女は癩しやくに触つたのか、つんと済まして、あらぬ方角をじつと視つめているようでしたが、その眼の中には、明かに悲しいような、遣やる瀬せないような色が浮かんでいたのでした。

「どうだね、ナオミちゃん、ほんとうにお前、学問をしたい気があるかね。あるなら僕が

習わせて上げてでもいいけれど」

それでも彼女が黙っていますから、私は今度は慰めるような口調で云いました。

「え？ ナオミちゃん、黙っていないで何とかお云いよ。お前は何をやりたいんだい。何が習って見たいんだい？」

「あたし、英語が習いたいわ」

「ふん、英語と、——それだけ？」

「それから音楽もやってみたいの」

「じゃ、僕が月謝を出してやるから、習いに行ったらいいじゃないか」

「だって女学校へ上るのには遅過ぎるわ。もう十五なんですもの」

「なあに、男と違って女は十五でも遅くはないさ。それとも英語と音楽だけなら、女学校へ行かないだって、別に教師を頼んだらいいさ。どうだい、お前真面目まじめにやる気があるかい？」

「あるにはあるけれど、——じゃ、ほんとうにやらしてくれる？」

そう云ってナオミは、私の眼の中を俄にわかにハッキリ見据にえました。

「ああ、ほんとうとも。だがナオミちゃん、もしそうなれば此処こゝに奉公している訳には行

かなくなるが、お前の方はそれで差支さしつかえないのかね。お前が奉公を止めていいなら、僕はお前を引取って世話をしてみてもいいんだけど、………そうして何処どこまでも責任を以もつて、立派な女に仕立ててやりたいと思うんだけど」

「ええ、いいわ、そうしてくれば」

何の躊躇ちゆうちよするところもなく、言下に答えたキツパリとした彼女の返辞に、私は多少の驚きを感じないではいられませんでした。

「じゃ、奉公を止めると云うのかい？」

「ええ、止めるわ」

「だけどナオミちゃん、お前はそれでいいにしたって、おッ母さんや兄さんが何と云うか、家の都合を聞いて見なけりやならないだろうが」

「家の都合なんか、聞いて見ないでも大丈夫だわ。誰も何とも云う者はありやしないの」と、口ではそう云っていたものの、その実彼女がそれを案外気にしていたことは確かでした。つまり彼女のいつもの癖で、自分の家庭の内幕を私に知られるのが嫌さに、わざと何でもないような素振りを見せていたのです。私もそんなに嫌がるものを無理に知りたくはないのですが、しかし彼女の希望を実現させる為ためには、矢張どうしても家庭を訪れて

彼女の母なり兄なりに篤^{とく}と相談をしなければならぬ。で、二人の間にその後だんだん話が進行するに従い、「一遍お前の身内の人に会わしてくれろ」と、何度もそう云ったのですけれど、彼女は不思議に喜ばないで、

「いいのよ、会ってくれないでも。あたし自分で話をするわ」と、そう云うのが極^きまり文句でした。

私はここで、今では私の妻となつてゐる彼女の爲めに、「河合夫人」の名誉の爲めに、強^しいて彼女の不機嫌を買つてまで、当時のナオミの身許^{みもと}や素性^{すじょう}を洗い立てる必要はありませんから、成るべくそれには触れないことにして置きましょう。後で自然と分つて来る時もありましょうし、そうでないまでも彼女の家が千束町にあつたこと、十五の歳^{とし}にカフエ工の女給に出されてゐたこと、そして決して自分の住居を人に知らせようとしなかつたことなどを考えれば、大凡^{おおおよ}そんな家庭であつたかは誰にも想像がつく筈^{はず}ですから。いや、そればかりではありません、私は結局彼女を説き落して母だの兄だのに会つたのですが、彼等は殆ど^{ほとん}自分の娘や妹の貞操と云うことに就いては、問題にしていないのです。私が彼等に持ちかけた相談と云うのは、折角当人も学問が好きだと云うし、あんな所に長く奉公させて置くのも惜しい児^このように思うから、其方^{そちら}でお差支えがないのなら、どうか私に

身柄を預けては下さるまいか。どうせ私も十分な事は出来まいけれど、女中が一人欲しいと思つていた際でもあるし、まあ台所や拭き掃除の用事ぐらいはして貰つて、そのあい間に一と通りの教育はさせて上げますが、と、勿論私の境遇だのまだ独身であることなどをすっかり打ち明けて頼んで見ると、「そうして戴ければ誠に当人も仕合わせでして、……」と云うような、何だか張合いがなさ過ぎるくらいな挨拶でした。全くこれではナオミの云う通り、会う程のことはなかつたのです。

世の中には随分無責任な親や兄弟もあるものだ、私は、その時つくづくと感じましたが、それだけ一層ナオミがいじらしく、衰れに思えてなりませんでした。何でも母親の言葉に依ると、彼等はナオミを持て扱つていたらしいので、「実はこの児は芸者にする筈でございましたのを、当人の氣が進みませんものですから、そういうまでも遊ばせて置く訳にも参らず、抛んどころなくカフエエへやつて置きましたので」と、そんな口上でしたから、誰かが彼女を引き取つて成人させてくれさえすれば、まあともかくも一と安心だと云うような次第だったのです。ああ成る程、それで彼女は家にいるのが嫌だものだから、公休日にはいつも戸外へ遊びに出て、活動写真を見に行ったりしたんだなど、事情を聞いてやつと私もその謎が解けたのでした。

が、ナオミの家庭がそう云う風であつたことは、ナオミに取つても私に取つても非常に幸だつた訳で、話が極まると直きに彼女はカフエエから暇を貰い、毎日々々私と二人で適当な借家を捜しに歩きました。私の勤め先が大井町でしたから、成るべくそれに便利な所を選ぼうと云うので、日曜日には朝早くから新橋の駅に落ち合い、そうでない日はちようど会社の退^ひけた時刻に大井町で待ち合わせて、蒲^{かまた}田、大森、品川、目黒、主としてあの辺の郊外から、市中では高^{たかなわ}輪や田町や三田あたりを廻つて見て、さて帰りには何処かで一緒に晩飯をたべ、時間があれば例の如^{ごと}く活動写真を覗^{のぞ}いたり、銀座通りをぶらついたりして、彼女は千束町の家へ、私は芝口の下宿へ戻る。たしかその頃は借家が払^{ふつてい}底な時でしたから、手頃な家がなかなかオイソレと見つからないで、私たちは半月あまりこうして暮らしたものでした。

もしもあの時分、麗^{うらら}かな五月の日曜日の朝などに、大森あたりの青葉の多い郊外^{みち}の路を、肩を並べて歩いている会社員らしい一人の男と、桃割れに結った見すばらしい小娘の様子を、誰かが注意していたとしたら、まあどんな風に思えたでしょうか？ 男の方は小娘を「ナオミちゃん」と呼び、小娘の方は男を「河合さん」と呼びながら、主従ともつかず、兄妹ともつかず、さればと云^いつて夫婦とも友達ともつかぬ恰好で、互に少し遠慮しいしい

語り合ったり、番地を尋ねたり、附近の景色を眺めたり、ところどころの生垣や、邸の庭や、路端などに咲いている花の色香を振り返ったりして、晩春の長い一日を彼方此方と幸福そうに歩いていたこの二人は、定めし不思議な取り合わせだったに違いありません。花の話で想い出すのは、彼女が大変西洋花を愛していて、私などにはよく分らないいろいろな花の名前——それも面倒な英語の名前を沢山知っていたことでした。カフエエに奉公していた時分に、花瓶の花を始終扱いつけていたので自然に覚えたのだそうですが、通りすがりの門の中なぞに、たまたま温室があつたりすると、彼女は眼敏くも直ぐ立ち止まつて、

「まあ、綺麗な花！」

と、さも嬉しそうに叫んだものです。

「じゃ、ナオミちゃんは何の花が一番好きだね」

と、尋ねてみたとき、

「あたし、チューリップが一番好きよ」

と、彼女はそう云ったことがあります。

浅草の千束町のような、あんなゴミゴミした路次の中に育ったので、却つてナオミは反動

的にひろびろとした田園を慕い、花を愛する習慣になったのでありましようか。堇^{すみれ}、たんぽぽ、げんげ、桜草、——そんな物でも畑の畔^{あぜ}や田舎道などに生えていると、忽ち^{たちま}チヨコと駆けて行つて摘もうとする。そして終日歩いているうちに彼女の手には摘まれた花が一杯になり、幾つとも知らない花束が出来、それを大事に帰り途^{みち}まで持つて来ます。「もうその花はみんな萎^{しぼ}んでしまったじゃないか、好^いい加減に捨てておしまい」そう云つても彼女はなかなか承知しないで、

「大丈夫よ、水をやつたら又直ぐ生きツ返るから、河合さんの机の上へ置いたらいいわ」と、別れるときにその花束をいつも私にくれるのでした。

こうして方々捜し廻つても容易にいい家が見つからないで、散々迷ひ抜いた揚句、結局私たちが借りることになったのは、大森の駅から十二三町行つたところの省線電車の線路に近い、とある一軒の甚だお粗末な洋館でした。所謂^{いわゆる}「文化住宅」と云う奴^{やつ}、——まだあの時分はそれがそんなに流行^{はや}つてはいませんでした、近頃の言葉で云えばさしずめそう云つたものだつたでしょう。勾配^{こうばい}の急な、全体の高さの半分以上もあるかと思われる、赤いスレートで葺^ふいた屋根。マッチの箱のように白い壁で包んだ外側。ところどころに切つてある長方形のガラス窓。そして正面のポーチの前に、庭と云うよりは寧^{むし}ろちよつとし

た空地がある。と、先ずそんな風な恰好で、中に住むよりは絵に画いた方が面白そうに見つきでした。もつと尤もそれはその筈なので、もとこの家は何とか云う絵かきが建てて、モデル女を細君にして二人で住んでいたのだそうです。従つて部屋の取り方などは随分不便に出来ていました。いやにだだ広いアトリエと、ほんのささやかな玄関と、台所と、階下にはたったそれだけしかなく、あとは二階に三畳と四畳半とがありましたけれど、それとて屋根裏の物置小屋のようなもので、使える部屋ではありませんでした。その屋根裏へ通うのにはアトリエの室内に梯子段はしごだんがついていて、そこを上ると手すりを繞めぐらした廊下があり、あたかも芝居の栈敷さしきのように、その手すりからアトリエを見おろせるようになっていました。

ナオミは最初この家の「風景」を見ると、

「まあ、ハイカラなこと！ あたしこう云う家がいいわ」

と、大そう気に入った様子でした。そして私も、彼女がそんなに喜んだので直ぐ借りることに賛成したのです。

多分ナオミは、その子供らしい考で、間取りの工合など実用的でなくつても、お伽噺ときばなしの挿絵のような、一風変つた様式に好奇心を感じたのでしょう。たしかにそれは呑気のんきな青

年と少女とが、成るだけ世帯じみないように、遊びの心持で住まおうと云うにはいい家でした。前の絵かきとモデル女もそう云うつもりで此処に暮らしていたのでしようが、実際たった二人でいるなら、あのアトリエの一と間だけでも、寝たり起きたり食ったりするに十分用が足りたのです。

三

私がいよいよナオミを引き取って、その「お伽噺の家」へ移ったのは、五月下旬のことでしたらう。這入^{はい}つて見ると思ったほどに不便でもなく、日あたりのいい屋根裏の部屋からは海が眺められ、南を向いた前の空地は花壇を造るのに都合がよく、家の近所をときどき省線の電車の通るのが瑕^{きず}でしたけれど、間にちよつとした田圃^{たんぼ}があるのでそれもそんなにやかましくはなく、先^まずこれならば申し分のない住居^{すまい}でした。のみならず、何分そう云う普通の人には不適當な家でしたから、思いの外に家賃が安く、一般に物価の安いあの頃のことではありましたが、敷金なしの月々二十円というので、それも私には気に入りました。「ナオミちゃん、これからお前は私のことを『河合さん』と呼ばないで『讓治さん』とお

呼び。そしてほんとに友達のように暮らそうじゃないか」

と、引越した日に私は彼女に云い聞かせました。勿論私の郷里の方へも、今度下宿を引払って一軒家を持ったこと、女中代りに十五になる少女を雇い入れたこと、などを知らせてやりましたけれど、彼女と「友達のように」暮らすとは云ってやりませんでした。国の方から身内の者が訪ねて来ることはめつたにないのだし、いずれそのうち、知らせる必要が起った場合には知らせてやろうと、そう考えていたのです。

私たちは暫くの間、この珍らしい新居にふさわしいいろいろの家具を買い求め、それらをそれぞれ配置したり飾りつけたりするために、忙しい、しかし楽しい月日を送りました。

私は成るべく彼女の趣味を啓発するように、ちよつとした買物をするのにも自分一人では極め^きないで、彼女の意見を云わせるようにし、彼女の頭から出る考を出来るだけ採用したものです。もともと筆^{たんす}笥^すだの長火鉢だのと云うような、在り来たりの世帯道具は置き所のない家であるだけ、従つて選択も自由であり、どうしても自分等の好きなように意匠を施せるのでした。私たちは印度更紗^{インドさらさ}の安物を見つけて来て、それをナオミが危^{こわ}ツかしい手つきで縫つて窓^{まど}かけに作り、芝口の西洋家具屋から古い籐^{とういす}椅子だのソファだの、安樂椅子だの、テーブルだのを搜して来てアトリエに並べ、壁にはメリー・ピクフォードを始め、

アメリカの活動女優の写真を二つ三つ吊りました。そして私は寝道具なども、出来ることなら西洋流にしたいと思つたのですけれど、ベッドを二つも買うとなると入費が懸るばかりでなく、夜具布団ふとんなら田舎の家から送つて貰もらえる便宜があるので、とうとうそれはあきらめなければなりませんでした。が、ナオミの為に田舎から送つてよこしたのは、女中を寝かす夜具でしたから、お約束の唐草模様の、ゴワゴワした木綿の煎餅せんべい布団でした。私は何だか可哀かわいそうな気がしたので、

「これではちよつとひど過ぎるね、僕の布団と一枚取換えて上げようか」
と、そう云いましたが、

「ううん、いいの、あたしこれで沢山」

と云つて、彼女はそれを引つ被かぶつて、独り淋さびしく屋根裏の三畳の部屋に寝ました。

私は彼女の隣りの部屋——同じ屋根裏の、四畳半の方へ寝るのですが、毎朝々々、眼をさますと私たちは、向うの部屋と此方の部屋とで、布団の中にもぐりながら声を掛け合つたものでした。

「ナオミちゃん、もう起きたかい」
と、私が云います。

「ええ、起きてるわ、今もう何時？」

と、彼女が応じます。

「六時半だよ、——今朝は僕がおまんまを炊いてあげようか」

「そう？ 昨日あたしが炊いたんだから、今日は譲治さんが炊いてもいいわ」

「じゃ仕方がない、炊いてやろうか。面倒だからそれともパンで済ましとうるか」

「ええ、いいわ、だけど譲治さんは随分ずるいわ」

そして私たちは、御飯がたべたければ小さな土鍋どなべで米を炊かしぎ、別にお櫃ひつへ移すまでもなく

テーブルの上へ持つて来て、罐詰いか何かを突ツつきながら食事をします。それもうるさく

て厭いやだと思えば、パンに牛乳にジャムでごまかしたり、西洋菓子ちそうを摘まんで置いたり、晩

飯などはそばやうどんちそうで間に合わせたり、少し御馳走ちそうが欲しい時には二人で近所の洋食屋

まで出かけて行きます。

「譲治さん、今日はビフテキをたべさせてよ」

などと彼女は、よくそんなことを云ったものです。

朝飯を済ませると、私はナオミを独り残して会社へ出かけます。彼女は午前中は花壇の草花をいじくったりして、午後になるとカラッポの家に錠をおろして、英語と音楽の稽古けいこに

行きました。英語は寧ろ始めから西洋人に就いた方がよからうと云うので、目黒に住んでいる亜米利加人の老嬢のミス・ハリソンと云う人の所へ、一日置きに会話とリーダーを習いに行つて、足りないところは私が家でときどき浚^{さら}つてやることにしました。音楽の方は、これは全く私にはどうしたらいいか分かりませんでした。二三年前に上野の音楽学校を卒業した或^ある婦人が、自分の家でピアノと声楽を教えると云う話を聞き、この方は毎日芝の伊皿^{いさら}子まで一時間ずつ授業を受けに行くのでした。ナオミは銘仙の着物の上に紺のカシミヤの袴^{はかま}をつけ、黒い靴下に可愛^{かわい}い小さな半靴^はを穿^はき、すっかり女学生になりすまして、自分の理想がようようかなつた嬉しさに胸をときめかせながら、せっせと通いました。おり帰り途などに彼女と往来で遇^あつたりすると、もうどうしても千束町に育つた娘で、カフェエの女給をしていた者とは思えませんでした。髪もその後は桃割れに結つたことは一度もなく、リボンで結んで、その先を編んで、お下げにして垂^たらしていました。

私は前に「小鳥を飼うような心持」と云いましたつけが、彼女は此方^{こつち}へ引き取られてから顔色などもだんだん健康そうになり、性質も次第に変つて来て、ほんとうに快活な、晴れやかな小鳥になつたのでした。そしてそのただッ広いアトリエの一と間は、彼女のためには大きな鳥籠^{とりかご}だったのです。五月も暮れて明るい初夏の氣候が来る。花壇の花は日増し

に伸びて色彩を増して来る。私は会社から、彼女は稽古から、夕方家へ帰って来ると、印度更紗の窓かけを洩^もれる太陽は、真つ白な壁で塗られた部屋の四方を、いまだにカツキリと昼間のように照らしている。彼女はフランクネルの单衣^{ひとえ}を着て、素足にスリッパを突ツかけて、とんとん床を踏みながら習つて来た唄^{うた}を歌ったり、私を相手に眼隠しだの鬼ごっこをして遊んだり、そんな時にはアトリエ中をぐるぐると走り廻つてテーブルの上を飛び越えたり、ソオファの下にもぐり込んだり、椅子を引つ繰り覆^{かえ}したり、まだ足らないで梯子段を駆け上がったは、例の栈敷のような屋根裏の廊下を、鼠^{ねずみ}の如くチョコチョコと往^いつたり来たりするのでした。一度は私が馬になつて彼女を背中に乗せたまま、部屋の中を這つて歩いたことがありました。

「ハイ、ハイ、ドウ、ドウ！」

と云いながら、ナオミは手拭^{てぬぐい}を手綱にして、私にそれを咬^{くわ}えさせたりしたものです。矢張そう云う遊びの日の出来事でしたらう、——ナオミがきやつきやつと笑いながら、あまり元気に梯子段を上ったり下りたりし過ぎたので、とうとう足を踏み外して頂^{てっぺん}辺から転げ落ち、急にしくしく泣き出したことがありましたのは。

「おい、どうしたの、——何処^{どこ}を打ったんだか見せて御覧」

と、私がそう云つて抱き起すと、彼女はそれでもまだしくしくと鼻を鳴らしつつ、袂をまくつて見せましたが、落ちる拍子に釘か何かに触つたのでしよう、ちようど右腕の肱のころの皮が破れて、血がにじみ出ているのでした。

「何だい、これッぽちの事で泣くなんて！　さ、絆瘡膏を貼つてやるから此方へおいで」
そして膏藥を貼つてやり、手拭を裂いて繃帶をしてやる間も、ナオミは一杯涙をためて、ぼたぼた涙を滴らしながらしやくり上げる顔つきが、まるで頑是ない子供のようでした。傷はそれから運悪く膿を持つて、五六日直りませんでした、毎日繃帶を取り替えてやる度毎に、彼女はきつと泣かないことはなかったのです。

しかし、私は既にその頃ナオミを恋していたかどうか、それは自分にはよく分りません。そう、たしかに恋してはいたのでしようが、自分自身のつもりでは寧ろ彼女を育ててやり、立派な婦人に仕込んでやるのが楽しみなので、ただそれだけでも満足出来るように思つていたので。が、その年の夏、会社の方から二週間の休暇が出たので、毎年の例で私は帰省することになり、ナオミを浅草の実家へ預け、大森の家に戸締りをして、さて田舎へ行つて見ると、その二週間と云うものが、たまらなく私には単調で、淋しく感ぜられたものです。あの児が居ないとこんなにもつまらないものか知らん、これが恋愛の初まりなので

はないか知らん、と、その時始めて考えました。そして母親の前を好い加減に云い繕って、予定を早めて東京へ着くと、もう夜の十時過ぎでしたけれど、いきなり上野の停車場からナオミの家までタクシーを走らせました。

「ナオミちゃん、帰って来たよ。角に自動車が待たしてあるから、これから直ぐに大森へ行こう」

「そう、じゃ今直ぐ行くわ」

と云って、彼女は私を格子こうしの外へ待たして置いて、やがて小さな風呂敷包ふろしきを提げながら出て来ました。それは大そう蒸し暑い晩のことでしたが、ナオミは白っぽい、ふわふわした、薄紫の葡萄ぶどうの模様のあるモスリンの単衣まとを纏まとって、幅のひろい、派手な鴝色ときいろのリボンで髪を結んでいました。そのモスリンは先せん達だつてのお盆に買ってやったので、彼女はそれを留守の間に、自分の家で仕立てて貰って着ていたのです。

「ナオミちゃん、毎日何をしていたんだい？」

車が賑にぎやかな広小路の方へ走り出すと、私は彼女と並んで腰かけ、こころもち彼女の方へ顔をすり寄せるようにしながら云いました。

「あたし毎日活動写真を見に行ってたわ」

「じゃ、別に淋しくはなかったらうね」

「ええ、別に淋しいことなんかなかったけれど、……………」
そう云つて彼女はちよつと考えて、

「でも讓治さんは、思つたより早く歸つて来たのね」

「田舎にいたつてつまらないから、予定を切り上げて来ちまったんだよ。やっぱり東京が一番だなア」

私はそう云つてほつと溜息ためいきをつきながら、窓の外にちらちらしている都会の夜の花やかな灯影ほかげを、云いようのない懐かしい氣持なつで眺めたものです。

「だけどあたし、夏は田舎もいいと思うわ」

「そりや田舎にもよりけりだよ、僕の家なんか草深い百姓家で、近所の景色は平凡だし、名所古蹟こせきがある訳じやなし、真つ昼間から蚊だの蠅はえだのがぶんぶん呻うなつて、とても暑くつてやり切れやしない」

「まあ、そんな所？」

「そんな所さ」

「あたし、何処か、海水浴へ行きたいなあ」

突然そう云ったナオミの口調には、だだッ児のような可愛らしさがありました。

「じゃ、近いうちに涼しい処ところへ連れて行こうか、鎌倉がいいかね、それとも箱根かね」

「温泉よりは海がいいわ、——行きたいなア、ほんとうに」

その無邪氣そうな声だけを聞いていると、矢張以前のナオミに違いないのでしたが、何だかほんの十日ばかり見なかった間に、急に身体からだが伸び伸びと育って来たようで、モスリンの単衣の下に息づいている円みを持った肩の形や乳房のあたりを、私はそつと偷ぬすみ視みみないではいられませんでした。

「この着物はよく似合うね、誰に縫って貰ったの？」
と、暫く立つてから私は云いました。

「おッ母かさんが縫ってくれたの」

「内の評判はどうだった、見立てが上手だと云わなかったかい」

「ええ、云ったわ、——悪くはないけれど、あんまり柄がハイカラ過ぎるツて、——」

「おッ母さんがそう云うのかい」

「ええ、そう、——内の人たちにやなんにも分りやしないのよ」

そう云って彼女は、遠い所を視つめるような眼つきをしながら、

「みんながあたしを、すっかり変ったって云ってたわ」

「どんな風に変ったって？」

「恐ろしくハイカラになっちゃったって」

「そりやそうだろう、僕が見たってそうだからなあ」

「そうかしら。——一遍日本髪に結って御覧て云われたけれど、あたしイヤだから結わなかつたわ」

「じゃあそのリボンは？」

「これ？ これはあたしが仲店なかみせへ行つて自分で買ったの。どうか？」

と云つて、頸くびをひねつて、さらさらとした油気のない髪の毛を風に吹かせながら、そこにひらひら舞っている鶉色の布を私の方へ示しました。

「ああ、よく映るね、こうした方が日本髪よりいくらか知れやしない」

「ふん」

と、彼女は、その獅子ししツ鼻ばなの先を、ちよいとしゃくつて意を得たように笑いました。悪く云えば小生意気なこの鼻先の笑いが彼女の癖ではありましたけれど、それが却かえつて私の眼には大へん伶俐りじょうそうに見えたものです。

四

ナオミがしきりに「鎌倉へ連れてツてよう！」とねだるので、ほんの二三日の滞在のつもりで出かけたのは八月の初め頃でした。

「なぜ二三日でなけりやいけないの？　行くなら十日か一週間ぐらい行っていないけりやつまらないわ」

彼女はそう云つて、出がけにちよつと不平そうな顔をしましたが、何分私は会社の方が忙がしいという口実の下に郷里を引き揚げて来たのですから、それがバレると母親の手前、少し工合が悪いのでした。が、そんなことをいうと却つて彼女が肩身の狭い思いをするであらうと察して、

「ま、今年は二三日で我慢をしてお置き、来年は何処か變つたところへゆつくり連れて行つて上げるから。——ね、いいじゃないか」

「だって、たった二三日じゃあ」

「そりやそうだけれども、泳ぎたけりや歸つて来てから、大森の海岸で泳げばいいじゃないやな

いか」

「あんな汚い海で泳げはしないわ」

「そんな分らないことを云うもんじゃないよ、ね、いい児だからそうおし、その代り何か着物を買ってやるから。——そう、そう、お前は洋服が欲しいと云っていたじゃないか、だから洋服を^{こしら}へて上げよう」

その「洋服」というえさに釣られて、彼女はやつと納得が行ったのでした。

鎌倉では^{はせ}長谷の金波楼と云う、あまり立派でない海水旅館へ泊りました。それに就いて今から思うと可笑^{おか}しな話があるのです。と云うのは、私のふところにはこの半期に貰^{もら}ったボ—ナスが大部分残っていましたから、本来ならば何も二三日滞在するのに儉約する必要はなかったのです。それに私は、彼女と始めて泊りがけの旅に出ると云うことが愉快でありませんでしたから、なるべくならばその印象を美しいものにするために、あまりケケケチした真似^{まね}はしないで、宿屋なども一流の所へ行きたいと、最初はそんな考でいました。ところがいよいよと云う日になって、横須賀行の二等室へ乗り込んだ時から、私たちは一種の気後れに襲われたのです。なぜかと云って、その汽車の中には逗子^{ずし}や鎌倉へ出かける夫人や令嬢が沢山乗り合わせていて、ずらりときらびやかな列を作っていましたので、さて

その中に割り込んで見ると、私はとにかく、ナオミの身なりがいかにも見すばらしく思えたものでした。

勿論^{もちろん}夏のことですから、その夫人達や令嬢達もそうゴテゴテと着飾っていた筈^{はず}はありません、が、こうして彼等とナオミとを比べて見ると、社会の上層に生れた者とそうでない者との間には、争われない品格の相違があるような気がしたのです。ナオミもカフエにいた頃とは別人のようになりはしたものの、氏^{うじ}や育ちの悪いものは矢張どうしても駄目なのじゃないかと、私もそう思い、彼女自身も一層強くそれを感じたに違いありません。そしていつもは彼女をハイカラに見せたところの、あのモスリンの葡萄の模様の単衣物が、まあその時はどんなに情なく見えたことでしょう。並居る婦人達の中にはあつさりとした浴衣^{ゆかた}がけの人もいましたけれど、指に宝石を光らしているとか、持ち物に贅^{ぜい}を凝らしているとか、何かしら彼等の富貴を物語るものが示されているのに、ナオミの手にはその滑かな皮膚より外に、何一つとして誇るに足るものは輝いていなかったのです。私は今でもナオミが極^きまり悪そうに自分のパラソルを袂^{たもと}の蔭^{かげ}へ隠したことを覚えています。それもその筈で、そのパラソルは新調のものではありませんでしたが、誰の目にも七八円の安物としか思われないような品でしたから。

で、私たちは三橋にしようか、思い切つて海浜ホテルへ泊ろうかななどと、そんな空想を描いていたに拘かかわらず、その家の前まで行つて見ると、先まず門構えの厳いめしいのに圧迫されて、長谷の通りを二度も三度も往いつたり来たりした末に、とうとう土地では二流か三流の金波楼へ行くことになったのです。

宿には若い学生たちが大勢がやがや泊つていて、とても落ち着いてはいられないので、私たちは毎日浜でばかり暮らしました。お転婆てんばのナオミは海さえ見れば機嫌がよく、もう汽車の中でしょげたことは忘れてしまつて、

「あたしどうしてもこの夏中に泳ぎを覚えてしまわなくっちゃ」

と、私の腕にしがみ着いて、盛んにぼちやぼちや浅い所で暴れ廻る。私は彼女の胴体を両手で抱えて、腹這はらばいにさせて浮かしてやつたり、シツカリ棒杭ぼうくいを掴つかませて置いて、その脚を持つて足掻あがき方を教えてやつたり、わざと突然手をつツ放して苦い潮水を飲ましてやつたり、それに飽きると波乗の稽古けいこをしたり、浜辺にごろごろ寝ころびながら砂いたずらをしてみたり、夕方からは舟を借りて沖の方まで漕こいで行つたり、——そして、そんな折には彼女はいつも海水着の上に大きなタオルを纏まとつたまま、或る時は臚とに腰かけ、或る時は舷ふなべりまぐらを枕に青空を仰いで誰に憚はばることもなく、その得意のナポリの船唄ふなうた、「サンタ・

ルチア」を甲高い声でうたいました。

O dolce Napoli,

O soul beato,

と、伊太利語でうたう彼女のソプラノが、夕なぎの海に響き渡るのを聴き惚れながら、私はしずかに櫓を漕いで行く。「もつと彼方へ、もつと彼方へ」と彼女は無限に浪の上を走りがる。いつの間にやら日は暮れてしまつて、星がチラチラと私等の船を空から瞰おろし、あたりがぼんやり暗くなつて、彼女の姿はただほの白いタオルに包まれ、その輪廓がぼやけてしまう。が、晴れやかな唄ごえはなかなか止まずに、「サンタ・ルチア」は幾度となく繰り返され、それから「ローレイ」になり、「流浪の民」になり、ミニヨンの一節になりして、ゆるやかな船の歩みと共にいろいろ唄をつづけて行きます。……

こういう経験は、若い時代には誰でも一度あることでしょうが、私に取っては実にその時が始めてでした。私は電気の技師であつて、文学だとか芸術だとか云うものには縁の薄い方でしたから、小説などを手にすることはめつたになかったのですけれども、その時思ひ出したのは嘗て読んだことのある夏目漱石の「草枕」です。そうです、たしかあの中に、「ヴェニスに沈みつつ、ヴェニスは沈みつつ」と云うところがあつたと思いますが、ナオ

ミと二人で船に揺られつつ、沖の方から夕靄ゆうもやの帳を透して陸の灯影を眺めると、不思議にあの文句が胸に浮んで来て、何だかこう、このまま彼女と果てしも知らぬ遠い世界へ押し流されて行きたいような、涙ぐましい、うツとりと酔った心地になるのです。私のような武骨な男がそんな気分を味わうことが出来ただけでも、あの鎌倉の三日間は決して無駄ではなかったのです。

いや、そればかりではありません、実を云うとその三日間は更にもう一つ大切な発見を、私に与えてくれたのです。私は今までナオミと一緒に住んでいながら、彼女がどんな体つきをしているか、露骨に云えばその素裸な肉体の姿を知り得る機会がなかったのに、それが今度はほんとうによく分ったのです。彼女が始めて由比ヶ浜ゆいの海水浴場へ出かけて行って、前の晩にわざわざ銀座で買って来た、濃い緑色の海水帽と海水服とを肌身に着けて現れたとき、正直なところ、私はどんなに彼女の四肢の整っていることを喜んだでしょう。そうです、私は全く喜んだのです。なぜかと云うに、私は先から着物の着こなし工合や何かで、きつとナオミの体の曲線はこうであろうと思っていたのが、想像通り中あたつたからです。

「ナオミよ、ナオミよ、私のメリー・ピクフォードよ、お前は何と云う釣合の取れた、い

い体つきをしているのだ。お前のそのしなやかな腕はどうだ。その真つ直ぐな、まるで男の子のようにすつきりとした脚はどうだ」

と、私は思わず心の中で叫びました。そして映画でお馴染の、あの活潑なマックスネットのベージング・ガールたちを想い出さずにはいられませんでした。

誰しも自分の女房の体のことなどを余り委しく書き立てるのは厭でしょうが、私にしたって、後年私の妻となつた彼女に就いて、そう云うことをいれいしくしゃべったり、多くの人に知らしたりするのは決して愉快ではありません。けれどもそれを云わないとどうも話の都合が悪いし、そのくらいのことを遠慮しては、結局この記録を書き留める意義がなくなってしまう訳ですから、ナオミが十五歳の八月、鎌倉の海辺に立つた時に、どう云う風な体格だったか、一通りはここに記して置かねばなりません。当時のナオミは、並んで立つと背の高さが私よりは一寸ぐらい低かったでしょう。――断つて置きますが、私は頑健岩の如き恰幅ではありましたが、身の丈は五尺二寸ばかりで、先ず小男の部だったのです。――が、彼女の骨組の著しい特長として、胴が短く、脚の方が長かったのだ、少し離れて眺めると、実際よりは大へん高く思えました。そして、その短い胴体はSの字のように非常に深くくびれていて、くびれた最底部のところに、もう十分に女

らしい円みを帯びた臀しりの隆起がありました。その時分私たちは、あの有名な水泳の達人ケラーマン嬢を主役にした、「水神の娘」とか云う人魚の映画を見たことがありましたので、「ナオミちゃん、ちよいとケラーマンの真似をして御覧」

と、私が云うと、彼女は砂浜に突つ立って、両手を空にかざしながら、「飛び込み」の形をして見せたものですが、そんな場合に両りようもも腿をぴったり合わせると、脚と脚との間には寸分の隙すきもなく、腰から下が足頸を頂天にした一つの細長い三角形を描くのです。彼女もそれには得意の様子で、

「どう？　讓治さん、あたしの脚は曲つていない？」

と云いながら、歩いて見たり、立ち止つて見たり、砂の上へぐつと伸ばして見たりして、自分でもその恰好かつこうを嬉うれしそうに眺めました。

それからもう一つナオミの体の特長は、頸から肩へかけての線でした。肩、……私はしばしば彼女の肩へ触れる機会があつたのです。と云うのは、ナオミはいつも海水服を着るときに、「讓治さん、ちよいとこれを簪はめて頂ちようだい戴」と、私の傍そばにやって来て、肩についているボタンを簪めさせるのでしたから。で、ナオミのように撫なで肩で、頸が長いものは、着物を脱ぐと瘦やせているのが普通ですけれど、彼女はそれと反対で、思いの外に厚み

のある、たつぷりとした立派な肩と、いかにも呼吸の強そうな胸を持っていました。ボタンを箆めてやる折に、彼女が深く息を吸ったり、腕を動かして背中の肉にもくもく波を打たせたりすると、それでなくてもハチ切れそうな海水服は、丘のように盛り上った肩のところに一杯に伸びて、ぴんと弾けてしまいそうになるのです。一口に云えばそれは実力の籠^{こも}った、「若さ」と「美しさ」の感じの溢^{あふ}れた肩でした。私は内々そのあたりにいる多くの少女と比較して見ましたが、彼女のように健康な肩と優雅な頸とを兼ね備えているものは外にないような気がしました。

「ナオミちゃん、少うしじツとしておいでよ、そう動いちやボタンが固くって箆まりやしない」

と云いながら、私は海水服の端を摘まんで大きな物を袋の中へ詰めるように、無理にその肩を押し込んでやるのが常でした。

こう云う体格を持っていた彼女が、運動好きで、お転婆だったのは当たり前だと云わなければなりません。実際ナオミは手足を使ってやることなら何事に依^よらず器用でした。水泳などは鎌倉の三日を皮切りにして、あとは大森の海岸で毎日一生懸命に習って、その夏中にととう物にしてしまい、ボートを漕いだり、ヨットを操ったり、いろんな事が出来るよ

うになりました。そして一日遊び抜いて、日が暮れるとガツカリ疲れて「ああ、くたびれた」と云いながら、ビツシヨリ濡れた海水着を持って帰って来る。

「あーあ、お腹が減っちゃった」

と、ぐったり椅子に体を投げ出す。どうかすると、晩飯を炊くのが面倒なので、帰り路に洋食屋へ寄って、まるで二人が競争のようにたらふく物をたべくらする。ビフテキのあとで又ビフテキと、ビフテキの好きな彼女は訳なくペロリと三皿ぐらいお代りをするのでした。

あの歳の夏の、楽しかった思い出を書き記したら際限がありませんからこのくらいにして置きますが、最後に一つ書き洩らしてならないのは、その時分から私彼女をお湯へ入れて、手だの足だの背中だのをゴムのスポンジで洗ってやる習慣がついたことです。これはナオミが睡がったりして銭湯へ行くのを大儀がったものですから、海の潮水を洗い落すのに台所で水を浴びたり、行水を使ったりしたのが始まりでした。

「さあ、ナオミちゃん、そのまんま寝ちまっちゃ身体がべたべたして仕様がないう。洗ってやるからこの盥の中へお這入り」

と、そう云うと、彼女は云われるままになつて大人しく私に洗わせていました。それがだ

んだん癖になつて、すずしい秋の季節が来ても行水は止まず、もうしまいにはアトリエの隅に西洋風呂ぶろや、バス・マツトを据えて、その周りを衝つ立てたてで囲つて、ずっと冬中洗つてやるようになったのです。

五

察しのいい読者のうちには、既に前回の話の間に、私とナオミが友達以上の関係を結んだかのように想像する人があるでしょう。が、事実そうではなかったのです。それはなるほど月日の立つに随したがつて、お互の胸の中に一種の「了解」と云うようなものが出来ていたことはありましよう。けれども一方はまだ十五歳の少女であり、私は前にも云うように女にかけて経験のない謹直な「君子」であつたばかりでなく、彼女の貞操に関しては責任を感じていたのですから、めつたに一時の衝動に駆られてその「了解」の範圍を越えるようなことはしなかつたのです。勿論もちろん私の心の中には、ナオミを措おいて自分の妻にするような女はいない、あつたところで今更情として彼女を捨てる訳には行かないという考が、次第にしっかりと根を張つて来ていました。で、それだけに猶なお、彼女を汚けがすような仕方ありで、或

は弄ぶ^{もてあそ}ような態度で、最初にその事に触れたくないと思っていました。

左様、私とナオミが始めてそう云う関係になったのはその明くる年、ナオミが取つて十六歳の年の春、四月の二十六日でした。――と、そうハッキリと覚えているのは、実はその

時分、いやずつとその以前、あの行水を使い出した頃から、私は毎日ナオミに就いていろいろ興味を感じたことを日記に附けて置いたからです。全くあの頃のナオミは、その体つきが一日々々と女らしく、際立^{きわだ}つて育つて行きましたから、ちようど赤子を産んだ親が

「始めて笑う」とか「始めて口をきく」とか云う風に、その子供の生^お立^{たち}のさまを書き留めて置くのと同じような心持で、私は一々自分の注意を惹^ひいた事柄を日記に誌^{しる}したのでし

た。私は今でもときどきそれを繰つて見ることにありますが、大正某年九月二十一日――

――即ち^{すなわ}ナオミが十五歳の秋、――の条にはこう書いてあります。――

「夜の八時に行水を使わせる。海水浴で日に焼けたのがまだ直らない。ちようど海水着を着ていたところだけが白くて、あとが真っ黒で、私もそうだがナオミは生地^{きじ}が白いから、余計カツキリと眼について、裸でいても海水着を着ているようだ。お前の体は縞^{しまうま}馬のようだといったら、ナオミは可笑^{おか}しがって笑った。……」

それから一と月ばかり立つて、十月十七日の条には、

「日に焼けたり皮が剥げたりしていたのがだんだん直ったと思ったら、却って前よりつやつやしい非常に美しい肌になった。私が腕を洗ってやったら、ナオミは黙って、肌の上を溶けて流れて行くシャボンの泡を見つめていた。『綺麗だね』と私が云ったら、『ほんとに綺麗ね』と彼女は云って、『シャボンの泡がよ』と附け加えた。……」

次に十一月の五日――

「今夜始めて西洋風呂を使つて見る。馴れないのでナオミはつるつる湯の中で滑つてきやつきやつと笑つた。『大きなベビーさん』と私が云ったら、私の事を『パパさん』と彼女が云つた。……」

そうです、この「ベビーさん」と「パパさん」とはそれから後も屢々《しばしば》出ました。ナオミが何かをねだつたり、だだを捏ねたりする時は、いつもふざけて私を「パパさん」と呼んだものです。

「ナオミの成長」――と、その日記にはそう云う標題が附いていました。ですからそれは云うまでもなく、ナオミに關した事柄ばかりを記したもので、やがて私は写真機を買い、いよいよメリー・ピクフオードに似て来る彼女の顔をさまざまな光線や角度から映し撮つては、記事の間のところどころへ貼りつけたりしました。

日記のことで話が横道へ外れましたが、とにかくそれに依つて見ると、私と彼女とが切つても切れない関係になつたのは、大森へ来てから第二年目の四月の二十六日なのです。尤も二人の間には云わず語らず「了解」が出来ていたのですから、極めて自然に孰方が孰方を誘惑するのでもなく、殆どこれと云う言葉一つも交さないで、暗黙の裡にそう云う結果になつたのです。それから彼女は私の耳に口をつけて、

「讓治さん、きつとあたしを捨てないでね」と云いました。

「捨てるなんて、——そんなことは決してないから安心おしよ。ナオミちゃんには僕の心がよく分つてゐるだろうが、……………」

「ええ、そりや分つてゐるけれど、……………」

「じゃ、いつから分つていた？」

「さあ、いつからだか、……………」

「僕がお前を引き取つて世話すると云つた時に、ナオミちゃんは僕をどう云う風に思つた？——お前を立派な者にして、行く行くお前と結婚するつもりじゃないかと、そう云う風には思わなかつた？」

「そりや、そう云う積りなのかしらと思つたけれど、……………」

「じゃナオミちゃんも僕の奥さんになつてもいい氣で来てくれたんだね」

そして私は彼女の返辭を待つまでもなく、力一杯彼女を強く抱きしめながらつづけました。

「ありがとよ、ナオミちゃん、ほんとにありがと、よく分つていてくれた。……………僕は今こそ正直なことを云うけれど、お前がこんなに、……………こんなにまで僕の理想にかつた女になつてくれようとは思わなかつた。僕は運がよかつたんだ。僕は一生お前を可愛^{かわい}がつて上げるよ。……………お前ばかりを。……………世間によくある夫婦のようにお前を決して粗末

にはしないよ。ほんとに僕はお前のために生きているんだと思つておくれ。お前の望みは何でもきつと聴いて上げるから、お前ももつと學問をして立派な人になつておくれ。……………」

「ええ、あたし一生懸命勉強しますわ、そしてほんとに讓治さんの氣に入るような女になるわ、きつと……………」

ナオミの眼には涙が流れていましたが、いつか私も泣いていました。そして二人はその晩じゅう、行くすえのことを飽かずに語り明かしました。

それから間もなく、土曜の午後から日曜へかけて郷里へ帰り、母に始めてナオミのことを打ち明けました。これは一つには、ナオミが国の方の思わくを心配している様子でしたから、彼女に安心を与えるためと、私としても公明正大に事件を運びたかったので、出来るだけ母への報告を急いだ訳でした。私は私の「結婚」に就いての考を正直に述べ、どう云う訳でナオミを妻に持ちたいのか、年寄にもよく納得が行くように理由を説いて聞かせました。母は前から私の性格を理解しており、信用していてくれたので、

「お前がそう云うつもりならその児こを嫁に貰もらうもいいが、その児の里さとがそう云う家だと面倒やすが起り易いから、あとあとの迷惑がないように気を付けて」

と、ただそう云っただけでした。で、おおびらの結婚は二三年先の事にしても、籍だけは早く此方こちらへ入れて置きたいと思つたので、千束町の方にも直すぐ掛け合いましたが、これはもともと呑気のんきな母や兄たちですから、訳なく済んでしまいました。呑気ではあるが、そう腹の黒い人達ではなかったと見えて、慾よくにからんだようなことは何一つ云いませんでした。そうなつてから、私とナオミとの親密さが急速度に展開したのは云うまでもありません。まだ世間で知る者もなく、うわべは矢張友達のようにしていましたが、もう私たちは誰にはばか憚るところもない法律上の夫婦だったのです。

「ねえ、ナオミちゃん」

と、私は或る時彼女に云いました。

「僕とお前はこれから先も友達みたいに暮らそうじゃないか、いつまで立つても。――」

「じゃ、いつまで立つてもあたしのことを『ナオミちゃん』と呼んでくれる？」

「そりやそうさ、それとも『奥さん』と呼んであげようか？」

「いやだわ、あたし、――」

「そうでなけりや『ナオミさん』にしようか？」

「さんはいやだわ、やっぱりちゃんの方がいいわ、あたしがさんにして頂戴ちようだい って云う

までは」

「そうすると僕も永久に『讓治さん』だね」

「そりやそうだわ、外に呼び方はありませんなもの」

ナオミはソオフアへ仰向けにねころんで、薔薇ばらの花を持ちながら、それを頻しきりに唇へあてていじくつていたかと思うと、そのとき不意に、

「ねえ、讓治さん？」と、そう云つて、両手をひろげて、その花の代りに私の首を抱きしめました。

「僕の可愛いナオミちゃん」と私は息が塞がるくらいシツカリと抱かれたまま、袂の蔭の暗い中から声を出しながら、

「僕の可愛いナオミちゃん、僕はお前を愛しているばかりじゃない、ほんとうを云えばお前を崇拜しているのだよ。お前は僕の宝物だ、僕が自分で見つけ出して研みがきをかけたダイヤモンドだ。だからお前を美しい女にするためなら、どんなものでも買ってやるよ。僕の月給をみんなお前に上げてもいいが」

「いいわ、そんなにしてくれないでも。そんな事よりか、あたし英語と音楽をもつとほんとに勉強するわ」

「ああ、勉強おし、勉強おし、もう直ぐピアノも買って上げるから。そうして西洋人の前へ出てはずも耻かしくないようなレディーにおなり、お前ならきつとなれるから」

——この「西洋人の前へ出ても」とか、「西洋人のように」とか云う言葉を、私はたびたび使ったものです。彼女もそれを喜んだことは勿論で、

「どう？　こうやるとあたしの顔は西洋人のように見えない？」

などと云いながら鏡の前でいろいろ表情をやって見せる。活動写真を見る時に彼女は余程女優の動作に注意を配っているらしく、ピクフォードはこう云う笑い方をするとか、ピナ

・メニケリはこんな工合に眼を使うとか、ジェラルデイン・ファラーはいつも頭をこう云う風に束ねているとか、もうしまいには夢中になって、髪の毛までもバラバラに解かしてしまつて、それをさまざまの形にしながら真似るのですが、瞬間的にそう云う女優の癖や感じを捉えることは、彼女は実に上手でした。

「巧いもんだね、とてもその真似は役者にだつて出来やしないね、顔が西洋人に似ているんだから」

「そうかしら、何処が全体似ているのかしら？」

「その鼻つきと齒ならびのせいだよ」

「ああ、この齒？」

そして彼女は「いー」と云うように唇をひろげて、その齒並びを鏡へ映して眺めるのでした。それはほんとに粒の揃つた非常につやのある綺麗な齒列だったのです。

「何しろお前は日本人離れがしているんだから、普通の日本の着物を着たんじゃ面白くないね。いつそ洋服にしまうか、和服にしても一風変つたスタイルにしたらどうだい」

「じゃ、どんなスタイル？」

「これからの女はだんだん活潑になるんだから、今までのような、あんな重苦しい窮

屈な物はいけないと思うよ」

「あたし筒ッぽの着物を着て兵児帯へこおびをしめちやいけないかしら？」

「筒ッぽも悪くはないよ、何でもいいから出来るだけ新奇な風をして見るんだよ、日本ともつかず、支那しなともつかず、西洋ともつかないような、何かそう云うりはないかな――

――

「あつたらあたしに拵こしらえてくれる？」

「ああ拵こしらえて上げるとも。僕はナオミちゃんにいろんな形の服を拵こしらえて、毎日々々取り換え引換ひきかえ着せて見るようにしたいんだよ。お召めいだの縮ちりめん緬めんだのつて、そんな高い物でなくつてもいい。めりんすや銘仙で沢山だから、意匠を奇抜にすることだね」

こんな話の末に、私たちはよく連れ立つて方々の呉服屋や、デパートメント・ストアへ裂地きれじを捜しに行ったものでした。殊ことにその頃は、殆ど日曜日たびごとの度毎に三越や白木屋へ行かないことはなかったでしょう。とにかく普通の女物ではナオミも私も満足しないので、これだと思う柄を見つけるのは容易でなく、在り来たりの呉服屋では駄目だと思つて、更さ紗屋らさだの、敷物屋だの、ワイシャツや洋服の裂きれを売る店だの、わざわざ横浜まで出かけて行つて、支那人街や居留地にある外国人向きの裂屋きれやだのを、一日がかりで尋ね廻つたこと

がありましたつけが、二人ともくたびれ切つて足を摺粉木のようにしながら、それからそれへと何処までも品物を漁りに行きます。路を通るにも油断をしないで、西洋人の姿や服装に目をつけたり、到る処のシヨウ・ウインドウに注意します。たまたま珍しいものが見つかると、

「あ、あの裂はどう？」

と叫びながら、すぐその店へ這入つて行つてその反物をウインドウから出して来させ、彼女の身体へあてがって見て頤の下からだらりと下へ垂らしたり、胴の周りへぐるぐると巻きつけたりする。——それは全く、ただそうやって冷かして歩くだけでも、二人に取つては優に面白い遊びでした。

近頃でこそ一般の日本の婦人が、オルガンデイーやジョウゼツトや、コットン・ボイルや、ああ云うものを単衣に仕立てることがポツポツ流行つて来ましたけれども、あれに始めて目をつけたものは私たちではなかったでしょうか。ナオミは奇妙にあんな地質が似合いました。それも真面目な着物ではいけないので、筒ッぽにしたり、パジャマのような形にしたり、ナイト・ガウンのようになり、反物のまま身体に巻きつけてところどころをブローチで止めたり、そうしてそんなりをしてはただ家の中を往つたり来たりして、鏡の前

に立つて見るとか、いろいろなポーズを写真に撮るとかして見るのです。白や、薔薇色や、薄紫の、紗しゃのように透すき徹とおるそれらの衣に包まれた彼女の姿は、一箇の生きた大輪の花のように美しく、「こうして御覧、ああして御覧」と云いながら、私は彼女を抱き起したり、倒したり、腰かけさせたり、歩かせたりして、何時間でも眺めていました。

こんな風でしたから、彼女の衣裳いしやうは一年間に幾通りとなく殖ふえたものです。彼女はそれらを自分の部屋へはとてしまいきれないので、手あたり次第に何処へでも吊つり下げたり、丸めて置いたりしていました。箆たんす筒すを買えばよかったです、そう云うお金があるくらいなら少しでも余計衣裳を買いたいし、それに私たちの趣味として、何もそんなに大切に保存する必要はない。数は多いがみんな安物であるし、どうせ傍そばから着殺してしまうのだから、見える所へ散らかして置いて、気が向いた時に何遍でも取り換えた方が便利でもあります、第一部屋の装飾にもなる。で、アトリエの中はあたかも芝居の衣裳部屋のように、椅子いの上でもソファの上でも、床の隅っこでも、甚だしきは梯子はしご段だんの中途や、屋根裏のさしき棧敷の手すりにまでも、それがだらしなく放ツたらかしてない所はなかったのです。そしてめつたに洗濯をしたことがなく、おまけに彼女はそれらを素肌へ纏まとうのが癖でしたから、どれも大概は垢あかじみていました。

これらの沢山な衣裳の多くは突飛な裁ち方になっていましたから、外出の際に着られるようなのは、半分ぐらいしかなかったでしょう。中でもナオミが非常に好きで、おりおり戸外へ着て歩いたのに、縹子の袷と対の羽織がありました。縹子と云っても綿入りの縹子でしたが、羽織も着物も全体が無地の蝦色で、草履の鼻緒や、羽織の紐にまで蝦色を使い、その他はすべて、半襟でも、帯でも、帯留でも、襦袢の裡でも、袖口でも、袴でも、一様に淡い水色を配しました。帯もやつぱり綿縹子で作って、心をうすく、幅を狭く拵えて思いきり固く胸高に締め、半襟の布には縹子に似たものが欲しいと云うので、リボンを買って来てつけたりました。ナオミがそれを着て出るのは大概夜の芝居見物の時なので、そのぎらぎらした眩しい地質の衣裳をきらめかしながら、有楽座や帝劇の廊下を歩くと、誰でも彼女を振り返って見ないものはありません。

「何だろああの女は？」

「女優かしら？」

「混血児かしら？」

などと云う囁きを耳にしながら、私も彼女も得意そうにわざとそこいらをうろついたものでした。

が、その着物でさえそんなに人が不思議がつたくらいですから、ましてそれ以上に奇抜なものは、いくらナオミが風変りを好んでも到底戸外へ着て行く訳には行きません。それらは実際ただ部屋の中で、彼女をいろいろな器に入れて眺めるための、容れ物だったに過ぎないのです。たとえば一輪の美しい花を、さまざまな花瓶へ挿し換えて見るのと同じ心持だったでしょう。私にとってナオミは妻であると同時に、世にも珍しき人形であり、装飾品でもあったのですから、敢て驚くには足りないのです。従って彼女は、殆ど家で真面目ななりをしていることはありませんでした。これも何とか云う亜米利加の活動劇の男装からヒントを得て、黒いビロードで拵えさせた三ツ組の背広服などは、恐らく一番金のかかった、贅沢な室内着だったでしょう。それを着込んで、髪の毛をくるくると巻いて、烏打帽子を被った姿は猫のようになまめかしい感じでしたが、夏は勿論、冬もストーヴで部屋を暖めて、ゆるやかなガウンや海水着一つで遊んでいることも屢《しばしば》ありました。彼女の穿いたスリッパの数だけでも、刺繍した支那の靴を始めとして何足くらいあったでしょうか。そして彼女は多くの場合足袋や靴下を着けることはなく、いつもそれらの穿物を直かに素足に穿いていました。

六

当時私は、それほど彼女の機嫌を買い、ありとあらゆる好きな事をさせながら、一方では又、彼女を十分に教育してやり、偉い女、立派な女に仕立てようと云う最初の希望を捨てたことはありませんでした。この「立派」とか「偉い」とか云う言葉の意味を吟味すると、自分でもハッキリしないのですが、要するに私らしい極く単純な考で、「何処へ出しても耻かしくない、近代的な、ハイカラ婦人」と云うような、甚だ漠然としたものを頭に置いていたのでしょう。ナオミを「偉くすること」と、「人形のように珍重すること」と、この二つが果して両立するものかどうか？——今から思うと馬鹿ばかげた話ですけれど、彼女の愛に惑わく溺でして眼が眩くらんでいた私には、そんな見易みやすい道理さえが全く分らなかったのです。

「ナオミちゃん、遊びは遊び、勉強は勉強だよ。お前が偉くなってくればまだまだ僕はいろいろな物を買って上げるよ」

と、私は口癖のように云いました。

「ええ、勉強するわ、そうしてきつと偉くなるわ」

と、ナオミは私に云われればいつも必ずそう答えます。そして毎日晚飯の後で、三十分くらい、私は彼女に会話やリーダーを浚^{さいら}つてやります。が、そんな場合に彼女は例のビロードの服だのガウンだのを着て、足の突^{とつ}先^{さき}でスリッパをおもちやにしながら椅子に靠^{もた}れる始末ですから、いくら口でやかましく云つても、結局「遊び」と「勉強」とはごつちやになつてしまふのでした。

「ナオミちゃん、何だねそんな真似をして！ 勉強する時はもつと行儀よくしなけりやいけないよ」

私がそう云うと、ナオミはぴくツと肩をちぢめて、小学校の生徒のような甘つ垂れた声を出して、

「先生、御免なさい」

と云つたり、

「河合チェンチェイ、堪^{かんにん}忍^{しの}して頂^{ちやうだい}戴^{だい}な」

と云つて、私の顔をコツソリ覗^{のぞ}き込むかと思うと、時にはちよいと頬つぺたを突ツついたりする。「河合先生」もこの可愛らしい生徒に対しては嚴格にする勇氣がなく、叱^{こじ}言^ごの果てがたわいのない悪ふざけになつてしまします。

一体ナオミは、音楽の方はよく知りませんが、英語の方は十五の歳としからもう二年ばかり、ハリソン嬢の教を受けていたのですから、本来ならば十分出来ていい筈はずなので、リーダーも一から始めて今では二の半分以上まで進み、会話の教科書としては『English Echo』を習い、文典の本は神田かんだ乃武ないぶの『Intermediate Grammar』を使まっていて、先まず中学の三年ぐらいな実力に相当する訳でした。けれどもいくら眞眼ひいきめに見ても、ナオミは恐らく二年生にも劣おとっているように思えました。どうも不思議だ、こんな筈はないのだがと思つて、一度私はハリソン嬢を訪ねたことがありますが、

「いいえ、そんなことはありません、あの児こはなかなか賢い児です。よく出来ます」と、そう云つて、太つた、人の好よさそうなその老嬢は、ニコニコ笑っているだけでした。

「そうです、あの児は賢い児です、しかしその割りに余り英語がよく出来ないと思います。読むことだけは読めますけれど、日本語に翻ほんやく訳やくすることや、文法を解釈することなどが、……」

「いや、それはあなたがいきません、あなたの考が違っています」と、矢張老嬢はニコニコ顔で、私の言葉を遮つて云うのでした。

「日本の人、みな文法やトランスレーションを考えます。けれどもそれは一番悪い。あな

た英語を習います時、決して決して頭の中で文法を考えてはいけません、トランスレートしてはいけません。英語のままで何度も何度も読んで見ること、それが一等よろしいです。ナオミさんは大変発音が美しい。そしてリーディングが上手ですから、今にきつと巧うまくなります」

成るほど老嬢の云うところにも理窟りくつはあります。が、私の意味は文典の法則を組織的に覚えろと云うものではありません。二年間も英語を習い、リーダーの三が読めるのですから、せめて過去分詞の使い方や、パッシヴ・ヴォイスの組み立てや、サブジャンクティヴ・ムードの応用法ぐらいは、實際的に心得ていい筈なのに、和文英訳をやらせて見ると、それがまるきり成っていないのです。殆ど中学の劣等生にも及ばないくらいなのです。いくらリーディングが達者だからと云つて、これでは到底実力が養成される道理がない。一体二年間も何を教え、何を習っていたのか訳が分らない。しかし老嬢は不平そうな私の顔つきに頓とんじやく着せず、ひどく安心しきつたような鷹揚おうような態度で領うなずきながら、「あの児は大へん賢いです」を相変らず繰り返すばかりでした。

これは私の想像ではありますが、どうも西洋人の教師は日本人の生徒に対して一種のえこひいきがあるようです。えこひいき——そう云つて悪ければ先入主とでも云いましょう

か？　つまり彼等は西洋人臭い、ハイカラな、可愛らしい顔だちの少年や少女を見ると、一も二もなくその児を伶俐りしやうだと云う風に感ずる。殊にオールド・ミスであるとその傾向が一層甚しい。ハリソン嬢がナオミを頻りに褒めちぎるのはそのせいなので、もう頭から「賢い児だ」ときめてしまっているのです。おまけにナオミは、ハリソン嬢の云う通り発音だけは非常に流暢りゆうちやうを極めていました。何しろ齒並びがいいところへ声楽の素養があつたのですから、その声だけを聞いていると実に綺麗きれいで、素晴らしく英語が出来そうで、私などはまるで足元へも寄りつけないように思いました。それで恐らくハリソン嬢はその声に欺だまかされて、コロリと参つてしまつたに違いないのです。嬢がどれほどナオミを愛していたかと云うことは、驚いたことに、嬢の部屋へ通つて見ると、その化粧台の鏡の周りにナオミの写真が沢山飾つてあつたのでも分るのでした。

私は内心嬢の意見や教授法に対しては甚だ不満でしたけれども、同時に又、西洋人がナオミをそんなにひいきにしてくれる、賢い児だと云つてくれるのが、自分の思う壺つぼなので、あたかも自分が褒められたような嬉うれしさを禁じ得ませんでした。のみならず、元来私は、——いや、私ばかりではありません、日本人は誰でも大概そうですが、——西洋人の前へ出ると頗すこぶる意気地がなくなつて、ハッキリ自分の考を述べる勇氣がない方でしたから、

嬢の奇妙なアクセントのある日本語で、しかも堂々とまくし立てられると、結局此方の云うべきことも云わないでしまいました。なに、向うがそう云う意見なら、此方は此方で、足りないところを家庭で補つてやればいいのだと、腹の中でそう極めながら、

「ええ、ほんとうにそれはそうです、あなたの仰おつしやる通りです。それで私も分りましたから安心しました」

とか何とか云つて、曖あいまい昧な、ニヤニヤしたお世辞笑いを浮かべながら、そのまま不得要領でスゴスゴ歸つて来たのでした。

「讓治さん、ハリソンさんは何と云つた？——」

と、ナオミはその晩尋ねましたが、彼女の口調はいかにも老嬢の寵ちやうたのを恃んで、すっかりたかを括くくつているように聞えました。

「よく出来るつて云つていたけれど、西洋人には日本人の生徒の心理が分らないんだよ。発音が器用で、ただすらすら読めさえすりやあいと云うのは大間違いだ。お前はたしかに記憶力はいいい、だから空で覚える事は上手だけれど、翻譯おうむさせると何一つとして意味が分つていないじゃないか。それじゃ鸚鵡おうむと同じことだ。いくら習つても何の足しにもなりやしないんだ」

私がナオミに叱言らしい叱言を云つたのはその時が始めてでした。私は彼女がハリソン嬢を味方にして、「それ見たことか」と云うように、得意の鼻を蠢めかしているのが癪に触つたばかりでなく、第一こんなで「偉い女」になれるかどうか、それを非常に心もとなく感じたのです。英語と云うものを別問題にして考えても、文典の規則を理解することが出来ないような頭では、全くこの先が案じられる。男の児が中学で幾何や代数を習うのは何のためか、必ずしも実用に供するのが主眼でなく、頭脳の働きを緻密にし、練磨するのが目的ではないか。女の児だつて、成るほど今までは解剖的の頭がなくても済んでいた。が、これからの婦人はそうは行かない。まして「西洋人にも劣らないような」「立派な」女になろうとするものが、組織の才がなく、分析の能力がないと云うのでは心細い。

私は多少依怙地にもなつて、前にはほんの三十分ほど浚つてやるだけだったのですが、それから後は一時間か一時間半以上、毎日必ず和文英訳と文典とを授けることにしたのでした。そしてその間は断じて遊び半分の気分を許さず、ぴしぴし叱り飛ばしました。ナオミの最も欠けているところは理解力でしたから、私はわざと意地悪く、細かいことを教えないうでちよつとしたヒントを与えてやり、あとは自分で発明するように導きました。たとえば文法のパッシヴ・ヴォイスを習つたとすると、早速その応用問題を彼女に示して、

「さ、これを英語に訳して御覧」

と、そう云います。

「今読んだところが分つてさえいりや、これがお前に出来ない筈はないんだよ」

と、そう云ったきり、彼女が答案を作るまでは黙つて氣長に構えています。その答案が違つていても決して何処どこが悪いとも云わないで、

「何だいお前、これじゃ分つていないんじゃないか、もう一度文法を読み直して御覧」
と、何遍でも突つ返します。そしてそれでも出来ないとなると、

「ナオミちゃん、こんな易しいものが出来ないでどうするんだい。お前は一体幾つになるんだ。……幾度も幾度も同じ所を直されて、まだこんな事が分らないなんて、何処に頭を持つているんだ。ハリソンさんが慥巧だなんて云つたつて、僕はちつともそうは思わないよ。これが出来ないじゃ学校に行けば劣等生だよ」

と、私もついつい熱中し過ぎて大きな声を出すようになります。するとナオミはむツと面を膨らせて、しまいにはしくしく泣きだすことがよくありました。

ふだんはほんとうに仲のいい二人、彼女が笑えば私も笑つて、嘗かつて一度もいさかいをしたことがなく、こんな睦ましい男女はないと思われる二人、——それが英語の時間になる

ときまつてお互に重苦しい、息の詰まるような氣持にさせられる。日に一度ずつ私が怒らないことはなく、彼女が膨れないことはなく、ついさつきまであんなに機嫌のよかったものが、急に双方ともシヤチコ張つて、殆ど敵意をさえ含んだ眠つきで睨めツくらをする。

——實際私はその時になると、彼女を偉くするためと云う最初の動機は忘れてしまつて、あまりの腑がいなさにジリジリして、心から彼女が憎らしくなつて来るのでした。相手が男の児だつたら、私はきつと腹立ち紛れにポカリと一つ喰わせたかも知れません。それだけでなくとも夢中になつて「馬鹿ツ」と怒鳴りつけることは始終でした。一度は彼女の額のあたりをこつんと拳骨で小突いたことさえありました。が、そうされるとナオミの方も妙にひねくれて、たとい知つてゐる事でも決して答えようとはせず、頬を流れる涙を呑みながらいつまでも石のような沈黙を押し通します。ナオミは一旦、^{いったん}そう云う風に曲り出したら驚くほど強情で、始末に負えないたちでしたから、最後は私が根負けをして、うやむやになつてしまふのでした。

或るときこんな事がありました。^あ“doing”とか“going”とか云う現在分詞には必ずその前に「ある」と云う動詞、——“to be”を附けなければいけないのに、それが彼女には何度教えても理解出来ない。そして未だに“I going” “He making”と云うような誤りを

するので、私は散々腹を立てて例の「馬鹿」を連発しながら口が酸っぱくなる程細かく説明してやった揚句、過去、未来、未来完了、過去完了といういろいろなテンスに互^{わた}って“going”の変化をやらせて見ると、呆^{あき}れた事にはそれがやつぱり分っていない。依然として

“He will going” とやつたり、“I had going” と書いたりする。私は覚えずかつとなつて、

「馬鹿！ お前は何という馬鹿なんだ！ “will going” だの “have going” だの（ツ）とは決して云えないツて人があれほど云つたのがまだお前には分らないか。分らなけりや分るまでやつて見ろ。今夜一と晩中かかつても出来るまでは許さないから」

そして激しく鉛筆を叩^{たた}きつけて、その帳面をナオミの前へ突き返すと、ナオミは固く唇を結んで、真つ青になつて、上眼づかいに、じーッと鋭く私の眉間^{みけん}を睨^ねめつけました。と、何と思つたか彼女はいきなり帳面を驚^{おどろ}かすほどに握^{にぎ}みにして、ピリピリに引き裂いて、ぽんと床の上へ投げ出したきり、再び物^{もの}凄^{すご}い瞳^{ひとみ}を据えて私の顔を穴のあくほど睨めるのです。

「何するんだ！」

一瞬間、その、猛獣のような氣勢に圧^おされてアツケに取られていた私は、暫^{しばら}く立つてからそう云いました。

「お前は僕に反抗する気か。学問なんかどうでもいいと思つていいのか。一生懸命に勉強

するの、偉い女になると云ったのは、ありや一体どうしたんだ。どう云う積りで帳面を破ったんだ。さ、詫^{あや}まれ、詫^{あや}まらなけりや承知しないぞ！　もう今日限りこの家を出て行ってくれ！」

しかしナオミは、まだ強情に押し黙ったまま、その真つ青な顔の口もとに、一種泣くような薄笑いを浮べているだけでした。

「よし！　詫^{あや}まらなけりやそれでいいから、今直ぐ此^{ここ}処を出て行ってくれ！　さ、出て行くと云ったら！」

そのくらいに見せないとしても彼女を威嚇^{おど}かすことは出来まいと思ったので、ついと私は立ち上つて脱ぎ捨ててある彼女の着換えを二三枚、手早く円めて風呂敷^{ふろしき}に包み、二階の部屋から紙入れを持って来て十円札を二枚取り出し、それを彼女に突きつけながら云いました。

「さあ、ナオミちゃん、この風呂敷に身の周りの物は入れてあるから、これを持って今夜浅草へ帰っておくれ。就いては此処に二十円ある。少いけれど当座の小遣いに取ってお置き。いずれ後からキツパリと話はつけるし、荷物は明日にでも送り届けて上げるから。——え？　ナオミちゃん、どうしたんだよ、なぜ黙っているんだよ。………」

そう云われると、きかぬ氣のようでもそこはさすがに子供でした。容易ならない私の劍幕にナオミはいささか怯^{ひる}んだ形で、今更後悔したように殊勝^{うなじ}らしく項を垂れ、小さくなつてしまふのでした。

「お前もなかなか強情だけど、僕にしたつて一旦こうと云い出したら、決してそのままにや濟まさないよ。悪いと思つたら詫まるがよし、それが厭^{いや}なら歸つておくれ。……さ、孰^{どっち}方にするんだよ、早く極めたらいいじゃないか。詫まるのかい？ それとも浅草へ歸るのかい？」

すると彼女は首を振つて「いやいや」をします。

「じゃ、歸りたくないのかい？」

「うん」と云うように、今度は頤^{あご}で頷いて見せます。

「じゃ、詫まると云うのかい？」

「うん」

と、又同じように頷きます。

「それなら堪^{かんにん}忍^{にん}して上げるから、ちゃんと手を衝^ついて詫まるがいい」

で、仕方がなしにナオミは机へ両手を衝いて、——それでもまだ何処か人を馬鹿にした

ような風つきをしながら、不精ツたらしく、横ツちよを向いてお辞儀をします。

こういう傲慢ごうまんな、我が儘ままな根性は、前から彼女にあつたのであるか、或は私あるいが甘やかし過ぎた結果なのか、いずれにしても日を経るふに従つてそれがだんだん昂こうじて来つつあることは明かでした。いや、実は昂じて来たのではなく、十五六の時分にはそれを子供らしい愛嬌あいぎようとして見逃していたのが、大きくなつても止まないので次第に私の手に余るようになったのかも知れません。以前はどんなにだだを捏ねても叱言こごとを云えば素直に聴いたものですが、もうこの頃では少し氣に喰わないことがあると、直ぐにむうツと膨れ返る。それでもしくしく泣いたりされればまだ可愛げがありますけれど、時には私がいかに厳しく叱りつけても涙一滴こぼさないで、小憎らしいほど空惚そらとぼけたり、例の鋭い上眼を使つて、まるで狙ねらいをつけるように一直線に私を見据える。——もし実際に動物電氣と云うものがあるなら、ナオミの眼にはきつと多量にそれが含まれているのだらうと、私はいつもそう感じました。なぜならその眼は女のものとは思われない程、炯々けいけいとして強く凄すさまじく、おまけに一種底の知れない深い魅力を湛たたえているので、グツと一と息に睨められると、折々ぞつとするようなことがあつたからです。

七

その時分、私の胸には失望と愛慕と、互に矛盾した二つのものが交る交る^{かわ}交る^{せめ}合っている。自分が選択を誤ったこと、ナオミは自分の期待したほど賢い女ではなかったこと、

——もうこの事実はいくら私のひいき眼でも^{いな}否^{よし}むに由なく、彼女が他日立派な婦人になるであろうと云うような望みは、今となつては全く夢であつたことを悟るようになったのです。やっぱり育ちの悪い者は争われない、千束町の娘にはカフエエの女給が相当なのだ、柄にない教育を授けたところで何にもならない。——私はしみじみそう云うあきらめを抱くようになりました。が、同時に私は、一方に於^おいてあきらめながら、他の一方ではますます強く彼女の肉体に惹^ひきつけられて行つたのでした。そうです、私は特に『肉体』と云います、なぜならそれは彼女の皮膚や、齒や、唇や、髪や、瞳や、その他あらゆる姿態の美しさであつて、決してそこには精神的の何物もなかったのですから。つまり彼女は頭脳の方では私の期待を裏切りながら、肉体の方ではいよいよますます理想通りに、いやそれ以上に、美しさを増して行つたのです。「馬鹿な女」「仕様の^{やつ}ない奴だ」と、思えば思うほど^{なお}尚意地悪くその美しさに誘惑される。これは実に私に取って不幸な事でした。私は

次第に彼女を「仕立ててやろう」と云う純な心持を忘れてしまつて、寧ろあべこべにずるずる引き摺られるようになり、これではいけないと気が付いた時には、既に自分でもどうする事も出来なくなつていたのでした。

「世の中の事は総べて自分の思い通りに行くものではない。自分はナオミを、精神と肉体と、両方面から美しくしようとした。そして精神の方面では失敗したけれど、肉体の方面では立派に成功したじやないか。自分は彼女がこの方面でこれほど美しくなろうとは思ひ設けていなかったのだ。そうして見ればその成功は他の失敗を補つて余りあるではないか」

——私は無理にそう云う風に考えて、それで満足するように自分の氣持を仕向けて行きました。

「讓治さんはこの頃英語の時間にも、あんまりあたしを馬鹿々々ツて云わないようになってたわね」

と、ナオミは早くも私の心の変化をみて取つてそう云いました。学問の方には疎くつても、私の顔色を読むことにかけては彼女は実に敏かつたのです。

「ああ、あんまり云うと却つてお前が意地を突ツ張るようになって、結果がよくないと思つたから、方針を変えることにしたのさ」

「ふん」

と、彼女は鼻先で笑つて、

「そりやあそうよ、あんなに無闇に馬鹿々々ツて云われりや、あたし決して云う事なんか聴きやしないわ。あたし、ほんとうはね、大概な問題はちやんと考えられたんだけど、わざと讓治さんを困らしてやろうと思つて、出来ないふりをしてやったの、それが讓治さんには分らなかつた？」

「へえ、ほんとうかね？」

私はナオミの云うことが空威張りの負け惜しみであるのを知つていながら、故意にそう云つて驚いて見せました。

「当り前さ、あんな問題が出来ない奴はありやしないわ。それを本気で出来ないと思つているんだから、讓治さんの方がよっぽど馬鹿だわ。あたし讓治さんが怒るたんびに、可笑しくツて可笑しくツて仕様がなかつたわ」

「呆れたもんだね、すっかり僕を一杯喰わせていたんだね」

「どう？ あたしの方が少し伶俐りこうでしょ」

「うん、伶俐だ、ナオミちゃんには敵かなわないよ」

すると彼女は得意になって、腹を抱えて笑うのでした。

読者諸君よ、ここで私が突然妙な話をし出すのを、どうか笑わないで聞いて下さい。と云うのは、嘗て私は中学校にいた時分、歴史の時間にアントニーとクレオパトラの条くだりを教わったことがあります。諸君も御承知のことでしょうが、あのアントニーがオクタヴィアヌスの軍勢を迎えてナイルの河上で船ふないくさ戦をする、と、アントニーに附いて来たクレオパトラは、味方の形勢が非なりとみるや、忽ち中途から船を返して逃げ出してしまふ。然るにアントニーはこの薄情な女王の船が自分を捨てて去るのを見ると、危急存亡の際であるにも拘かわらず、戦争などは其方除そつちのけにして、自分も直ぐに女のあとを追ひ駆けて行きます。

「諸君」と、歴史の教師はその時私たちに云いました。

「このアントニーと云う男は女の尻しりを追つ駆け廻して、命をおとしてしまったので、歴史の上にこのくらい馬鹿を曝さらした人間はなく、実にどうも、古今無類の物笑いの種であります。英雄豪傑もいやはやこうなってしまうては、……」

その云い方が可笑しかったので、学生たちは教師の顔を眺めながら一度にどっと笑ったものです。そして私も、笑った仲間の一人であつたことは云うまでもありません。

が、大切なのはここの處ところです。私は当時、アントニーともあろう者がどうしてそんな薄情な女に迷ったのか、不思議でなりませんでした。いや、アントニーばかりではない、すぐその前にもジュリアス・シーザーの如き英傑こゝとが、クレオパトラに引つかかつて器量を下げている。そう云う例はまだその外にいくらでもある。徳川時代のお家騒動や、一国の治乱興廢の跡を尋ねると、必ず蔭かげに物凄い妖婦ようふの手管てくだがないことはない。ではその手管と云うものは、一旦いったんそれに引つかかれば誰でもコロリと欺だまされるほど、非常に陰險に、巧妙に仕組まれているかと云うのに、どうもそうではないような気がする。クレオパトラがどんなに伶俐な女だったとしたところでまさかシーザーやアントニーより智慧ちえがあつたとは考えられない。たとい英雄でなくつても、その女に真心があるか、彼女の言葉が嘘うそかほんとかぐらいいなことは、用心すれば洞察出来る筈はずである。にも拘わらず、現に自分の身を亡ほろぼすのが分つていながら欺されてしまうと云うのは、余りと云えば腑甲斐ふがひないことだ、事実その通りだったとすると、英雄なんて何もそれほど偉い者ではないかも知れない、私はひそかにそう思つて、マーク・アントニーが「古今無類の物笑いの種」であり、「このくらい歴史の上に馬鹿を曝した人間はない」と云う教師の批評を、そのまま肯定したものでした。

私は今でもあの時の教師の言葉を胸に浮かべ、みんなと一緒にゲラゲラ笑った自分の姿を
 思い出すことがあるのです。そして思い出す度毎に、もう今日では笑う資格がないこと
 をつくづく感じます。なぜなら私は、どういう訳で羅馬の英雄が馬鹿になったか、アン
 トニーとも云われる者が何故たわいなく妖婦の手管に巻き込まれてしまったか、その心持
 が現在となつてはハッキリ領けるばかりでなく、それに対して同情をさえ禁じ得ないくら
 いですから。

よく世間では「女が男を欺す」と云います。しかし私の経験によると、これは決して最初
 から「欺す」ではありません。最初は男が自ら進んで「欺される」のを喜ぶのです、惚
 れた女が出来て見ると、彼女の云うことが嘘であろうと真実であろうと、男の耳には総べ
 て可愛い。たまたま彼女が空涙を流しながら靠れかかって来たりすると、

「ははあ、此奴、この手で己を欺そうとしているな。でもお前は可笑しな奴だ、可愛い奴
 だ、己にはちゃんとお前の腹は分つてゐるんだが、折角だから欺されてやるよ。まあまた
 んと己をお欺し……」

と、そんな風に男は大腹中に構えて、云わば子供を嬉しがらせるような気持で、わざとそ
 の手に乗つてやります。ですから男は女に欺される積りはない。却つて女を欺してやつて

いるのだと、そう考えて心の中で笑っています。

その証拠には私とナオミが矢張そうでした。

「あたしの方が譲治さんより伶俐だわね」

と、そう云つて、ナオミは私を欺し終せた氣になっている。私は自分を間抜け者にして、欺された体を装つてやる。私に取つては浅はかな彼女の嘘を発くよりか、寧ろ彼女を得意がらせ、そうして彼女のよろこぶ顔を見てやつた方が、自分もどんなにうれしいか知れない。のみならず私は、そこに自分の良心を満足させる言訳さえも持っていました。と云うのは、たといナオミが伶俐な女でないとしても、伶俐だという自信を持たせるのは悪くないことだ。日本の女の第一の短所は確乎たる自信のない点にある。だから彼等は西洋の女に比べていじけて見える。近代的の美人の資格は、顔だちよりも才氣煥発な表情と態度にあるのだ。よしや自信と云う程でなく、単なる己惚れであつてもいいから、「自分は賢い」「自分は美人だ」と思い込むことが、結局その女を美人にさせる。——私はそう云う考でしたから、ナオミの伶俐がる癖を戒しめなかつたばかりでなく、却つて大いに焚きつけてやりました。常に快く彼女に欺され、彼女の自信をいよいよ強くするように仕向けてやりました。

一例を挙げると、私とナオミとはその頃しばしば兵隊将棋やトランプをして遊びましたが、本気でやれば私の方が勝てる訳なのに、成るべく彼女を勝たせるようにしてやったので、次第に彼女は「勝負事では自分の方がずっと強者だ」と思い上って、

「さあ、譲治さん、一つ捻^{ひね}つてあげるから入^いらっしゃいよ」
などと、すっかり私を見縊^{みくび}つた態度で挑んで来ます。

「ふん、それじゃ一番復讐^{ふくしゅう}戦をしてやるかな。——なあに、真面目^{まじめ}でかかりやお前なんかには負けやしないんだが、相手が子供だと思ふもんだから、ついつい油断しちまつて、

——

「まあいいわよ、勝つてから立派な口をおきなさいよ」

「よし来た！ 今度こそほんとに勝つてやるから！」

そう云いながら、私は殊^{ことごと}更下手な手を打つて相変らず負けてやります。

「どう？ 譲治さん、子供に負けて口惜^{くや}しいこと？——もう駄目だわよ、何と云つたってあたしに抗^{かな}やしないわよ。まあ、どうだろう、三十一にもなりながら、大の男がこんな事で十八の子供に負けるなんて、まるで譲治さんはやり方を知らないのよ」
そして彼女は「やつぱり歳^{とし}よりは頭だわね」とか、「自分の方が馬鹿^{ばか}なんだから、口惜し

がったって仕方がないわよ」とか、いよいよ図に乗って、

「ふん」

と、例の鼻の先で生意氣そうにせせら笑います。

が、恐ろしいのはこれから来る結果なのです。始めのうちは私がナオミの機嫌を取ってや
っている、少くとも私自身はそのつもりでいる。ところがだんだんそれが習慣になるに従
って、ナオミは真に強い自信を持つようになり、今度はいくら私が本気で踏^ふん張っても、
事実彼女に勝てないようになるのです。

人と人との勝ち負けは理智に依^よつてのみ極^{きま}めるのではなく、そこには「気合い」と云うもの
があります。云い換えれば動物電気です。まして賭^かけ事の場合には尚更そうで、ナオミは
私と決戦すると、始めから氣を呑^のんでかかり、素晴らしい勢で打ち込んで来るので、此方^{こちら}
はジリジリと圧^おし倒されるようになり、立ち怯^{おく}れがしてしまうのです。

「ただでやったってつまらないから、幾らか賭けてやりましょうよ」

と、もうしまいにはナオミはすっかり味をしめて、金を賭けなければ勝負をしないようにな
りました。すると賭ければ賭けるほど、私の負けは嵩^{かさ}んで来ます。ナオミは一文なしの
癖に、十銭とか二十銭とか、自分で勝手に単位をきめて、思う存分小遣い銭をせしめます。

「ああ、三十円あるとあの着物が買えるんだけれど。……又ランプで取ってやろうかな」

などと云いながら挑戦して来る。たまには彼女が負けることがありますけれど、そう云う時には又別の手を知っていて、是非その金が欲しいとなると、どんな真似まねをしても、勝たずには置きませんでした。

ナオミはいつでもその「手」を用いられるように、勝負の時は大概ゆるやかなガウンのようなもの、わざとぐずぐずにだらしく纏まとっていました。そして形勢が悪くなると淫みだりがわしく居ひざずまいを崩して、襟えりをはだけたり、足を突き出したり、それでも駄目だと私の膝ひざへ靠かれかかつて頬ツペたを撫なでたり、口の端を摘つまんでぶるぶると振ったり、ありとあらゆる誘惑を試みました。私は実にこの「手」にかかつては弱なりました。就な中かん最後の手段——これはちよつと書く訳に行きませんが、——をとられると、頭の中が何だかもやもやと曇くもつて来て、急に眼の前が暗くなつて、勝負のことなぞ何が何やら分らなくなってしまうのです。

「ずるいよ、ナオミちゃん、そんなことをしちゃ、……………」

「ずるかないわよ、これだつて一つの手だわよ」

ずーんと気が遠くなつて、總べての物が霞^{かす}んで行くような私の眼には、その声と共に満面に媚^こびを含んだナオミの顔だけがぼんやり見えます。にやにやした、奇妙な笑いを浮べつつあるその顔だけが……

「ずるいよ、ずるいよ、トランプにそんな手があるもんじゃない、………」

「ふん、ない事があるもんか、女と男と勝負事をすりや、いろんなおまじないをするもんだわ。あたし余^よ所^そで見たことがあるわ。子供の時分に、内で姉さんが男の人とお花をする時、傍^{そば}で見ていたらいろんなおまじないをやってたわ。トランプだってお花とおんなじ事じゃないの。………」

私は思います、アントニーがクレオパトラに征服されたのも、つまりはこう云う風にして、次第に抵抗力を奪われ、円め込まれてしまったのだらうと。愛する女に自信を持たせるのはいいが、その結果として今度は此方が自信を失うようになる。もうそうなつては容易に女の優越感に打ち勝つことは出来なくなります。そして思わぬ禍^{わざわい}がそこから生じるようになります。

ちようどナオミが十八の歳の秋、残暑のきびしい九月初旬の或る夕方（あ）のことでした。私はその日、会社の方が暇だったので一時間程早く切り上げて、大森の家へ帰つて来ると、思いがけなく門を這入（はい）つた庭の所に、ついで見馴（みな）れない一人の少年が、ナオミと何か話しているのを見かけました。

少年の歳は矢張ナオミと同じくらい、上だとしてもせいぜい十九を超えてはいまいと思えました。白地（しろじ）紺（がすみ）の単衣（ひとえ）を着て、ヤンキー好みの、派手なりボンの附いている麦藁（むぎわら）帽子（ぼうし）を被（かぶ）つて、ステッキで自分の下駄（した）の先（あた）を叩（たた）きながらしゃべっている、赭（あか）ら顔（か）の、眉毛（まゆげ）の濃い、目鼻（めびし）立（た）ちは悪くないが満面（まんめん）にきびのある男。ナオミはその男の足下（あしもと）にしゃがんで花壇（かげ）の蔭（かげ）に隠（かく）れているので、どんな様子（ようす）をしているのだからつきり見えませんでした。百日草（ひゃくじくそう）や、おいらん草（いらんそう）や、カンナの花（はな）の咲（さ）いている間（ま）から、その横顔（よこか）と髪（か）の毛（け）だけが僅（わず）かにチラ（ちら）するだけでした。

男（おとこ）は私（わたし）に氣（き）がつくと、帽子（ぼうし）を取（と）つて会（え）釈（しゃく）をして、

「じゃあ、又（また）」

と、ナオミの方（かた）を振り向（む）いて云（い）いながら、すぐすたすたと門（かど）の方（かた）へ歩いて来（き）ました。

「じゃあ、さよなら」

と、ナオミもつづいて立ち上りましたが、「さよなら」と男は、後向きのままそう云い捨てて、私の前を通る時帽子の縁へちよつと手をかけて、顔を隠すようにしながら出て行きました。

「誰だね、あの男は？」

と、私は嫉妬しつとと云うよりは、「今のは不思議な場面だったね」と云うような、軽い好奇心で聞いたのでした。

「あれ？ あれはあたしのお友達よ、浜田さんて云う、……………」

「いつ友達になったんだい？」

「もう先からよ、——あの人も伊皿子いさらづへ声楽を習いに行っているの。顔はあんなにきびだらけで汚いけれど、歌を唄うたわせるとほんとに素敵よ。いいバリトンよ。この間の音楽会にも私と一緒にクワルテットをやったの」

云わないでもいい顔の悪口を云ったので、私はふいと疑いを起して彼女の眼の中を見ましたけれど、ナオミの素振りは落ち着いたもので、少しも平素と異なった所はなかったのです。

「ちよいちよい遊びにやって来るのかい」

「いいえ、今日が始めてよ、近所へ来たから寄ったんだって。——今度ソシアル・ダンスの倶楽部クラブを捲こしらえるから、是非あたしにも這入ってくれッて云いに来たのよ」

私は多少不愉快だったのは事実ですが、しかしだんだん聞いて見ると、その少年が全くそれだけの話をしに来たのであることは、嘘でないように考えられました。第一彼とナオミとが、私の帰つて来そうな時刻に、庭先でしゃべっていたと云うこと、それは私の疑いを晴らすのに十分でした。

「それでお前は、ダンスをやるつて云つたのかい」

「考えて置くつて云つといたんだけれど、………」

と、彼女は急に甘ったれた猫撫ねこなで声を出しながら、

「ねえ、やつちやいけない？　よう！　やらしてよう！　讓治さんも倶楽部へ這入つて、一緒に習えばいいじゃないの」

「僕も倶楽部へ這入れるのかい？」

「ええ、誰だつて這入れるわ。伊皿子の杉崎先生の知っている露西亞ロシア人が教えるのよ。何でも西比利亞シベリアから逃げて来たんで、お金がなくなつて困つてるもんだから、それを助けてや

りたいと云うんで倶楽部を捨てたんですって。だから一人でもお弟子の多い方がいいのよ。

—— ねえ、やらせてよう！」

「お前はいいが、僕が覚えられるかなア」

「大丈夫よ、直きに覚えられるわよ」

「だけど、僕には音楽の素養がないからナア」

「音楽なんか、やってるうちに自然と分るようになるわよ。……ねえ、讓治さんもやらないや駄目。あたし一人でやったって踊りに行けやしないもの。よう、そうして時々二人でダンスに行こうじゃないの。毎日々々内で遊んでばかりいたってつまりやしないわ」

—— ナオミがこの頃、少し今までの生活に退屈を感じているらしいことは、うすうす私にも分っていました。考えて見れば私たちが大森へ巢を構えてから、既に足かけ四年になります。そしてその間私たちは、夏の休みを除く外はこの「お伽ときばなし 嚙くはの家」の中に立こも籠こもってひろい世の中との交際を断ち、いつもいつもただ二人きりで顔を突き合わせていたのですから、いくらいいろいろな「遊び」をやって見たところで、結局退屈を感じて来るのは無理ありません。ましてナオミは非常に飽きっぽいたちで、どんな遊びでも初めは馬ば鹿かに夢中になりますが、決して長つづきはしないのでした。そのくせ何かしていなければ、

一時間でもじつとしてはいられないので、ランプもいや、兵隊将棋もいや、活動俳優の真似事もいや、となると、仕方がなしに暫く捨てて顧みなかった花壇の花をいじくつて、せつせと土を掘り返したり、種を蒔いたり、水をやりたりしましたけれど、それも一時のきまぐ気紛れに過ぎませんでした。

「あーあ、つまらないなア、何か面白い事はないかなア」

と、ソオファの上に反り返つて読みかけの小説本をおッぽり出して、彼女が大きく欠伸あくびをするのを見るにつけても、この単調な二人の生活に一転化を与える方法はないものかと、私も内々それを気にしていたのでした。で、あたかもそう云う際でしたから、これは成る程、ダンスを習うのも悪くはなからう。もはやナオミも三年前のナオミではない。あの鎌倉へ行つた時分とは訳が違うから、彼女を立派に盛装させて社交界へ打って出たら、恐らく多くの婦人の前でもひけを取るような事はなからう。——と、その想像は私に云い知れぬ誇りを感じさせました。

前にも云うように、私には学校時代から格別親密な友達もなく、これまで出来るだけ無駄な附合いを避けて暮してはいましたけれど、しかし決して社交界へ出るのが嫌ではなかったのです。田舎者で、お世辞が下手で、人との応対が我ながら無細工なので、そのために

引つ込み思案になつていたものの、それだけに又、却^{かえ}つて一層華やかな社会を慕う心がありました。もともとナオミを妻にしたのも彼女をうんと美しい夫人にして、毎日方々へ連れ歩いて、世間の奴等^{やつら}に何とかかとか云われて見たい。「君の奥さんは素敵なハイカラだね」と、交際場^{こうさいじょうり}裡で褒められて見たい。と、そんな野心が大いに働いていたのですから、そういうまでも彼女を「小鳥の籠^{かご}」の中へしまつて置く気はなかったのです。

ナオミの話では、その露西亞人の舞踊の教師はアレキサンドラ・シユレムスカヤと云う名前の、或る伯^{はくしやく}爵^{きやく}の夫人だと云うことでした。夫の伯爵は革命騒ぎで行く^{ゆく}え不明になつてしまい、子供も二人あつたのだそうですが、それも今では居所が分らず、やつと自分の身一つを日本へ落ちのびて、ひどく生活に窮していたので、今度いよいよダンスの教授を始めることになったのだそうです。で、ナオミの音楽の先生である杉崎春枝女史^{むすめ}が夫人の^たために倶楽部を組織し、そして幹事になったのがあの浜田と云う、慶応義塾の学生でした。稽古場^{けいこば}にあてられたのは三田の聖^{ひじりざか}坂にある、吉村と云う西洋楽器店の二階で、夫人はそこへ毎週二回、月曜日と金曜日に出張する。会員は午後の四時から七時までの間に、都合のいい時を定めて行つて、一回に一時間ずつ教えて貰^{もら}い、月謝は一人前二十円、それを毎月前金で払うと云う規定でした。私とナオミと二人で行けば月々四十円もかかる訳で、

いくら相手が西洋人でも馬鹿げているとは思いましたが、ナオミの云うにはダンスと云えば日本の踊りも同じことで、どうせ贅^{ぜいたく}沢なものだからそのくらい取るのは当り前だ。それにそんなに稽古しないでも、器用な人なら一と月ぐらい、不器用な者でも三月もやれば覚えられるから、高いと云つても知れたことだ。

「第一何だわ、そのシユレムスカヤつて云う人を助けてやらないじゃ気の毒だわ。昔は伯爵の夫人だったのがそんなに落ちぶれてしまうなんて、ほんとに可哀^{かわい}そうじゃないの。浜田さんに聞いたんだけど、ダンスは非常に巧^{うま}くつて、ソシアル・ダンスばかりじゃなく、希望者があればステージ・ダンスも教えるんだつて。ダンスばかりは芸人のダンスは下品で、駄目だわ、ああ云う人に教わるのが一番いいのよ」

と、まだ見たこともないその夫人に、彼女は頻^{しき}りと肩を持って、一ぱしダンス通らしいことを云うのでした。

そう云う訳で私とナオミとは、とにかく入会することになり、毎月曜日と金曜日に、ナオミは音楽の稽古を済ませ、私は会社の方が退^ひけると、すぐその足で午後六時までに聖坂の楽器店へ行くことにしました。始めの日は午後五時に田町の駅でナオミが私を待ち合わせ、そこから連れだつて出かけましたが、その楽器店は坂の中途にある、間口の狭いささやか

な店でした。中へ這入るとピアノなの、オルガンなの、蓄音器なの、いろいろな楽器が窮屈な場所に列ならんでいて、もう二階ではダンスが始まっているらしく、騒々しい足取りと蓄音器の音が聞えました。ちょうど梯子段はしごだんの上り口のところ、慶応の学生らしいのが五六人うじやうじやしていて、それがジロジロ私とナオミの様子を見るのが、あまり好い気持はしませんでした、

「ナオミさん」

と、その時馴れ馴れしい大きな声で、彼女を呼んだ者がありました。見ると今の学生の一入で、フラット・マンドリン——と云うものでしょうか、平べったい、ちよつと日本の月琴げつきんのような形の楽器を小脇こわきにかかえて、その調子を合わせながら針金の絃げんをチリチリ鳴らしているのです。

「今日はア」

と、ナオミも女らしくない、書生ツぽのような口調で応じて、

「どうしたのまアちゃんは？ あんたダンスをやらないの？」

「やあだア、己おれあ」

と、そのまアちゃんと呼ばれた男は、ニヤニヤ笑ってマンドリンを棚の上に置きながら、

「あんなもなあ己あ真つ平御免だ。第一お前^{めえ}、月謝を二十円も取るなんて、まるでたけえや」

「だって始めて習うんなら仕方がないわよ」

「なあに、いずれそのうちみんなが覚えるだろうから、そうしたら奴等を取つ掴^{つか}まえて習つてやるのよ。ダンスなんざあそれで沢山よ。どうでえ、要領がいいだろう」

「ずるいわまアちゃんは！ あんまり要領がよ過ぎるわよ。——ところで『浜さん』は二階にいる？」

「うん、いる、行つて御覧」

この楽器屋はこの近辺の学生たちの「溜^{たま}り」になつてゐるらしく、ナオミもちよいちよい来るものと見えて、店員などもみんな彼女と顔^{かお}馴染^{なじみ}なのでした。

「ナオミちゃん、今下にいた学生たちは、ありや何だね？」

と、私は彼女に導かれて梯子段を上りながら尋ねました。

「あれは慶応のマンドリン倶楽部の人たちなの、口はぞんざいだけれど、そんなに悪い人たちじゃないのよ」

「みんなお前の友達なのかい」

「友達つて云う程じゃないけれど、時々此処へ買い物に來るとあの人たちに会うもんだから、それで知り合いになっちゃったの」

「ダンスをやるのは、ああ云う連中が重なのかなあ」

「さあ、どうだか、——そうじゃないでしよ、学生よりはもっと年を取った人が多いんじゃない?——今行つて見れば分るわよ」

二階へ上ると、廊下の取っ突きに稽古場があつて、「ワン、トウウ、スリー」と云いながら足拍子を踏んでゐる五六人の人影が、すぐと私の眼に入りました。日本座敷を二た間打ち抜いて、靴穿きのまま這入れるような板敷にして、多分滑りをよくする為めか何かでしよう、例の浜田と云う男が彼方此方へチョコチョコ駆けて歩いては、細かい粉を床の上へまいています。まだ日の長い暑い時分のことだったので、すっかり障子を明け放してある西側の窓から、夕日がぎらぎらとさし込んでゐる、そのほの紅い光を背に浴びせながら、白いジョオゼットの上衣を着て、紺のサージのスカートを穿いて、部屋と部屋との間仕切りの所に立っているのが、云うまでもなくシユレムスカヤ夫人でした。二人の子供があるというのから察すれば、実際の歳は三十五六にもなるのでしょうか? 見たところでは漸く三十前後ぐらいで、成る程貴族の生れらしい威厳を含んだ、きりりと引き緊まった顔だ

ちの婦人、——その威厳は、多少の凄^{すこ}みを覚えさせるほど蒼^{そう}白^{はく}を帯びた、澄んだ血色のせいであろうと思われましたが、しかし凜^{りん}乎^こたる表情や、瀟^{しょう}洒^{うしや}な服装や、胸だの指だのに輝いている宝石を見ると、これが生活に困っている人とはどうしても受け取れませんでした。

夫人は片手に鞭^{むち}を持つて、ここもち氣むずかしそうに眉根^{まゆね}を寄せながら、練習している人々の足元を睨^{にら}んで、「ワン、トウウ、トウリー」——露西亞人の英語ですから“three”を“tree”と発音するのです。——と静かな、しかし命令的な態度^{もつ}を以て繰り返してい

ます。それに従つて、練習生が列を作つて、覺^{おぼ}束^{つか}ないステップを蹈^いみつつ、往^いつたり来たりしているところは、女の士官が兵隊を訓練しているようで、いつか浅草の金竜館で見たことのある「女軍出征」を想^{おも}い出しました。練習生のうちの三人は、とにかく学生ではないらしい背広服を着た若い男で、あとの二人は女学校を出たばかりの、何^ど処^こかの令嬢でありましょう、質素ななりをして、袴^{はかま}を穿いて男と一緒に一生懸命に稽古しているのが、いかにも真面目^{まじめ}なお嬢さんらしくて悪い感じはしませんでした。夫人は一人でも足を間違えた者があると、忽^{たちま}ち

「No!」

と、鋭く叱^{しつ}して、傍へやって来て歩いて見せる。覚えが悪くて余りたびたび間違えると、

「No good!

と叫びながら、鞭でぴしりツと床を叩^{たた}いたり、男女の容赦なくその人の足を打ったりします。

「教え方が実に熱心でいらつしやいますのね、あれでなければいけませんわ」

「ほんとうにね、シユレムスカヤ先生はそりや熱心でいらつしやいますの。日本人の先生方だどうしてもああは参りませんけれど、西洋の方はたとい御婦人でも、其^{そこ}処はキッチンとしていらつて、全く氣持がようございますのよ。そしてあの通り授業の間は一時間でも二時間でも、ちつともお休みにならないで稽古をおつづけになるのですから、この暑いにお大抵ではあるまいと思つて、アイスクリームでも差上げようかと申すのですけれど、時間の間は何も要らないと仰^おつしやつて、決して召し上らないんですの」

「まあ、よくそれでおくたびれになりませんのね」

「西洋の方は体が出来ていらつしやるから、わたくし共とは違いますのね。——でも考
えるとお気の毒な方でございますわ、もとは伯爵の奥様で、何不自由なくお暮らしになつ
ていらしつたのが、革命のためにこう云う事までなさるようになったのですから。——」

待合室になっている次の間のソファに腰かけて、稽古場の有様を見物しながら、二人の婦人がさも感心したようにこんな事をしゃべっています。一人の方は二十五六の、唇の薄く大きい、支那金魚の感じがする円顔の出眼の婦人で、髪の毛を割らずに、額の生え際から頭の頂辺へはりねずみの臀部の如く次第に高く膨らがして、髻の所へ非常に大きな白鬘の簪を挿して、埃及模様の塩瀬の丸帯に翡翠の帯留めをしているのですが、シユレムスカヤ夫人の境遇に同情を寄せ、しきりに彼女を褒めちぎっているのはこの婦人の方なものでした。それに合槌を打っているもう一人の婦人は、汗のため厚化粧のお白粉がぶちになって、ところどころに小皺のある、荒れた地肌が出ているのから察すると、恐らく四十近いのでしょう。わざとか生れつきか束髪に結った赭い髪の毛のぼうぼうと縮れた、痩せたひよろ長い体つきの、身なりは派手にしていますけれど、ちよつと看護婦上りのような顔だちの女でした。

この婦人連を取り巻いて、つつましやかに自分の番を待ち受けている人々もあり、中には既に一通りの練習を積んだらしく、てんでに腕を組み合わせて、稽古場の隅を踊り廻っているのもあります。幹事の浜田は夫人の代理と云う格なのか、自分でそれを気取っているのか、そんな連中の相手になつて踊つてやつたり、蓄音器のレコードを取り換えたりし

て、独りで目まぐるしく活躍しています。一体女は別として、男でダンスを習いに来ようと言う者は、どう云う社会の人間なのかと思つて見ると、不思議なことにしやれた服を着ているのは浜田ぐらいで、あとは大概安月給取りのような、野暮くさい紺の三つ組みを着た、気の利かなきそうなのが多いのでした。尤も歳は皆私より若そうで、三十台と思われる紳士はたった一人しかありません。その男はモーニングを纏まとつて、金縁の分の厚い眼鏡をかけて、時勢おくれの奇妙に長い八字髭はちひげを生やしていて、一番呑込みのみこが悪いらしく、幾度となく夫人に『No good』とどやしつけられ、鞭でピシリと喰たわされます。と、その度たび毎ごとにニヤニヤ間の抜けた薄笑いをしながら、又始めから「ワン、トウウ、スリー」をやり直します。

ああ云う男が、いい歳をしてどう云うつもりでダンスをやる氣になつたものか？ いや、考えると自分も矢張あの男と同じ仲間じゃないのだろうか？ それでなくても晴れがましい場所へ出たことのない私は、この婦人たちの眼の前で、あの西洋人にどやしつけられる刹那せつなを思うと、いかにナオミのお附き合ひとは云いながら、何だかこう、見ているうちに冷汗あせわが湧いて来るように、自分の番の廻つて来るのが恐ろしいようになるのでした。

「やあ、入いらつしやい」

と、浜田は二三番踊りつづけて、ハンケチでにきびだらけの額の汗を拭きながら、その時
傍へやつて来ました。

「や、この間は失礼しました」

と今日はいささか得意そうに、改めて私に挨拶あいさつをして、ナオミの方を向きながら、

「この暑いのによく来てくれたね、——君、済まないが扇子を持ってたら貸してくれな
いか、何しろどうも、アッシスタントもなかなか楽な仕事じゃないよ」

ナオミは帯の間から扇子を出して渡してやつて、

「でも浜さんはなかなか上手ね、アッシスタントの資格があるわ。いつから稽古し出した
のよ」

「僕かい？ 僕はもう半歳もやつているのさ。けれど君なんか器用だから、すぐ覚えるよ、
ダンスは男がリードするんで、女はそれに喰くつ着いて行けりやあいんだからね」

「あの、此処にいる男の連中はどう云う人たちが多いでしょか？」

私がそう云うと、

「はあ、これですか」

と、浜田は丁寧な言葉になって、

「この人たちは大概あの、東洋石油株式会社の社員の方が多いんです。杉崎先生の御親^{しんせ}戚^きが会社の重役をしておられるので、その方からの御紹介だそうですがね」

東洋石油の会社員とソシアル・ダンス！——随分妙な取り合わせだと思ひながら、私は重ねて尋ねました。

「じゃあ何ですか、あのあすこに居る髭の生えた紳士も、やっぱり社員なんですか」

「いや、あれは違います、あの方はドクトルなんです」

「ドクトル？」

「ええ、やはりその会社の衛生顧問をしておられるドクトルなんです。ダンスぐらい体の運動になるものはないと云うんで、あの方は寧ろ^{むし}その為^ためにやっておられるんです」

「そう？ 浜さん」

と、ナオミが口を挟みました。

「そんなに運動になるのかしら？」

「ああ、なるとも。ダンスをやつてたら冬でも一杯汗を掻^かいて、シャツがぐちやぐちやになるくらいだから、運動としては確かにいいね。おまけにシユレムスカヤ夫人のは、あの通り練習が猛烈だからね」

「あの夫人は日本語が分るのでしょうか？」

私がそう云つて尋ねたのは、実はさつきからそれが気になっていたからでした。

「いや、日本語は殆ど^{ほん}分りません、大概英語でやっていますよ」

「英語はどうも、……スピーキングの方になると、僕は不得手だもんだから、……」

「なあに、みんな御同様でさあ。シュレムスカヤ夫人だつて、非常なブローケン・イングリッシュで、僕等よりひどいくらいですから、ちつとも心配はありませんよ。それにダンスの稽古なんか、言葉はなんにも要りやしません。ワン、トゥウ、スリーで、あとは身振り分るんですから。……」

「おや、ナオミさん、いつお見えになりました？」

と、その時彼女に声をかけたのは、あの白鼈甲の簪を挿した、支那金魚の婦人でした。

「ああ、先生、——ちよいと、杉崎先生よ」

ナオミはそう云つて、私の手を執つて、その婦人のいるソオファの方へ引つ張つて行きました。

「あの、先生、御紹介いたします、——河合讓治——」

「ああ、そう、——」

と、杉崎女史はナオミが赧^{あか}い顔をしたので、皆まで聞かずにそれと意味を悟つたらしく、立ち上つて会^え釈^{しゃく}しながら、

「——お初にお目に懸ります、わたくし、杉崎でございます。ようこそお越し下さいました。——ナオミさん、その椅子^{いす}を此方へ持つていらつしやい」

そして再び私の方を振り返つて、

「さあ、どうぞおかけ遊ばして。もう直きでございますけれど、そうして立つてお待ちになつていらしつちや、おくたびれになりますわ」

「……………」

私は何と挨拶したかハッキリ覚えていませんが、多分口の中でもぐもぐやらせただけだったでしょう。この、「わたくし」と云うような切口上でやって来られる婦人連が、私には最も苦手でした。そればかりでなく、私とナオミとの関係をどう云う風に女史が解釈しているのか、ナオミがそれをどの点までほめかしてあるのか、ついうっかりして質^{ただ}して置くのを忘れたので、尚^{なほ}更^{さら}どぎまぎしたのでした。

「あの御紹介いたしますが」

と、女史は私のもじもじするのに頓^{とん}着^{じやく}なく、例の縮れ毛の婦人の方を指しながら、

「この方は横浜のジェームス・ブラウンさんの奥さんでいらつしやいます。——この方は大井町の電気会社に出ていらつしやる河合譲治さん、——」

成る程、するとこの女は外国人の細君だったのか、そう云われれば看護婦よりも洋妾タイプだと思いながら、私はいよいよ固くなってお辞儀をするばかりでした。

「あなた、失礼でございますけれど、ダンスのお稽古をなさいますのは、フォイスト・タイムでいらつしやいますの？」

その縮れ毛は直ぐに私を掴まえて、こんな風にしやべり出したが、「フォイスト・タイム」と云うところがいやに気取った発音で、ひどく早口に云われたので、

「は？」

と云いながら私がへどもどしている、

「ええ、お始めてなのでございますの」

と、杉崎女史が傍から引き取ってくれました。

「まあ、そうでいらつしやいますか、でもねえ、何でございますわ、そりやジェルマンはレディーよりもモー・モー・デイフィカルトでございますけれど、お始めになれば直きに何でございますわ。………」

この「モー・モー」と云う奴が、又私には分りませんでした、よく聞いて見ると“more”と云う意味なのです。「ジェントルマン」を「ジエンルマン」、「リットル」を「リルル」、総べてそう云う発音の仕方です。そして日本語にも一種奇妙なアクセントがあつて、三度に一度は「何でございますわ」を連発しながら、油紙へ火がついたように際限もなくしゃべるのです。

それから再びシュレムスカヤ夫人の話、ダンスの話、語学の話、音楽の話、………ベトオヴエンのソナタが何だとか、第三シンフォニーがどうしたとか、何々会社のレコードは何々会社のレコードより良いとか悪いとか、私がすっかりしよげて黙ってしまったので、今度は女史を相手にしてぺらぺらやり出すその口ぶりから推察すると、このブラウン氏の夫人というのは杉崎女史のピアノの弟子でもありませんか。そして私はこんな場合に、「ちよつと失礼いたします」と、いい潮時を見計つて席を外すと云うような、器用な真似が出来ないので、この饒舌家の婦人の間に挟まった不運を嘆息しながら、否でも応でもそれを拝聴していなければなりませんでした。

やがて、髭のドクトルを始めとして石油会社の一団の稽古が終ると、女史は私とナオミとをシュレムスカヤ夫人の前へ連れて行つて、最初にナオミ、次に私を、——これは多分

レディーを先にと云う西洋流の作法に従ったのでしよう、——極めて流暢な英語で以て引き合わせました。その時女史はナオミのことを「ミス・カワイ」と呼んだようでした。私は内々、ナオミがどんな態度を取って西洋人と応対するか、興味を持って待ち受けていましたが、ふだんは己惚れの強い彼女も、夫人の前へ出てはさすがにちよつと狼狽の気味で、夫人が何か一言二言云いながら、威厳のある眼元に微笑を含んで手をさし出すと、ナオミは真つ赤な顔をして何も云わずにコソコソと握手をしました。私と来では尚更の事で、正直のところ、その青白い彫刻のような輪廓を、仰ぎ見ることは出来ませんでした。そして黙つて俯向いたまま、ダイヤモンドの細かい粒が無数に光っている夫人の手を、そうツと握り返しただけです。

九

私が、自分は野暮な人間であるにも拘わらず、趣味としてハイカラを好み、万事につけて西洋流を真似したことは、既に読者も御承知の筈です。若しも私に十分な金があつて、気随氣儘な事が出来たら、私は或は西洋に行つて生活をし、西洋の女を妻にしたかも知れま

せんが、それは境遇が許さなかったので、日本人のうちではとにかく西洋人くさいナオミを妻としたような訳です。それにもう一つは、たとい私に金があったとしたところで、男振りに就いての自信がない。何しろ背が五尺二寸という小男で、色が黒くて、齒並びが悪くて、あの堂々たる体格の西洋人を女房に持とうなどは、身の程を知らな過ぎる。矢張日本人には日本人同士がよく、ナオミのようなのが一番自分の注文に餽^はまっているのだと、そう考えて結局私は満足していたのです。

が、そうは云うものの、白^{はく}皙^{せき}人種の婦人に接近し得ることは、私に取って一つの喜び、

——いや、喜び以上の光榮^{ありてい}でした。有^{ありてい}体に云うと、私は私の交際下手と語学の才の乏^{あひそ}しいのに愛憎^{あひそ}を尽かして、そんな機会は一生廻^{めぐ}つて来ないものとあきらめを附け、たまに外人団のオペラを見るとか、活動写真の女優の顔に馴染^{なじ}むとかして、わずかに彼等の美しさを夢のように慕^ほっていました。然^{しか}るに図らずもダンスの稽古^{しきこ}は、西洋の女——おまけにそれも伯^{はく}爵^{しやく}の夫人——と接近する機会を作ったのです。ハリソン嬢のようなお婆^{ばあ}さんは別として、私が西洋の婦人と握手する「光榮」に浴したのは、その時が生れて始めてでした。私はシユレムスカヤ夫人がその「白い手」を私の方へさし出したとき、覚えず胸をどきツとさせてそれを握^{にぎ}つていいものかどうか、ちよつと躊躇^{ちゆうちよ}躊躇^{ちゆうちよ}したくらいでした。

ナオミの手だつて、しなやかで艶^{つや}があつて、指が長々とほつそりしていて、勿^{もちろん}論優雅でないことはない。が、その「白い手」はナオミのそのようにきやしや過ぎないで、掌^{てのひら}が厚くたつぷりと肉を持ち、指もなよなよと伸びていながら、弱々しい薄ッぺらな感じがなく、「太い」と同時に「美しい」手だ。——と、私はそんな印象をうけました。そこに簇^{ゆびわ}めている眼玉のようにギラギラした大きな指環も、日本人ならきつと厭味^{いやみ}になるでしょうに、却^{かえ}つて指を纖麗に見せ、氣品の高い、豪奢^{ごうしゃ}な趣を添えています。そして何よりもナオミと違つていたところは、その皮膚の色の異常な白さです。白い下にうすい紫の血管が、大理石の斑^{はんもん}紋^{もん}を想^{おも}わせるように、ほんのり透いて見える凄^{せい}艶^{えん}さです。私は今までナオミの手をおもちやにしながら、

「お前の手は実にきれいだ、まるで西洋人の手のように白いね」

と、よくそう云つて褒めたものですが、こうして見ると、残念ながらやつぱり違います。白いようでもナオミの白さは冴^さえていない、いや、一旦^{いったん}この手を見たあとではどす黒くさえ思われます。それからもう一つ私の注意を惹^ひいたのは、その爪^{つま}でした。十本の指頭の悉^{ことごと}くが、同じ貝殻を集めたように、どれも鮮かに小爪^{そつろ}が揃^{そろ}つて、桜色に光つていたばかりでなく、大方これが西洋の流行なのでもありましようか、爪の先が三角形に、ぴんと尖^{とが}ら

せて切つてあつたのです。

ナオミは私と並んで立つと一寸ぐらい低かつたことは、前に記した通りですが、夫人は西洋人としては小柄のように見えながら、それでも私よりは上背があり、踵かかとの高い靴はを穿はいているせいか、一緒に踊るとちょうど私の頭とすれすれに、彼女の露あらわな胸がありました。夫人が始めて、

『Walk with me!』

と云いつつ、私の背中へ腕を廻してワン・ステップの歩みを教えたとき、私はどんなにこの真つ黒な私の顔が彼女の肌に触れないように、遠慮したことでしょう。その滑かな清せ楚いそな皮膚は、私に取つてはただ遠くから眺めるだけで十分でした。握手してさえ済まないように思われたのに、その柔かな羅うすもの衣を隔てて彼女の胸に抱きかかえられてしまつては、私は全くしてはならないことをしたようで、自分の息が臭くはななろうか、このにちやにちやした脂あぶらツ手が不快を与えはしななろうかと、そんな事ばかり気にかかつて、たまたま彼女の髪の毛一と筋が落ちて来ても、ヒヤリとしないではいられませんでした。それのみならず夫人の体には一種の甘い匂におがありました。

「あの女アひでえ腋臭わきがだ、とてもくせえや！」

と、例のマンドリン倶楽部クラブの学生たちがそんな悪口を云いっているのを、私は後で聞いたことがありますがし、西洋人には腋臭が多いそうですから、夫人も多分そうだったに違いなく、それを消すために始終注意して香水をつけていたのでしょうか、しかし私にはその香水と腋臭との交あった、甘酸あまっぱいようなほのかな匂が、決して厭いとでなかったばかりか、常に云い知れぬ蠱惑こわくでした。それは私に、まだ見たこともない海の彼方かなたの国々や、世にも妙たえなる異国の花園を想い出させました。

「ああ、これが夫人の白い体から放たれる香氣か」
と、私は恍惚こうこつとなりながら、いつもその匂を貪むさぼるように嗅かいだものです。

私のようなぶきツちよな、ダンスなどと云う花やかな空気には最も不適當であるべき男が、ナオミの為ためめとは云いながら、どうしてもその後飽きもしないで、一と月も二た月も稽古に通う氣になったか。——私は敢あえて白状しますが、それは確かにシユレムスカヤ夫人と云うものがあつたからです。毎月曜日と金曜日の午後、夫人の胸に抱かれて踊ること。そのほんの一時間が、いつの間にか私の何よりの楽しみとなっていたのです。私は夫人の前に出ると、全くナオミの存在を忘れました。その一時間はたとえば芳烈な酒のように、私を酔わせずには置きませんでした。

「讓治さんは思いの外熱心ね、直きイヤになるかと思つたら。――」

「どうして？」

「だって、僕にダンスが出来るかなアなんて云つてたじゃないの」

ですから私は、そんな話が出るたびに、何だかナオミに済まないような気がしました。

「やれそうもないと思つたけれど、やつて見ると愉快なもんだね。それにドクトルの云い草じゃないが、非常に体の運動になる」

「それ御覧なさいな、だから何でも考えていないで、やつて見るもんだわ」

と、ナオミは私の心の秘密には気がつかないで、そう云つて笑うのでした。

さて、大分稽古を積んだからもうそろそろよかろうと云うので、始めて私たちが銀座のカフェ・エルドラドオへ出かけたのは、その年の冬のことでした。まだその時分、東京にはダンス・ホールがそう沢山なかったので、帝国ホテルや花月園を除いたら、そのカフェがその頃漸くやり出したくらいのものでしたでしょう。で、ホテルや花月園は外国人が主であつて、服装や礼儀がやかましいそうだから、まず手初めにはエルドラドオがよからう、と、そう云うことになったのでした。尤もそれはナオミが何処からか噂を聞いて来て「是非行つて見よう」と発議したので、まだ私にはおおびらな場所で踊るだけの度胸はな

かったのですが、

「駄目よ、讓治さんは！」

と、ナオミは私を睨みつけて、

「そんな気の弱いことを云っているから駄目なのよ。ダンスなんて云うものは、稽古ばかりじゃいくらやっただって上手になりっこありやしないわよ。人中へ出てずうずうしく踊っているうちに巧くなるものよ」

「そりやあたしかにそうだろうけれども、僕にはその、ずうずうしさが無いもんだから、………」

「じやいいわよ、あたし独りでも出かけるから。………浜さんでもまアちゃんでも誘って行つて、踊つてやるから」

「まアちゃんて云うのはこの間のマンドリン倶楽部の男だろう？」

「ええ、そうよ、あの人なんか一度も稽古しないくせに何処へでも出かけて行つて相手構わず踊るもんだから、もうこの頃じやすっかり巧くなっちゃったわ。讓治さんよりずっと上手だわ。だからずうずうしくしなけりや損よ。………ね、いらっしやいよ、あたし讓治さんと踊つて上げるわ。………ね、後生だから一緒に来て！………いい児、いい児、讓治

さんはほんとに好い児！」

それで結局出かけることに話が極まると、今度は「何を着て行こう」でまた長いこと相談が始まりました。

「ちよつと讓治さん、どれがいいこと？」

と、彼女は出かける四五日も前から大騒ぎをして、有るだけのものを引っ張り出して、それに一々手を通して見るのです。

「ああ、それがいいだろう」

と、私もしまいには面倒になつて好い加減な返辞をすると、

「そうかしら？　これで可笑おかしいかしら？」

と鏡の前をぐるぐる廻つて、

「変だわ、何だか。あたしこんなものじゃ気に入らないわ」

と直ぐ脱ぎ捨てて、紙屑かみくずのように足で蹴しくちやに蹴け飛ばして、又次の奴を引っかけて見ます。が、あの着物もいや、この着物もいやで、

「ねえ、讓治さん、新しいのを拵こしらえてよ！」

となるのでした。

「ダンスに行くにはもつと思いきり派手なのでなけりや、こんな着物じや引き立ちはしないわ。よう！ 拵えてよう！ どうせこれからちよいちよい出かけるんだから、衣裳がなけりや駄目じやないの」

その時分、私の月々の収入はもはや到底彼女の贅ぜい沢たくには追いつかなくなっていました。

元来私は金銭上の事にかけてはなかなか几帳面きちょうめんな方で、独身時代にはちゃんと毎月の小遣いを定め、残りはたとい僅わずかでも貯金するようにしていましたから、ナオミと家を持つ

た当座はかなりの余裕があつたものです。そして私はナオミの愛おほに溺おほれてはいましたけれど、会社の仕事は決して疎おろそかにしたことはなく、依然として精せい励れい恪かく勤きんな模範的社員だ

つたので、重役の信用も次第に厚くなり、月給の額も上つて来て、半期々々のボーナスを加えれば、平均月に四百円になりました。だから普通に暮らすのなら二人で楽な訳であるのに、それがどうしても足りませんでした。細かいことを云うようですが、先まず月々の生活費が、いくら内輪に見積つても二百五十円以上、場合によっては三百円もかかります。

このうち家賃が三十五円、——これは二十円だったのが四年間に十五円上がりました。

——それから瓦斯ガス代、電燈でんとう代、水道代、薪炭しんたん代、西洋洗濯代等の諸雑費を差し引き、残りの二百円内外から二百三四十円と云うものを、何に使つてしまふかと云うと、その大

部分は喰い物でした。

それもその筈で、子供の頃には一品料理のビフテキで満足していたナオミでしたが、いつの間にやらだんだん口が奢おごつて来て、三度の食事の度たびごと毎に「何がたべたい」「彼かがたべたい」と、歳としに似合わぬ贅沢を云います。おまけにそれも材料を仕入れて、自分で料理するなどと云う面倒臭いことは嫌いなので、大概近所の料理屋へ注文します。

「あーあ、何か旨うまい物がたべたいなア」

と、退屈するとナオミの云い草はきつとそれでした。そして以前は洋食ばかり好きでしたけれど、この頃ではそうでもなく、三度に一度は「何屋のお椀わんがたべて見たい」とか、

「何処どこその刺身を取って見よう」とか、生意気なことを云います。

午ひるは私は会社に居ますから、ナオミ一人でたべるのですが、却ってそう云う折の方がその贅沢は激しいのでした。夕方、会社から帰つて来ると、台所の隅に仕出し屋のおかもちや、洋食屋の容物いれものなどが置いてあるのを、私はしばしば見ることがありました。

「ナオミちゃん、お前又何か取ったんだね！ お前のようにてんや物ばかり喰たべていた日にお金つたいが懸たつて仕様がないう。第一女一人でもってそんな真似まねをするなんて、少しは勿も体たいないと云う事を考えて御覧」

そう云われてもナオミは一向平気なもので、

「だって、一人だからあたし取ったんだわ、おかず拵えるのが面倒なんだもの」と、わざとふてくされて、ソオファの上にふん反り返っているのです。

この調子だからたまったものではありません。おかずだけならまだしもですが、時には御飯を炊く^たのさえ億劫^{おっくう}がつて、飯まで仕出し屋から運ばせると云う始末でした。で、月末になると、鳥屋、牛肉屋、日本料理屋、西洋料理屋、鮎^{すし}屋、鰻^{うなぎ}屋、菓子屋、果物屋と、方々から持つて来る請求書の締め高が、よくもこんなに喰^かべられたものだど、驚くほど多額に上ったのです。

喰^かい物の次に嵩^{かさ}んだのは西洋洗濯の代でした。これはナオミが足袋一足でも決して自分で洗おうとせず、汚れ物は総^すべてクリーニングに出したからです。そしてたまたま叱^こ言^ごを云えば、二た言目には、

「あたし女中じゃないことよ」と云います。

「そんな、洗濯なんかすりゃあ、指が太くなっちゃって、ピアノが弾けなくなるじゃないの、讓治さんはあたしの事を何と云って？ 自分の宝物だって云ったじゃないの？ だの

にこの手が太くなつたらどうするのよ」

と、そう云います。

最初のうちこそナオミは家事向きの用をしてくれ、勝手元の方を働きましたが、それが続いたのはほんの一年か半年ぐらいたつたでしょう。ですから洗濯物などはまだいいとして、何より困つたのは家の中が日増しに乱雑に、不潔になつて行くことでした。脱いだものは脱ぎツ放し、喰べた物は喰ベツ放しと云う有様で、喰い荒した皿小鉢だの、飲みかけの茶碗や湯呑みだの、垢じみた肌着や湯文字だのが、いつ行つて見てもそこらに放り出してある。床は勿論椅子でもテーブルでも埃が溜つていないことはなく、あの折角のインド更紗の窓かけも最早や昔日の俤を止めず煤けてしまい、あんなに晴れやかな「小鳥の籠」であつた筈のお伽噺の家の気分は、すっかり趣を変えてしまつて、部屋へ這入るとそう云う場所に特有な、むうツと鼻を衝くような臭いがする。私もこれには閉口して、「さあさあ、僕が掃除をしてやるから、お前は庭へ出ておいで」と、掃いたりハタいたりして見たこともありますけれど、ハタけばハタくほどごみが出て来るばかりでなく、余り散らかり過ぎていたので、片附けたくとも手の附けようがないのでした。

これでは仕方がないと云うので、二三度女中を雇ったこともありましたが、来る女中も来る女中もみんな呆^{あき}れて帰ってしまつて、五日と辛抱しているものはありませんでした。第一初めからそう云う積りはなかつたので、女中が来ても寝るところがありません。そこへ持つて来て私たちの方でも不遠慮ないちやつきが出来なくなつて、ちよつと二人でふざけるのにも何だか窮屈な思いをする。ナオミは人手が殖^ふえたとなると、いよいよ横着を發揮して、横のものを縦にもしないで、一々女中をコキ使います。そして相変らず「何屋へ行つて何を注文して来い」と、却^{かえ}つて前より便利になつただけ、余計贅沢を並べます。結局女中というものは非常に不経済でもあり、われわれの「遊び」の生活に取つて邪魔でもあるので、向うも恐れをなしたでしょうが、此方も達^{たつ}て居て貰^{もら}いたくはなかつたのです。

そう云^いう訳で、月々の暮らしがそれだけは懸るとして、あとの百円から百五十円のうちから、月に十円か二十円ずつでも貯金をしたいと思つたのですが、ナオミの錢遣いが激しいので、そんな余裕はありませんでした。彼女は必ず一と月に一枚は着物を作ります。いくらめりんすや銘仙でも裏と表とを買つて、しかも自分で縫う事はせず、仕立て賃をかけますから、五十円や六十円は消えてなくなる。そうして出来上つた品物は、氣に入らなければ押入れの奥へ突つ込んだまままるで着ないし、氣に入つたとなると膝^{ひざ}が抜けるまで着殺

してしまう。ですから彼女の戸棚の中には、ぼろぼろになった古着が一杯詰まっています。それから下駄の贅沢を云います。草履、駒下駄こまげた、足駄ひより、日和下駄、両ぐり、余所行きよその下駄、不斷の下駄——これ等が一足七八円から二三円どまりで、十日間に一遍ぐらいは買うのですから、積つて見ると安いものではありません。

「こう下駄を穿はいちやたまらないから、靴にしたらいじやないか」

と云つて見ても、昔は女学生らしく袴はかまをつけて靴で歩くのを喜んだ癖に、もうこの頃では稽古けいこに行くにも着流しのまましやなりしやなりと出かけると云う風で、

「あたしこう見えても江戸ッ児よ、なりはどうでも穿きものだけはチャンとしないじや気が済まないわ」

と、此方を田舎者扱いにします。

小遣いなども、音楽会だ、電車賃だ、教科書だ、雑誌だ、小説だと、三円五円ぐらいつつ三日に上げず持つて行きます。この外に又英語と音楽の授業料が二十五円、これは毎月規則的に払わなければなりません、と、四百円の収入で以上の負担に堪えるのは容易でなく、貯金どころかあべこべに貯金を引き出すようになり、独身時代にいくらか用意して置いたものもチビチビ成し崩しに崩れて行きます。そして、金と云うものは手を付け出したら誠

に早いものですから、この三四年間にすっかり蓄えを使い果して、今では一文もないのでした。

因果な事には私のような男の常として、借金の断りを云うのは不得手、従つて勘定はキンキチンと払わなければどうも落ち着いていられないので、晦日みそかが来ると云うに云われないう苦労をしました。「そう使つちや晦日みそかが越せなくなるじゃないか」とたしなめても、

「越せなければ、待つて貰えばいいわよ」

と、云います。

「——三年も四年も一つ所に住んでいながら、晦日の勘定が延ばせないなんて法はないわよ、半期々々にはきつと払うからつて云えば、何処でも待つにきまつているわ。讓治さんは気が小さくつて融通が利きかないからいけないのよ」

そう云つた調子で、彼女は自分の買かいたいものは総べて現金、月々の払いはボーナスが入るまで後廻しと云うやり方。そのくせ矢張借金の言訳ことわりをするのは嫌いで、

「あたしそんなこと云うのは厭いやだわ、それは男の役目じゃないの」

と、月末になればフイと何処かへ飛び出して行きます。

ですから私は、ナオミのために自分の収入を全部捧ささげていたと云つてもいいのでした。彼

女を少しでもよりよく身綺麗みぎれいにさせて置くこと、不自由な思いや、ケチ臭いことはさせないで、のんびりと成長させてやること、——それは素もとより私の本懐でしたから、困る困ると愚痴りながらも彼女の贅沢を許してしまいます。するとそれだけ他の方面を切り詰めなければならぬ訳で、幸い私は自分自身の交際費はちつとも懸りませんでした、それでもたまに会社関係の会合などがあつた場合、義理を欠いても逃げられるだけ逃げるようにする。その外自分の小遣い、被服費、弁当代などを、思い切つて節約する。毎日通う省線電車もナオミは二等の定期を買うのに、私は三等で我慢をする。飯を炊くのが面倒なので、てんや物を取られては大変だから、私が御飯を炊いてやり、おかずを拵えてやることもある。が、そう云う風になつて来るとそれが又ナオミには気に入りません。

「男のくせに台所なんぞ働かなくつてもいいことよ、見ツともないわよ」

と、そう云うのです。

「讓治さんはまあ、年が年中同じ服ばかり着ていないで、もう少し気の利いたなりをしたらどうなの？ あたし、自分ばかり良くつたつて讓治さんがそんな風じゃあやっぱり厭だわ。それじゃ一緒に歩けやしないわ」

彼女と一緒に歩けなければ何の楽しみもありませんから、私にしても所謂いわゆる「気の利いた」

服の一つも揃えなければなくなる。そして彼女と出かける時は電車も二等へ乗らなければならぬ。つまり彼女の虚栄心を傷けないようにするためには、彼女一人の贅沢では済まない結果になるのだ。

そんな事情で遣り繰りに困っていたところへ、この頃又シユレムスカヤ夫人の方へ四十円ずつ取られますから、この上ダンスの衣裳を買ってやったりしたらにっちもさっちも行かなくなります。けれどもそれを聴き分けるようなナオミではなく、ちようど月末のことなので、私のふところに現金があつたものですから、尚更それを出せといつて承知しません。

「だつてお前、今この金を出しちまつたら、直ぐに晦日に差支えるのが分つていそうなものじゃないか」

「差支えたつてどうにかなるわよ」

「どうにかなるつて、どうなるのさ。どうにもなりようはありやしないよ」

「じゃあ何のためにダンスなんか習つたのよ。——いいわ、そんなら、もう明日から何処にも行かないから」

そう云つて彼女は、その大きな眼に露を湛えて、恨めしそうに私を睨んで、つんと黙つて

しまうのでした。

「ナオミちゃん、お前怒っているのかい、…………え、ナオミちゃん、ちよつと、…………此^こ方^{つち}を向いておくれ」

その晩、私は床の中に這入つてから、背中を向けて寝たふりをしている彼女の肩を揺す振りながらそう云いました。

「よう、ナオミちゃん、ちよつと此方をお向きツてば。…………」

そして優しく手をかけて、魚の骨つきを裏返すように、ぐるりと此方へ引つくり覆^{かえ}すと、抵抗のないしなやかな体は、うつすらと半眼を閉じたまま、素直に私の方を向きました。

「どうしたの？　まだ怒ってるの？」

「…………」

「え、おい、…………怒らないでもいいじゃないか、どうにかするから、…………」

「…………」

「おい、眼をお開きよ、眼を…………」

云いながら、睫毛^{まつげ}がぶるぶる顫^{ふる}えている眼瞼^{まぶた}の肉を吊りあげると、貝の実のように中からそつと覗^{のぞ}いているむつくりとした眼の玉は、寝ているどころか真正面に私の顔を視^みている

のです。

「あの金で買って上げるよ、ね、いいだろう、……………」

「だって、そうしたら困りやしない？……………」

「困ってもいいよ、どうにかするから」

「じゃあ、どうする？」

「国へそう云って、金を送って貰うからいいよ」

「送ってくれる？」

「ああ、それあ送ってくれるとも。僕は今まで一度も国へ迷惑をかけたことはないんだし、二人で一軒持つていればいろいろ物が懸るだろうぐらいなことは、おふくろだって分っているに違いないから。……………」

「そう？　でもおかあさんに悪くはない？」

ナオミは気にしているような口ぶりでしたが、その実彼女の腹の中には、「田舎へ云ってやればいいのに」と、とうからそんな考があつたことは、うすうす私にも読めていました。私がそれを云い出したのは彼女の思う壺つぼだったのです。

「なあに、悪い事なんかなんにもないよ。けれども僕の主義として、そう云う事は厭だつ

たからしなかつたんだよ」

「じゃ、どう云う訳で主義を変えたの？」

「お前がさつき泣いたのを見たら可哀かわいそうになつちやつたからさ」

「そう？」

と云つて、波が寄せて来るような工合に胸をうねらせて、羞はかしそうなほほ笑みを浮べながら、

「あたし、ほんとに泣いたかしら？」

「もうどっこへも行かないツて、眼に一杯涙をためていたじゃないか。いつまで立つてもお前はまるでだだツ児こだね、大きなベビちゃん………」

「私のパパちゃん！ 可愛かわいいパパちゃん！」

ナオミはいきなり私の頸くびにしがみつки、その唇の朱の捺な印を繁忙な郵便局のスタンプ掛りが捺おすように、額や、鼻や、眼瞼の上や、耳みみたぶ朶の裏や、私の顔のあらゆる部分へ、寸分の隙間すきまもなくぺたぺたと捺しました。それは私に、何か、椿つばきの花のような、どつしりと重い、そして露けく軟かい無数の花びらが降つて来るような快さを感じさせ、その花びらの薫かおりの中に、自分の首がすっかり埋まつてしまったような夢見心地を覚えさせました。

「どうしたの、ナオミちゃん、お前はまるで氣違いのようだね」

「ああ、氣違ひよ。……あたし今夜は氣違ひになるほど讓治さんが可愛いんだもの。：

……それともうるさい？」

「うるさいことなんかあるものか、僕も嬉しいよ、氣違ひになるほど嬉しいよ、お前のためならどんな犠牲を払ったって構やしないよ。……おや、どうしたの？ 又泣いてるの

？」

「ありがとよ、パパさん、あたしパパさんに感謝してるのよ、だからひとりでに涙が出るの。……ね、分った？ 泣いちゃいけない？ いけなけりや拭いて頂戴」

ナオミは懷から紙を出して、自分では拭かずに、それを私の手の中へ握らせましたが、瞳はじーつと私の方へ注がれたまま、今拭いて貰うその前に、一層涙を滾々と睫毛の縁まで溢れさせているのでした。ああ何と云う潤いを持った、綺麗な眼だろう。この美しい涙の玉をそうツとこのまま結晶させて、取つて置く訳には行かないものかと思ひながら、私は最初に彼女の頬を拭いてやり、その円々と盛り上つた涙の玉に触れないように眼窩の周りを拭うてやると、皮がたるんだり引つ張れたりする度毎に、玉はいろいろな形に揉まれて、凸面レンズのようになつたり、凹面レンズのようになつたり、しまいにははらはら

と崩れて折角拭いた頬の上に再び光の糸を曳きながら流れて行きます。すると私はもう一度その頬を拭いてやり、まだいくらか濡れている眼玉の上を撫でてやり、それからその紙で、かすかな嗚咽をつづけている彼女の鼻の孔をおさえ、

「さ、鼻をおかみ」

と、そう云うと、彼女は「チーン」と鼻を鳴らして、幾度も私に涙をかませました。

その明くる日、ナオミは私から二百円貰つて、一人で三越へ行き、私は会社で午の休みに、母親へ宛てて始めて無心状を書いたものです。

「……………何分この頃は物価高く、二三年前とは驚くほどの相違にて、さしたる贅沢を致さざるにも不^{かわらず}拘、月々の経費に追われ、都会生活もなかなか容易に無^{これなく}之、……………」と、そう書いたのを覚えていますが、親に向つてこんな上手な嘘を云うほど、それほど自分が大胆になつてしまつたかと思うと、私は我ながら恐ろしい気がしました。が、母は私を信じている上に、悴^{せがれ}の大事な嫁としてナオミに対しても慈愛を持っていたことは、二三日してから手許に届いた返辞を見ても分りました。手紙の中には「なをみに着物でも買つておやり」と私が云つてやったよりも百円余計為替が封入してあつたのです。

十

エルドラドオのダンスの当夜は土曜日の晩でした。午後の七時半からと云うので、五時頃会社から帰つて来ると、ナオミは既に湯上りの肌を脱ぎながら、せっせと顔を作っていました。

「あ、讓治さん、出来て来たわよ」

と、鏡の中から私の姿を見るなり云つて、片手をうしろの方へ伸ばして、彼女が指し示すソオファの上には、三越へ頼んで大急ぎで作らせた着物と丸帯とが、包みを解かれて長々と並べてあります。着物は口綿の這入はいっている比翼あわせの袷きんしやで、金紗きんしやちりめんと云うのでしようか、黒みがかつた朱のような地色には、花を黄色く葉を緑に、点々と散らした総模様があり、帯には銀糸で縫いを施した二たすじ三すじの波がゆらめき、ところどころに、御座船ざぶねのような古風な船が浮かんでいます。

「どう？ あたしの見立ては巧いでしょう？」

ナオミは両手にお白粉しろいを溶き、まだ湯煙の立っている肉づきのいい肩から項うなじを、その手のひらで右左からヤケにぴたぴた叩たたきながら云いました。

が、正直のところ、肩の厚い、臀しりの大きい、胸のつき出た彼女の体には、その水のように柔かい地質が、あまり似合いませんでした。めりんすや銘仙を着ていると、混血児の娘のような、エキゾティックな美しさがあるのですけれど、不思議な事にこう云う真面目まじめな衣裳しやうまつを纏うと、却かえつて彼女は下品に見え、模様が派手であればあるだけ、横浜あたりのチャブ屋か何かの女のような、粗野な感じがするばかりでした。私は彼女が一人で得意になっているので、強しいて反対はしませんでしたが、この毒々よそおしい装いの女と一緒に、電車へ乗ったりダンス・ホールへ現れたりするのは、身が竦すくむような気がしました。

ナオミは衣裳をつけてしまうと、

「さ、讓治さん、あなたは紺の背広を着るのよ」

と、珍しくも私の服を出して来てくれ、埃ほこりを払ったり火熨斗ひのしをかけたりしてくれました。

「僕は紺より茶の方がいいがな」

「馬鹿ばかねえ！ 讓治さんは！」

と、彼女は例の、叱しかるような口調で一と睨み睨んで、

「夜の宴会は紺の背広かタキシードに極きまっているもんよ。そうしてカラーもソフトをしないでステイツフのを着けるもんよ。それがエティケツトなんだから、これから覚えてお

置きなさい」

「へえ、そう云うもんかね」

「そう云うもんよ、ハイカラがつている癖にそれを知らないでどうするのよ。この紺背広は随分汚れているけれど、でも洋服はぴんと皺しわが伸びていて、型が崩れていなければいいのよ。さ、あたしがちゃんとして上げたから、今夜はこれを着ていらつしやい。そして近いうちにタキシードを拵こしらえなけりやいけないわ。でなけりやあたし踊つて上げないわ」

それからネクタイは紺か黒無地で、蝶ちようむす結びにするのがいいこと、靴はエナメルにすべきだけれど、それがなければ普通の黒の短靴にすること、赤皮は正式に外れていること、靴下もほんとうは絹がいいのだが、そうでなくても色は黒無地を選ぶべきこと。——何ど

処こから聞いて来たものか、ナオミはそんな講釈をして、自分の服装ばかりでなく、私のことにも一つ一つ嘴くちばしを入れ、いよいよ家を出かけるまでにはなかなか手間が懸りました。

向うへ着いたのは七時半を過ぎていたので、ダンスは既に始まっていました。騒々しいジャズ・バンドの音を聞きながら梯子段はしごだんを上つて行くと、食堂の椅子いすを取り払ったダンス・ホールの入口に、『Special Dance — Admission : Ladies Free, Gentlemen 3.00』と記した貼紙はりがみがあり、ボーイが一人番をしていて、会費を取ります。勿論もちろんカフエエのことです

から、ホールと云つてもそんなに立派なものではなく、見わたしたところ、踊っているのは十組ぐらいもあったでしょうが、もうそれだけの人数でも可なりガヤガヤ賑にぎわっていました。部屋の一方にテーブルと椅子と二列にならべた席があつて、切符を買つて入場した者は各 《おのおの》その席を占領し、ときどきそこで休みながら、他人の踊るのを見物するような仕組になっているのでしよう。そこには見知らない男や女が彼方あつちに一団、此方に一団とかたまりながらしゃべっています。そしてナオミが這入つて来ると、彼等は互に何かコソコソ囁ささやき合つて、こう云う所でなければ見られない、一種異様な、半ば敵意を含んだような、半ば軽蔑けいべつしたような胡散うさんな眼つきで、ケバケバしい彼女の姿を捜さがるように眺めるのでした。

「おい、おい、あすこにあんな女が来たぞ」

「あの連れの男は何者だろう！」

と、私は彼等に云われているような気がしました。彼等の視線が、ナオミばかりか、彼女のうしろに小さくなつて立っている私の上にも注がれていることを、はつきりと感じました。私の耳にはオーケストラの音楽がガンガン鳴り響き、私の眼の前には踊りの群衆が、………みんな私より遙はるかに巧うまそうな群衆が、大きな一つの環わを作つてぐるぐると廻つていま

す。同時に私は、自分がたつた五尺二寸の小男であること、色が土人のように黒くて乱杭^{いば}歯であること、二年も前に拵^{ほて}えた甚だ振わない紺の背広を着ていることなどを考えたので、顔がカツカツと火照^{ほて}つて来て、体中に胴^{はら}ぶるいが来て、「もうこんなところへ来るもんじゃない」と思わないではいられませんでした。

「こんな所に立っていたって仕様がないわ。……何処か彼方の……テーブルの方へ行こうじゃないの」

ナオミもさすがに気怩^{きおく}れがしたのか、私の耳へ口をつけて、小さな声でそう云うのでした。「でも何かしら、この踊っている連中の間を突ツ切ってもいいのかしら？」

「いいのよ、きつと、……」

「だってお前、衝^つきあたつたら悪いじゃないか」

「衝^つきあたらないように行けばいいのよ、……ほら、御覧なさい、あの人だつて彼^{あそこ}処を突ツ切つて行つたじゃないの。だからいいのよ、行つて見ましようよ」

私はナオミのあとに附いて広場の群衆を横切つて行きましたが、足が顫^{ふる}えている上に床がつるつる滑りそうなので、無事に向うへ渡り着くまでが一と苦勞でした。そして一遍ガタンと転びそうになり、

「チョッ」

と、ナオミに睨^{にら}みつけられ、しかめツ面^{つら}をされたことを覚えています。

「あ、あすこが一つ空いているようだよ、あのテーブルにしようじゃないの」

と、ナオミはそれでも私よりは臆^{おく}面^{めん}がなく、ジロジロ見られている中をすうツと済まして通り越して、とあるテーブルへ就きました。が、あれ程ダンスを楽しみにしていたくせに、すぐ踊ろうとは云い出さないで、何だかこう、ちよつとの間落ち着かないように、手提げ袋から鏡を出してこっそり顔を直したりして、

「ネクタイが左へ曲っているわよ」

と、内証で私に注意しながら、広場の方を見守っているのです。

「ナオミちゃん、浜田君が来ているじゃないか」

「ナオミちゃんなんて云うもんじゃないわよ、さんて仰^おつしやいよ」

そう云ってナオミは、又むずかしいしかめツ面をして、

「浜さんも来てるし、まアちゃんも来ているのよ」

「どれ、何処に？」

「ほら、あすこに……………」

そして慌あわてて声を落して、「指さしをしちや失礼だわよ」と、そつと私をたしなめてから、
 「ほら、あすこにあの、ピンク色の洋服を着たお嬢さんと一緒に踊っているでしょう、あれがまアちゃんよ」

「やあ」

と、云いながら、その時まアちゃんはわれわれの方へ寄つて来て、相手の女の肩越しににやにや笑つて見せました。ピンク色の洋服は、せいの高い、肉感的な長い両腕をムキ出しにした太った女で、豊かなと云うよりは鬱うつと陶しいほど沢山ある、真つ黒な髪を肩の辺りでザクリと切つて、そいつをぼやぼやと縮らせた上に、リボンの鉢巻をしているのですが、顔はと云うと、頬つぺたが赤く、眼が大きく、唇が厚く、そして何処までも純日本式の、浮世絵にでもありそうな細長い鼻つきをした瓜実顔うりぎねがの輪廓りんかくでした。私も随分女の顔には氣をつけている方ですけど、こんな不思議な、不調和な顔はまだ見たことがありません。思うにこの女は、自分の顔があまり日本人過ぎるのをこの上もなく不幸に感じて、成るだけ西洋臭くしようと苦心さんたん惨憺さんたんしているらしく、よくよく見ると、凡およそ外部へ露出している肌と云う肌には粉が吹いたようにお白粉が塗っており、眼の周りにはペンキのようにぎらぎら光る緑ろくし青しやう色の絵の具がぼかしてあるのです。あの頬ツぺたの真つ赤なもの、

疑いもなく頬紅をつけているので、おまけにそんなリボンの鉢巻をした恰好は、気の毒ながらどう考えても化け物としか思われません。

「おい、ナオミちゃん、……………」

うっかり私はそう云ってしまったて、急いでさんと云い直してから、

「あの女はあれでもお嬢さんなのかね？」

「ええ、そうよ、まるで淫売みたいだけれど、……………」

「お前あの女を知ってるのかい？」

「知っているんじゃないけれど、よくまアちゃんから話を聞いたわ。ほら、頭ヘリボンを巻いてるでしょう。あのお嬢さんは眉毛が額のうんと上の方にあるので、それを隠すために鉢巻をして、別に眉毛を下の方へ画いてるんだって。ね、見て御覧なさいよ、あの眉毛は贋物なのよ」

「だけど顔だちはそんなに悪くないじゃないか。赤いものだの青いものだの、あんなにゴチャゴチャ塗り立ててるから可笑しいんだよ」

「つまり馬鹿よ」

ナオミはだんだん自信を恢復して来たらしく、己惚れの強い平素の口調で、云つてのけ

て、

「顔だちだって、いい事なんかありやしないわ。あんな女を讓治さんは美人だと思うの？」
 「美人と云うほどじゃないけれども、鼻も高いし、体つきも悪くはないし、普通に作つたら見られるだろうが」

「まあ厭だ！ 何が見られるもんじやない！ あんな顔ならいくらだってぎらにあるわよ。おまけにどうでしょう、西洋人臭く見せようと思つて、いろんな細工をしているところはいいけれど、それがちつとも西洋人に見えないんだから、お慰みじやないの。まるで猿だわ」

「ところで浜田君と踊っているのは、何処かで見たとような女じやないか」

「そりや見た筈だわ、あれは帝劇の春野綺羅子よ」

「へえ、浜田君は綺羅子を知っているのかい？」

「ええ知っているのよ、あの人はダンスが巧いもんだから、方々で女優と友達になるの」
 浜田は茶つばい背広を着て、チヨコレート色のボックスの靴にスパットを穿いて、群集の中でも一と際目立つ巧者な足取で踊っています。そして甚だ怪しからんことには、或はこ
 う云う踊り方があるのかも知れませんが、相手の女とべったり顔を着け合っています。き

やしやな、象牙ぞうげのような指を持った、ぎゅつと抱きしめたら撓しなつて折れてしまいそうな小柄な綺羅子は、舞台で見るよりは遙はるかに美人で、その名の如く綺羅を極めたあでやかな衣裳に、緞子どんすと云うのか朱珍しゅちんと云うのか、黒地に金糸と濃い緑とで竜を描いた丸帯を締めていたのでした。女の方がせいが低いので、浜田はあたかも髪かみの毛けの匂においぎでもするよう
に、頭をぐつと斜めにかしげて、耳のあたりを綺羅子の横よこ鬢びんに喰くつ着きけている。綺羅子は綺羅子で、眼尻めじりに皺しわが寄るほど強く男の頬ツペたへ額おでこをあてている。二つの顔は四つ
の眼玉をパチクリさせながら、体は離れることがあつても、首と首とはいつかな離れずに踊
つて行きます。

「譲治さん、あの踊り方を知っている？」

「何だか知らないが、あんまり見つともいいもんじやないね」

「ほんとうよ、実際下品よ」

ナオミはペツペツと唾つばを吐くような口つきをして、

「あれはチーク・ダンスって云つて、真面目な場所まじめでやれるものじやないんだって。アメリ
カあたりであれをやったら、退場して下さいって云われるんだって。浜さんもいいけれ
ど、全く気障きざよ」

「だが女の方も女の方だね」

「そりやそうよ、どうせ女優なんて者はあんな者よ、全体此^{ここ}処へ女優を入れるのが悪いんだわ、そんなことをしたらほんとうのレディーは来なくなるわ」

「男にしたって、お前はひどくやかましいことを云ったけれど、紺の背広を着ている者は少いじゃないか。浜田君だつてあんななりをしているし、……」

これは私が最初から気がついていた事でした。知ったか振りをしたがるナオミは、所謂^{いわゆる}エティケツトなるものを聞きかじつて来て、無理に私に紺の背広を着せましたけれど、さて来て見ると、そんな服装をしている者は二三人ぐらいで、タキシードなどは一人もなく、あとは大概変り色の、凝ったスーツを着ているのです。

「そりやそうだけれど、あれは浜さんが間違つてるのよ、紺を着るのが正式なのよ」

「そう云^いつたつて……ほら、あの西洋人を御覧、あれもホームスパンじゃないか。だから何だつていいんだろう」

「そうじゃないわよ、人はどうしても自分だけは正式ななりをして来るもんよ。西洋人があやうなりをして来るのは、日本人が悪いからなのよ。それに何だわ、浜さんのように場数を踏^ふんでいて、踊りが巧い人なら格別、讓治さんなんかなりでもキッチンとしていなけり

や見ツともないわよ」

広場の方のダンスの流れが一時に停まって、盛んな拍手が起りました。オーケストラが止んだので、彼等はみんな少しでも長く踊りたそうに、熱心なのは口笛を吹き、地団太を踏んで、アンコールをしているのです。すると音楽が又始まる、停まっていた流れが再びぐるぐると動き出す。一としきり立つと又止んでしまう、又アンコール、……二度も三度も繰り返して、とうとういくら手を叩いても聴かれなくなると、踊った男は相手の女の後に従ってお供のように護衛しながら、一同ぞろぞろとテーブルの方へ帰って来ます。浜田とまアちゃんは綺羅子とピンク色の洋服をめいめいのテーブルへ送り届けて、椅子にかけさせて、女の前で丁寧にお辞儀をしてから、やがて揃って私たちの方へやって来ました。

「やあ、今晚は。大分御ゆっくりでしたね」

そう云ったのは浜田でした。

「どうしたんだい、踊らねえのかい？」

まアちゃんは例のぞんざいな口調で、ナオミのうしろに突っ立ったまま、眩い彼女の盛装を上からしげしげと見おろして、

「約束がなけりやあ、この次に己と踊ろうか？」

「いやだよ、まアちゃんは、下手くそなもの！」

「馬鹿^{ばか}云いねえ、月謝は出さねえが、これでもちゃんと踊れるから不思議だ」

と、大きな団子ツ鼻の孔^{あな}をひろげて、唇を「へ」の字なりに、えへらえへら笑って見せて、

「根が御器用でいらつしやるからね」

「ふん、威張るなよ！ あのパンク色の洋服と踊つてゐる恰好なんざあ、あんまりいい図じやなかつたよ」

驚いたことには、ナオミはこの男に向うと、忽ち^{たちま}こんな乱暴な言葉を使うのでした。

「や、此奴^{こいつ}アいけねえ」

と、まアちゃんは首をちぢめて頭を搔^かいて、ちらりと遠くのテーブルにいるピンク色の方を振り返りながら、

「己もずうずうしい方じや退^ひけを取らねえ積りだけれど、あの女には敵^{かな}わねえや、あの洋服で此処へ押し出して来ようてんだから」

「何だいありやあ、まるで猿だよ」

「あははは、猿か、猿たあうめえことを云つたな、全く猿にちげえねえや」

「巧く云つてらあ、自分が連れて来たんじゃないか。——ほんとうにまアちゃん、見つ

ともないから注意しておやりよ。西洋人臭く見せようとしたって、あの御面相じや無理だわよ。どだい顔の造作が、ニッポンもニッポンも、純ニッポンと来てるんだから」

「要するに悲しき努力だね」

「あははは、そうよほんとに、要するに猿の悲しき努力よ。和服を着たって、西洋人臭く見える人は見えるんだからね」

「つまりお前のようにかね」

ナオミは「ふん」と鼻を高くして、得意のせせら笑いをしながら、

「そうさ、まだあたしの方が混血児あいのこのように見えるわよ」

「熊谷君」

と、浜田は私に気がねするらしく、もじもじしている様子でしたが、その名でまアちゃんを呼びかけました。

「そう云えば君は、河合さんとは始めてなんじやなかったかしら？」

「ああ、お顔はたびたび見たことがあるがね、——」

「熊谷」と呼ばれたまアちゃんは矢張ナオミの背中越しに、椅子いすのうしろに衝つつ立ったまま、私の方へジロリと厭味な視線を投げました。

「僕は熊谷政太郎と云うもんです。——自己紹介をして置きます、どうか何分——」

「本名を熊谷政太郎、一名をまアちゃんと申します。——」

ナオミは下から熊谷の顔を見上げて、

「ねえ、まアちゃん、ついでも少し自己紹介をしたらどうなの？」

「いいや、いけねえ、あんまり云うとボロが出るから。——委くわしいことはナオミさんから御聞きを願います」

「アラ、いやだ、委くわしい事なんかあたしが何を知っているのよ」

「あははは」

この連中に取り巻かれるのは不愉快だとは思いつながら、ナオミが機嫌よくはしやぎ出したので、私も仕方なく笑って云いました。

「さ、いかがです。浜田君も熊谷君も、これへお掛けになりませんか」

「讓治さん、あたし喉のどが渴いたから、何か飲む物を云って頂ちやうだい戴。浜さん、あんた何がいい？ レモン・スクオツシュ？」

「え、僕は何でも結構だけれど、……………」

「まアちゃん、あんたは？」

「どうせ御馳走になるのなら、ウイスキー・タンサンに願いたいね」

「まあ、呆れた、あたし酒飲みは大嫌いなさ、口が臭くって！」

「臭くつてもいいよ、臭い所が捨てられないッて云うんだから」

「あの猿がかい？」

「あ、いけねえ、そいつを云われると詫まるよ」

「あははは」

と、ナオミは辺り憚らず、体を前後に揺す振りながら、

「じゃ、讓治さん、ボーイを呼んで頂戴、——ウイスキー・タンサンが一つ、それからレモン・スクオツシュが三つ。……あ、待って、待って！ レモン・スクオツシュは止めにするわ、フルーツ・カクテルの方がいいわ」

「フルーツ・カクテル？」

私は聞いたこともないそんな飲み物を、どうしてナオミが知っているのか不思議でした。

「カクテルならばお酒じゃないか」

「うそよ、讓治さんは知らないのよ、——まあ、浜ちゃんもまアちゃんも聞いて頂戴、この人はこの通り野暮なんだから」

ナオミは「この人」と言う時に人差し指で私の肩を軽く叩いて、

「だからほんとに、ダンスに来たってこの人と二人じゃ間が抜けていて仕様がないわ。ぼんやりしているもんだから、さっきも滑って転びそうになったのよ」

「床がつるつるしてますからね」

と、浜田は私を弁護するように、

「初めのうちは誰でも間が抜けるもんですよ、馴なれると追い追い板につくようになりますけれど、……………」

「じゃ、あたしはどう？ あたしもやつぱり板につかない？」

「いや、君は別さ、ナオミ君は度胸がいいから、……………まあ社交術の天才だね」

「浜さんだって天才でない方でもないわ」

「へえ、僕が？」

「そうさ、春野綺羅子といつの間にかお友達になったりして！ ねえ、まアちゃん、そう思わない？」

「うん、うん」

と、熊谷は下唇を突き出して、頤あごをしゃくつて頷うなずいて見せます。

「浜田、お前綺羅子にモーションをかけたのかい？」

「ふざけちゃいかんよ、僕あそんなことをするもんかよ」

「でも浜さんは真つ赤になつて云い訳するだけ可愛いわ。何処か正直な所があるわ。――

――ねえ、浜さん、綺羅子さんを此処へ呼んで来ない？ よう！ 呼んでらっしゃいよ！

あたしに紹介して頂戴」

「なんかんて、又冷やかそうツて云うんだらう？ 君の毒舌に懸つた日にや敵わんからなア」

「大丈夫よ、冷やかさないから呼んでらっしゃいよ、賑やかな方がいいじゃないの」

「じゃあ、己もあの猿を呼んで来るかな」

「あ、それがいい、それがいい」

と、ナオミは熊谷を振り返つて、

「まあちゃんも猿を呼んどいでよ、みんな一緒になろうじゃないの」

「うん、よからう、だがもうダンスが始まつたぜ、一つお前と踊つてからにしようじゃないか」

「あたしまあちゃんじゃ厭だけれど、仕方がない、踊つてやろうか」

「云うな云うな、習いたての癖にしやがつて」

「じゃ讓治さん、あたし一遍踊つて来るから見てらッしやい。後であなたと踊つて上げるから」

私は定めし悲しそうな、変な表情をしていたらうと思いますが、ナオミはフイと立ち上つて、熊谷と腕を組みながら、再び盛んに動き出した群集の流れの中へ這入^{はい}つて行つてしまいました。

「や、今度は七番のフォックス・トロットか、——」

と、浜田も私と二人になると何となく話題に困るらしく、ポケットからプログラムを出して見て、こそこそ臀^{しり}を持ち上げました。

「あの、僕ちよつと失礼します、今度の番は綺羅子さんと約束がありますから。——」

「さあ、どうぞ、お構いなく、——」

私は独り、三人が消えてなくなった跡へボーイが持つて来たウイスキー・タンサンと、所^{わゆる}謂^い「フルーツ・カクテル」なるものと、四つのコップを前にして、茫^{ぼう}然^{ぜん}と広場の景氣を眺めていなければなりませんでした。が、もともと私は自分が踊りたいのではなく、こ^う云う場所^うでナオミがどれほど引き立つか、どう云う踊りッ振^ふりをするか、それを見たい

のが主でしたから、結局この方が気楽でした。で、ほんと解放されたような心地で、人波の間に見え隠れするナオミの姿を、熱心な眼で追つ懸けていました。

「ウム、なかなかよく踊る！……あれなら見つともない事はない……ああ云う事をやらせるとやつぱりあの児は器用なものだ。……」

可愛いダンスの草履を穿いた白足袋の足を爪立てて、くるりくるりと身を翻すと、華やかな長い袂がひらひらと舞います。一步を踏み出す度に、着物の上ん前の裾が、蝶々のようにハタハタと跳ね上ります。芸者が撥を持つ時のような手つきで熊谷の肩を摘

まんでいる真つ白な指、重くどつしり胴体を締めつけた絢爛な帯地、一茎の花のように、この群集の中に目立っている項、横顔、正面、後の襟足、——こうして見ると、成る程和服も捨てたものではありません、のみならず、あのピンク色の洋服を始め突飛な意匠の婦人たちが居るせいか、私が密かに心配していた彼女のケバケバしい好みも、決してそんなに卑しくはありません。

「ああ、暑、暑！ どうだった、讓治さん、あたしの踊るのを見ていた？」

踊りが済むと彼女はテーブルへ戻つて来て、急いでフルーツ・カクテルのコップを前へ引き寄せました。

「ああ、見ていたよ、あれならどうして、とても始めてとは思えないよ」

「そう！　じゃ今度、ワン・ステップの時に譲治さんと踊って上げるわ、ね、いいでしょう？……ワン・ステップなら易しいから」

「あの連中はどうしたんだい、浜田君と熊谷君は？」

「え、今来るわよ、綺羅子と猿を引っ張って。——フルーツ・カクテルをもう二つ云ったらしいわ」

「そう云えば何だね、今ピンク色は西洋人と踊っていたようだね」

「ええ、そうなのよ、それが滑稽こっけいじゃあないの、——」

と、ナオミはコップの底を視みつめ、ゴクゴクと喉を鳴らして、渴いた口を湿うるおしながら、

「あの西洋人は友達でも何でもないのよ、それがいきなり猿の所へやって来て、踊って下さいッて云ったんだって。つまり此方こっちを馬鹿ばかにしているのよ、紹介もなしにそんな事を云うなんて、きつと淫いんばい売ばいか何かと間違えたのよ」

「じゃ、断ればよかったじゃないか」

「だからさ、それが滑稽じゃないの。あの猿が又、相手が西洋人だもんだから、断り切れないで踊ったところが！　ほんとうにいい馬鹿ばかだわ、耻はじッ晒さらしな！」

「だけどお前、そうツケツケと悪口を云うもんじやないよ。傍そばで聞いていてハラハラするから」

「大丈夫よ、あたしにはあたしで考があるわよ。——なあに、あんな女にはそのくらいのことを云つてやった方がいいのよ、でないと此方まで迷惑するから。まあちゃんだつてあれじゃ困るから注意してやるつて云つていたわ」

「そりや、男が云うのはいいだろうけれど、……」

「ちよいと！ 浜ちゃんが綺羅子を連れて来たわよ、レディーが来たら直ぐすに椅子から立つもんよ。——」

「あの、御紹介します、——」

と、浜田は私たち二人の前に、兵士の「氣をつけ」のような姿勢で立ち止まりました。

「これが春野綺羅子嬢です。——」

こう云う場合、「この女はナオミに比べて優まさつているか、劣よつているか」と、私は自然、ナオミの美しさを標準にしてしまうのですが、今浜田の後から、しとやかなしなを作つて、その口もとに悠然と自信のあるほほ笑みを浮かべながら、一と足そこへ歩み出た綺羅子は、ナオミより一つか二つ歳としかさでもありませんか。が、生き生きとした、娘々した点に於お

いては、小柄なせいもあるでしょうが、少しもナオミと変りなく、そして衣裳いしやうの豪華なことは寧ろナオミを圧倒するものがありました。

「初めまして、……」

と、慎ましやかな態度で云つて、伶俐りこうそうな、小さく円く、パッチリとした眸ひとみを伏せて、こころもち胸を引くようにして挨拶する、その身のこなしには、さすがは女優だけあってナオミのようなガサツな所がありません。

ナオミは為る事成す事が活潑かつぱつの域を通り越して、乱暴過ぎます。口の利き方きもつんけんしていて女としての優しみに欠け、ややともすると下品になります。要するに彼女は野生の獣で、これに比べると綺羅子の方は、物の言いよう、眼の使いよう、頸くびのひねりよう、手の挙げよう、総べてが洗煉せんれんされていて、注意深く、神経質に、人工の極致を尽して研みがきをかけられた貴重品の感がありました。たとえば彼女が、テーブルに就いてカクテルのコップを握った時の、掌てのひらから手頸を見ると、実に細い。そのしつとりと垂れている袂の重みにも得堪えぬほどに、しなしなと細い。きめのこまやかさと色つやのなまめかしさは、ナオミと孰れ劣らずで、私は幾度卓上に置かれた四枚の掌を、代る代る打ち眺めたか知れませんが、しかし二人の顔の趣は大変に違う。ナオミがメリー・ピクフォードで、ヤ

ンキー・ガールであるとするなら、此方はどうしても伊太利か仏蘭西あたりの、しとやかなうちに仄かなる媚びを湛えた幽艶な美人です。同じ花でもナオミは野に咲き、綺羅子は室に咲いたものです。その引き締まった円顔の中にある小さな鼻は、まあ何と云う肉の薄い、透き徹るような鼻でしょう！ 余程の名工が拵えた人形か何かでない限り、赤ん坊の鼻だつてよもやこんなに繊細ではありませんまい。そして最後に気がついたことは、ナオミが日頃自慢している見事な歯並び、それと全く同じ物の真珠の粒が、真赤な瓜を割いたような綺羅子の可愛い口腔の中に、その種子のように生え揃っていたことです。

私が引け目を感じると同時に、ナオミも引け目を感じたに違いありません。綺羅子が席へ交つてから、ナオミはさっきの傲慢にも似ず、冷やかすどころか俄かにしんと黙ってしまった、一座はしらせ渡りました。が、それでなくても負け惜しみの強い彼女は、自分が「綺羅子を呼んで来い」と云つた言葉の手前、やがていつもの腕白氣分を盛り返したらしく、

「浜さん、黙っていないで何か仰つしやいよ。——あの、綺羅子さんは何ですか、いつから浜さんとお友達におなりになつて？」
と、そんな風にぼつぼつ始めました。

「わたくし？」

と綺羅子は云って、^さ冴えた瞳を^{ひとみ}ぱつと明るくして、

「ついこの間からですの」

「あたくし」

と、ナオミも相手の「わたくし」口調に釣り込まれながら、

「今拝見しておりましたけれど、随分お上手でいらつしやいますのね、よっぽどお習いになりましたの？」

「いいえ、わたくし、やる事はあの、前からやっておりますけれど、ちっとも上手になりませんのよ、不器用だものですから、………」

「あら、そんなことはありませんわ。ねえ浜さん、あんたどう思う？」

「そりや巧い^{うま}筈^{はず}ですよ、綺羅子さんののは女優養成所で、本式に稽古したんだから」

「まあ、あんなことを仰つしやつて」

と、綺羅子はぼうツとはにかなだような素振りを見せて、^{うつむ}俯向いてしまします。

「でもほんとうにお上手よ、見わたしたところ、男で一番巧いのは浜さん、女では綺羅子さん………」

「まあ」

「何だい、ダンスの品評会かい？　男で一番うめえのは何と云つても己^{おれ}じゃねえか。――

――

と、そこへ熊谷がピンク色の洋服を連れて割り込んで来ました。

このピンク色は、熊谷の紹介に依^よると青山の方に住んでいる実業家のお嬢さんと云うのでした。もはや婚期を過ぎかけている二十五六の歳頃で、――これは後で聞いたのですが、二三年前或^ある所へ嫁いだのに、あまりダンスが好きなので近頃離婚になったのだそうです。――わざとそう云う夜会服の下に肩から腕を露^{あら}わにした装^{よそお}いは、大方

豊艷なる肉体美を売り物にしているのでしようが、さてこうやって向い合つた様子では、豊艷と云わんより脂^{あぶら}ぎつた大年増^{おおとしま}と云う形でした。尤も貧弱な体格よりはこのくらいな肉づきの方が、洋服には似合う訳ですけれど、何を云うにも困つたのはその顔だけです。

西洋人形へ京人形の首をつけたような、洋服とは甚だ縁の遠い目鼻立ち、――それもそのままにして置けばいいのに、成るべく縁を近くしようと骨を折つて、彼方^{あっち}此方^{こっち}へ余計な手入れをして、折角の器量をダイナシにしてしまっている。見ると成る程、本物の眉毛^{まゆげ}は鉢巻の下に隠されているに違いなく、その眼の上に引いてあるのは明かに作り物なのです。

それから眼の縁の青い隈取り、頬紅、入れぼくろ、唇の線、鼻筋の線、と、殆ど顔のあらゆる部分が不自然に作ってあります。

「まアちゃん、あんた猿は嫌い？」

と、突然ナオミがそんな事を云いました。

「猿？——」

そう云つて熊谷は、ぷつと吹き出したくなるのを我慢しながら、

「何でえ、妙なことを聞くじゃねえか」

「あたしの家に猿が二匹飼つてあるのよ、だからまアちゃんが好きだったら、一匹分けて上げようと思うの。どう？ まアちゃんは猿が好きじゃない？」

「あら、猿を飼つていらつしやいますの？」

と真顔になつて、菊子がそれを尋ねたので、ナオミはいよいよ図に乗りながらいたずら好きの眼を光らして、

「ええ、飼つておりますの、菊子さんは猿がお好き？」

「わたくし、動物は何でも好きでございますわ、犬でも猫でも——」

「そうして猿でも？」

「ええ、猿でも」

その問答があまり可笑^{おか}しいので、熊谷は側方^{そつぽ}を向いて腹を抱える、浜田はハンケチを口へあててクスクス笑う、綺羅子もそれと感づいたらしくニヤニヤしている。が、菊子は案外人の好^いい女だと見えて、自分が嘲^{ちやうろう}弄^わされているとは気がつきません。

「ふん、あの女はよつぽど馬鹿^{ばか}だよ、少し血の循環^{めく}が悪いんじゃないかね」

やがて八番目のワン・ステップが始まって、熊谷と菊子が踊り場の方へ行ってしまうと、ナオミは綺羅子の居る前をも憚^{はば}らず、口汚い調子で云うのでした。

「ねえ、綺羅子さん、あなたそう思いにならなかった？」

「まあ、何でございますか、……」

「いいえ、あの方が猿みたいな感じがするでしょ、だからあたし、わざと猿々ツて云つてやっただですよ」

「まあ」

「みんながあんなに笑っているのに、気が付かないなんてよつぽど馬鹿^{ばか}だわ」

綺羅子は半ば呆^{あき}れたように、半ば蔑^{さげす}むような眼つきでナオミの顔を偷^{ぬす}み視^みながら、何処までも「まあ」の一点張りでした。

十一

「さあ、讓治さん、ワン・ステップよ。踊って上げるからいらっしやい」

と、それから私はナオミに云われて、やっと彼女とダンスをする光榮を有しました。

私にしたつて、きまりが悪いとは云うものの、日頃の稽古を實地に試すのはこの際でもあり、殊に相手が可愛いナオミであつてみれば、決して嬉しくないことはありません。よしんば物笑いの種になるほど下手糞だつたとしたところで、その下手糞は却つてナオミを引き立てることになるのですから、寧ろ私は本望なのです。それから又、私には妙な虚榮心もありました。と云うのは、「あれがあゝの女の亭主だと見える」と、評判されて見たいことです。云いかえれば「この女は己の物だぞ。どうだ、ちよつと己の宝物を見てくれ」と大いに自慢してやりたいことです。それを思うと私は晴れがましいと同時に、ひどく痛快な氣がしました。彼女のために今日まで払った犠牲と苦勞とが、一度に報いられたような心地がしました。

どうもさつきからの彼女の様子では、今夜は己と踊りたくないのだろう。己がもう少し巧

くなるまでは厭^{いや}なのだろう。厭なら厭で、己もそれまではたって踊ろうとは云わない。と、もう好い加減あきらめていたところへ、「踊って上げよう」と来たのですから、その一声はどんなに私を喜ばせたか知れませんが、

で、熱病やみのように興奮しながら、ナオミの手を執って最初のワン・ステップを蹈^ふみ出したまでは覚えていますが、それから先は夢中でした。そして夢中になればなるほど、音楽も何も聞えなくなつて、足取りは滅茶苦茶になる、眼はちらちらする、動悸^{どうき}は激しくなる、吉村楽器店の二階で、蓄音器のレコードでやるのとはガラリと勝手が違つてしまつて、この人波の大海の中へ漕^こぎ出してみると、退^ひこうにも進もうにも、さっぱり見当がつきません。

「讓治さん、何をブルブル顫^{ふる}えているのよ、シツカリしないじや駄目じやないの！」
と、そこへ持つて来てナオミは始終耳元で叱言^{こごと}を云います。

「ほら、ほら又すべった！ そんなに急いで廻るからよ！ もっと静かに！ 静かにツたら！」

が、そう云われると私は一層のぼせ上ります。おまけにその床は特に今夜のダンスのために、うんと滑りをよくしてあるので、あの稽古場の積りでうっかりしていると、忽^{たちま}ちつる

りと来るのです。

「それそれ！ 肩を上げちゃいけないッてば！ もっとこの肩を下げて！ 下げて！」

そう云つてナオミは、私が一生懸命に握っている手を振りもぎつて、ときどきグイと、邪じ慳やけんに肩を抑えつけます。

「チョッ、そんなにぎゅッと手を握つててどうするのよ！ まるであたしにしがみ着いていちや、此方が窮屈で仕様がないわよ！……そら、そら又肩が！」

これでは何の事はない、全く彼女に怒鳴られるために踊っている様なものでしたが、そのガミガミ云う言葉さえが私の耳には這はい入らないくらいでした。

「譲治さん、あたしもう止やめるわ」

と、そのうちにナオミは腹を立てて、まだ人々は盛んにアンコールを浴びせているのに、どんどん私を置き去りにして席へ戻つてしまいました。

「ああ、驚いた。まだまだとても譲治さんとは踊れやしないわ、少し内で稽古けいこなさいよ」

浜田と綺羅子がやつて来る、熊谷が来る、菊子が来る、テーブルの周囲は再び賑にぎやかになりましたが、私はすっかり幻滅の悲哀に浸つて、黙つてナオミの嘲弄の的になるばかりでした。

「あははは、お前のように云った日にやあ、気の弱え者は尚なおさら更踊れやしねえじゃねえか。まあそう云いわずに踊ってやんなよ」

私はこの、熊谷の言葉が又癪しやくに触りました。「踊ってやんな」とは何と云う云い草だ。己を何だと思っているのだ？ この青二才が！

「なあに、ナオミ君が云うほど拙ますかありませんよ、もっと下手なのがいくらも居るじゃありませんか」

と浜田は云って、

「どうです、綺羅子さん、今度のフォックス・トロットに河合さんと踊って上げたら？」

「はあ、何卒どうぞ………」

綺羅子は矢張女優らしい愛嬌あいきようを以てうなずきました。が、私は慌あわてて手を振りながら、

「やあ、駄目ですよ駄目ですよ」

と、滑稽なほど面喰めんくらってそう云いました。

「駄目なことがあるもんですか。あなたのように遠慮なさるからいけないんですよ。ねえ、綺羅子さん」

「ええ、………どうぞほんとに」

「いやあいけません、とてもいけません、巧くなつてから願いますよ」

「踊つて下さるつて云うんだから、踊つて戴いたらしいじゃないの」

と、ナオミはそれが、私に取つての身に余る面目でもあるかのように、おッ被せて云つて、

「讓治さんはあたしとばかり踊りたがるからいけないんだわ。——さあ、フォックス・トロットが始まつたから行つてらっしゃい、ダンスは他流試合がいいのよ」

“Will you dance with me?”

その時そう云う声が聞えて、つかつかとナオミの傍へやつて来たのは、さつき菊子と踊っていた、すらりとした体つきの、女のようなにやけた顔へお白粉しろいを塗っている、歳としの若い外人でした。背中を円く、ナオミの前へ身をかがめて、ニコニコ笑いながら、大方お世辞でも云うのでしょうか、何か早口にぺらぺらとしゃべります。そして厚かましい調子で「プリースプリース」と云うところだけが私に分ります。と、ナオミも困つた顔つきをして火の出るように真っ赤になつて、その癡怒することも出来ずに、ニヤニヤしています。断りたいには断りたいのだが、何と云つたら最も婉曲えんきよくに表わされるか、彼女の英語では咄嗟とつさの際に一と言も出て来ないのです。外人の方はナオミが笑い出したので、好意がある

と見て取つたらしく、「さあ」と云つて促すような素振りをしながら、押しつけがましく彼女の返辞を要求します。

“Yes, ……”

そう云つて彼女が不承々に立ち上ったとき、その頬ツペたは一層激しく、燃え上るように赧あかくなりました。

「あははは、とうとう奴やつこさん、あんなに威張つていたけれど、西洋人にかかっちゃあ意氣地がねえね」

と、熊谷がゲラゲラ笑いました。

「西洋人はずうずうしくつて困りますのよ。さつきもわたくし、ほんとに弱つてしまいましたわ」

そう云つたのは菊子でした。

「では一つ願いますかな」

私は綺羅子が待つていたので、否いやでも応でもそう云わなければならぬハメになりました。一体、今日に限ったことではありませんけれども、嚴格に云うと私の眼にはナオミより外に女と云うものは一人ありません。それは勿論もちろん、美人を見ればきれいだとは感じます。

が、きれいであればきれいであるだけ、ただ遠くから手にも触れずに、そうツと眺めていたいと思うばかりでした。シユレムスカヤ夫人の場合は例外でしたが、あれにしたって、私があの時経験した恍惚こうこうとした心持は、恐らく普通の情慾じょうよくではなかったでしょう。「情慾」と云うには余りに神韻しんいん漂渺ひょうびょうとした、捕捉ほそくし難い夢見心地だったでしょう。それに相手は全然われわれとかけ離れた外人であり、ダンスの教師なのですから、日本人で、帝劇の女優で、おまけに眼もあやな衣裳いしやうを纏まとった綺羅子に比べれば気が楽でした。然るに綺羅子は、意外なことに、踊って見ると実に軽いものでした。体全体がふわりとして、綿のようで、手の柔かさは、まるで木の葉の新芽のような肌触りです。そして非常に此方の呼吸をよく呑み込んで、私のような下手糞を相手にしながら、感のいい馬のようにピタリと息を合わせます。こうなつて来ると軽いと云うことそれ自身に得も云われない快感があります。私の心は俄かに浮き浮きと勇み立ち、私の足は自然と活潑かつぱつなステップを踏み、あたかもメリー・ゴー・ラウンドへ乗っているように、何処までもするすると、滑かに廻って行きます。

「愉快々々！ これは不思議だ、面白いもんだ！」

私は思わずそんな気になりました。

「まあ、お上手ですわ、ちつとも踊りにくいことはございませんわ」

……………グルグルグル！ 水車のように廻っている最中、綺羅子の声が私の耳を掠めました。
……………やさしい、かすかな、いかにも綺羅子らしい甘い声でした。……………

「いや、そんなことはないでしょう。あなたがお上手だからですよ」

「いいえ、ほんとに、……………」

しばらく
暫く立つてから、又彼女は云いました。

「今夜のバンドは、大へん結構でございますのね」

「はあ」

「音楽がよくないと、折角踊つても何だか張合いがございませんわ」

気がついて見ると、綺羅子の唇はちょうど私のこめかみの下にあるのでした。これがこの女の癖だと見えて、さつき浜田としたように、その横^{よこ}鬚^{びん}は私の頬へ触れていました。やんわりとした髪の毛の撫^なで心地、……………そしておりおり洩^もれて来るほのかな囁^{ささや}き、……………長い間悍馬^{かんば}のようなナオミの蹄^{ひづめ}にかけられていた私には、それは想像したこともない「女らしさ」の極みでした。何だかこう、茨^{いばら}に刺された傷の痕^{あと}を、親切な手でさすって貰^{もら}ってでもいるような、……………

「あたし、よつぽど断つてやろうと思つたんだけど、西洋人は友達がないんだから、同情してやらないじゃ可哀そうよ」

やがてテールブルへ戻つて来ると、ナオミがいささかしよげた形で弁解してゐるのです。十六番のワルツが終つたのはかれこれ十一時半でしたらうか。まだこのあとにエキストラが数番ある。おそくなつたら自動車で帰ろうとナオミが云うのを、ようようなだめて最後の電車に間に合うように新橋へ歩いて行きました。熊谷も浜田も女連と一緒に、銀座通りをぞろぞろと繋がりながらその辺まで私たちを送つて来ました。みんなの耳にジャズ・バンドが未だに響いているらしく、誰か一人が或るメロディーを唄い出すと、男も女も直ぐその節に和して行きましたが、歌を知らない私には、彼等の器用さと、物覚えのよさと、その若々しい晴れやかな声とが、ただ妬ましく感ぜられるばかりでした。

「ラ、ラ、ラララ」

と、ナオミは一と際高い調子で、拍子を取つて歩いていきました。

「浜さん、あんた何がいい？ あたしキャラバンが一番すきだわ」

「おお、キャラバン！」

と、菊子が頓狂な声で云いました。

「素敵ね！ あれは」

「でもわたくし、——」

と、今度は綺羅子が引き取つて、

「ホイスパリングも悪くはないと存じますわ。大へんあれは踊りよくつて、——」

「蝶々ちようちようさんがいいじゃないか、僕はあれが一番好きだよ」

そして浜田は「蝶々さん」を早速口笛で吹くのでした。

改札口で彼等に別れて、冬の夜風が吹き通すプラットホームに立ちながら、電車を待つて
いる間、私とナオミとはあんまり口を利ききませんでした。歓楽のあとの物淋ものさびしさ、とで
も云うような心持が私の胸を支配していました。尤もつともナオミはそんなものを感じなかつた
に違いなく、

「今夜は面白かつたわね、又近いうちに行きましようよ」

と、話しかけたりしましたけれど、私は興きんざめた顔つきで「うん」と口のうちに答えただ
けでした。

何だ？　これがダンスと云うものなのか？　親おれを欺あざむき、夫婦喧嘩げんかをし、さんざ泣いたり笑
つたりした揚句の果てに、己おれが味わつた舞ぶ蹈とう会かいと云うものは、こんな馬鹿ばかげたものだつ

たのか？ 奴等^{やつら}はみんな虚栄心とおべつかと己惚^{うぬぼ}れと、気障^{きざ}の集団じゃないか？――

が、そんなら己は何の爲^{ため}に出かけたのだ？ ナオミを奴等へ見せびらかすため？――

そうだとすれば己もやつぱり虚栄心のかたまりなのだ。ところで己がそれほどまでに自慢していた宝物はどうだったろう！

「どうだね、君、君がこの女を連れて歩いたら、果して君の注文通り、世間はあツと驚いたかね？」

と、私は自ら嘲^{あざけ}るような心持で、自分の心にそう云わないではいられませんでした。――

「君、君、盲人蛇^{めくら}に怖^おじずとは君のことだよ。そりやあ成る程、君に取つてはこの女は世界一の宝だろう。だがその宝を晴れの舞台へ出したところはどんなだった？ 虚栄心と己惚^{うま}れの集団！ 君は巧^{うま}いことを云つたが、その集団の代表者はこの女じゃあなかったかね？ 自分独りで偉がつて、無闇^{むやみ}に他人の悪口を云つて、ハタで見えて一番鼻ツ摘まみだったのは、一体君は誰だったと思う？ 西洋人に淫^{いんばい}売と間違えられて、しかも簡単な英語一つしやべれないで、ヘドモドしながら相手になったのは、菊子嬢だけではなかったようだぜ。それにこの女の、あの乱暴な口の利き方は何と云うぎまだ。仮りにレディー――

を氣取つていながら、あの云い草は殆ど聞くに堪えないじゃないか、菊子嬢や綺羅子の方が遥にたしなみがあるじゃないか」

——この不愉快な、悔恨と云おうか失望と云おうか、ちよつと何とも形容の出来ない厭な氣持は、その晩家へ歸るまで私の胸にこびりついていました。

電車の中でも、私はわざと反対の側に腰かけて、自分の前に居るナオミと云うものを、も一度つくづくと眺める氣になりました。全体己はこの女の何処がよくつて、こうまで惚れているのだろうか？ あの鼻かしら？ あの眼かしら？ と、そう云う風に数え立てると、

不思議なことに、いつもあんなに私に対して魅力のある顔が、今夜は実につまらなく、下らないものに思えるのでした。すると私の記憶の底には、自分が始めてこの女に会った時分、——あのダイヤモンド・カフエエの頃のナオミの姿がぼんやり浮かんで来るのでした。が、今に比べるとあの時分はずつと好かつた。無邪氣で、あどけなくて、内気な、陰鬱なところがあつて、こんなガサツな、生意気な女とは似ても似つかないものだった。

己はあの頃のナオミに惚れたので、その情勢が今日まで続いて来たのだけれど、考えて見れば知らない間に、この女は随分たまらないイヤな奴になつてゐるのだ。あの「伶俐な女は私でござい」と云わんばかりに、チンと済まして腰かけてゐる恰好はどうだ、「天

下の美人は私です」というような、「私ほどハイカラな、西洋人臭い女は居なからう」と云いたげな、あの傲然とした面つきはどうだ。あれで英語の「え」の字もしやべれず、パッシヴ・ヴォイスとアクティヴ・ヴォイスの区別さえも分らないとは、誰も知るまいが己だけはちゃんと知っているのだ。……

私はこっそり頭の中で、こんな悪罵を浴びせて見ました。彼女は少し反り身になって、顔を仰向けにしているのです、ちょうど私の座席からは、彼女が最も西洋人臭さを誇っているところの獅子ツ鼻の孔が、黒々と覗けました。そして、その洞穴の左右には分厚い小鼻の肉がありました。思えば私は、この鼻の孔とは朝夕深い馴染なのです。毎晩々々、私がこの女を抱いてやるとき、常にこう云う角度からこの洞穴を覗き込み、ついこの間もしたようにその涙を^{はな}かんでやり、小鼻の周りを愛撫してやり、又或る時は自分の鼻とこの鼻とを、^{くさび}楔のように喰い違わせたりするのですから、つまりこの鼻は、——この、女の顔のまん中に附着している小さな肉の塊は、まるで私の体の一部も同じことで、決して他人の物のようには思えません。が、そう云う感じを以て見ると、一層それが憎らしく汚らしくなつて来るのです。よく、腹が減った時なぞにまずい物を夢中でムシャムシャ喰うことがある、だんだん腹が膨れて来るに随つて、急に今まで詰め込んだ物のまずさ加減に気がつく

や否や、一度に胸がムカムカし出して吐きそうになる、——まあ云って見れば、それに似通った心地でしょうが、今夜も相変らずこの鼻を相手に、顔を突き合わせて寝ることを想像すると、「もうこの御馳走は沢山だ」と云いたいような、何だかモタレて来てゲンナリしたようになるのでした。

「これもやつぱり親の罰だ。親を欺して面白い目を見ようとしたって、ロクな事はありません」

と、私はそんな風に考えました。

しかし読者よ、これで私がすっかりナオミに飽きが来たのだと、推測されては困るのです。いや、私自身も今までこんな覚えはないので、一時はそうかと思っただけでしたけれど、さて大森の家へ帰って、二人きりになって見ると、電車の中のあの「満腹」の心は次第に何処かへすつ飛んでしまって、再びナオミのあらゆる部分が、眼でも鼻でも手でも足でも、蠱惑に充ちて来るようになり、そしてそれらの一つ一つが、私に取って味わい尽せぬ無上の物になるのです。

私はその後、始終ナオミとダンスに行くようになりましたが、その度毎に彼女の欠点が目につくので、帰り途にはきつと厭な気持ちになる。が、いつでもそれが長続きしたことは

なく、彼女に対する愛憎の念は一と晩のうちに幾回でも、猫の眼のように変りました。

十二

閑散であつた大森の家には、浜田や、熊谷や、彼等の友達や、主として舞踏会で近づきになつた男たちが、追ひ追ひ頻繁に出入りするようになりました。

やつて来るのは大概夕方、私が会社から戻る時分で、それからみんなで蓄音機をかけてダンスをやります。ナオミが客好きであるところへ、気兼ねをするような奉公人や年寄は居ず、おまけに此処ここのアトリエはダンスに持つて来いでしたから、彼等は時の移るのを忘れて遊んで行きます。始めのうちはいくらか遠慮して、飯時になれば帰ると云つたものですが、

「ちよいと！ どうして帰るのよ！ 御飯をたべていらつしやいよ」

と、ナオミが無理に引き止めるので、しまいにはもう、来れば必ず「大森亭」の洋食を取つて、晩飯を馳走するのが例のようになりました。

じめじめとした入梅の季節の、或る晩のことでした。浜田と熊谷が遊びに来て、十一時過

ぎまでしゃべっていましたが、外は非常な吹き降りになり、雨がざあざあガラス窓へ打ちつけて来るので、二人とも「帰ろう帰ろう」と云いながら、暫く躊躇ちゅうちよしていると、「まあ、大変なお天気だ、これじゃあとても帰れないから、今夜は泊っていらっしやいと、ナオミがふいそう云いました。」

「ねえ、いいじゃないの、泊ったって。——まあちゃんは無論いいんだろう?」

「うん、己アどうでもいいんだけど、………浜田が帰るなら己も帰ろう」

「浜さんだつて構やしないわよ、ねえ、浜さん」

そう云つてナオミは私の顔色を窺うかがつて、

「いいのよ、浜さん、ちつとも遠慮することはないのよ、冬だと布団ふとんが足りないけれど、今なら四人ぐらいどうにかなるわ。それに明日は日曜だから、讓治さんも内にいるし、いくら寝坊してもいいことよ」

「どうです、泊って行きませんか、全くこの雨じゃ大変だから」
と、私も仕方なしに勧めました。

「ね、そうなさいよ、そして明日は又何かして遊ぼうじゃないの、そう、そう、夕方から花月園へ行つてもいいわ」

結局二人は泊ることになりましたが、

「ところで蚊帳かやはどうしようね」

と、私が云うと、

「蚊帳は一つしかないんだから、みんな一緒に寝ればいいわよ。その方が面白いじゃないの」

と、そんな事がひどくナオミには珍しいのか、修学旅行にでも行ったように、きやつきやつと喜びながら云うのでした。

これは私には意外でした。蚊帳は二人に提供して、私とナオミとは蚊やり線香でも焚たきながら、アトリエのソファで夜を明かしても済むことだと考えていたので、四人が一つ部屋の中へごろごろかたまつて寝ようなどは、思い設けてもいませんでした。が、ナオミがその気になっているし、二人に対してイヤな顔をするでもないし、……と、例の通り私がぐずぐずしているうちに、彼女はさつさと極きめてしまつて、

「さあ、布団を敷くから三人とも手伝つて頂ちようだい戴だい」

と、先に立つて号令しながら、屋根裏の四畳半へ上つて行きました。

布団の順序はどう云う風にするのかと思うと、何分蚊帳が小さいので、四人が一列まぐらに枕を

並べる訳には行かない。それで三人が並行になり、一人がそれと直角になる。

「ね、こうしたらいいじゃないの。男の人が三人そこへお並びなさいよ、あたし此方へ独りで寝るわ」

と、ナオミが云います。

「やあ、えれえ事になっちゃったな」

蚊帳が吊れると、熊谷は中を透かして見ながらそう云いました。

「これじゃあどうしても豚小屋だぜ、みんなごちやごちやになっちゃまうぜ」

「ごちやごちやだっていいじゃないか、贅沢なことを云うもんじゃないわ」

「ふん！ 人様の家に御厄介になりながらか」

「当り前さ、どうせ今夜はほんとに寝られやしないんだから」

「己あ寝るよ、グウグウ鼾をかいいびきて寝るよ」

どしんと熊谷は地響を立てて、着物のまんま真つ先にもぐり込みました。

「寝ようツたつて寝かしやしないわよ。——浜さん、まアちゃんを寝かしちや駄目よ、寝そうになったらくす擽ぐつてやるのよ。——」

「ああ蒸し暑い、とてもこれじゃ寝られやしないよ。——」

まん中の布団にふん反り返って膝を立てている熊谷の右側に、洋服の浜田はズボンと下着のシャツ一枚で、痩せた体を仰向けに、ぺこんと腹を凹ましていました。そして静かに戸外の雨を聞き澄ましてでもいるように、片手を額の上に載せて、片手でばたばたと団扇を使っている音が、一層暑苦しそうでした。

「それに何だよ、僕ア女の人がいると、どうもおちおち寝られないような気がするよ」

「あたしは男よ、女じゃないわよ、浜さんだって女のような気がしないって云ったじゃないか」

蚊帳の外の、うす暗い所で、ぱつと寝間着に着換える時ナオミの白い背中が見えました。

「そりゃ、云ったことは云ったけれど、……」

「……：やつぱり傍へ寝られると、女のような気がするのかい？」

「ああ、まあそうだな」

「じゃ、まアちゃんは？」

「己ア平気さ、お前なんか女の数に入れちゃあいねえさ」

「女でなけりや何なのよ？」

「うむ、まあお前は海豹だあざらしな」

「あはははは、海豹と猿と孰方がいい？」

「孰方も己あ御免だよ」

と、熊谷はわざと眠そうな声を出しました。私は熊谷の左側に寝ころびながら、三人がしきりにべちやくちや云うのを黙って聞いていましたが、ナオミが此処へ這入つて来ると、浜田の方か、私の方か、いずれ孰方かへ頭を向けなければならないのだが、と、内々それを気にしていました。と云うのは、ナオミの枕が孰方つかずに、曖昧な位置に放り出してあったからです。何でもさつき布団を敷く時に、彼女はわざとそう云う風に、あとでどうでもなるように置いたのじやないかと思われました。と、ナオミは桃色の縮みのガウンに着換えてしまうと、やがて這入つて来て衝つ立ちながら、

「電気を消す？」

と、そう云いました。

「ああ、消して貰いてえ、……………」

そう云う熊谷の声がしました。

「じゃあ消すわよ。……………」

「あ、痛え！」

と、熊谷が云つたとたんに、いきなりナオミはその胸に飛び上って、男の体を踏み台にして、蚊帳の中からパチリとスイッチを切りました。

暗くはなつたが、表の電信柱にある街燈の灯先が窓ガラスに映っているのです、部屋の中はお互の顔や着物が見分けられるほどもやもと明るく、ナオミが熊谷の首を跨いで、自分の布団へ飛び降りた刹那の、寝間着の裾のさつとはだけた風の勢が私の鼻を颯りました。「まあちゃん、一服煙草を吸わない？」

ナオミは直ぐに寝ようとはしないで、男のように股を開いて枕の上にどつかと腰かけ、上から熊谷を見おろしながら云うのでした。

「よう！ 此方をお向きよ！」

「畜生、どうしても己を寝かさねえ算段だな」

「うふふふ、よう！ 此方をお向きよ！ 向かなけりやいじめてやるよ」

「あ、いてえ！ よせ、止せ、止セツたら！ 生き物だから少し鄭重にしてくんねえ、踏み台にされたり蹴られたりしちや、いくら頑丈でもたまらねえや」

「うふふふ」

私は蚊帳の天井を見ているのでハッキリ分りませんでした、ナオミは足の爪先で男の

頭をグイグイ押したもののらしく、

「仕方がねえな」

と云いながら、やがて熊谷は寝返りを打ちました。

「まアちゃん、起きたのかい？」

そう云う浜田の声がしました。

「ああ、起きちやつたよ、盛んに迫害されるんでね」

「浜さん、あんたも此方をお向きよ、でなけりや迫害してやるわよ」

浜田はつづいて寝返りを打って、腹這いになったようでした。

同時に熊谷がガチャガチャと袂たもとの中からマツチを搜さがり出す音がしました。そしてマツチを擦こつたので、ぼうツと私の眼瞼まぶたの上に明りが来しました。

「讓治さん、あなたも此方を向いたらどう？ 独りで何をしているのよ」

「う、うん、……………」

「どうしたの、眠いの？」

「う、うん……………少しとろとろしかけたところだ、……………」

「うふふふ、巧うまく云つてらア、わざと寝たふりをしてるんじゃないの、ねえ、そうじゃ

ない？ 気が揉めやしない？」

私は凶星を指されたので、眼をつぶってはいましたけれど、顔が真っ赤になったような気がしました。

「あたし大丈夫よ、ただこうやって騒いでるだけよ、だから安心して寝てもいいわ。……それともほんとに気が揉めるなら、ちよつと此方を見てみない？ 何も痩せ我慢しないだって、——」

「やつぱり迫害されたいんじゃないかね」

そう云ったのは熊谷で、煙草に火をつけて、すばつと口を鳴らしながら吸い出しました。

「いやよ！ こんな人を迫害したって仕様がないわよ、毎日してやっているんだもの」

「御馳走様だなア」

と浜田の云ったのが、心からそう云ったのでなく、私に対する一種のお世辞のようにしか取れませんでした。

「ねえ、讓治さん、——だけれど、迫害されたいんならして上げようか」

「いや、沢山だよ」

「沢山ならあたしの方をお向きなさいよ、そんな、一人だけ仲間外れをしているなんて妙

じゃないの」

私はぐるりと向き直って、枕の上へ頤あごを載せました。と、立て膝をして両脛りようはぎを八の字に踏ん張っているナオミの足の、一方は浜田の鼻先に、一方は私の鼻先にあるのです。そして熊谷はと云うと、その八の字の間へ首を突っ込んで、悠々と敷島を吹かしています。

「どう？ 讓治さん、この光景は？」

「うん、……………」

「うんとは何よ」

「呆あきれたもんだね、まさに海豹に違いないね」

「ええ、海豹よ、今海豹が氷の上で休んでるところよ。前に三匹寝ているのも、これも男の海豹よ」

低く密雲の閉ざすように、頭の上に垂れ下がっている萌黄もえぎの蚊帳、……………夜目にも黒く、長々と解いた髪の毛の中の白い顔、……………しどけないガウンの、ところどころに露あらわれている胸や、腕や、膨ふくらツ脛ばぎや、……………この恰好かつこうは、ナオミがいつもこれで私を誘惑するポーズの一つで、こう云う姿を見せられると私はあたかも餌えさを投げられた獣のようにさせられるのです。私は明かに、ナオミが例のそそのかすような表情をして、意地の悪い眼で

微笑しながら、じつと此方を見おろしているのを、うす暗い中で感じました。

「呆れたなんて嘘うそなのよ。あたしにガウンを着られるとたまらないッて云う癖に、今夜はみんなが居るもんだから我慢してるのよ。ねえ、讓治さん、中あたつたでしよう」

「馬鹿ばかを云うなよ」

「うふふふ、そんなに威張るなら、降参させてやろうか」

「おい、おい、ちと穏やかでねえね、そう云う話は明日の晩に願いてえね」

「賛成！」

と、浜田も熊谷の尾おに附いて云つて、

「今夜はみんな公平にして貰いたいなア」

「だから公平にしてるじゃないの。恨みツコがないように、浜さんの方へは此方の足を出しているし、讓治さんの方へは此方を出してるし、——」

「そうして己はどうなんだい？」

「まアちゃんが一番得をしてるわよ、一番あたしの傍そばにいて、こんな所へ首を突ン出してるじゃないの」

「大いに光榮の至りだね」

「そうよ、あんたが一番優待よ」

「だがお前、まさかそうして一と晩じゅう起きてる訳じゃねえだろう。一体寝る時はどうなるんだい？」

「さあ、どうしようか、孰方へ頭を向けようか。浜さんにしようか、讓治さんにしようか」
「そんな頭は孰方へ向けたって、格別問題になりやしねえよ」

「いや、そうでないよ、まあちゃんはまん中だからいいが、僕に取っちゃ問題だよ」

「そう？ 浜さん、じゃ、浜さんの方を頭にしようか」

「だからそいつが問題なんだよ、此方へ頭を向けられても心配だし、そうかと云って河合さんの方へ向けられても、やっぱり何だか気が揉めるし、……………」

「それに、この女は寝像が悪いぜ」

と、熊谷が又口を挟んで、

「用心しないと、足を向けられた方の奴は夜中に蹴ッ飛ばされるかも知れんぜ」

「どうですか河合さん、ほんとに寝像が悪いですか」

「ええ、悪いですよ、それも一と通りじゃありませんよ」

「おい、浜田」

「ええ？」

「寝惚ねぼけて足の裏を舐なめたってね」

そう云つて熊谷がゲラゲラ笑いました。

「足を舐めたっていいじゃないの。讓治さんなんか始終だわよ、顔より足の方が可愛かわいいくらいだつて云うんだもの」

「そいつあ一種の拝物教だね」

「だつてそうなのよ、ねえ、讓治さん、そうじゃなかった？ あなたは実は足の方が好きなんだわね？」

それからナオミは、「公平にしなけりや悪い」と云つて、私の方へ足を向けたり、浜田の方へ向け変えたり、五分おきぐらゐに、何度も何度も布団ふとんの上を彼方あつち此方こつちへ寝そべりました。

「さあ、今度は浜さんが足の番！」

と云つて、寝ながら体をぶん廻しのようにぐるぐる廻したり、廻す拍子に両脚を上げて蚊帳の天井を蹴つ飛ばしたり、向うの端から此方の端へぽんと枕まくらを投げつけたりする。その海豹の活躍ぶりが激しいので、それだけでなくも布団の半分はみ出している蚊帳すその裾がぱつ

ぱつとめくれて、蚊が幾匹も舞い込んで来る。「此奴あいけねえ、大変な蚊だ」と、熊谷がムツクリ起き上って、蚊退治を始める。誰かが蚊帳を蹈んづけて、釣り手を切つて落してしまふ。その落ちた中でナオミが一層ばたばたと暴れる。釣り手を繕つて、蚊帳を吊り直すのに又長いこと時間がかかる。そんな騒ぎで、やつといくらか落ち着いたような気がしたのは、東の方が明るみかけた時分でした。

雨の音、風の響き、隣りに寝ている熊谷の鼾いびき……私はそれが耳について、ついとろとろとしたかと思うと、ややともすれば眼がさめました。一体この部屋は二人で寝てさえ狭苦しい上に、ナオミの肌や着物にこびりついている甘い香と汗の匂においとが、醜はづ醜こうしたように籠こもっている。そこへ今夜は大の男が二人も余計殖ふえたのですから、尚な更おさらたまらない人いきれがして、密閉された壁の中は、何だか地震でもありそうな、息の詰まるような蒸し暑さでした。ときどき熊谷が寝返りを打つと、べつとり汗ばんだ手だの膝ひざだのが互にぬるぬると触りました。ナオミはと見ると、枕は私の方にありながら、その枕へ片足を載せ、一方の膝を立てて、その足の甲を私の布団の下へ突つ込み、首を浜田の方へかしげて、両手は一杯にひらいたまま、さすがのお転婆てんばもくたびれたものか、好い心持そうに眠つています。

「ナオミちゃん……」

と、私はみんなの静かな寢息をうかがいながら、口のうちにそう云って、私の布団の下にある彼女の足を撫^なでてみました。ああこの足、このすやすやと眠っている真つ白な美しい足、これはたしかに己の物だ、己はこの足を、彼女が小娘の時分から、毎晩々々お湯へ入れてシャボンで洗ってやったのだ、そしてまあこの皮膚の柔かさは、——十五の歳^{とし}から彼女の体は、ずんずん伸びて行つたけれど、この足だけはまるで発達しないかのように依然として小さく可愛い。そうだ、この拇^{おやゆび}趾^びもあの時の通りだ。小趾^{こゆび}の形も、踵^{かかと}の円味も、ふくれた甲の肉の盛り上りも、総^すべてあの時の通りじゃないか。……私は覚え、その足の甲へそうツと自分の唇をつけずにはいられませんでした。

夜が明けてから、私は再びうとうとしたようでしたが、やがてどつと云う笑い声に眼がさめて見ると、ナオミが私の鼻の孔^{あな}へかんじよりを突っ込んでいました。

「どうした？ 讓治さん、眼がさめた？」

「ああ、もう何時だね」

「もう十時半よ、だけど起きたって仕様がなからどんが鳴るまで寝ていようじゃないの」
雨が止^やんで、日曜日の空は青々と晴れていましたが、部屋の中にはまだ人いきれが残って

いました。

十三

当時、私のこんなふしだらな有様は、会社の者は誰も知らない筈はずでした。家に居る時と会社かに居る時と、私の生活は劃かく然ぜんと二分されていました。勿もちろん論事務を執っている際でも、頭の中にはナオミの姿が始終チラついていましたけれど、別段それが仕事の邪魔になるほどではなく、まして他人は気がつく訳ありません。で、同僚の眼には私は矢張君子に見えるのだらうと、そう思い込んでいたことでした。

ところが或る日——まだ梅雨が明けきれない頃で、鬱うつと陶とうしい晩のことでしたが、同僚の一人の波川と云う技師が、今度会社から洋行を命ぜられ、その送別会が築地の精養軒で催されたことがありました。私は例に依よつて義理一遍に出席したに過ぎませんから、会食が済み、デザート・コースの挨拶あいさつが終り、みんながそろそろ食堂から喫煙室へ流れ込んで、食後のリキウルを飲みながらガヤガヤ雑談をし始めた時分、もう帰っても好よかろうと思つて立ち上ると、

「おい、河合君、まあかけ給え^{たま}」

と、ニヤニヤ笑いながら呼び止めたのは、Sと云う男でした。Sはほんのり微醺^{びくん}を帯びて、TやKやHなどと一つソオファを占領して、そのまん中へ私を無理に取り込めようとするのでした。

「まあ、そう逃げんでもいいじゃないか、これから何処^{どこ}かへお出かけかね、この雨の降るのに。――」

と、Sはそう云つて、孰方^{どっち}つかずに衝つ立つたままの私の顔を見上げながら、もう一度ニヤニヤ笑いました。

「いや、そう云う訳じゃないけれど、……………」

「じゃ、真^まつ直^すぐにお帰りかね」

そう云つたのはHでした。

「ああ、済まないけれど、失敬させてくれ給え。僕の所は大森だから、こんな天気には路^{みち}が悪くつて、早く帰らないと俾^{くるま}がなくなっちゃうんだよ」

「あははは、巧^{うま}く云つてるぜ」

と、今度はTが云いました。

「おい、河合君、種はすっかり上ってるんだぜ」

「何が？……………」

「種」とはどう云う意味なのか、Tの言葉を判じかねて、私は少し狼狽しながら聞き返しました。

「驚いたなアどうも、君子とばかり思っていたのになア……………」

と、次にはKが無闇と感心したように首をひねって、

「河合君がダンスをすると云うに至つちやあ、何しろ時勢は進歩したもんだよ」

「おい、河合君」

と、Sはあたりに遠慮しながら、私の耳に口をつけるようにしました。

「その、君が連れて歩いている素晴らしい美人と云うのは何者かね？ 一遍僕等にも紹介し給え」

「いや紹介するような女じゃないよ」

「だって、帝劇の女優だって云う話じゃないか。……………え、そうじゃないのか、活動の女優だと云う噂もあるし、混血児だと云う説もあるんだが、その女の巢を云い給え。云わなけりや帰さんよ」

私が明かに不愉快な顔をして、口を吃^{ども}らしているのも気が付かず、Sは夢中で膝を乗り出して、ムキになって尋ねるのでした。

「え、君、その女はダンスでなけりやあ呼べないのか？」

私はもう少しで「馬鹿ツ」と云ったかも知れませんでした。まだ会社では恐らく誰も気がつくまいと思つていたのに、豈^{あにはか}図らんや嗅^かぎつけていたばかりでなく、道楽者の名を博しているSの口吻^{こうふん}から察すると、奴等は私たちを夫婦であるとは信じないで、ナオミを何処へでも呼べる種類の女のように考えているのです。

「馬鹿ツ、人の細君^{つか}を掴^{つか}まえて『呼べるか』とは何だ！ 失敬な事を云い給うな」

この堪え難い侮辱に對して、私は当然、血相を変えてこう怒鳴りつけるところでした。いや、たしかにほんの一瞬間、私はさつと顔色を変えました。

「おい、河合々々、教えろよ、ほんとに！」

と、奴等は私の人の好いを見込んでいたので、何処までもずうずうしく、Hがそう云つてKの方を振り向きながら、

「なあ、K、君は何処から聞いたんだつて云つたけな。——」

「僕ア慶応の学生から聞いたよ」

「ふん、何だつて？」

「僕の親戚しんせきの奴なんだね、ダンス気違いなもんだから始終ダンス場へ出入りするんで、その美人を知ってるんだ」

「おい、名前は何て云うんだ？」

と、Tが横合から首を出しました。

「名前は……ええと、……妙な名だったよ、……ナオミ、……ナオミと云うんじゃないかったかな」

「ナオミ？……じゃあやつぱり混血児かな」

そう云つてSは、冷やかすように私の顔を覗のぞいて、

「混血児だとすると、女優じゃないな」

「何でも偉い発展家だそうだが、その女は。盛んに慶応の学生なんかを荒らし廻るんだそうだから」

私は変な、痙攣けいれんのような薄笑いを浮かべたまま、口もとをぴくぴく顫ふるわせているだけでしたが、Kの話が此処ここまで来ると、その薄笑いは俄にわかに凍りついたように、頬ツペたの上で動かなくなり、眼玉がグツと眼窩がんかの奥へ凹へこんだような気がしました。

「ふん、ふん、そいつあ頼もしいや！」

と、Sはすっかり恐悦しながら云うのでした。

「君の親戚の学生と云うのも、その女と何かあつたのかい？」

「いや、そりやどうか知らないが、友達のうちに二三人はあるそうだよ」

「止せ、止せ、河合が心配するから。——ほら、ほら、あんな顔してるぜ」

Tがそう云うと、みんな一度に私を見上げて笑いました。

「なあに、ちつとぐらい心配させたって構わんさ。われわれに内証でそんな美人を専有しようとするなんて心がけが怪しからんよ」

「あはははは、どうだ河合君、君子もたまにはイキな心配をするのもよからう？」

「あはははは」

もはや私は、怒るところではありませんでした。誰が何と云ったのかまるで聞えませんでした。ただどつと云う笑い声が、両方の耳にがんがん響いただけでした。咄嗟の私の当惑は、どうしてこの場を切り抜けたらいいか、泣いたらいいのか、笑ったらいいのか、——
——が、うっかり何か云ったりすると、尚更嘲弄ちやうろうされやしないかと云うことでした。
とにかく私は、何が何やら上の空で喫煙室を飛び出しました。そしてぬかるみの往来へ立

つて冷めたい雨に打たれるまでは、足が大地に着きませんでした。未だに後から何かがい駆けて来るような心地で、私はどんどん銀座の方へ逃げ伸びました。

尾張町のもう一つ左の四つ角へ出て、そこを私は新橋の方へ歩いて行きました。……

と云うよりも、私の足がただ無意識に、私の頭とは関係なく、その方角へ動いて行きました。私の眼には雨に濡れた舗道の上に街の燈火のきらきら光るのが映りました。このお天気にも拘わらず、通りはなかなか人が出ているようでした。あ、芸者が傘をさして通る、若い娘がフランネルを着て通る、電車が走る、自動車が駆ける、……

……ナオミが非常な発展家だ。学生たちを荒らし廻る？……そんな事が有り得るだろうか？ 有り得る、たしかに有り得る、近頃のナオミの様子を見れば、そう思わないのが不思議なくらいだ。実は己だつて内々氣にしてはいたのだけれど、彼女を取り巻く男の友達に余り多いので、却つて安心していたのだ。ナオミは子供だ、そして活潑だ。「あたし男よ」と彼女自身が云っている通りだ。だから男を大勢集めて、無邪気に、賑やかに、馬鹿騒ぎをするのが好きなだけなんだ。仮に彼女に下心があつたとしたつて、これだけ多くの人目があれば、それを忍べるものではなし、まさか彼女が、……と、そう考えたこの「まさか」が悪かつたんだ。

けれどもまさか、……まさか事実じゃないのじゃなかろうか？ ナオミは生意気にはな
 ったが、でも品性は気高い女だ。己はその事をよく知っている。うわべは己を軽蔑した
 りするけれども、十五の歳から養つてやった己の恩義には感謝している。決してそれを裏
 切るようなことはしないと、寝物語に彼女が屢 《しばしば》 涙を以て云う言葉を、己は
 疑うことは出来ない。あのKの話——事に依つたら、あれは会社の人の悪い奴等が、己
 をからかうのじゃなかろうか？ ほんとうに、そうであつてくれればいいが。……あの、
 Kの親戚の学生と云うのは誰だろうか？ その学生の知っているのでも二三人は関係があ
 る？ 二三人？……浜田？ 熊谷？……怪しいとすればこの二人が一番怪しい、が、
 それならどうして二人は喧嘩しないのだろう。別々に来ないで、一緒にやって来て、仲よ
 くナオミと遊んでいるのはどう云う気だろう？ 己の眼を晦ます手段だろうか？ ナオミ
 が巧く操っているので、二人は互に知らないのだろうか？ いや、それよりも何よりも、
 ナオミがそんなに墮落してしまつただろうか？ 二人に関係があつたとしたら、この間の
 晩の雑魚寝のような、あんな無耻な、しゃあしやあとした真似が出来るだろうか？ 若し
 そうだったら彼女のしぐさは売笑婦以上じゃないか。……

私はいつの間にか新橋を渡り、芝口の通りを真っ直ぐにぴちやぴちや泥を撥ね上げながら

金杉橋の方まで歩いてしまいました。雨は寸分の隙間もなく天地を閉じ込め、私の体を前後左右から包囲して、傘から落ちる雨だれがレインコートの肩を濡らします。ああ、あの雑魚寝をした晩もこんな雨だった。あのダイヤモンド・カフェエのテーブルでナオミに始めて自分の心を打ち明けた晩も、春ではあったがやっぱりこんな雨だった。と、私はそんなことを思いました。すると今夜も、自分がこうしてびしょ濡れになって此処を歩いている最中、大森の家には誰かが来ていやしないだろうか？ 又雑魚寝じゃないのだろうか？——と、そう云う疑懼が突然浮かんで来るのでした。ナオミをまん中に、浜田や熊谷が行儀の悪い居ずまいで、べちやくちや冗談を云い合っている淫らなアトリエの光景が、まざまざと見えて来るのでした。

「そうだ。己はぐずぐずしている場合じゃないんだ」

そう思うと私は、急いで田町の停車場へ駆けつけました。一分、二分、三分……と、やつと三分目に電車が来ましたが、私は嘗てこんなに長い三分間を経験したことがありませんでした。

ナオミ、ナオミ！ 己はどうして今夜彼女を置き去りにして来たのだろう。ナオミが傍に居ないからいけないんだ、それが一番悪い事なんだ。——私はナオミの顔さえ見れば、

このイライラした心持が幾らか救われる気がしました。彼女の闊達な話声を聞き、罪のなさそうな瞳を見れば疑念が晴れるであろうことを祈りました。

が、それにしても、若しも彼女が再び雑魚寝をしようなどと云い出したら、自分は何と云うべきだろうか？ この後自分は、彼女に対し、彼女に寄りつく浜田や熊谷や、その他の有象無象に対し、どんな態度を執るべきだろうか？ 自分は彼女の怒りを犯しても、敢然として監督を厳にすべきであろうか？ それで彼女が大人しく自分に承服すればいいが、反抗したらどうなるだろう？ いや、そんなことはない。「自分は今夜会社の奴等に甚だしい侮辱を受けた。だからお前も世間から誤解されないように、少し行動を慎しんでおくれ」と云えば、外の場合とは違うから、彼女自身の名誉のためにでも、恐らく云うことを聴くであろう。若しその名誉も誤解も顧みないようなら、正しく彼女は怪しいのだ。Kの話は事実なのだ。若し、……ああ、そんな事があつたら……

私は努めて冷静に、出来るだけ心を落ち着けて、この最後の場合を想像しました。彼女が私を欺いていたことが明かになったとしたら、私は彼女を許せるだろうか？——正直のところ、既に私は彼女なしには一日も生きて行けません。彼女が墮落した罪の一半は勿論私にもあるのですから、ナオミが素直に前非を悔いて詫言まつてさえくれるなら、私は

それ以上彼女を責めたくはありませんし、責める資格もないのです。けれども私の心配なのは、あの強情な、殊^{こと}に私に対してはひと強硬^{ひしお}になりたがる彼女が、仮に証拠を突きつけたとしても、そう易々^{やすやす}と私に頭を下げるだろうかと云うことでした。たとい一旦^{いったん}は下げたとしても、実は少しも改心しないで、此方^{こつち}を甘く見くびって、二度も三度も同じ過^{あやまち}を繰り返すようになりはしないか？　そして結局、お互の意地ツ張りから別れるようになってしまったら？　——それが私には何より恐ろしいことでした。露骨に云えば彼女の貞操その物よりも、ずっとこの方が頭痛の種でした。彼女を糺^{きゆうめい}明^あし、或^{ある}は監督するにしても、その際に処する自分の腹^{あらかじ}を予め決めて置かなければならぬ。「そんならあたし出て行くわよ」と云われたとき、「勝手に出て行け」と云えるだけの、覚悟が出来ていないが。……

しかし私は、この点になるとナオミの方にも同じ弱点があることを知っていました。なぜなら彼女は、私と一緒に暮らしてこそ思う存分の贅^{ぜいたく}沢が出来ますけれども、一度此処を追い出されたら、あのむさくろしい千束町^{せんぞく}の家より外、何処^{どこ}に身を置く場所があるでしょう。もうそうなれば、それこそほんとに売笑婦にでもならない以上、誰も彼女にチャホヤ云う者はなくなるでしょう。昔はとにかく、我が儘^ま一杯に育ってしまった今の彼女の

虚栄心では、それは到底忍び得ないに極まっています。或は浜田や熊谷などが引き取ると云うかも知れませんが、学生の身で、私がさせて置いたような栄耀^{えいよう}栄華^{えいが}がさせられないのは、彼女にも分つて^{はず}いる筈です。そう考えると、私が彼女に贅沢^{ぜいたく}の味を覚えさせたのはいい事でした。

そうだ、そう云えばいつか英語の時間にナオミがノートを引き裂いた時、己が怒って「出て行け」と云つたら、彼女は降参したじゃないか。あの時彼女に出て行かれたらどんなに困ったか知れないのだが、己が困るより彼女の方がもっと困るのだ。己があつての彼女であつて、己の傍を離れたが最後、再び社会のどん底へ落ちてこの世の下積になつてしまう。それが彼女には余程恐ろしいに違いないのだ。その恐ろしさは今もあの時と変りはあるまい。もはや彼女も今歳は十九だ。歳を取つて、多少でも分別がついて来ただけ、一層彼女はそれをハッキリと感じる筈だ。そうだとすれば万一おどかしに「出て行く」と云うことはあつても、よもや本気で実行することは出来なからう。そんな見え透いた威嚇^{いかく}で以て、己が驚くか驚かないか、そのくらいなことは分つて^{いる}だろう。……

私は大森の駅へ着くまでに、いくらか勇氣を取り返しました。どんな事があつてもナオミと私とは別れるような運命にはならない、もうそれだけはきつと確かだと思えました。

家の前までやって来ると、私の忌^いまわしい想像はすっかり外れて、アトリエの中は真つ暗になっており、一人の客もないらしく、しーんと静かで、ただ屋根裏の四畳半に明りが燈^{とも}っているだけでした。

「ああ、一人で留守番をしているんだな、——」

私はほつと胸を撫^なでました。「これでよかった、ほんとうに仕合わせだった」と、そんな気がしないではいられませんでした。

締まりのしてある玄関の扉を合鍵^{あいかぎ}で開け、中へ這^{はい}入ると私は直^すぐにアトリエの電気をつきました。見ると、部屋は相変らず取り散らかしてありますけれど、矢張客の来たような形跡はありません。

「ナオミちゃん、只^{ただいま}今、……帰つて来たよ、……」

そう云^いつても返辞がないので、梯子^{はしご}段を上つて行くと、ナオミは一人四畳半に床を取つて、安らかに眠っているのです。これは彼女に珍しいことではないので、退屈すれば昼でも夜でも、時間を構わず布団^{ふとん}の中へもぐり込んで小説を読み、そのままやすやすと寝入ってしまうのが常でしたから、その罪のない寝顔に接しては、私はいよいよ安心するばかりでした。

「この女が己を欺いている？ そんな事があるだろうか？……この、現在己の眼前で平和な呼吸をつづけている女が？……」

私は密かに、彼女の眠りを覚まさないように枕もとへ据わったまま、暫くじつと息を殺してその寝姿を見守りました。昔、狐が美しいお姫様に化けて男を欺したが、寝ている間に正体を顕わして、化けの皮を剥がされてしまった。——私は何か、子供の時分に聞いたことのあるそんな噺を想い出しました。寝像の悪いナオミは、掻い巻きをすっかり剥いでしまつて、両股の間にその襟を挟み、乳の方まで露わになった胸の上へ、片肘を立てててその手の先を、あたかも撓んだ枝のように載せています。そして片一方の手は、ちょうど私が据わっている膝のあたりまで、しなやかに伸びています。首は、その伸ばした手の方角へ横向きになつて、今にも枕からずり落ちそうに傾いている。そのつい鼻の先の所に、一冊の本がページを開いたまま落ちていました。それは彼女の批評に依れば「今の文壇で一番偉い作家だ」と云う有島武郎の、「カインの末裔」と云う小説でした。私の眼は、その仮綴じの本の純白な西洋紙と、彼女の胸の白さとの上に、交る交る注がれました。ナオミは一体、その肌の色が日によつて黄色く見えたり白く見えたりするものでしたが、ぐっすり寝込んでいる時や起きたばかりの時などは、いつも非常に冴えていました。眠つて

いる間に、すっかり体中の脂が脱けてしまうかのように、きれいになりました。普通の場合「夜」と「暗黒」とは附き物ですけれど、私は常に「夜」を思うと、ナオミの肌の「白さ」を連想しないではいられませんでした。それは真つ昼間の、隈なく明るい「白さ」とは違って、汚れた、きたない、垢だらけな布団の中の、云わば檻褌に包まれた「白さ」であるだけ、余計私を惹きつけました。で、こうしてつくづく眺めてみると、ランプの笠の蔭になつてゐる彼女の胸は、まるで真つ青な水の底にでもあるもののように、鮮かに浮き上つて来るのでした。起きてゐる時はあんなに晴れやかな、変幻極らないその顔つきも、今は憂鬱に眉根を寄せて苦い藥を飲まれたような、頸を締められた人のような、神秘的な表情をしているのですが、私は彼女のこの寝顔が大へん好きでした。「お前は寝ると別人のような表情になるね、恐ろしい夢でも見てゐるように」——と、よくそんなことを云い云いました。「これでは彼女の死顔もきつと美しいに違いない」と、そう思ったことも屢ありました。私はよしやこの女が狐であつても、その正体がこんな妖艶なものであるなら、寧ろ喜んで魅せられることを望んだでしょう。

私は大凡そ三十分ぐらいそうして黙つてすわつていました。笠の蔭から明るい方へはみ出している彼女の手は、甲を下に、掌を上、綻びかけた花びらのように柔かに握られて、

その手頸には静かな脈の打っているのがハッキリと分りました。

「いつ帰ったの？……」

すう、すう、すう、と、安らかに繰り返されていた寝息が少し乱れたかと思うと、やがて彼女は眼を開きました。その憂鬱な表情をまだ何処やらに残しながら、……

「今、……もう少し前」

「なぜあたしを起さなかった？」

「呼んだんだけど起きなかったから、そうツとして置いたんだよ」

「そこにすわって、何をしてたの？——寝顔を見ていた？」

「ああ」

「ふツ、可笑^{おか}しな人！」

そう云って彼女は、子供のようにあどけなく笑って、伸ばしていた手を私の膝に載せました。

「あたし今夜は独りぼちでつまらなかったわ。誰か来るかと思ったら、誰も遊びに来ないんだもの。……ねえ、パパさん、もう寝ない？」

「寝てもいいけれど、……」

「よう、寝てよう！……ごろ寝しちゃったもんだから、方々蚊に喰われちゃったわ。ほら、こんなよ！　ここん所を少うし搔いて！——」

云われるままに、私は彼女の腕だの背中だのを暫く搔いてやりました。

「ああ、ありがと、痒^{かゆ}くつて痒^{かゆ}くつて仕様がないわ。——済まないけれど、そこにある寝間着を取ってくれない？　そうしてあたしに着せてくれない？」

私はガウンを持って来て、大の字なりに倒れている彼女の体を抱き掬^{すく}いました。そして私が帯を解き、着物を着換えさせてやる間、ナオミはわざとぐつたりとして、屍骸^{しかい}のように手足をぐにやぐにやさせていました。

「蚊帳^{かや}を吊^つつて、それからパパさんも早く寝てよう。——」

十四

その夜の二人の寝物語は、別にくだなく書くまでもありません。ナオミは私から精養軒での話を聞くと、「まあ、失敬な！　何て云う物を知らない奴等^{やつら}だろう！」と口汚^{ののし}く罵って一笑に附してしまいました。要するにまだ世間ではソシアル・ダンスと云うものの意

義を諒解りようかいしていない。男と女が手を組み合つて踊りさえすれば、何かその間に良くない関係があるもののように臆測おくそくして、直ぐそう云う評判を立てる。新時代の流行に反感を持つ新聞などが、又いい加減な記事を書いては中傷するので、一般の人はダンスと云えば不健全なものだと極めてしまっている。だから私たちは、どうせそのくらいな事は云われる覚悟でいなければならない。――

「それにあたしは、讓治さんより外の男と二人ツきりで居たことなんか一度もないのよ。

――ねえ、そうじゃなくって？」

ダンスに行く時も私と一緒に、内で遊ぶ時も私と一緒に、万一私が留守であっても、客は一人と云うことはない。一人で来ても「今日は此方も一人だから」と云えば、大概遠慮して帰ってしまう。彼女の友達にはそんな不法な男は居ない。――ナオミはそう云って、

「あたしがいくら我が儘だつて、いいことと悪いことぐらひは分っているわよ。そりや讓治さんを欺そうと思えば欺せるけれど、あたし決してそんな事はしやしないわ。ほんとに公明正大よ、何一つとして讓治さんに隠したことなんかありやしないのよ」と云うのでした。

「それは僕だつて分っているんだよ、ただあんな事を云われたのが、氣持が悪かったと云

うだけなんだよ」

「悪かったら、どうするって云うの？　もうダンスなんか止めるって云うの？」

「止めなくつてもいいけれど、成るべく誤解されないように、用心した方がいいと云うのさ」

「あたし、今も云うように用心して付き合っているじゃないの」

「だから、僕は誤解していやあしないよ」

「讓治さんさえ誤解していなけりや、世間の奴等が何て云おうと、恐くはないわ。どうせあたしは、乱暴で口が悪くつて、みんなに憎まれるんだから。——」

そして彼女は、ただ私が信じてくれ、愛してくれば沢山だとか、自分は女のようにでないから自然男の友達が出来、男の方がサッパリしていて自分も好きだものだから、彼等とばかり遊ぶのだけれど、色の恋のと云うようなイヤらしい気持は少しもないとか、センチメンタルな、甘ったるい口調で繰り返して、最後には例の「十五の歳としから育てて貰もらった恩を忘れたことはない」とか「讓治さんを親とも思い夫とも思っています」とか、極まり文句を云いながら、さめざめと涙を流したり、又その涙を私に拭ふかせたり、矢継ぎ早に接吻せつぶんの雨を降らせたりするのでした。

が、そんなに長く話をしながら浜田と熊谷の名前だけは、故意にか、偶然にか、不思議に彼女は云いませんでした。私も実はこの二つの名を云って、彼女の顔に現れる反応を見たいと思っていたのに、とうとう云いそびれてしまいました。勿論もちろん私は彼女の言葉を一から十まで信じた訳ではありませんが、しかし疑えばどんな事でも疑えますし、強いて過ぎ去った事までも詮議せんぎ立てする必要はない、これから先を注意して監督すればいいのだと、……いや、始めはもつと強硬に出るつもりでいたにも拘かかわらず、次第にそう云う曖昧あいまいな態度にさせられました。そして涙と接吻の中から、すすり泣きの音に交まじって囁ささかれる声を聞いていると、嘘うそではないかと二の足を踏ふみながら、やっぱりそれが本当のように思われて来るのでした。

こんな事があつてから後、私はそれとなくナオミの様子に気をつけましたが、彼女は少しずつ、あまり不自然でない程度に、在来ざらいの態度を改めつつあるようでした。ダンスにも行くことは行きますけれど、今までのように頻繁ではなく、行っても余り沢山は踊らずに、程よいところで切り上げて来る。客もうるさくはやって来ない。私が会社から帰って来ると、独りで大人しく留守番して、小説を読むとか、編物をするとか、静かに蓄音器を聴いているとか、花壇に花を植えるとかしている。

「今日も独りで留守番かね？」

「ええ、独りよ、誰も遊びに来なかったわ」

「じゃ、淋さびしくはなかったかね？」

「始めから独りときまっていれば、淋しいことなんかありやしないわ、あたし平気よ」
そう云つて、

「あたし、賑にぎやかなのも好きだけれど、淋しいのも嫌いじゃないわ。子供の時分にはお友達なんかちつともなくつて、いつも独りで遊んでいたのよ」

「ああ、そう云えばそんな風だったね。ダイヤモンド・カフェエにいた時分なんか、仲間の者ともあんまり口を利きかないで、少し陰鬱てんぱなくらいだったね」

「ええ、そう、あたしはお転婆てんぱなようだけれど、ほんとうの性質は陰鬱てんぱなのよ。——陰鬱てんぱじゃないか？」

「大人しいのは結構だけれど、陰鬱てんぱになられても困るなア」

「でもこの間じゆうのように、暴れるよりはよくはなくつて？」

「そりやいくらか知れやしないよ」

「あたし、好いい児こになつたでしよ」

そしていきなり私に飛び着いて、両手で首ツ玉を抱きしめながら、眼が晦むほど切なく激しく、接吻したりするのでした。

「どうだね、暫くダンスに行かないから、今夜あたり行つて見ようか」

と、私の方から誘いをかけても、

「どうでも——讓治さんが行きたいなら、——」

と、浮かぬ顔つきで生返辞をしたり、

「それより活動へ行きましょうよ、今夜はダンスは気が進まないわ」

と云うようなこともよくありました。

又あの、四五年前の、純な楽しい生活が、二人の間に戻つて来ました。私とナオミとは水入らずの二人きりで、毎晩のように浅草へ出かけ、活動小屋を覗いたり帰りには何処かの料理屋で晩飯をたべながら、「あの時分はこうだった」とか「ああだった」とか、互になつかしい昔のことを語り合つて、思い出に耽る。「お前はなりが小さかったものだから、帝国館の横木の上へ腰をかけて、私の肩に掴まりながら絵を見たんだよ」と私が云えば、「讓治さんが始めてカフェエへ来た時分には、イヤにむツつりと黙り込んで、遠くの方からジロジロ私の顔ばかり見て、気味が悪かった」とナオミが云う。

「そう云えばパパさんは、この頃あたしをお湯に入れてくれないのね、あの時分にはあたしの体を始終洗ってくれたじゃないの」

「ああそうそう、そんな事もあったつけね」

「あつたつけじゃないわ、もう洗ってくれないの？　こんなにあたしが大きくなつちや、洗うのは厭いや？」

「厭なことがあるもんか、今でも洗つてやりたいんだけれど、実は遠慮していたんだよ」
「そう？　じゃ、洗つて頂ちやうだい戴だいよ、あたし又ベビーさんになるわ」

こんな会話があつてから、ちやうど幸い行水の季節になつて来たので、私は再び、物置き
の隅に捨ててあつた西洋風呂ぶろをアトリエに運び、彼女の体を洗つてやるようになりました。
「大きなベビーさん」——と、嘗かつてはそう云つたものですけれど、あれから四年の月日が
過ぎた今のナオミは、そのたつぷりした身長を湯船の中へ横たえて見ると、もはや立派に
成人し切つて完全な「大人」になっていました。ほどけば夕立雲のように、一杯にひろが
る豊満な髪、ところどころの関節に、えくぼの出来ているまろやかな肉づき。そしてその
肩は更に一層の厚みを増し、胸と臀しりとはいやが上にも弾力を帯びて、堆うずたかく波うち、優雅な
脚はいよいよ長くなつたように思われました。

「讓治さん、あたしいくらかせいが伸びた？」

「ああ、伸びたとも。もうこの頃じゃ僕とあんまり違わないようだね」

「今にあたし、讓治さんより高くなるわよ。この間目方を計ったら十四貫二百あつたわ」

「驚いたね、僕だつてやつと十六貫足らずだよ」

「でも讓治さんはあたしより重いのか？　ちびの癖に」

「そりや重いさ、いくらちびでも男は骨組が頑丈だからな」

「じゃ、今でも讓治さんは馬になつて、あたしを乗せる勇氣がある？——来たての時分にはよくそんなことをやつたじゃないの。ほら、あたしが背中へ跨またがつて、手拭てぬぐいを手綱にして、ハイハイドウドウつて云いながら、部屋の中を廻つたりして、——」

「うん、あの時分には軽かつたね、十二貫ぐらいなもんだつたらうよ」

「今だつたらば讓治さんは潰つぶれちまうわよ」

「潰れるもんかよ。嘘だと思ふなら乗つて御覧」

二人は冗談を云つた末に、昔のように又馬ごっこをやったことがありました。

「さ、馬になつたよ」

と、そう云つて、私が四つん這ばいになると、ナオミはどしんと背中の上へ、その十四貫二

百の重みでのしかかつて、手拭いの手綱を私の口に咬えさせ、

「まあ、何て云う小さなよたよた馬だろう！ もっとしツかり！ ハイハイ、ドウドウ！」と叫びながら、面白そうに脚で私の腹を締めつけ、手綱をグイグイとしごきます。私は彼女に潰されまいと一生懸命に力み返って、汗を掻き掻き部屋を廻ります。そして彼女は、私がへたばってしまふまではそのいたずらを止めないのでした。

「讓治さん、今年の夏は久振りで鎌倉へ行かない？」

八月になると、彼女は云いました。

「あたし、あれツきり行かないんだから行つて見たいわ」

「成る程、そう云えばあれツきりだったかね」

「そうよ、だから今年は鎌倉にしましょうよ、あたしたちの記念の土地じゃないの」

ナオミのこの言葉は、どんなに私を喜ばしたことでしよう。ナオミの云う通り、私たちが新婚旅行？——まあ云つて見れば新婚旅行に出かけたのは鎌倉でした。鎌倉ぐらいわれわれに取つて記念になる土地はない筈はずでした。あれから後も毎年何処かへ避暑に行きながら、すっかり鎌倉を忘れていたのに、ナオミがそれを云い出してくれたのは、全く素晴らしい思いつきでした。

「行こう、是非行こう！」

私はそう云つて、一も二もなく賛成しました。

相談が極まるとそこそこに、会社の方は十日間の休暇を貰い、大森の家に戸じまりをして、月の初めに二人は鎌倉へ出かけました。宿は長谷の通りから御用邸の方へ行く道の、植^{うえそ}惣^うと云う植木屋の離れ座敷を借りました。

私は最初、今度はまさか金波楼でもあるまいから、少し気の利いた旅館へ泊るつもりでしたが、それが図らずも間借りをするようになったのは、「大変都合のいいことを杉崎女史から聞いた」と云つて、この植木屋の離れの話^{しんせき}をナオミが持つて来たからでした。ナオミの云うには、旅館は不経済でもあり、あたり近所に気がねもあるから、間借りが出来れば一番いい。で、仕合わせなことに、女史の親^{しんせき}戚の東洋石油の重役の人が、借りたままで使わずにいる貸間があつて、それを此方^{こつち}へ譲つて貰えるそうだから、いっそその方がいいじゃないか。その重役は、六、七、八、と三カ月間五百円の約束で借り、七月一杯は居ただけれど、もう鎌倉も飽きて来たから誰でも借りたい人があるなら喜んで貸す。杉崎女史の周旋とあれば家賃などはどうでもいいと云っているから、……と云うのでした。

「ね、こんな旨い^{うまい}話はないからそうしましょうよ。それならお金もかからないから、今月

一杯行つていられるわ」

と、ナオミは云いました。

「だつてお前、会社があるからそんなに長くは遊べないよ」

「だけど鎌倉なら、毎日汽車で通えるじゃないの、ね、そうしない？」

「しかし、そこがお前の氣に入るかどうか見て来ないじゃあ、……………」

「ええ、あたし明日でも行つて見て来るわ、そしてあたしの氣に入ったら極めてもいい？」

「極めてもいいけれど、ただと云うのも氣持が悪いから、そこを何とか話をつけて置かな
けりやあ、……………」

「そりや分つてゐるわ。讓治さんは忙しいだろうから、いいとなったら杉崎先生の所へ行つ
て、お金を取つてくれるように頼んで来るわ。まあ百円か百五十円は払わなくっちゃ。：

……」

こんな調子で、ナオミは独りでぱたと進行させて、家賃は百円と云うことに折れ合い、
金の取引も彼女がすっかり済ませて来ました。

私はどうかと案じていましたが、行つて見ると思ったより好い家でした。貸間とは云うも
の、母屋おもやから独立した平家建てのひとつむね棟で、八畳と四畳半の座敷の外に、玄関と湯殿と

台所があり、出入口も別になっていて、庭から直ぐと往来へ出ることが出来、植木屋の家族とも顔を合わせる必要はなく、これなら成る程、二人が此処で新世帯を構えたようなものでした。私は久振りで、純日本式の新しい畳の上に腰をおろし、長火鉢の前にあぐらを掻いて、伸び伸びとしました。

「や、これはいい、非常に気分がゆったりするね」

「いい家でしょう？　大森と孰方がよくつて？」

「ずっとこの方が落ち着くね、これなら幾らでも居られそうだよ」

「それ御覧なさい、だからあたしが此処にしようって云ったんだわ」

そう云ってナオミは得意でした。

或る日——此処へ来てから三日ぐらい立った時だったでしょうか、午から水を浴びに行つて、一時間ばかり泳いだ後、二人が沙浜にころがっていると、

「ナオミさん！」

と、不意に私たちの顔の上で、そう呼んだ者がありました。

見ると、それは熊谷でした。たつた今海から上ったらしく、濡れた海水着がべつたりと胸に吸い着き、その毛むくじやらの脛を伝わって、ぼたぼた潮水が滴っていました。

「おや、まアちゃん、いつ来たの？」

「今日来たんだよ、——てつきりお前にちげえねえと思ったら、やつぱりそうだった」
そして熊谷は海に向つて手を挙げながら、

「おーい」

と呼ぶと、沖の方でも、

「おーい」

と誰かが返辞をしました。

「誰？ 彼処あそこに泳いでいるのは？」

「浜田だよ、——浜田と関と中村と、四人で今日やって来たんだ」

「まあ、そりや大分賑やかだわね、何処の宿屋に泊っているの？」

「ヘツ、そんな景氣のいいんじやねえんだ。あんまり暑くつて仕様がねえから、ちよつと日帰りで行つて来たのよ」

ナオミと彼とがしやべっている所へ、やがて浜田が上つて来ました。

「やあ、暫しばらく！ 大へん御無沙汰ぶさたしちゃつて、——どうです河合さん、近頃さつぱりダンスにお見えになりますね」

「そう云う訳でもないんですが、ナオミが飽きたと云うもんだから」

「そうですか、そりや怪けしからんな。――あなた方はいつから此方へ？」

「つい二三日前からですよ、長谷の植木屋の離れ座敷を借りてゐるんです」

「そりやほんとにいい所よ、杉崎先生のお世話でもって今月一杯の約束で借りたの」

「おっしやれ乙おう洒落てるね」

と、熊谷が云いました。

「じゃ、当分此処に居るんですか」

と浜田は云つて、

「だけど鎌倉にもダンスはありますよ。今夜も実は海浜ホテルにあるんだけど、相手があれば行きたいところなんだがなア」

「いやだわ、あたし」

と、ナオミはにべもなく云いました。

「この暑いのにダンスなんか禁物だわ、又そのうちに涼しくなったら出かけるわよ」

「それもそうだね、ダンスは夏のものじゃないね」

そう云つて浜田は、つかぬ様子でモジモジしながら、

「おい、どうするいまアちゃん——もう一遍泳いで来ようか？」

「やあだア、己^{おれ}あ、くたびれたからもう帰ろうや。これから行って一と休みして、東京へ帰ると日が暮れるぜ」

「これから行くつて、何処へ行くのよ？」

と、ナオミは浜田に尋ねました。

「何か面白い事でもあるの？」

「なあに、扇^{おうぎ}ヶ谷^{やつ}に関の叔父さんの別荘があるんだよ。今日はみんなでそこへ引つ張つて来られたんで、御馳走^{ちそう}するつて云うんだけれど、窮屈だから飯を喰わずに逃げ出そうと思つているのさ」

「そう？ そんなに窮屈なの？」

「窮屈も窮屈も、女中が出て来て三つ指を衝^つきやがるんで、ガツカリよ。あれじゃ御馳走になつたつて飯が喉^{のど}へ通りやしねえや。——なあ、浜田、もう帰ろうや、帰つて東京で何か喰おうや」

そう云^いいながら、熊谷は直ぐに立とうとはしないで、脚を伸ばしてどっかり浜へ腰を据えたまま、砂を掴^{つか}んで膝^{ひざ}の上へ打^ぶつけていました。

「ではどうです、僕等と一緒に晩飯をたべませんか。折角来たもんだから、——」
 ナオミも浜田も熊谷も、一としきり黙り込んでしまったので、私はどうもそう云わなければ、バツが悪いような気がしました。

十五

その晩は久しぶりで賑にぎやかな晩飯をたべました。浜田に熊谷、あとから関や中村も加わつて、離れ座敷の八畳の間に六人の主客がチャブ台を囲み、十時頃までしゃべっていました。私も始めは、この連中に今度の宿を荒らされるのは厭いやでしたが、こうしてたまに会つて見れば、彼等の元気な、サツパリとしたこだわりのない、青年らしい肌合が、愉快でないことはありませんでした。ナオミの態度も、人をそらさぬ愛あい嬌きようはあつて、蓮はす葉はでなく、座興の添え方やもてなし振りは、すっかり理想的でした。

「今夜は非常に面白かったね、あの連中にとどき会うのも悪くはないよ」
 私とナオミとは、終列車で帰る彼等を停車場まで送って行って、夏の夜道を手を携えて歩きながら話しました。星のきれいな、海から吹いて来る風の涼しい晩でした。

「そう、そんなに面白かった？」

ナオミも私の機嫌のいいのを喜んでいような口調でした。そして、ちよつと考えてから云いました。

「あの連中も、よく付き合えばそんなに悪い人たちじゃないのよ」

「ああ、ほんとうに悪い人たちじゃないね」

「だけど、又そのうちに押しかけて来やしないかしら？ 関さんは叔父さんの別荘があるから、これからはちよいちよいみんなを連れてやつて来るって、云つてたじゃないの」

「だが何だろう、僕等の所へそう押しかけちゃ来ないだろう、……」

「たまにはいいけれど、たびたび来られると迷惑だわ。もし今度来たら、あんまり優待しない方がいいことよ。御飯なんか御馳走しないで、大概にして帰って貰うのよ」
もら

「けれどまさか、追いついて立てる訳には行かんからなあ。……」

「行かない事はあるやしないわ、邪魔だから帰って頂戴ちようだいって、あたしとつと追いついてやるわ。——そんな事を云つちやいけない？」

「ふん、又熊谷に冷やかされるぜ」

「冷やかされたっていいじゃないの、人が折角鎌倉へ来たのに、邪魔に来る方が悪いんだ

もの。――」

二人は暗い松の木蔭^{こかげ}へ来ていましたが、そう云いながらナオミはそつと立ち止まりました。

「譲治さん」

甘い、かすかな、訴えるようなその声の意味が私に分ると、私は無言で彼女の体を両手の中へ包みました。がぶりと一滴、潮水を呑^のんだ時のような、激しい強い唇を味わいながら、
……

それから後、十日の休暇はまたくうちに過ぎ去りましたが、私たちは依然として幸福でした。そして最初の計画通り、私は毎日鎌倉から会社へ通いました。「ちよいちよい来ると云っていた関の連中も、ほんの一遍、一週間ほど立つてから立ち寄ったきり、殆^{ほとんど}ど影を見せませんでした。

すると、その月の末になってから、或る緊急な調べ物をする用事が出来て、私の帰りがおそくなるがありました。いつもは大抵七時までには帰って来て、ナオミと一緒に夕飯をたべられるのが、九時まで会社に居残って、それから帰るとかれこれ十一時過ぎになる、――そんな晩が、五六日はつづく予定になっていた、そのちようど四日目のことでした。その晩私は、九時までかかる筈^{はず}だったのが、仕事が早く片附いたので、八時頃に会社を出

ました。いつものように大井町から省線電車で横浜へ行き、それから汽車に乗り換えて、鎌倉へ降りたのは、まだ十時には間のある時分でしたらうか。每晚々々、——と云つても僅か三日か四日でしたけれど、——このところ引きつづいて、帰りのおそい日が多かつたものですから、私は早く宿へ戻つてナオミの顔を見、ゆつくりくつろいで夕飯を喰べたいと、いつもよりは気がせいいたので、停車場前から御用邸の傍の路を俾で行きました。

夏の日盛りの暑いさなかを一日会社で働いて、それから再び汽車に揺られて帰つて来る身には、この海岸の夜の空気は何とも云えず柔かな、すがすがしい肌触りを覚えさせます。それは今夜に限ったことではありませんが、その晩はまた、日の暮れ方にさつと一遍、夕立があつた後だったので、濡れた草葉や、露のしたたる松の枝から、しずかに上る水蒸気にも、こつそり忍び寄るようなしめやかな香が感ぜられました。ところどころに、夜目にもしるく水たまりが光っていましたけれど、沙地の路はもはや埃を揚げぬ程度にきれいに乾いて、走っている車夫の足音が、びろうどの上をでも踏むように、軽く、しとしとと地面に落ちて行きました。何処かの別荘らしい家の、生垣の奥から蓄音器が聞えたり、たまに一人か二人ずつ、白地の浴衣の人影がそこらを徘徊していたり、いかにも避暑地へ来

たらしい心持がするのでした。

木戸口のところで俵を帰して、私は庭から離れ座敷の縁側の方へ行きました。私の靴の音を聞いてナオミが直ぐにその縁側の障子を明けて出るであろうと予期していたのに、障子の中は明りがかんかん燈ともつていながら、彼女の居そうなけはいはなく、ひっそりとしていたのでした。

「ナオミちゃん、……………」

私は二三度呼びましたが、返辞がないので、縁側へ上つて障子を明けると、部屋はからっぽになっていました。海水着だの、タオルだの、浴衣だのが、壁や、襖ふすまや、床の間や、そこらじゅうに引っかけられてあり、茶器や、灰皿や、座布団ざぶとんなどが出しツ放しになっている座敷の様子は、いつもの通り乱雑で、取り散らかしてはありましたけれど、何か、しーんとした人気のなさ、——それは決して、つい今しがた留守になったのではない静かさがそこにあるのを、私は恋人に特有な感覚を以て感じました。

「何処かへ行つたのだ、……………恐らく二三時間も前から、……………」

それでも私は、便所を覗のぞいたり、湯殿を調べたり、なお念のために勝手口へ降りて、流しもとの電燈でんとうをつけて見ました。すると私の眼に触れたのは、誰かが盛んに喰い荒らし、

飲み荒らして行つたらしい正宗まさむねの一升びん壇と、西洋料理の残骸ざんがいでした。そうだ、そう云えばあの灰皿にも煙草たばこの吸殻が沢山あつた。あの同勢が押しかけて来たのに違いないのだ。
……

「おかみさん、ナオミが居ないようですが、何処かへ出て行きましたか？」

私は母屋おもやへ駆けて行つて、植惣のかみさんに尋ねました。

「ああ、お嬢さんでいらつしやいますか。——」

かみさんはナオミのことを「お嬢さん」と云うのでした。夫婦ではあつても、世間に対しでは単なる同棲者どうせいしや、若しくは許婚いいなづけと云う風につけて貰いたいので、そう呼ばれなければナオミは機嫌が悪かつたのです。

「お嬢さんはあの、夕方一遍お帰りになつて、御飯をお上りになつてから、又皆さんとお出かけになりましたでございます」

「皆さんと云うのは？」

「あの、……」

と云つて、かみさんはちよつと云い澀よどんでから、

「あの熊谷さんの若様や何か、皆さん御一緒にございましたが、……」

私は宿のかみさんが、熊谷の名を知っているのみか、「熊谷さんの若様」などと彼を呼ぶのを不思議に思いましたけれど、今そんな事を聞いている暇はなかったのです。

「夕方一遍帰ったと云うと、昼間もみんなと一緒にでしたか？」

「お午過ぎひるに、お一人で泳ぎにいらっしやいまして、それからあの、熊谷さんの若様と御一緒にお帰りになりました、……………」

「熊谷君と二人ぎりで？」

「はあ、……………」

私は実は、まだその時はそんなに慌あわててはいませんでした。かみさんの言葉が何となく云いにくそうで、その顔つきに当惑の色がますます強く表れて来るのが次第に私を不安にさせました。このかみさんに腹を見られるのはイヤだと思いながら、私の口調は性急にならずにはいませんでした。

「じゃあ何ですか、大勢一緒じゃないんですか！」

「はあ、その時はお二人ぎりで、今日はホテルに昼間のダンスがあるからと仰おつしやつて、お出かけになったんでございますが、……………」

「それから？」

「それから夕方、大勢さんで戻っていらつしやいました」

「晩の御膳ごぜんは、みんなで内でたべたんですかね？」

「はあ、何ですか大そうお賑にぎやかに、………」

そう云つてかみさんは、私の眼つきを判じながら、苦笑いするのでした。

「晩飯を食つてから又出かけたのは、何時頃でしたらうか？」

「さあ、あれは、八時時分でございましたでしょうか、………」

「じゃ、もう二時間にもなるんだ」

と、私は覺えず口へ出して云いました。

「するとホテルにでも居るのかしら？　何かおかみさんは、お聞きになつちやいませんかしら？」

「よくは存じませんが、御別荘の方じやございますまいか、………」

成る程、そう云われれば関の叔父さんの別荘と云うのが、扇ヶ谷にあったことを私は思い出しました。

「ああ別荘へ行つたんですか。それじやこれから僕は迎いに行つて来ますが、どの辺にあるか、おかみさんは御存知ありますまいか？」

「あの、直きその、長谷の海岸でございますが、……………」

「へえ、長谷ですか？　僕はたしか扇ヶ谷だと聞いてたんですが、……………あの、何ですよ、僕の云うのは、今夜も此処へ来たかどうか知らないけれど、ナオミのお友達の、関と云う男の叔父さんの別荘なんだが、……………」

私がそう云うと、かみさんの顔にはつとかな驚きが走ったようでした。

「その別荘と違うんでしょうか？……………」

「はあ、……………あの、……………」

「長谷の海岸にあると云うのは、一体誰の別荘なんです？」

「あの、——熊谷さんの御親戚しんせきの、……………」

「熊谷君の？……………」

私は急に真っ青になりました。

停車場の方から長谷の通りを左へ切れて、海浜ホテルの前の路みちを真っ直ぐすに行つて御覧なさい。路は自然と海岸へつきあたります。その出はずれの角にある大久保さんの御別荘が、熊谷さんの御親戚なのでございます。——そうかみさんは云うのですが、全く私には初耳でした。ナオミも熊谷も、今まで嘗てかつそんな話をおくびにも出しはしませんでした。

「その別荘へはナオミはたびたび行くんでしょうか？」

「はあ、いかがでございますかしら、……………」

そうは云つても、そのかみさんのオドオドした素振りを、私は見逃しませんでした。

「しかし勿論、今夜が始めてじゃないんでしょな？」

私はひとりでに呼吸が迫り、声がふるえるのをどうすることも出来ませんでした。私の剣幕に恐れをなしたのか、かみさんの顔も青くなりました。

「いや、御迷惑はかけませんから、構わずに仰っしゃって下さい。昨夜はどうでした？ 昨夜も出かけたんですか？」

「はあ。……………ううべもお出かけになったようでございましたが、……………」

「じゃ、一昨日の晩は？」

「はあ」

「やっぱり出かけたんですね？」

「はあ」

「その前の晩は？」

「はあ、その前の晩も、……………」

「僕の帰りがおそくなつてから、ずっと毎晩そうなんですネ？」

「はあ、…………ハッキリ覚えてはおりませんけれど、……………」

「で、いつも大概何時頃に戻つて来るんです？」

「大概何でございます、…………十一時ちよつと前ごろには、……………」

では始めから二人で己おれを担かついでいたのだ！ それでナオミは鎌倉へ来たがったのだ！――

――私の頭は暴風のように廻転し始め、私の記憶は非常な速さで、この間じゅうのナオミの言葉と行動とを、一つ残らず心の底に映しました。一瞬間、私を取り巻くからくりの糸が驚く程の明瞭めいりょうさで露あらわれました。そこには殆ど、私のような單純な人間には到底想像も出来なかつた、二重にも三重にももの嘘うそがあり、念には念を入れた謀しめし合わせがあり、しかもどれ程大勢の奴等やつらがその陰謀に加担しているか分らないくらい、それは複雑に思われました。私は突然、平らな、安全な地面から、どしんと深い陷おとし穽あなへ叩たたき落され、穴の底から、高い所をガヤガヤ笑いながら通つて行くナオミや、熊谷や、浜田や、関や、その他無数の影を羨うらやましそうに見送つていたのでした。

「おかみさん、僕はこれから出かけて来ますが、もし行き違いに戻つて来ても、僕が歸つて来たことは何卒黙どうぞつていて下さい、少し考があるんですから」

そう云い捨てて、私は表へ飛び出しました。

海浜ホテルの前へ出て、教えられた路を、成るべく暗い蔭に寄りながら辿って行きました。そこは両側に大きな別荘の並んでいる、森閑とした、夜は人通りの少い街で、いい塩梅にそう明るくはありませんでした。とある門燈の光の下で、私は時計を出して見ました。

十時がやっと廻ったばかりのところでした。その大久保の別荘というのに、熊谷と二人きりでいるのか、それとも例の御定連と騒いでいるのか、とにかく現場を突き止めてやりたい。若し出来るなら彼等を感じかねないようにコッソリ証拠を掴んで来て、あとで彼等がどんなにらしい出まかせを云うか試してやりたい。そして動きが取れないようにして置いて、トツチメてやりたいと思つたので、私は歩調を早めて行きました。

目的の家はすぐ分りました。私は暫くその前通りを往つたり来たりして、構えの様子を窺いましたが、立派な石の門の内にはこんもりとした植込みがあり、その植込みの間を縫うて、ずっと奥まった玄関の方へ砂利を敷き詰めた道があり、「大久保別邸」と記された標札の文字の古さと云い、ひろい庭を囲んでいる苔のついた石垣と云い、別荘と云うよりは年数を経た屋敷の感じで、こんな所にこんな宏壮な邸宅を持った熊谷の親戚があらうなどとは、思えば思うほど意外でした。

私は成る可く、砂利に足音を響かせないように、門の中へ忍んで行きました。何分樹木が繁しげっているのです、往來からは母屋の模様はよくは分りませんでした、近寄って見ると、奇妙なことに、表玄関も裏玄関も、二階も下も、そこから望まれる部屋と云う部屋は悉くひっそりとして、戸が締まって、暗くなっているのです。

「ハテナ、裏の方にでも熊谷の部屋があるのじゃないか」

私はそう思つて、又足音を殺しながら、母屋に添つて後側へ廻りました。すると果して、二階の一と間と、その下にある勝手口に、明りがついているのです。

その二階が熊谷の居間であることを知るには、たった一と目で十分でした。なぜかと云うのに、縁側を見ると例のフラット・マンドリンが手すりに寄せかけてあるばかりか、座敷の中には、たしかに私の見覚えのあるタスカンの中折帽子が柱にかかつていたからです。障子が明け放されているのに、話声一つ洩もれて来ないので、今その部屋に誰もいないことは明かでした。

——そう云えば勝手口の方の障子も、今しがた誰かがそこから出て行つたらしく、矢張明け放しになっていました。と、私の注意は、勝手口から地面へさしている仄ほのかな明りを伝わつて、つい二三間先のところに裏門のあるのを発見しました。門は扉がついていない

古い二本の木の柱で、柱と柱の間から、由比ヶ浜ゆいけはまに碎ける波が闇やみにカッキリと白い線になつて見え、強い海の香が襲つて来ました。

「きつと此処ここから出て行つたんだな」

そして私が裏門から海岸へ出ると殆ど同時に、疑うべくもないナオミの声がすぐと近所で聞えました。それが今まで聞えなかったのは、大方風の加減か何かだったのでしょうか。――

「ちよつと！ 靴はきの中へ砂が這入はいつちやつて、歩けやしないよ。誰かこの砂を取つてくれない？……まあちゃん、あんた靴を脱がしてよ！」

「いやだよ、己おれあ。己おれあお前の奴隷どれいじゃあねえよ」

「そんなことを云うと、もう可愛かわいがつてやらないわよ。……じゃあ浜さんは親切だね、……ありがと、ありがと、浜さんに限るわ、あたし浜さんが一番好きさ」

「畜生！ 人が好いいと思つて馬鹿ばかにするない」

「あ、あツはははは！ いやよ浜さん、そんなに足の裏を擦くすつちや！」

「擦くすっているんじゃないんだよ、こんなに砂が附ついているから、払はつてやっているんじゃないか」

「ついでにそれを舐めちやったら、パパさんになるぜ」

そう云ったのは関でした。つづいてどつと四五人の男の笑い声がしました。

ちようど私の立っている場所から沙丘がだらだらと降り坂になったあたりに、葭簀張りの茶店があつて、声はその小屋から聞えて来るのです。私と小屋との間隔は五間と離れていませんでした。まだ会社から帰つたままの茶のアルパカの背広服を着ていた私は、上衣服の襟を立て、前のボタンをすっかり簪めて、カラーとワイシャツが目立たぬようにし、麦藁帽子を脇の下に隠しました。そして身を屈めて這うようにしながら、小屋のうしろの井戸側の蔭へついと走って行きましたが、とたんに彼等は、

「さあ、もういいわよ、今度は彼方へ行つて見ようよ」

と、ナオミが音頭を取りながら、そろそろ繋がつて出て来ました。

彼等は私には気が付かないで、小屋の前から波打ち際へ降りて行きました。浜田に熊谷に関に中村、——四人の男は浴衣の着流しで、そのまん中に挟まったナオミは、黒いマントを引っかけて、踵の高い靴を穿いているのだけがありました。彼女は鎌倉の宿の方へ、マントや靴を持って来てはいないのですから、それは誰かの借り物に違いありません。風が吹くのでマントの裾がぱたぱためくれそうになる、それを内側から両手でしっかりと体へ

巻きつけているらしく、歩く度毎にマントの中で大きな臀が円くむつくりと動きます。そして彼女は酔っ払いのような歩調で、両方の肩を左右の男に打っつけながら、わざとよろけて行くのでした。

それまでじつと小さくなつて息をこらしていた私は、彼等との距離が半町ぐらい隔たつて、白い浴衣が遠くの方にほんのちらちら見える時分、始めて立ち上つてそつとその跡を追いました。最初彼等は、海岸を真つすぐに、材木座の方へ行くのだらうかと思われましたが、途中でだんだん左へ曲つて、街の方へ出る沙山を越えたようでした。彼等の姿が、その沙山の向うへ隠れきつてしまうと、私は急に全速力で山へ駆け上り始めました。なぜなら私は、ちようど彼等の出る路が、松林の多い、身を隠すのに究、竟な物蔭のある、暗い別荘街であるのを知っていたので、そこならもつと傍へ寄つても、多分彼等に発見される恐れはないと思つたからです。

降りると忽ち、彼等の陽気な唄声^{うたごえ}が私の耳朵^{じだ}を打ちました。それもその筈^{はず}、彼等は僅か^{わず}五六歩に足らぬところを、合唱しながら拍子を取つて進んで行くのです。

Just before the battle, mother,

I am thinking most of you,

それはナオミが口癖にうたう唄でした。熊谷は先に立って、指揮棒を振るような手つきをしています。ナオミは矢張彼方へよろよろ、此方こつちへよろよろと、肩を打ツつけて歩いて行きます。すると打ツつけられた男も、ボートでも漕こいでいるように、一緒になって端から端へよろけて行きます。

「ヨイシヨ！　ヨイシヨ！……ヨイシヨ！　ヨイシヨ！」

「アラ、何よ！　そんなに押しちや塀へ打ツつかるじやないの」

ばらばらばらツ、と、誰かが塀をステッキで殴ったようでした。ナオミがきやツきやツと笑いました。

「さ、今度はホニカ、ウワ、ウイキ、ウイキだ！」

「よし来た！　此奴こいつあ布哇ハワイの臀振りダンスだ、みんな唄いながらけつを振るんだ！」

ホニカ、ウワ、ウイキ、ウイキ！　スウィート、ブラウン、メイドウン、セツド、トウー、ミー、……そして彼等は一度に臀を振り出しました。

「あツははは、おけつの振り方は関さんが一番うまいよ」

「そりやそうさ、己あこれでも大いに研究したんだからな」

「何処どこで？」

「上野の平和博覧会でさ、ほら、万国館で土人が踊ってるだろう？ 己あ彼処へ十日も通ったんだ」

「馬鹿だばかな貴様は」

「お前もいつそ万国館へ出るんだつたな、お前の面つらならたしかに土人とまちげえられたよ」「おい、まあちゃん、もう何時だろう？」

そう云つたのは浜田でした。浜田は酒を飲まないので一番真面目まじめのようでした。

「さあ、何時だろう？ 誰か時計を持っていねえか？」

「うん、持っている、——」

と、中村が云つて、マツチを擦りました。

「や、もう十時二十分だぜ」

「大丈夫よ、十一時半にならなけりやパパは帰つて来ないんだよ。これからぐるりと長谷の通りをひと廻りして帰ろうじやないの。あたしこのなりで賑にぎやかな所を歩いて見たいわ」

「賛成々々！」

と、関が大声で怒鳴りました。

「だけどこの風ふうで歩いたら一体何に見えるだろう？」

「どう見ても女団長だね」

「あたしが女団長なら、みんなあたしの部下なんだよ」

「白浪しらなみ四人男じゃねえか」

「それじゃあたしは弁天小僧よ」

「エエ、女団長河合ナオミは、……………」

と、熊谷が活弁の口調で云いました。

「……………夜陰に乗り、黒きマントに身を包み、……………」

「うふふふ、お止しよよそんな下司張げすつた声を出すのは！」

「……………四名の悪漢を引率いたして、由比ヶ浜の海岸から……………」

「お止しよまアちゃん！ 止さないかったら！」

ぴしやツとナオミが、平手で熊谷の頬ツペタを打ちました。

「あ痛え、……………下司張つた声は己の地声さ、己あ浪花節なにわぶし語りにならなかったのが、天

下の恨事だ」

「だけれどメリー・ピクフオードは女団長にやならないぜ」

「それじゃ誰だい？ プリシラ・デーンかい？」

「うんそうだ、プリシラ・デーンだ」

「ラ、ラ、ラ、ラ」

と浜田が再びダンス・ミュージックを唄いながら、踊り出した時でした。私は彼がステツプを踏^ふんで、ふいと後向きになりそうにしたので、素早く木蔭へ隠れましたが、同時に浜田の「おや」と云う声がありました。

「誰?——河合さんじゃありませんか?」

みんな俄^{にわ}かに、しーんと黙つて、立ち止まったまま、闇を透かして私の方を振り返りました。「しまった」と思つたが、もう駄目でした。

「パパさん? パパさんじゃないの? 何しているのよそんな所で? みんなの仲間へお這入^{はいり}なさいよ」

ナオミはいきなりツカツカと私の前へやつて来て、ぱつとマントを開くや否^{いな}や、腕を伸ばして私の肩へ載せました。見ると彼女は、マントの下に一糸^{いと}をも纏^{まと}つていませんでした。

「何だお前は! 己^{おれ}に耻^{はじ}を搔^かかせたな! ばいた! 淫^{いんばい}売^{ばい}! じごく!」

「おほほほ」

その笑い声には、酒の匂^{におい}がぶんぶんしました。私は今まで、彼女が酒を飲んだところを一

度も見たことはなかったのです。

十六

ナオミが私を欺^{あざむ}いていたからくりの一端は、その晩とその明くる日と二日ばかりで、やつと強情な彼女の口から聞き出すことが出来ました。

私が推察した通り、彼女が鎌倉へ来たがったのは、矢張熊谷と遊びたかったからなのだそうです。扇^{おうぎ}ヶ谷^{やつ}に閨^{おんな}の親類が居ると云うのは真^まつ赤^{あか}な嘘^{うそ}で、長谷の大久保の別荘こそ、熊谷の叔父の家だったのです。いや、そればかりか、私が現に借りているこの離れ座敷も、実は熊谷の世話なのでした。この植木屋は大久保の邸^{やしき}のお出入りなので、熊谷の方から談じ込んで、どう話をつけたものか、前に居た人に立ち退^のいて貰^{もら}い、そこへ私たちを入れるようにしたのでした。云^いうまでもなく、それはナオミと熊谷との相談の上でやったことで、杉崎女史の周旋^{しゆせん}だとか、東洋石油の重役^{うんぬん}云々^んは、全くナオミの出鱈^{でたらめ}目に過ぎなかったのです。さてこそ彼女は、自分でどんな事を運んだ訳でした。植惣^よのかみさんの話に依^よると、彼女が始めて下検分に来た折には、熊谷の「若様」と一緒にやって来て、あたかも

「若様」の一家の人であるかのように振舞っていたばかりでなく、前からそう云う触れ込みだったものだから、よんどころなく先のお客を断って、部屋を此方へ明け渡したのだと云うことでした。

「おかみさん、まことに飛んだ係り合いで御迷惑をかけて済みませんが、どうかおかみさんの知っていらつしやるだけの事を私に話してくれませんか。どんな場合でもあなたの名前を出すようなことはしませんから。私は決してこの事に就いて、熊谷の方へ談じ込む気はないんです。事実を知りたいだけなんです」

私は明くる日、今まで休んだことのない会社を休んでしまいました。そして嚴重にナオミを監視して、「一步も部屋から出てはならない」と堅く云いつけ、彼女の衣類、穿き物、財布を悉く纏めて母屋おもやに運び、その一室でかみさんを訊問じんもんしました。

「じゃ何ですか、もうずっと前から、私の留守中二人は往き来ゆききしていたんですか？」

「はあ、それは始終でございました。若様の方からお越しになりましたり、お嬢様の方からお出かけになりましたり、……」

「大久保さんの別荘には全体誰がいるんですね？」

「今年は皆さんが御本宅の方へお引き揚げになりましたて、時々お見えになりますけれど、

いつも大概熊谷さんの若様お一人でございますの」

「ではあの、熊谷君の友達はどうでしたろう？ あの連中も折々やって来たでしょうか？」

「はあ、ちよくちよくおいでになりましたでございます」

「それは何ですか、熊谷君が連れて来るんですか、めいめい勝手に来るんですか？」

「さあ」

と云つて、——これは私が後で気がついた事なのですが、その時かみさんは非常に困つたらしい様子をしました。

「……………御めいめいでおいになつたり、若様と御一緒だったり、いろいろのようでございますましたが、……………」

「誰か、熊谷君の外にも、一人で来た者があるでしょうか？」

「あの浜田さんと仰^おつしやるお方や、それから外のお方たちも、お一人でお越しになつた事がございましたかと存じますが、……………」

「じゃあそんな時は何処かへ誘つて出るのですかね？」

「いいえ、大抵内でお話しになつていらつしやいました」

私に一番不可解なのはこの一事でした。ナオミと熊谷とが怪しいとすれば、なぜ邪魔にな

る連中を引つ張つて来たりするのだろうか？ 彼等の一人が訪ねて来たり、ナオミがそれと話しているとはどう云う訳だろう？ 彼等がみんなナオミを狙^{ねら}つているとしたら、何故喧嘩^{けんか}が起らないのだろうか？ 昨夜もあんなに四人の男は仲好^{なかよ}くふざけていたじゃないか。そう考えると再び私は分らなくなつて、果してナオミと熊谷とが怪しいかどうかさえ、疑問になつてしまふのでした。

ナオミはしかし、この点になると容易に口を開きませんでした。自分は別に深い企^{たく}らみがあつたのではない。ただ大勢の友達と騒ぎたかつただけなのだと、何処までもそう云い張るのです。では何のためにあまで陰険に、私を欺^{だま}したのかと云うと、

「だって、パパさんがあの人たちを疑ぐつていて、余計な心配をするんだものと云うのでした。

「それじゃ、関の親類の別荘があると云つたのはどう云う訳だい？ 関と熊谷とどう違ふんだい？」

そう云われると、ナオミはたと返辞に窮したようでした。彼女は急に下を向いて、黙つて、唇を嚙^かみながら、上眼づかいに穴のあくほど私の顔を睨^{にら}んでいました。

「でもまあちゃんが一番疑ぐられているんだもの、——まだ関さんにして置いた方がい

くらかいいと思ったのよ」

「まアちゃんなんて云うのはお止し！ 熊谷と云う名があるんだから！」

我慢に我慢をしていた私は、そこでとうとう爆発しました。私は彼女が「まアちゃん」と呼ぶのを聞くと、むしずが走るほどイヤだったのです。

「おい！ お前は熊谷と関係があつたんだろう？ 正直のことを云っておしまい！」

「関係なんかありやしないわよ、そんなにあたしを疑ぐるなら、証拠でもあるの？」

「証拠がなくつても己にはちゃんと分つてるんだ」

「どうして？——どうして分るの？」

ナオミの態度は凄^{すげ}いほど落ち着いたものでした。その口辺には小憎らしい薄笑いさえ浮かんでいました。

「昨夜のあのざまは、あれは何だ？ お前はあんなざまをしながらそれでも潔白だと云える積りか？」

「あれはみんながあたしを無理に酔っ払わして、あんななりをさせたんだもの。——ただああやって表を歩いただけじゃないの」

「よし！ それじゃ飽くまで潔白だと云うんだな？」

「ええ、潔白だわ」

「お前はそれを誓うんだな！」

「ええ、誓うわ」

「よし！ その一言を忘れずにいろよ！ 己はお前の云うことなんか、もう一と言も信用しちやいないんだから」

それきり私は、彼女と口をききませんでした。

私は彼女が熊谷に通牒つうちようしたりすることを恐れて、書簡箋しよかんせん、封筒、インキ、鉛筆、万

年筆、郵便切手、一切のものを取り上げてしまい、それを彼女の荷物と一緒に植惣のかみさんに預けました。そして私が留守の間にも決して外出することが出来ないように、赤いちぢみのガウン一枚を着せて置きました。それから私は、三日目の朝、会社へ行くような風を装よそおつて鎌倉を出ましたが、どうしたら証拠を得られるか、散々汽車の中で考えた末、

とにかく最初に、もう一と月も空家になつてゐる大森の家へ行つて見ようと決心しました。もし熊谷と関係があるなら、無論夏から始まつたことではない。大森へ行つてナオミの持ち物を搜索したなら、手紙か何か出て来はしないかと思つたからです。

その日はいつもより一汽車おくれて出て来たので、大森の家の前まで来たのはかれこれ十

時頃でした。私は正面のポーチを上り、合鍵^{あいかぎ}で扉をあけ、アトリエを横ぎり、彼女の部屋を調べるために屋根裏へ昇って行きました。そしてその部屋のドアを開いて、一步中へ踏み込んだ瞬間、私は思わず「あつ」と云ったなり、二の句がつけずに立ち竦^{すく}んでしまいました。見るとそこには、浜田が独りぽつ然^{ねん}として臥^ねころんでいるではありませんか！

浜田は私が這入^{はい}つてくると、突然顔を真っ赤にして、

「やあ」

と云って起き上りました。

「やあ」

そう云ったきり二人は暫^{しばら}く、相手の腹を読むような眼つきで、睨めツくらをしていました。

「浜田君……君はどうしてこんな所に？……」

浜田は口をもぐもぐやらせて、何か云いそうにしましたけれど、矢張黙って、私の前に憐^{あわ}れみを乞^こうかの如^{ごと}く、項^{うなじ}を垂れてしまいました。

「え？ 浜田君……君はいつから此処^{ここ}に居るんです？」

「僕は今しがた、……今しがた来たところなんです」

もうどうしても逃れられない、覚悟をきめたと云う風に、今度はハッキリとそう云いまし

た。

「しかしこの家は、戸締まりがしてあつたでしょう、何処どこから這入つて来たんですね？」

「裏口の方から、——」

「裏口だつて、錠がおりていた筈はずだけれど、………」

「ええ、僕は錠を持っているんです。——」

そう云つた浜田の声は聞えないくらい微かすかでした。

「錠を？——どうして君が？」

「ナオミさんから貰つたんです。——もうそう云えば、僕がどうして此処に來ているか、大凡おおよそあなたはお察しになつたと思いますが、………」

浜田は静かに面を上げて、啞然あぜんとしている私の顔を、まともに、そして眩まぶしうに、じつと見ました。その表情にはいざとなると正直な、お坊っちゃんらしい氣品があつて、いつもの不良少年の彼ではありませんでした。

「河合さん、僕はあなたが今日出し抜けに此処へおいでになつた理由も、想像がつかなくはありません。僕はあなたを欺あざむいていたんです。それに就いてはたどんな制裁でも、甘んじて受ける積りなんです。今更こんな事を云うのは変ですけれど、僕はとうから、…

……一度あなたにこう云う所を発見されるまでもなく、自分の罪を打ち明けようと思つていました。……………」

そう云つてゐるうちに、浜田の眼には涙が一杯浮かんで来て、それがぼたぼた頬を伝つて流れ出しました。総べてが全く、私の予想の外でした。私は黙つて、眼瞼をパチパチやらせながら、その光景を眺めていましたが、彼の自白を一往信用するとしても、まだ私には腑に落ちないことだらけでした。

「河合さん、どうか僕を赦すと云つてくれませんか、……………」

「しかし、浜田君、僕にはまだよく分つていないんだ。君はナオミから鍵を貰つて、此処へ何しに来ていたと云うんです？」

「此処で、……………此処で今日……………ナオミさんと逢う約束になつていたんです」

「え？ ナオミと此処で逢う約束に？」

「ええ、そうです、……………それも今日だけじゃないんです。今まで何度もそうしてたんです。……………」

だんだん聞くと、私たちが鎌倉へ引き移つてから、彼とナオミとは此処で三度も密会してゐると云うのでした。つまりナオミは、私が会社へ出て行つたあとで、一と汽車か二た汽

車おくらせて、大森へやって来るのだそうです。いつも大概朝の十時前後に来て、十一時半には帰って行く。それで鎌倉へ戻るのはおそくも午後一時頃なので、彼女がまさかその間に大森まで行つて来たろうとは、宿の者にも気がつかれないようにしてある。そして浜田は、今朝も十時に落ち合う手筈になつていたので、さっき私が上つて来たのを、てつきりナオミが来たのだとばかり思つていた、と、そう彼は云うのでした。

この驚くべき自白に対して、最初に私の胸を一杯に充たしたものは、ただ茫然たる感じより外ありませんでした。開いた口が塞がらない、——何ともかとも話にならない、——

——事実その通りの氣持でした。断つて置きますが私はその時三十二歳で、ナオミの歳は十九でした。十九の娘が、かくも大胆に、かくも奸黠に、私を欺いていようとは！ ナオミがそんな恐ろしい少女であるとは、今の今まで、いや、今になつても、まだ私には考えられないくらいでした。

「君とナオミとは、一体いつからそう云う關係になつていました？」

浜田を赦す赦さないは二の次の問題として、私は根掘り葉掘り、事実の真相を知りたいと思ふ願ひに燃えました。

「それはよほど前からなんです。多分あなたが僕を御存じにならない時分、………」

「じゃ、いつだったか君に始めて会ったことがありましたっけね、——あれは去年の秋だったでしょう、僕が会社から帰つて来ると、花壇のところで君がナオミと立ち話をしていたのは？」

「ええ、そうでした、かれこれちょうど一年になります。——」

「すると、もうあの時分から？——」

「いや、あれよりもつと前からでした。僕は去年の三月からピアノを習いに、杉崎女史の所へ通い出したんですが、あそこで始めてナオミさんを知ったんです。それから間もなく、何でも三月ぐらい立つてから、——」

「その時分は何処で逢つてたんです？」

「やつぱり此処の、大森のお宅でした。午前中はナオミさんは何処へも稽古けいこに行かないし、独りで淋さびしくつて仕様がなから遊びに来てくれと云われたんで、最初はそのつもりで訪ねて来たんです」

「ふん、じゃ、ナオミの方から遊びに来いと云つたんですね？」

「ええ、そうでした。それに僕はあなたと云うものがあることを、全く知りませんでした。自分の国は田舎の方だから、大森の親類へ来ているので、あなたと従兄妹いとこ同士の間

柄だと、ナオミさんは云っていました。それがそうでないと知ったのは、あなたが始めてエルドラドオのダンスに来られた時分でした。けれども僕は、……もうその時はどうすることも出来なくなっていたのです」

「ナオミがこの夏、鎌倉へ行きがったのは、君と相談の結果なのじゃないでしょうか？」
「いいえ、あれは僕じゃないんです、ナオミさんに鎌倉行きをすすめたのは熊谷なんです」
浜田はそう云って、急に一段と語気を強めて、

「河合さん、欺されたのはあなたばかりじゃありません！　僕もやつぱり欺されていたんです！」

「……………それじゃナオミは熊谷君とも？……………」

「そうです、今ナオミさんを一番自由に行っている男は熊谷なんです。僕はナオミさんが熊谷を好いているのを、とうからうすうすは感じていました。けれども一方僕と関係していながら、まさか熊谷ともそうなつていようとは、夢にも思っていなかったんです。それにナオミさんは、自分はただ男の友達と無邪気に騒ぐのが好きなんだ、それ以上の事は何もないんだって云うもんだから、成る程それもそうかと思って、……………」

「ああ」

と、私はため息をつきながら云いました。

「それがナオミの手なんですよ、僕もそう云われたものだから、それを信じていたんですよ。……そうして君は、熊谷とそうなっているのをいつ発見したんです？」

「それはあの、雨の降った晩に此処で雑魚寝ざこねをしたことがあったでしょう。あの晩僕は気がついたんです。……あの晩、僕はあなたにほんとうに同情しました。あの時の二人のずうずうしい態度は、どうしたってただの間柄ではないと思えましたからね。僕は自分が嫉妬しつとを感じれば感じるほど、あなたの気持をお察しすることが出来たんです」

「じゃ、あの晩君が気がついたと云うのは、二人の態度から推し測って、想像したと云うだけの……」

「いいえ、そうじゃありません、その想像を確かめる事実があったんです。明け方、あなたは寝ていらしって御存じなかったようでしたが、僕は眠られなかったので、二人が接せつぷ吻するところを、うとうとしながら見ていたのです」

「ナオミは君に見られたことを、知っているのでしょうか？」

「ええ、知っています。僕はその後ナオミさんに話したんです。そして是非とも熊谷と切れてくれろと云ったんです。僕はおもちやにされるのは厭いやだ、こうなった以上ナオミさん

を貰^{もら}わなければ……」

「貰^{もら}わなければ？……」

「ああ、そうでした、僕はあなたに二人の恋を打ち明けて、ナオミさんを自分の妻に貰^{もら}い受けるつもりでした。あなたは訳の分った方だから、僕等の苦しい心持をお話しすれば、きっと承知して下さるだろうって、ナオミさんは云っていました。事實はどうか知りませんが、ナオミさんの話だと、あなたはナオミさんに学問を仕込むつもりで養育なすつただけなので、同棲^{どうせい}はしているけれど、夫婦にならなけりやいけないと云う約束がある訳でもない。それにあなたとナオミさんとは歳も大變違っているから、結婚しても幸福に暮せるかどうか分らないと云うような、……」

「そんな事を、……そんな事をナオミが云ったんですね？」

「ええ、云いました。近いうちにあなたに話して、僕と夫婦になれるようにするから、もう少し時期を待ってけると、何度も何度も僕に堅い約束をしました。そして熊谷とも手を切ると云いました。けれどもみんな出鱈目^{でたらめ}だったんです。ナオミさんは初めツから、僕と夫婦になるつもりなんかまるツきりなかったんです」

「ナオミはそれじゃ、熊谷君ともそんな約束をしているんでしょうか？」

「さあ、それはどうか分りませんが、恐らくそうじゃなかうと思います。ナオミさんは飽きッぽいたちですし、熊谷の方だつてどうせ真面目まじめじゃないんです。あの男は僕なんかよりずっと狡猾こうかつなんですから、……」

不思議なもので、私は最初から浜田を憎む心はなかったのですが、こんな話をきかされて見ると、寧ろ同病相憐れむ——と、云うような気持ちにさせられました。そしてそれだけ、一層熊谷が憎くなりました。熊谷こそは二人の共同の敵であると云う感じを強く抱きました。

「浜田君、まあ何にしてもこんな所でしゃべってもいられないから、何処かで飯でも喰いながら、ゆっくり話そうじゃありませんか。まだまだ沢山聞きたいことがあるんですから」で、私は彼を誘い出して、洋食屋では工合が悪いので、大森の海岸の「松浅」へ連れて行きました。

「それじゃ河合さんも、今日は会社をお休みになったんですか」

と、浜田も前の興奮した調子ではなく、いくらか重荷をおろしたような、打ち解けた口ぶりみちみちで、途々みちみちそんな風に話しかけました。

「ええ、昨日も休んじまったんです。会社の方もこの頃は又意地悪く忙しいんで、出なけ

りや悪いんですけれど、一昨日以来頭がむしゃくしゃしまつて、とてもそれどころじゃないもんだから。………」

「ナオミさんは、あなたが今日大森へ入らっしゃるのを、知っていますかしら？」

「僕は昨日は一日内にいましたけれど、今日は会社へ出ると云つて来たんです。あの女のことだから、或は内々気がついたかも知れないが、まさか大森へ来るとは思っていないでしょう。僕は彼奴の部屋を捜したら、ラブ・レターでもありやしないかと思つたもんだから、それで突然寄つて見る氣になつたんです」

「ああそうですか、僕はそうじゃない、あなたが僕を掴まえに來たと思つたんです。しかしそれだと、後からナオミさんもやつて來やしないでしょうか」

「いや、大丈夫、……僕は留守中、着物も財布も取り上げちまつて、一步も外へ出られないようにして來たんです。あのなりじや門口へだつて出られやしませんよ」

「へえ、どんなりをしてるんです？」

「ほら、君も知っている、あの桃色のちぢみのガウンがあつたでしょう？」

「ああ、あれですか」

「あれ一枚で、細帯一つ締めていないんだから、大丈夫ですよ。まあ猛獸が檻へ入れられ

たようなもんです」

「しかし、さつき彼処へナオミさんが這入つて来たらどうなったでしょう。それこそほんとに、どんな騒ぎが持ち上つたかも知れませんか」

「ですが一体、ナオミが君と今日逢うと云う約束をしたのはいつなんですか？」

「それは一昨日、——あなたに見つかったあの晩でした。ナオミさんは、僕があの晩すねていたもんですから、御機嫌を取るつもりか何かで、明後日大森へ来てくれろつて云つたんですが、勿論僕も悪いんですよ。僕はナオミさんと絶交するか、でなけりや熊谷と喧嘩をするのが当り前なのに、それが僕には出来ないんです。自分も卑屈だと思いながら、気が弱くつて、ついぐずぐずに奴等と附き合つていたんです。ですからナオミさんに欺されたとは云うものの、つまり自分が馬鹿だったんですよ」

私は何だか、自分のことを云われているような気がしました。そして「松浅」の座敷へ通つて、さし向いに坐つて見ると、どうやらこの男が可愛くさえなつて来るのでした。

十七

「さあ、浜田君、君が正直に云ってくれたので、僕は非常に気持がいい。とにかく一杯やりませんか」

そう云つて私は、杯をさしました。

「じやあ河合さんは、僕を赦ゆるして下さるんですか」

「赦すも赦さないもありませんよ。君はナオミに欺あざわされていたので、僕とナオミとの間柄を知らなかったと云うのだから、ちつとも罪はない訳です。もう何とも思つてやしません」
「いや、有難う、そう云つて下されば僕も安心するんです」

浜田はしかし、やつぱり極きまりが悪いと見えて、酒を進めても飲もうとはしないで、伏しめがちに、遠慮しながらぼつぼつと口を利きくのでした。

「じや何ですか、失礼ですが河合さんとナオミさんとは、御親しんせき戚と云うような訳じやないんですか？」

暫しばらく立つてから、浜田は何か思いつめていたらしく、そう云つて微かすかな溜ためい息をつきました。

「ええ、親戚でも何でもありません。僕は宇都宮の生れですが、あれは生き粋つすいの江戸ッ児こで、実家は今でも東京にあるんです。当人は学校へ行きしたがっていたのに、家庭の事情で

行かれなかったもんですから、それを可哀^{かわい}そうだと思つて、十五の歳^{とし}に僕が引き取つてやつたんですよ」

「そうして今じゃ、結婚なすつていらつしやるんですね？」

「ええ、そうなんです、両方の親の許しを得て、立派に手続きを踏^ふんであるんです。尤^{もつと}もそれは、あれが十六の時だったので、あんまり歳が若過ぎるのに『奥さん』扱いにするのも変だし、当人にしてもイヤだろうと思つたもんだから、暫くの間は友達のようにして暮らそうと、そんな約束ではあつたんですがね」

「ああ、そうですか、それが誤解^{もと}の原^{もと}だったんですね。ナオミさんの様子を見ると、奥さんのようには思えなかつたし、自分でもそう云つていなかつたから、それで僕等もつい欺されてしまつたんです」

「ナオミも悪いが、僕にも責任があるんですよ。僕は世間の所謂^{いわゆる}『夫婦』と云うものが面白くないんで、成るべく夫婦らしくなく暮らそうと云う主義だったんです。そいつがどうも飛んだ間違いになつたんだから、もうこれからは改良しますよ。いや、ほんとうに懲^こり懲りしましたよ」

「そうなすつた方がよござんすね。それから河合さん、自分のことを棚に上げてこんなこ

とを云うのも可笑しいですが、熊谷は悪い奴ですから、注意なさらないといけませんよ。僕は決して恨みがあると云うんじゃないんです。熊谷でも関でも中村でも、あの連中はみんな良くない奴等なんです。ナオミさんはそんなに悪い人じゃありません。みんな彼奴等が悪くさせてしまったんです。……」

浜田は感動の籠こもった声で云うと同時に、その両眼には再び涙を光らせていました。さてはこの青年は、これほど真面目にナオミを恋していたのだったか、そう思うと私は感謝したような、済まないような気がしました。若しも浜田は、私と彼女とが既に完全な夫婦であると云われなかったら、進んで彼女を譲ってくれと云い出すつもりだったのでしょうか。いやそれどころか、たった今でも、私が彼女をあきらめさえしたら、彼は即座に彼女を引き取ると云うでしょう。この青年の眉宇びうの間に溢あふれているいじらしいほどの熱情から、その決心があることは疑うべくもないのでした。

「浜田君、僕は御忠告に従って、いずれ何とか二三日のうちに処置をつけます。そしてナオミが熊谷とほんとに手を切ってくればよし、そうでなければもう一日も一緒にいるのは不愉快ですから、……」

「けれど、けれどあなたは、どうかナオミさんを捨てないで上げて下さい」

と、浜田は急いで私の言葉を遮^{さへぎ}つて云いました。

「もしもあなたに捨てられちまえば、きつとナオミさんは墮落します。ナオミさんに罪はないんですから。……」

「有難う、ほんとに有難う！ 僕はあなたの御好意をどんなに嬉^{うれ}しく思うか知れない。そりや僕だって十五の時から面倒を見ているんですもの、たとい世間から笑われたって、決してあれを捨てようなんて気はないんです。ただあの女は強情だから、何とか巧^{うま}く悪い友達と切れるように、それを案じているだけなんです」

「ナオミさんはなかなか意地ツ張りですからね。つまらないことでふいと喧嘩になっちゃうと、もう取り返しがつきませんから、そのところを上手におやりになって下さい、生意気なことを云うようですけれど。……」

私は浜田に何遍となく、「ありがとありがと」を繰り返しました。二人の間に年齢の相違、地位の相違と云うようなものがなかったら、そして私たちが前からもつと親密な仲であつたら、私は恐らく彼の手を執り、互に抱き合つて泣いたかも知れませんでした。私の気持は少くともそのくらいまで行っていました。

「どうか浜田君、これから後も君だけは遊びに来て下さい。遠慮するには及びませんから」

と、私は別れ際にそう云いました。

「ええ、だけれど当分は何えないかも知れませんよ」

と、浜田はちよつともじもじして、顔を見られるのを厭うように、下を向いて云いました。

「どうしてですか？」

「当分、……ナオミさんのことを忘れることが出来るまでは。……」

そう云つて彼は、涙を隠しながら帽子を冠つて、「さよなら」と云いさま、「松浅」の前を品川の方へ、電車にも乗らずに歩いて行きました。

私はそれからとにかく会社へ出かけましたが、勿論仕事など手につく筈はありません。ナオミの奴、今頃はどうしているだろう。寝間着一枚で放ったらかして来たのだから、よもや何処へも出られる筈はないだろう。と、そう思う傍からやっぱりそれが氣にならずにはいませんでした。それと云うのが、何しろ実に意外な事が後から後からと起つて来て、欺された上にも欺されていたことが分るに随い、私の神経は異常に鋭く、病的になり、いろいろな場合を想像したり臆測したりし始めるので、そうなつて来るとナオミと云うものが、とても私の智慧では及ばない神変不可思議の通力を備え、又いつの間に何をしているか、ちつとも安心はならないように思われて来るのです。己はこうしてはいられない、

どんな事件が留守の間に降って湧わいているかも知れない。——私は会社をそこそこにして、大急ぎで鎌倉に帰って来ました。

「やあ、只今ただいま」

と、私は門口に立っている上さんの顔を見るなり云いました。

「いますかね、内に？」

「はあ、いらっしゃるようでございますよ」

それで私はほっとしながら、

「誰か訪ねて来た者はありませんかね？」

「いいえ、どなたも」

「どうです？　どんな様子ですかね？」

私は頗あきで離れの方をさしながら、上さんに眼くばせしました。そしてその時気が附いたのですが、ナオミの居るべきその座敷は、障子が締まって、ガラスの中は薄暗く、ひっそりとして、人氣がないように見えるのでした。

「さあ、どんな御様子か、——今日は一日じつと彼処に這入はいっていらっしゃいますけれど、……………」

ふん、とうとう一日引つ込んでいたか。だがそれにしてもイヤに様子が静かなのはどうしたんだろう、どんな顔つきをしているだろうと、まだ幾分胸騒ぎに駆られながら、私はそつと縁側へ上り、離れの障子を明けました。と、もう夕方の六時が少し廻った時分で、明りのとどかない部屋の奥の隅の方に、ナオミはだらしない恰好かつこうをして、ふん反り返つてぐうぐう眠っているのです。蚊に喰われるので、彼方あつちへ転がり此方こつちへ転がりしたものでしよう、私のクレバネットを出して腰の周りを包んではいましたが、それで器用に隠されているのはほんの下っ腹のところだけで、紅いあかちぢみのガウンから真つ白い手足が、湯立ったキャベツの茎のように浮き出ているのが、そう云う時には又運悪く、変に蠱惑こわく的に私の心を掻き撈かむしりました。私は黙つて電燈でんとうをつけ、独りでさっさと和服に着換え、押入れの戸をわざとガタピシ云わせましたけれど、それを知つてか知らないでか、ナオミの寝息はまだすやすやと聞えました。

「おい、起きないか、夜じやないか。……………」

三十分ばかり、用もないのに机にもた靠れて、手紙をかくような風を装よそおっていた私は、とうとう根負けがしてしまつて声をかけました。

「ふむ、……………」

と云つて、不承々々に、睡ねむそうな返辞をしたのは、私が二三度怒鳴つてからでした。

「おい！ 起きないかつたら！」

「ふむ、……………」

そう云つたきり、又暫くは起きそうにもしません。

「おい！ 何してるんだ！ おいッたら！」

私は立ち上つて、足で彼女の腰のあたりを乱暴にぐんぐん揺す振りました。

「あーあ」

と云つて、先まずによつきりとそのしなしなした二本の腕を真まつ直すぐに伸ばし、小さな、紅い握り拳こぶしをぎゅツと固めて前へ突き出し、生あくびを噛かみ殺しながらやおら体を擡もたげたナオミは、私の顔をチラと偷ぬすんで、すぐ側方そつぽを向いてしまつて、足の甲だの、脛はぎのあたりだの、背筋の方だの、蚊に喰あわれた痕しきを頻りにぼりぼり搔かき始めました。寝過ぎたせいかな、それともこつそり泣いたのであらうか、その眼は充血して、髪は化粧物のように乱れて、両方の肩へ垂れていました。

「さ、着物を着換えろ、そんな風をしていないで」

母屋おもやへ行つて着物の包みを取つて来てやり、彼女の前へ放り出すと、彼女は一言も云わな

いで、つんとしてそれを着換えました。それから晩飯の膳^{ぜん}が運ばれ、食事を済ましてしま
う間、二人はとうとう孰方^{どちら}からも物を云いかけませんでした。

この、長い、鬱陶^{うつとう}しい睨^{にら}み合いの間に、私はどうして彼女に泥を吐かせたらいいか、こ
の強情な女を素直に詫^{あや}まらせる道はないだろうかと、ただそればかりを考えました。浜田
の云った忠告の言葉、——ナオミは意地ツ張りだから、ふいとしたことで喧嘩^{けんか}をすると、
もう取り返しがつかなくなると云うことも、無論私の頭にありました。浜田があんな忠告
をしたのは、恐らく彼の実験から来ているのでしょうか、私にしてもそう云う覚えはた
びあります。何よりかより彼女を怒らせてしまつては一番いけない、彼女がつむじを曲
げないように、決して喧嘩にならないように、そうかと云つて此方が甘く見られないよう
に、上手に切り出さなければならぬ。で、それには此方が裁判官のような態度で問い詰
めて行くのは最も危険だ。「お前は熊谷とこれこれだろう?」「そして浜田ともこれこれ
だろう?」と、こう正面から肉迫すれば、「へえ、そうです」と恐れ入るような女ではな
い。きつと彼女は反抗する。飽くまで知らぬ存ぜぬと云い張る。すると此方もジリジリし
て来て癩^{かんしゃく}癩^{かんしゃく}を起す。もしそうなつたらおしまいだから、押し問答することはとにかく
くよくくない。これは彼女に泥を吐かせると云うような考は止^やめにして、いつそ此方から今

日の出来事を話してしまつた方がいい。そうすればいくら強情でもそれを知らないとは云えないだろう。よし、そうしようと思つたので、

「僕は今日、朝の十時頃に大森へ寄つたら浜田に遇^あつたよ」

と、先ずそんな風に云つて見ました。

「ふうん」

とナオミは、さすがにぎよツとしたらしく私の視線を避けるように、鼻の先でそう云いました。

「それからかれこれするうちに飯時になつたもんだから、浜田を誘つて『松浅』へ行つて、一緒に飯を喰つたんだ。――」

もうそれからはナオミは返辞をしませんでした。私は彼女の顔色に絶えず注意を配りながら、あまり皮肉にならないように諄^{じゆんじゆん}々と話して行きましたが、話し終つてしまうまで、ナオミはじつと下を向いて聴いていました。そして悪びれた様子はなく、ただ頬の色がこころもち青ざめただけでした。

「浜田がそう云つてくれたので、僕はお前に聞くまでもなくみんな分つてしまつたんだ。だからお前は何も強情を張ることはない。悪かつたらば悪かつたと、そう云つてくれさえ

すればいいんだ。……………どうだい、お前、悪かったかね？ 悪いと云うことを認めるかね？」

ナオミがなかなか答えないので、ここで私の心配していた押し問答の形勢が持ち上りそうになりましたが、「どうだね？ ナオミちゃん」と、私は出来るだけ優しい口調で、

「悪かったことさえ認めてくれれば、僕はなんにも過ぎ去ったことを咎めやしないよ。何もお前に両手について詫まれと云う訳じゃない。この後こう云う間違いがないように、それを誓ってくれたらいいんだ。え？ 分つたろうね？ 悪かったと云うんだろうね？」するとナオミは、好い塩梅あんばいに、頷うなずで「うん」と頷うなずきました。

「じゃあ分つたね？ これから決して熊谷やなんかと遊びはしないね？」

「うん」

「きつとだろうね？ 約束するね？」

「うん」

この「うん」で以て、お互の顔が立つようにどうやら折り合いがつけました。

その晩、私とナオミとは最早や何事もなかったように寝物語をしましたけれども、しかし正直の気持を云うと、私は決して心の底から綺麗サツパリとはしませんでした。この女は、既に清浄潔白ではない。——この考は私の胸を晦く鎖したばかりでなく、自分の宝であったところのナオミの値打ちを、半分以上に引き下げてしまいました。なぜなら彼女の値打ちと云うものは、私が自分で育ててやり、自分でこれほどの女にしてやり、そうしてただ自分ばかりがその肉体のあらゆる部分を知っていると云うことに、その大半があつたのですから、つまりナオミと云うものは、私に取つては自分が栽培したところの一つの果実と同じことです。私はその実が今日のように立派に成熟するまでに随分さまざまの丹精を凝らし、労力をかけた。だからそれを味うのは栽培者たる私の当然の報酬であつて、他の何人にもそんな権利はない筈であるのに、それが何時の間にかあかの他人に皮を撈られ、齒を立てられていたのです。そうしてそれは、一旦汚されてしまった以上、いかに彼女が罪を詫びてももう取り返しのつかないことです。「彼女の肌」と云う貴い聖地には、二人の賊の泥にまみれた足痕が永久に印せられてしまったのです。これを思えば思うほど口惜しいことの限りでした。ナオミが憎いと云うのでなしに、その出来事が憎くてたまり

ませんでした。

「讓治さん、堪忍^{かに}してね、……………」

ナオミは私が黙って泣いているのを見ると、昼間の態度とは打って變つて、そう云つてくれませんでしたけれど、私はやはり泣いて頷くばかりでした。「ああ堪忍するよ」と口では云つても、取り返しをつかないと云う無念さは消すことが出来ませんでした。

鎌倉の一と夏はこんな始末で散々な終りを告げ、やがて私たちは大森の住居へ戻りましたが、今も云うように私の胸にわだかまりが出来たものですから、それが自然と何かの場合に現れると見え、それから後の二人の仲はどうもしっくりとは行きかねました。表面は和解したようであつても、私は決して、まだほんとうにはナオミに心を許していません。会社へ行つても依然として熊谷のことが心配になる。留守の間の彼女の行動が気になる余り、毎朝家を出かけると見せてこっそり裏口へ立ち廻つたり、彼女が英語や音楽の稽古^{けいこ}に行くと言ふ日は、そつとその跡をつけて行つたり、時々彼女の眼を偷^{ぬす}んでは、彼女宛^あてに来る手紙の内容を調べて見たり、そう云う風にまで私が秘密探偵のような氣持になるに随い、ナオミはナオミで、腹の中ではこのしつツこい私のやり方をせせら笑っているらしく、言葉に出して云い争いはしないまでも、變に意地悪い素振りを見せるようになりました。

「おい、ナオミ！」

と、私は或る晩、いやに冷たい顔つきをして寝た振りをしている彼女の体を揺す振りながら、そう云いました。（断つて置きますがもうその時分、私は彼女を「ナオミ」と呼びつけにしていたのです）

「何だつてそんな……寝たふりなんぞしているんだ？ そんなに己が嫌いなのかい？……」

「寝たふりなんかしていやしないわ。寝ようと思って眼を潰つぶっているだけなんだわ」

「じゃあ眼をお開き、人が話をしようとするのに眼を潰つぶっている法はなからう」

そう云うとナオミは、仕方なしにうツすと眼瞼まぶたを開きましたが、睫毛まつげの蔭かげから纔わずかに此方を覗のぞいている細い眼つきは、その表情を一層冷酷なものにしました。

「え？ お前は己が嫌いなのかよ？ そうならそうと云っておくれ。……」

「なぜそんなことを尋ねるの？……」

「己には大概、お前の素振りでも分っているんだ。この頃の己たちは喧嘩こそしないが、心の底では互に鎬しのぎを削っている。これでも己たちは夫婦だろうか？」

「あたしは鎬を削つてやしない、あなたこそ削っているんじゃないの」

「それはお互様だと思う。お前の態度が己に安心を与えないから、己の方でもつい疑いの眼を以て……………」

「ふん」

とナオミは、その鼻先の皮肉な笑いで私の言葉を打ツ切ってしまったて、

「じゃあ聞きますが、あたしの態度に何か怪しい所があるの？ あるなら証拠を見せて頂ちようだい
戴」

「そりや、証拠と云つてはありやしないが、……………」

「証拠がないのに疑ぐるなんて、それはあなたが無理じゃないの。あなたがあたしを信用しないで、妻としての自由も権利も与えないで置きながら、夫婦らしくしようとしたってそりや駄目だわ。ねえ、讓治さん、あなたはあたしが何も知らずにいると思つて？ 人の手紙を内証で読んだり、探偵みたいに跡をつけたり、……………あたしちゃんと知っているのよ」

「それは己も悪かったよ、けれども己も以前の事があるもんだから、神経過敏になつてい
るんだ。それを察してくれないじゃ困るよ」

「じゃ、一体どうしたらいいのよ？ 以前の事はもう云わないツて約束じゃないの」

「己の神経がほんとうに安まるように、お前が心から打ち解けてくれ、己を愛してくれたらいいんだ」

「でもそうするにはあなたの方で信じてくれなけりやあ、……………」

「ああ信じるよ、もうこれからきつと信じるよ」

私はここで、男と云うものの浅ましさを白状しなければなりません、昼間とはにかく、夜の場合になつて来ると私はいつも彼女に負けました。私が負けたと云うよりは、私の中にある獣性が彼女に征服されました。事実を云えば私は彼女をまだまだ信じる気にはなれない、にも拘^{かか}わらず私の獣性は盲目的に彼女に降伏することを強^しい、総^すべてを捨てて妥協するようにさせてしまいます。つまりナオミは私に取つて、最早や貴い宝でもなく、有難い偶像でもなくなつた代り、一箇^この娼^{しょう}婦^ふとなつた訳です。そこには恋人としての清さも、夫婦としての情愛もない。そうそんなものは昔の夢と消えてしまった！ それならどうしてこんな不貞な、汚れた女に未練を残しているのかと云うと、全く彼女の肉体の魅力、ただそれだけに引き摺^ひられつゝあつたのです。これはナオミの墮落であつて、同時に私の墮落でもありました。なぜなら私は、男子としての節操、潔癖、純情を捨て、過去の誇りを抛^{なげ}つてしまつて、娼婦の前に身を屈しながら、それを耻^はじとも思わないようになったのです。

から。いや時としてはその卑しむべき娼婦の姿を、さながら女神を打ち仰ぐように崇拜さえもしたのですから。

ナオミは私のこの弱点を面の憎いほど知り抜いていました。自分の肉体が男にとつては抵抗し難い蠱惑であること、夜にさえなれば男を打ち負かしてしまえること、——こう云う意識を持ち始めた彼女は、昼間は不思議なくらい不愛想な態度を示しました。自分はこのにいる一人の男に自分の「女」を売っているのだ、それ以外には何もこの男に興味もなければ因縁もない、と、そんな様子をありありと見せて、あたかも路傍の人のようにむうツとそつけなく済まし込んで、たまに私が話しかけてもろくすっぽう返辞もしません。是非必要な場合にだけ「はい」とか「いいえ」とか答えるだけです。こういう彼女のやり方は、私に対して消極的に反抗している心を現わし、私を極度に侮蔑する意を示そうとするものであるとしか、私には思えませんでした。「讓治さん、あたしがいくら冷淡だって、あなたは怒る権利はないわよ。あなたはあたしから取れる物だけ取っているんじゃないやありませんか。それであなたは満足しているんじゃないやありませんか」——私は彼女の前へ出ると、そう云う眼つきで睨まれているような気がしました。そしてその眼は動ともすると、

「ふん、何と云うイヤな奴だろう。まるで此奴は犬みたようにさもない男だ。仕方がない

から我慢してやっているんだけれど」

と、そんな表情をムキ出しにして見せるのでした。

けれどもかかる状態が長持ちをする筈はずがありません。二人は互に相手の心に捜さがりを入れ、陰險な暗闘をつづけながら、いつか一度はそれが爆発することを内々覚悟していました、或る晩私は、

「ねえ、ナオミや」

と、特にいつもより優しい口調で呼びかけました。

「ねえ、ナオミや、もうお互につまらない意地ツ張りは止よそうじゃないか。お前はどうか知らないが、僕は到底堪えられないよ、この頃のようなこんな冷やかな生活には。……

…

「ではどうしようって云う積りなの？」

「もう一度何とかしてほんとうの夫婦になろうじゃないか。お前も僕も焼け半分になつて
いるのがいけないんだよ。真面目まじめになつて昔の幸福を呼び戻そうと、努力しないのが悪い
んだよ」

「努力したって、気持と云うものはなかなか直つて来ないと思うわ」

「そりやあそうかも知れないが、僕は二人が幸福になる方法があると思うよ。お前が承知してくれさえすりやあいことなんだが、……………」

「どんな方法？」

「お前、子供を生んでくれないか、母親になつてくれないか？ 一人でもいいから子供が出来れば、きっと僕等はほんとうの意味で夫婦になれるよ、幸福になれるよ。お願いだから僕の頼みを聴いてくれない？」

「いやだわ、あたし」

と、ナオミは即座にきつぱりと云いました。

「あなたはあたしに、子供を生まないようにしてくれ。いつまでも若々しく、娘のようにしていてくれ。夫婦の間に子供の出来るのが何よりも恐ろしいッて、云ったじゃないの？」

「そりや、そんな風に思つた時代もあつたけれども、……………」

「それじゃあなたは、昔のようにあたしを愛そうとしないんじゃないの？ あたしがどんなに年を取つて、汚くなつても構わないと云う気なんじゃないの？ いいえ、そうだわ、あなたこそあたしを愛さないんだわ」

「お前は誤解してるんだ。僕はお前を友達のように愛していた、だがこれからは真実の妻

として愛する。……」

「それであなは、昔のような幸福が戻つて来ると思ふのかしら？」

「昔のようではないかも知れない、けれども眞の幸福が、……」

「いや、いや、あたしはそれなら沢山だわ」

そう云つて彼女は、私の言葉が終らないうちに激しく冠かぶりを振るのでした。

「あたし、昔のような幸福が欲しいの。でなけりやなんにも欲しくはないの。あたしそう云う約束であなとの所へ来たんだから」

十九

ナオミがどうしても子供を生むのが厭いやだというなら、私の方には又もう一つ手段がありました。それは大森の「お伽とぎ噺ばなしの家」を畳んで、もつと眞面目な、常識的な家庭を持つと云う一事です。全体私はシンプル・ライフと云う美名に憧あこがれて、こんな奇妙な、甚だ実用的でない絵かきのアトリエに住んだのですが、われわれの生活を自墮落にしたのはこの家のせいも確かにあるのです。こう云う家に若い夫婦が女中も置かずに住まっていれば、

却^{かえ}つてお互に我が儘^{まま}が出て、シンプル・ライフがシンプルでなくなり、ふしだらになるのは已^やむを得ない。それで私は、私の留守中ナオミを監視するためにも、小間使いを一人と飯^{めした}焚きを一人置くことにする。主人夫婦と女中が二人、これだけが住まえるような、所^{いわゆ}謂^る「文化住宅」でない純日本式の、中流の紳士向きの家へ引き移る。今まで使っていた西洋家具を売り払って、総べてを日本風の家具に取り換え、ナオミのために特にピアノを一台買つてやる。こうすれば彼女の音楽の稽古も杉崎女史の出教授を頼めばよいことになり、英語の方もハリソン嬢に出向いて貰^{もら}つて、自然彼女が外出する機会がなくなる。この計画を実行するには纏^{まとま}った金が必要でしたが、それは国もとへそう云つてやり、すっかりお膳^{ぜんだて}立が整うまではナオミに知らせない決心を以て、私は独りで借家捜しや家財道具の見積りなどに苦心していました。

国の方からは取り敢^あえずこれだけ送ると云つて、千五百円の為替が来ました。それから私は女中の世話も頼んでやったのでしたが、「小間使いには大へん都合のいいがある、内で使っていた仙太郎の娘がお花と云つて、今年十五になっているから、あれならお前も気が分つて安心して置けるだろう。飯^{めした}焚きの方も心あたりを捜しているから、引越^きし先が極^きまるまでには上京させる」と、為替と同封の母の手でそう云つて来ました。

ナオミは私が内々何か企たくらんでいるのをうすうす感たづいていたのでしようが、「まあ何を
するか見ていてやれ」と云った調子で、初めのうちは凄すこいほど落ち着いていました。が、
ちようど母から手紙が届いて二三日過ぎた或る夜のこと、

「ねえ、讓治さん、あたし、洋服が欲しいんだけど、拵こしらえてくれない？」

と、彼女は突然、甘あまったれるような、そのくせ変に冷やかすような、猫撫ねこなで声でそう云い
ました。

「洋服？」

私は暫しばらくあつけに取られて、彼女の顔を穴の開くほど視詰みつめながら、「ははあ、此奴、為
替の来たのが分わつたんだな、それで搜りを入れているんだな」と氣がつきました。

「ねえ、いいじゃないの、洋服でなけりや和服でもいいわ。冬の余所行よそきを拵こしらえて頂戴」
「僕は当分そんな物は買かつてやらんよ」

「どうしてなの？」

「着物は腐るほどあるじゃないか」

「腐るほどあつたつて、飽あきちやつたから又欲しいんだわ」

「そんな贅ぜいたく沢はもう絶対に許さないんだ」

「へえ、じゃ、あのお金は何に使うの？」

とうとう来たな！ 私はそう思つて空^{そらとほ}惚けながら、

「お金？ 何処にそんなものがあるんだ？」

「讓治さん、あたし、あの本箱の下にあつた書留の手紙見たのよ。讓治さんだつて人の手紙勝手に見るから、そのくらいな事をあたしがしたつていいだろうと思つて、——」

これは私には意外でした。ナオミが金のことを云うのは、書留が来たから為替が這入^{はい}つていたのだろうと見当をつけているだけなので、まさか私があの本箱の下に隠した手紙の中味を見ていようとは、全く予期していなかつたのです。が、ナオミはどうかして私の秘密を嗅^かぎ出そうと、手紙のありかを捜し廻つたに違いなく、あれを読まれてしまったとすると、為替の金額は勿^{もちろん}論のこと、移転のことも女中のことも総べてを知られてしまったのです。

「あんなにお金で沢山あるのに、あたしに着物の一枚ぐらい拵えてくれないと思つてわ。

——ねえ、あなたはいつか何と云^いつて？ お前の為^ためならどんな狭苦しい家に住んでも、どんな不自由でも我慢をする。そうしてそのお金でお前に出来るだけ贅沢をさせるつて、そう云つたのを忘れちまつたの？ まるであなたはあの時分とは違っているのね」

「僕がお前を愛する心に変りはないんだ、ただ愛し方が変わっただけなんだ」

「じゃ、引越しのことはなぜあたしに隠していたの？ 人には何も相談しないで、命令的にやる積りなの？」

「そりや、適当な家が見付かった上で、無論お前にも相談する積りでいたんだ。………」
 そう云いかけて、私は調子を和けて、なだめるように説き聞かせました。

「ねえ、ナオミ、僕はほんとうの気持を云うと、今でもやっぱりお前に贅沢をさせたいんだよ。着物ばかりの贅沢でなく、家も相当の家に住まって、お前の生活全体を、もっと立派な奥さんらしく向上させてやりたいんだよ。だからなんにも不平を云うところはないじゃないか」

「そうお、そりやどうも有りかと、………」

「何なら明日、僕と一緒に借家を捜しに行ったらどうだね。此処ここよりもっと間数があつて、お前の氣に入つた家でさえありや何処どこでもいいんだ」

「それならあたし、西洋館にして頂戴ちようだい、日本の家は真つ平御免よ。——」

私が返辞に困っている間に、「それ見たことか」と云う顔つきで、ナオミは嘔かんで吐き出すように云うのでした。

「女中もあたし、浅草の家へ頼みますから、そんな田舎の山出しなんか断つて頂戴、あたしが使う女中なんだから」

こう云ういさかいが度重なるに従つて、二人の間の低気圧はだんだん濃くなつて行ききました。そして一日口をきかないようなことも屡《しばしば》でしたが、それが最後に爆発したのは、ちようど鎌倉を引き払つてから二箇月の後、十一月の初旬のことで、ナオミが未だに熊谷と關係を断つていないと云う動かぬ証拠を、私が発見した時でした。

これを発見するまでのいきさつに就いては、別段ここにそう委しく書く必要がありません。私は疾うから、引つ越しの準備に頭を使っている一方、直覺的にナオミを怪しいと睨んでいたのです、例の探偵的行動を少しも緩めずにいた結果、或る日彼女と熊谷とが、大胆にもつい大森の家の近所の曙楼あけぼのろうで密会した歸りを、とうとう抑えてしまったのです。

その日の朝、私はナオミの化粧の仕方がいつもより派手であるのに疑いを抱き、家を出るなり直ぐ引つ返して裏口にある物置小屋の炭俵の蔭かげに隠れていたのです。（そう云う訳でその頃の私は、会社を休んでばかりいました）すると果して、九時頃になつた時分、今日は稽古けいこに行く日でもないのに彼女はひどくめかし込んで出て来ましたが、停車場の方へは行かないで、反対の方へ、足を早めてさっさと歩いて行くのでした。私は彼女を五六間や

り過してから大急ぎで家へ飛び込み、学生時代に使っていたマントと帽子を引き摺り出して洋服の上へそれを被り、素足に下駄穿きで表へ駆け出すと、ナオミの跡を遠くの方から追って行きました。そして彼女が曙楼へ這入って行き、それから十分ぐらい後れて熊谷がそこへやって来たのを確かに見届けて置いてから、やがて彼等の出て来るのを待ち構えていたのです。

帰りもやはり別々で、今度は熊谷が居残ったらしく、一と足先きにナオミの姿が往来へ現れたのは、かれこれ十一時頃でした。——私は殆ど一時間半も曙楼の近所をうろうろしていた訳です。——彼女は来た時と同じように、そこから十丁余りある自分の家まで、傍目もふらずに歩いて行きました。そして私も次第に歩調を早めて行つたので、彼女が裏口のドアを開けて中へ這入る、すぐその跡から、五分とは立たずに私が這入って行つたのです。

這入った刹那に私の見たものは、瞳の据わった、一種凄惨な感じの籠つたナオミの眼でした。彼女はそこに、棒のように突つ立ったまま、私の方を鋭く睨んでいるのですが、その足もとには私がさつき脱ぎ換えて行つた帽子や、外套や、靴や、靴下があの時のまま散らばっていました。彼女はそれで一切を悟ってしまったのでしよう、麗かに晴れた秋

の朝の、アトリエの明りを反射している彼女の顔は穏やかに青ざめ、総べてをあきらめてしまったような深い静けさがそこにありました。

「出て行け！」

たつた一言、自分の耳がごとする程怒鳴ったきり、私も二の句が継げなければナオミも何とも返辞をしません。二人はあたかも白刃はくじんを抜いて立ち向った者がピタリと青眼せいがんに構えたように、相手の隙すきを狙ねらっていました。その瞬間、私は実にナオミの顔を美しいと感じました。女の顔は男の憎しみがかかればかかる程美しくなるのを知りました。カルメンを殺したドン・ホセは、憎めば憎むほど一層彼女が美しくなるので殺したのだと、その心境が私にハッキリ分りました。ナオミがじいツと視線を据えて、顔面の筋肉は微動だもさせずに、血の気の失うせた唇をしつかり結んで立っている邪悪けしんの化身のような姿。――あ、それこそ淫婦いんぶの面魂つらだましを遺憾なく露あらわした形相ぎようそうでした。

「出て行け！」

と、私はもう一度叫ぶや否いなや、何とも知れない憎さと恐ろしさと美しさに駈り立てられつつ、夢中で彼女の肩を掴つかんで、出口の方へ突き飛ばしました。

「出て行け！ さあ！ 出て行けったら！」

「堪忍して、……讓治さん！　もう今度ツから、……」

ナオミの表情は俄かに変わり、その声の調子は哀訴にふるえ、その眼の縁には涙をさめざめと湛えながら、ぺったりそこへ跪いて歎願するように私の顔を仰ぎ視ました。

「讓治さん、悪かったから堪忍してッてば！……堪忍して、堪忍して、……」

こんなに脆く彼女が赦しを乞うだろうとは予期していなかったことなので、はっと不意打ちを喰った私は、そのために尚憤激しました。私は両手の拳を固めてつづけさまに彼女を殴りました。

「畜生！　犬！　人非人！　もう貴様には用はないんだ！　出て行けったら出て行かんか！」

と、ナオミは咄嗟に、「こりや失策ったな」と気がついたらしく、忽ち態度を改めてすうツと立ち上ったかと思うと、

「じゃあ出て行くわ」

と、まるで不断の通りの口調でそう云いました。

「よし！　直ぐに出て行け！」

「ええ、直ぐ行くわ、——二階へ行つて、着換えを持って行つちやあいけない？」

「貴様はこれから直ぐに帰って、使いを寄越せ！ 荷物はみんな渡してやるから！」

「だってあたし、それじゃ困るわ、今すぐいろいろ入用なものがあるんだから。——」

「じゃ勝手にしろ、早くしないと承知しないぞ！」

私はナオミが今すぐ荷物を運ぶと云うのを一種の威嚇いかくと見て取ったので負けない気でそう云ってやると、彼女は二階へ上って行って、そこらじゅうをガタピシと引つ掻かき廻して、バスケットだの、風呂敷ふろしき包みだの、背負い切れないほどの荷造りをして、自分でとツとと俥くるまを呼んで積み込みました。

「では御機嫌よう、どうも長々御厄介になりました。——」

と、出て行くときにそう云った彼女の挨拶あいさつは、至極あつさりしたものでした。

二十

彼女の俥が行ってしまうと、私はどう云う積りだったか直ぐに懷中時計を出して、時間を見ました。ちようど午後零時三十六分、……ああそうか、さっき彼女が曙楼を出て来たのが十一時、それからあんな大喧嘩おおげんかをしてあツと云う間に形勢が変り、今まで此処に立

つていた彼女がもう居なくなってしまうたんだ。その間が僅かに一時間と三十六分。……
 ……人は屢々、看護していた病人が最後の息を引き取る時とか、又は大地震に出つ会した時
 とかに、覚えす知らず時計を見る癖があるものですが、私がその時ふいと時計を出して見
 たのも大方それに似たような氣持だったでしょう。大正某年十一月某日午後零時三十六分、
 ——自分はこの日のこの時刻に、遂にナオミと別れてしまった。自分と彼女との關係は、
 この時を以て或は終焉を告げるかも知れない。……

「先ずほつとした！ 重荷が下りた！」

何しろ私はこの間じゅうの暗闘に疲れ切っていた際だったので、そう思うと同時にぐつた
 り椅子に腰かけたままぼんやりしてしまいました。咄嗟の感じは、「ああ有難い、やつと
 のことで解放された」と云うような、せいせいとした気分でした。それと云うのが私は単
 に精神的に疲労していたばかりでなく、生理的にも疲労していたので、一度ゆっくり休養
 したいと云うことは、寧ろ私の肉体の方が痛切に要求していたのです。たとえばナオミと
 云うものは非常に強い酒であつて、あまりその酒を飲み過ぎると体に毒だと知りながら、
 毎日々々、その芳醇な香氣を嗅がされ、なみなみと盛った杯を見せられては、矢張私
 は飲まずにはいられない。飲むに随つて次第に酒毒が体の節々へ及ぼして来て、ひだるく、

ものうく、後頭部が鉛のようにどんより重く、ふいと立ち上ると眩暈^{めまい}がしそうで、仰向けさまにうしろへ打^ぶつ倒れそうになる。そしていつでも二日酔いのような心地で、胃が悪く、記憶力が衰え、すべての事に興味がなくなり、病人か何ぞのように元気がない。頭のなかには奇妙なナオミの幻ばかりが浮かんで来て、それが時々おくびのように胸をむかつかせ、彼女の臭^{にお}いや、汗や、脂^{あぶら}が、始終むうツと鼻についている。で、「見れば眼の毒」のナオミが居なくなつたことは、入梅の空が一時にからツと晴れたような工合でした。

が、今も云うようにそれは全く咄嗟の感じで、正直のところ、そのせいせいした心持が続いたのは、一時間ぐらいなものだつたでしょう。まさか私の肉体がいくら頑健だからと云つて、ほんの一時間やそこの間に疲労が恢^{かいふく}復し切つた訳でもありますまいが、椅子に腰かけてほつと一と息ついたかと思うと、間もなく胸に浮かんで来たのは、さっきのナオミの、あの喧嘩をした時の異常に凄^{すご}い容貌^{ようぼう}でした。「男の憎^{せつな}しみがかかればかかる程美しくなる」と云つた、あの一刹那^{せつな}の彼女の顔でした。それは私が刺し殺しても飽き足りないほど憎い憎い淫婦の相で、頭の中へ永久に焼きつけられてしまったまま、消そうとしてもいつかな消えずにいたのですが、どう云う訳か時間が立つに随つていよいよハッキリと眼の前に現れ、未だにじーいツと瞳を据えて私の方を睨^{にら}んでいるように感ぜられ、しか

もだんだんその憎らしさが底の知れない美しさに變つて行くのでした。考えて見ると彼女の顔にあんな妖艶ようえんな表情が溢あふれたところを、私は今日まで一度も見ることがありません。疑いもなくそれは「邪惡の化身」であつて、そして同時に、彼女の体と魂こころとが持つ悉くことごとくの美が、最高潮の形に於おいて発揚された姿なのです。私はさっきも、あの喧嘩の真つ最中に覺えずその美に撲うたれたのみならず、「ああ美しい」と心の中で叫んだのでありながら、どうしてあの時彼女の足下に跪ひざまづいてしまわなかつたか。いつも優柔で意氣地なしの私が、いかに憤激していたとは云えあの恐ろしい女神に向つて、どうしてあれほどの面罵めんばを浴びせ、手を振り上げることが出来たか。自分のどこからそんな無鉄砲な勇氣が出たか。――

――それが私には今更不思議なように思われ、その無鉄砲と勇氣とを恨むような心持さえ、次第に湧わき上つて来るのでした。

「お前は馬鹿ばかだぞ、大變なことをしちまつたんだぞ。ちつとやそつとの不都合があつても、それと『あの顔』と引き換えになると思つていいのか。あれだけの美はこの後決して、二度と世間にありはしないぞ」

私は誰かにそう云われているような氣がし始め、ああ、そうだった、自分は實につまらないことをしてしまった。彼女を怒らせないようにと、あんなに不斷から用心していながら、

こういう結末になったというのは魔がさしたのに違いないんだと、そんな考が何処からともなく頭を擡^{もた}げて来るのでした。

たつた一時間前まではあれほど彼女を荷厄介にし、その存在を呪^{のろ}った私が、今は反対に自分を呪い、その軽率を悔いるようになったと云うのは？ あんなに憎らしかった女が、こんなにも恋しくなつて来るとは？ この急激な心の変化は私自身にも説明の出来ないことで、恐らく恋の神様ばかりが知っている謎^{なぞ}でありましょう。私はいつの間にか立ち上つて、部屋を往^いつたり来たりしながら、どうしたらこの恋慕の情を癒^いやすことが出来るだろうかと、長い間考えました。と、どう考えても癒やす方法は見付からないで、ただただ彼女の美しかったことばかりが想^{おも}い出される。過去五年間の共同生活の場面々々が、ああ、あの時にはこう云つた、あんな顔をした、あんな眼をしたと云う風に、後から後からと浮かんで来て、それが一々未練の種でないものはない。殊^{こと}に私の忘れられないのは、彼女が十五六の娘の時分、毎晩私が西洋風呂へ入れてやつて体を洗つてやつたこと。それから私が馬になつて彼女を背中へ乗せながら、「ハイハイ、ドウドウ」と部屋の中を這^はい廻^{まわ}つて遊んだこと。——どうしてそんな下らない事がそんなにまでも懐^{なつ}かしいのか、実に馬鹿げていましたけれど、若^もしも彼女がこの後もう一度私の所へ歸つて来てくれたら、私は何より

真つ先にあの時の遊戯をやつて見よう。再び彼女を背中の上へ跨^{また}がらせて、この部屋の中を這つて見よう。それが出来たら己^{おれ}はどんなに嬉しいか知れないと、まるでその事をこの上もない幸福のように空想したりするのでした。いや、単に空想したばかりでなく、私は彼女が恋しさの余り、思わず床に四つ這いになって、今も彼女の体が背中へぐツとのしかかつてでもいるかのように、部屋をグルグル廻つてみました。それから私は、——此^{ここ}処に書くのも耻^{はず}かしい事の限りですが、——二階へ行つて、彼女の古着を引つ張り出してそれを何枚も背中に載せ、彼女の足袋を両手に簞^はめて、又その部屋を四つん這いになって歩きました。

この物語を最初から読んでおられる読者は、多分覚えておられるでしょうが、私は「ナオミの成長」と題する一冊の記念帖^{きねんちよう}を持っていました。それは私が彼女を風呂へ入れてやつて、体を洗つてやつていた頃、彼女の四肢が日増しに発達する様を委しく記して置いたもので、つまり少女としてのナオミがだんだん大人になるところを、——ただそればかりを専門のように書き止めて行つた一種の日記帳でした。私はその日記のところどころに、当時のナオミのいろいろな表情、ありとあらゆる姿態の変化を写真に撮^はつて貼つて置いたのを思い出し、せめて彼女を偲^{しの}ぶよすがに、長い間埃^{ほこり}にまみれて突つ込んであつたその帳

面を、本箱の底から引き摺り出して順々にページをはぐって見ました。それらの写真は私以外の人間には絶対に見せるべきものではないので、自分で現像や焼き付けなどをしたのですが、大方水洗いが完全でなかったのでしょう。今ではポツポツそばかすのような斑点が出来、物によつてはすっかり時代がついてしまつて、まるで古めかしい画像のように朦朧としたものもありましたけれど、そのために却って懐かしさは増すばかりで、もう十年も二十年もの昔のこと、……幼い頃の遠い夢をでも辿るような気がするのです。そしてそこには、彼女があの時分好んで装つたさまざまな衣裳やなりかたちが、奇抜なものも、軽快なものも、贅沢なものも、滑稽なものも、殆ど剩す所なく写されています。或るページには天鵲絨の背広服を着て男装した写真がある。次をめくると薄いコットン・ボイルの布を身に纏つて、彫像の如く立っている姿がある。又その次にはきら光る縐子の羽織に縐子の着物、幅の狭い帯を胸高に締め、リボンの半襟を着けた様子が現れて来る。それから種々雑多な表情動作や活動女優の真似事の数々、——メリー・ピクフォードの笑顔だの、グロリア・スワンソンの眸だの、ポーラ・ネグリの猛り立つところだの、ビーブ・ダニエルの乙に気取ったところだの、憤然たるもの、嫣然たるもの、疎然たるもの、恍惚たるもの、見るに随つて彼女の顔や体のこなしは一々変

化し、いかに彼女がそう云うことに敏感であり、器用であり、伶俐であつたかを語らないものではないのです。

「ああ飛んでもない！ 己はほんとに大変な女を逃がしてしまった」

私は心も狂おしくなり、口惜しまぎれに地団太を踏み、なおも日記を繰って行くと、まだ写真が幾色となく出て来ました。その撮り方はだんだん微に入り、細を穿って、部分々々を大映しにして、鼻の形、眼の形、唇の形、指の形、腕の曲線、肩の曲線、背筋の曲線、脚の曲線、手頸、足頸、肘、膝頭、足の蹠までも写してあり、さながら希臘の彫刻か奈良の仏像か何かを扱うようにしてあるのです。ここに至ってナオミの体は全く芸術品となり、私の眼には實際奈良の仏像以上に完璧なものであるかと思われ、それをしてしみ眺めていると、宗教的な感激さえが湧いて来るようになるのです。ああ、私は一体どう云う積りでこんな精密な写真を撮って置いたのでしょうか？ これがいつかは悲しい記念になると云うことを、予覚してでもいたのでしょうか？

私のナオミを恋うる心は加速度を以て進みました。もう日が暮れて窓の外には夕の星がまたたき始め、うすら寒くさえなつて来ましたが、私は朝の十一時から御飯もたべず、火も起さず、電気をつける気力もなく、暗くなつて来る家の中を二階へ行ったり、階下へ降り

たり、「馬鹿！」と云いながら自分で自分の頭を打ったり、空家のように森閑としたアトリエの壁に向いながら「ナオミ、ナオミ」と叫んでみたり、果ては彼女の名前を呼び続けつつ床に額を擦りつけたりました。もうどうしても彼女を引き戻さなければならぬ。己は絶対無条件で彼女の前に降伏する。彼女の云うところ、欲するところ、総べてに己は服従する。……が、それにしても今頃彼女は何しているだろう？ あんなに荷物を持っていたから、東京駅からきつと自動車で行っただろう。そうだとすると浅草の家へ着いてから五六時間は立っている筈だ。彼女は実家の人々に対し、追い出されて来た理由を正直に話したろうか？ それとも例の負けず嫌いで、一時遁れの出鱈目を云い、姉や兄貴を煙に巻いてでもいるだろうか？ 千束町で卑しい稼業をしている実家、その娘だと云われることをひどく嫌って、親兄弟を無智な人種のように扱い、めつたに里へ帰ったことのない彼女。——この不調和な一族の間に、今頃どんな善後策が講ぜられていよう？ 姉や兄貴は勿論詫りに行けと云う、「あたしは決して詫まりになんか行くもんか。誰か荷物を取って来てくれろ」と、ナオミは何処までも強気に出る。そして殆ど心配などはしていないように、平気な顔で冗談を云ったり、気焰を吐いたり、英語交りにまくし立てたり、ハイカラな衣裳や持ち物などを見せびらかしたり、まるで貴族の

お嬢様が貧民窟を訪れたように、威張り散らしていやしないか。…………

しかしナオミが何と云つても、とにかく事件が事件であるから、早速誰かが飛んで来なければならぬ筈だが、…………若し当人が「詫まりになんか行かない」と云うなら、姉か兄貴が代りにやつて来るところだが、…………それともナオミの親兄弟は誰も親身にナオミのことを案じてなんぞいないのだろうか？ ちようどナオミが彼等に対して冷淡のように、彼等も昔からナオミに就いては何の責任も負わなかった。「あの兄のことは一切お任せします」と、十五の娘を此方へ預けッ放しにして、どうでも勝手にしてくれと云う態度だった。だから今度もナオミのしたい放題にさせて、打ツちやらかして置くのだろうか？ それならそれで荷物だけでも受け取りに来そうなものではないか。「帰つたら直ぐに使を寄せ、荷物はみんな渡してやるから」とそう云つてやったのに、未だに誰も来ないと云うのはどうしたんだらう？ 着換えの衣類や手周りの物は一通り持って行つたけれど、彼女の「命から二番目」である晴れ着の衣裳はまだ幾通りも残っている。どうせ彼女はあのむさくろしい千束町に一日燻っている筈はないから、毎日々々、近所隣を驚かすような派手な風俗で出歩くだらう。そうだとすれば尚更衣裳が必要な訳だし、それがなくてはとても辛抱出来ないだらうに。…………

けれどもその晩、待てど暮らせどナオミの使は来ませんでした。私はあたりが真つ暗になるまで電燈でんとうをつけずに置いたので、若しも空家と間違えられたら大変だと思つて、慌あわてて家じゅうの部屋と云う部屋へ明りを燈ともし、門の標札が落ちていやしないかと改めて見、戸口のところへ椅子いすを持つて来て何時間となく戸外の足音を聞いていましたが、八時が九時になり、十時になり、十一時になつても、……とうとう朝からまる一日立つてしまつても、何の便りもありません。そして悲觀のどん底に落ちた私の胸には、又いろいろな取り止めのない臆測おくそくが生じて来るのでした。ナオミが使を寄越さないので、事に依よつたら事件を軽く見ている証拠で、二三日したら解決がつくとたかを括くくっているんじゃないかな。「なに大丈夫だ、向うはあたしに惚ほれているんだ、あたしなしには一日も居られやしないんだから、迎いに来るに極きまつている」と、懸引をしているんじゃないかな。彼女にしたつて今まで贅沢なに馴なれて来たのが、あんな社会の人間の中で暮らせないことは分つているんだ。そうかと云つて外の男の所へ行つても、己ほど彼女を大事にしてやり、氣随氣儘きままをさせて置く者はありません。ナオミの奴やつはそんなことは百も承知で、口では強がりきやうがりを云いながら、迎いに来るのを心待ちにしているんじゃないかな。それとも明日の朝あたりでも、姉か兄貴がいよいよ仲裁にやつて来るかな。夜が忙しい商売だから、朝でなけれ

ば出られない事情があるかも知れない。何しろ使が来ないと云うのは却って一縷いちるの望みがあるんだ。明日になつても音沙汰おとさたがなければ、己は迎いに行つてやろう。もうこうなれば意地も外聞もあるもんじやない、もともと己はその意地でもつて失策しよくつたんだ。実家の奴等に笑われようと、彼女に内うちかぶと兜を見透かされようと、出かけて行つて平詫りに詫まつて、姉や兄貴にも口添えを頼んで、「後生一生のお願いだから帰つておくれ」と、百万遍も繰り返す。そうすれば彼女も顔が立つて、大手を振つて戻つて来られよう。

私は殆どまんじりともしないで一と夜を明かし、明くる日の午後六時頃まで待ちましたけれど、それでも何の沙汰もないので、もうたまりかねて家を飛び出し、急いで浅草へ駈かけ付けました。一刻も早く彼女に会いたい、顔さえ見れば安心する！——恋い焦こがれるとはその時の私を云うのでしよう、私の胸には「会いたい見たい」の願いより外何物もありませんでした。

花屋敷のうしろの方の、入り組んだ路次の中にある千束町の家へ着いたのは大方七時頃でしたらう。さすがに極まりが悪いので私はそつと格子こうしをあけ、

「あの、大森から来たんですが、ナオミは参つておりましようか？」
と、土間に立つたまま小声で云いました。

「おや、河合さん」

と、姉は私の言葉を聞きつけて次の間の方から首を出しましたが、怪訝けげんそうな顔つきをして云うのでした。

「へえ、ナオミちゃんが？——いいえ、参つてはおりませんが」

「そりや可笑おかしいな、来ていない筈はないんですが、昨夜此方こちらへ伺うと云つて出たんですから。………」

二十一

最初私は、姉が彼女の意を含んで隠しているものと邪推したので、いろいろに云つて頼んで見ましたが、だんだん聞くと、事実ナオミは此処ここへ来ていないらしいのです。

「おかしいな、どうも、……荷物も沢山持っていたんだし、あのまま何処どこへも行かれる筈はないんだけど。………」

「へえ、荷物を持つて？」

「バスケットだの、鞆かばんだの、風呂敷ふろしき包みだの、大分持つて行ったんですよ。実は昨日、つ

まらないことぢよつと喧嘩けんかしたもんですから、………」

「それで当人は、此処へ来ると云つて出たんですか」

「当人じゃあない、僕がそう云つてやつたんですよ、これから直ぐに浅草に帰つて、人を寄越せつて。——誰かあなた方が来て下されば話が分ると思つたもんですから」

「へえ、成る程、………だけどとにかく手前共へは参りませんのよ、そう云うことなら追つ付け来るかも知れませんか」

「だけでもお前めえ、昨夜ツからなら分りやしねえぜ」

と、そうこうするうちに兄貴も出て来て云うのでした。

「そりや何処か、お心当りがおあんなすつたら外を捜して御覧なさい。もう今まで来ねえようじゃあ、此処へ帰つちや来ますまいよ」

「それにナオちゃんはさつぱり家へ寄り付かないんで、あれはこうツと、いつだったかしら？——もう二た月も顔を見せたことはないんですよ」

「では済みませんが、もしも此方へ参りましたら、たとい当人が何と云おうと、早速どうか僕の所へ知らして戴いたきたいんですが」

「ええ、そりやあもう、あツしの方じゃ今更あの児をどうするツて気はねえんですから、

来れば直ぐにも知らせますがね」

上り^{あが}框へ腰をかけて、出された渋茶をすすりながら、私は暫く^{しばら}途方に暮れていましたけれど、妹が家出をしたと聞いても別に心配をするのでもない姉や兄貴が相手では、ここで衷情を訴えたところでどうにも仕様がありません。で、私は重ねて、万一彼女が立ち廻った時を移さず、昼間だったら会社の方へ電話をかけてくれること。尤も^{もつと}この頃は時々会社を休んでいるから、もしも会社に居なかった場合は直ぐ大森へ電報を打って貰^{もら}いたいこと。そうしたら私が迎いに来るから、それまで必ず何処へも出さずに置いてくれること。などをくどくど頼み込んで、それでも何だかこの連中のずべらなのがアテにならないような気がして、なお念のために会社の電話番号を教えたり、この様子では大森の家の番地なんぞも知らないのではないかと思つて、それを委^{くわ}しく書き止めたりして出て来ました。

「さて、どうしたらいいんだろう？ 何処へ行つちまったんだろう？」

——私は殆どベそを搔^かかないばかりの気持で、——いや、實際ベそを搔いていたかも知れませんが、——千束^{せんぞく}町の路次を出ると、何と云^いう目的もなく、公園の中をぶらぶら歩きながら考えました。実家へ帰らないところを見ると、事態は明かに予想したよりも重大なのです。

「これはきつと熊谷の所だ、彼奴あいつの所へ逃げて行つたんだ」——そう気がつく、ナオミが昨日出て行く時に、「だってあたし、それじゃ困るわ、今すぐいろいろ入用なものがあるんだから」とそう云つたのも、成る程思い中あたるのでした。そうだ、やつぱりそうだったんだ、熊谷の所へ行く積りだから、あんなに荷物を持つて行つたんだ。あるい或は前から、こう云う時にはこうしようと、二人で打ち合わせがしてあつたかも知れん。そうだとするとこれは中々むずかしいかも知らんぞ。第一己おれは熊谷の家が何処にあるのかも知らない。それは調べれば分るとしても、まさか彼奴が両親の家へ彼女を匿かくまつては置けなからう。彼奴は不良少年だけれど、親は相当な者らしいから、自分の息子にそんな不都合を働かして置かないだろう。彼奴も家を飛び出して、二人で何処かに隠れていやしないか？ 親の金でも引さらツ浚さらつて、遊び歩いていやしないか？ が、それならそれと、ハッキリ分つてくれればいい。そうすれば己は熊谷の親に談判して、厳しい干渉を加えて貰う。たとい彼奴が親の意見を聴かないにしたつて、金が尽きれば二人で暮らせる訳がないから、結局彼奴は自分の家へ戻るだろうし、ナオミは此方へ歸つて来る。トドの詰まりはそうなるだろうが、その間の己の苦勞と云うものは？——それが一と月で済むものやら、二た月、三月、或は半年もかかるものやら？——いや、そうなつたら大変だ。そんな事をしているうち

にだんだん帰りそびれてしまつて、又ひよつとすると第二第三の男が出来ないもんでもない。すると此奴はぐずぐずしているところじゃないんだ。こうして離れていればいるだけ彼女との縁が薄くなるんだ。刻一刻と彼女は遠くへ去りつつあるんだ。己れやれ！ 逃げようとしたつて逃がすもんか！ 己はどうしても引き戻してやるから！ 苦しい時の神頼み、——私はついぞ神信心をしたことなぞはなかったのですが、その時ふいと思ひ出して、観音様へお参りをしました。そして「ナオミの居所が一時も早く知れますように、明日にも帰つてくれますように」と、真心籠めて祈りました。それから何処をどう歩いたか、二三軒のバアへ寄つて、ぐでんぐでんに酔つ払つて、大森の家へ歸つたのは夜の十二時過ぎでした。が、酔つてはいてもナオミの事が始終頭の中にあつて、寝ようとしても容易に寝つかれず、そのうちに酒が醒めてしまつと、又しても一つの事をくよくよと考える。どうしたら居所が突き止められるか、事実熊谷と逃げたかどうか、彼奴の家へ談判するにも其奴を確かめた上でなければ軽率過ぎるし、そうかと云つて秘密探偵でも頼まなければ、ちよつと確かめる方法はなし、……と、散々思案に余つた揚句、ひよつこり考えついたのは例の浜田のことでした。そうそう、浜田と云う者が居たつけ、己はウツカリ忘れていたが、あの男なら己の味方になつてくれよう。己は「松浅」で別れた時にあの男の住所を

控えて置いた筈だから、明日にも早速手紙を出すかな。手紙なんかじゃ慓^じれたいから電報を打つか？ そいつもちよつと大袈裟^{おおげさ}なようだが、多分電話があるだろうから、電話をかけて来て貰うか？ いやいや、来て貰うには及ばないんだ。その暇があつたら熊谷の方を探つて貰う方がいいんだ。この際何より肝要なのは熊谷の動静を知ることにある。浜田だつたら手蔓^{てづる}があるから直きに報告を齎^{もた}らしてくれよう。目下のところ、己の苦しみを察してくれ、己を救つてくれる者はあの男より外にないんだ。これもやつぱり「苦しい時の神頼み」かも知れないんだが、……

明くる日の朝、私は七時に飛び起きて近所の自動電話へ馳^はせ付け、電話帳を繰ると、好い塩梅^{あんばい}に浜田の家が見つかりました。

「ああ、坊つちやまでございますか、まだお休みでございますが、………」
女中が出て来てそう云うのを、

「誠に恐れ入りますが、急な用事でございますので、ちよつと何卒^{なにとぞ}お取次を、………」
と、押し返して頼むと、暫く立つてから電話口へ出て来た浜田は、

「あなたは河合さんですか、あの大森の？」

と、寢惚^{ねぼ}けた声で云うのでした。

「ええ、そうですよ、僕は太森の河合ですよ、どうもいつぞやは大へん御迷惑をかけてしまつて、それに突然、こんな時刻に電話をかけて甚だ失礼なんですが、実はあの、ナオミが逃げてしまひましてね、——」

この、「逃げてしまひましてね」と云う時、私は覚えぬ泣き声になりました。非常に寒い、もう冬のような朝のことで、寝間着の上にとてらを一枚引つ懸けたまま慌てて出て来たものですから、私は受話器を握りながら、胸顫いが止まりませんでした。

「ああ、ナオミさんが、——矢つ張りそうだったんですか」

すると浜田は、意外にも、いやに落ち着いてそう云うのでした。

「それじゃあ、君はもう知つてゐるんですか？」

「僕は昨夜遇あいましたよ」

「えッ、ナオミに？……ナオミに昨夜遇つたんですか？」

今度は、私は前とは違つた胸顫いで、体中がガクガクしました。あまり激しく顫えたので前歯をカチリと送話器の口に打ぶつけました。

「昨夜僕はエルドラドオのダンスに行つたら、ナオミさんが来ていましたよ。別に事情を聞いた訳ではないんですけれど、どうも様子が変でしたから、大方そんな事なんだろうと

思ったんです」

「誰と一緒に来ていましたか？ 熊谷と一緒にじゃないんですか？」

「熊谷ばかりじゃありません、いろんな男が五六人も一緒に、中には西洋人もいました」

「西洋人が？……」

「ええ、そうですよ、そうして大そう立派な洋服を着ていましたよ」

「家を出る時、洋服なんぞ持っていなかったんですが、……」

「それがとにかく、洋服でしたよ。しかも非常に堂々たる夜会服を着ていましたよ」

私は狐きつねにつままれたように、ポカンとしたきり、何を尋ねていいのやらかいくら見当が付かなくなっていました。

二十二

「ああ、もし、もし、どうしたんですか、河合さん、……もし、……」

私があまり電話口で黙っているの、浜田はそう云って催促しました。

「ああ、もし、もし、……」

「ああ、……………」

「河合さんですか、……………」

「ああ、……………」

「どうしたんですか、……………」

「ああ、……………」どうしたらいいかわからないんです、……………」

「しかし電話口で考えていたって、仕様がないうちありませんか」

「仕様がないうちは分ってるんだが、……………」しかし浜田君、僕は実に困ってるんですよ。どうしたものか途方に暮れているんですよ。彼奴がいなくなってから、夜もロクロク寝ないくらいに苦しんでいるんです。……………」

ここで私は浜田の同情を求めるために精一杯の哀れみを籠めてつづけました。

「……………」浜田君、僕はこの場合、君より外に頼りにする人がないもんだから、飛んだ御迷惑をかけるんですけれど、僕は、……………」どうかしてナオミの居所を知りたいんです。熊谷の所にいるんだか、それとも誰か外の男の所にいるんだか、それをハッキリと突き止めたいんです。就いては誠に、勝手なお願いなんですが、君の御尽力でそれを調べて戴く訳には行かないでしょうか。……………」僕は自分で調べるよりも、君が調べて下さる方がいろ

いろ手蔓がおありになりはしないかと、そう思うもんですから、……………」

「ええ、そりや、僕が調べれば直きに分るかも知れませんがね」

と、浜田は造作もなさそうに云つて、

「ですが河合さん、あなたの方にも大凡^{おおよ}何処^{どこ}と云う心当りはないんですか？」

「僕はテツキリ熊谷の所だと思つていたんです。実は君だからお話しますが、ナオミは^い未^まだに僕に内証で、熊谷と関係していたんです。それがこの間バレたもんだから、とうとう僕と喧嘩になつて、家を飛び出しちまつたんです。……………」

「ふむ、……………」

「ところが君の話だと、西洋人だのいろんな男が一緒だと云うし、洋服なんか着ていると云うんで、僕には全く見当が付かなくなつちやつたんです。でも熊谷に会つて下されば大概の様子は分るだろうと思うんですが、……………」

「ああ、よござんす、よござんす」

と、浜田は私の愚痴ッぽい言葉を打ち切るように云うのです。

「それじやとにかく調べて見ますよ」

「それもどうか、成るべく至急にお願いしたいんですけれど、……………」^も若し出来るなら今日

のうちにでも結果を知らして下さると、非常に助かるんですけれど、……………」

「ああ、そうですか、多分今日じゅうには分るでしょうが、分ったら何処へお知らせしましょう？　あなたはこの頃、やっぱり大井町の会社ですか？」

「いや、この事件が起つてから、会社はずつと休んでいるんです。万一ナオミが帰つて来ないもんでもないと、そんな気がするもんですから、成るだけ家を空けないようにしているんです。それで何とも勝手な話ですけど、電話ではちよつと工合が悪いし、お目に懸れば大変好都合なんですけど、……………どうでしょう？　様子が知れたら大森の方へ来て戴くことは出来ないでしょうか？」

「ええ、構いません、どうせ遊んでいるんですから」

「ああ、有難う、そうして下さればほんとうに僕は有難いんです！」

さてそうなる、浜田の来るのが一刻千秋の思いなので、私は尚なおもセカセカしながら、

「じゃ、おいでになるのは大概何時頃になるでしょうか？　おそくも二時か三時には分るでしょうか？」

「さあ、分るだろうとは思いますが、しかし此奴こいつは一往尋ねて見てからでなけりやあハツキリしたことは云えませんか。最善の方法を取つては見ますが、場合に依よつたら二三日

かかるかも知れませんから、……………」

「そ、そりや仕方がありません、明日になつても明後日になつても、僕は君が来て下さるまで、じつと内で待つていますよ」

「承知しました、委くわしい事はいずれお目に懸くつてからお話しましょう。——じゃ左様な
ら。——」

「あ、もし、もし」

電話が切れそうになつた時、私は慌ててもう一度浜田を呼び出しました。

「もし、もし、……………」あのう、それから、……………」これはその時の事情次第でどうでもいいことなんです、君が直接ナオミにお会いになるようだったら、そして話をする機会があったら、そう云つて戴いたきたいんですがね。——僕は決して彼女の罪を責めようとはしない、彼女が墮落したに就いては自分の方にも罪のあることがよく分つた。それで自分の悪かつたことは幾重にも詫あやまるし、どんな条件でも聴き入れるから、一切の過去は水に流して、是非もう一度帰つて来てくれるように。それも厭いやなら、せめて一遍だけ僕に会つてくれるように。——」

どんな条件でも聴き入れると云う文句の次に、もつと正直な氣持を云うと、「彼女が土下

座しろと云うなら、僕は喜んで土下座します。大地に額を擦りつけろと云うなら、大地に額を擦りつけます。どうにでもして詫まります」と、寧ろ^{むし}そう云いたいくらいでしたが、さすがにそこまでは云いかねました。

「——僕がそれほど彼女のことを思っていると云うことを、若し出来るなら伝えて戴きたいんですがね。……………」

「ああ、そうですか、機会があつたらそれも十分そう云つて見ますよ」

「それから、あのう、……………或^{あるい}はああ云う気象ですから、帰りたいたく帰りたいには帰りたい、意地を突ツ張っているのじやないかと思うんです。そんな風なら、僕が非常にシヨゲているからとそう仰^おつしやつて、無理にも当人を連れて来て下さると尚いいんですが、……………」

「分りました、分りました、どうもそこまでは請け合いかねますが、出来るだけの事はやってみますよ」

余り私がしつツこいので、浜田も聊^{いささ}かウンザリしたような口調でしたが、私はその自動電話で、墓^{がまぐち}口の中の五銭銅貨がなくなるまで、三通話ほども立て続けにしゃべりました。恐らく私が泣き声を出したり、顫え声を出したりして、こんなに雄弁に、こんなにずうずうしくしゃべったことは、生れて始めてだったでしょう。が、電話が済むと、私はほッと

するどころでなく、今度は浜田の来てくれるのが、無上に待ち遠になりました。多分今日じゆうにとはいったけれども、若し今日じゆうに来ないようなら、どうしたらいいだろう？——いや、どうしたらと云うよりも、自分はどうなってしまうだろう？ 自分は今、

一生懸命ナオミを恋慕っているより外、何の仕事も持っていないのだ。どうすることも出来ずにいるのだ。寝ることも、食うことも、外へ出ることも出来ないで、家の中にじーッと籠こもつて、あかの他人が自分のために奔走してくれ、或ある報道を齎もたらしてくれるのを、手を束つかねて待つていなければならないのだ。實際人は、何もしないでいる程の苦痛はありませんが、私はその上に死ぬほどナオミが恋しいのです。その恋しさに身を慄じしながら、自分の運命を他人に委ゆだねて、時計の針を視み詰めているということは、考えて見てもたまらないことです。ほんの一分の間にしても、「時」の歩みと云うものが驚くほど遅々として、無限に長く感ぜられます。その一分が六十回でやっと一時間、百二十回でやっと二時間、仮りに三時間待つものとしても、このしよざいがない、どうにもこうにもしようのない「一分」を、セコンドの針がチクタク、チクタクと、円を一周する間を、百八十回こらえねばならない！ それが三時間どころではなく、四時間になり、五時間になり、或は半日、一日になり、二日にも三日にもなったとしたら、待ち遠しさと恋しさの余り、私はきつと発

狂するに違いのないような気がしました。

が、いくら早くても浜田の来るのは夕方になるだろうと、覚悟をきめていたのですが、電話をかけてから四時間の後、十二時頃になって、表の呼鈴がけたたましく鳴り、続いて浜田の、

「今日は」

という意外な声が聞えた時には、私は覚え^{うれ}ず、嬉し紛れに飛び上って、急いでドアを開けに行きました。そしてソワソワした口調で、

「ああ、今日は。今すぐ此^{ここ}処を開けますよ、鍵^{かぎ}が懸^かっているもんですから」

と、そう云いながらも、「こんなに早く来てくれようとは思わなかったが、事に依つたら訳なくナオミに会えたんじゃないかな。会つたら直きに話が分つて、一緒に彼女を連れて来てでもくれたんじゃないかな」と、ふとそんな風に考えると、尚更嬉しさが込み上げて来て、胸がドキドキするのです。

ドアを開けると、私は浜田のうしろの方に彼女が寄り添っているかと思つて、辺りをキョロキョロ見廻しましたが、誰も居ません。浜田がひとりポーチに立っているだけでした。「やあ、先^{さつき}刻は失礼しました。どうでしたかしら？ 分りましたか？」

私はいきなり嘯^かみ着くような調子で尋ねると、浜田はイヤに落ち着き払^かって、私の顔を憐^{あわ}れむが如く眺^べめながら、

「ええ、分ることは分りましたが、……しかし河合さん、もうあの人はとても駄目です、あきらめた方がよござんすよ」

と、キツパリ云い切つて、首を振るのでした。

「そ、そ、そりやあどう云う訳なんです？」

「どう云う訳ツて、全く話の外なんですから、——僕はあなたの為^ためを思つて云うんですが、もうナオミさんのことなんぞは、忘れておしまいになつたらどうです」

「そうすると君は、ナオミに会つてくれたんですか？ 会つて話はしてみたいけれども、とても絶望だと云うんですか？」

「いや、ナオミさんには会やしません。僕は熊谷の所へ行つて、すっかり様子を聞いて来たんです。そしてあんまりヒド過ぎるんで、実に驚いちゃまったんです」

「だけど浜田君、ナオミは何処に居るんです？ 僕は第一にそれを聞かして貰^{もら}いたいんだ」
「それが何処と云つて、極^きまった所がある訳じゃなく、彼方^{あつちこつち}此方を泊り歩いているんですよ」

「そんなに方々泊れる家はないでしょうがね」

「ナオミさんにはあなたの知らない男の友達が、幾人あるか知れやしません。尤も最初、あなたと喧嘩けんかをした日には、熊谷の所へやつて来たそうです。それも予め電話あらかじをかけて、コツソリ訪ねて来てくれるんならよかつたんだが、荷物を積んで、自動車を飛ばして、いきなり玄関に乗り着けたんで、家じゅうの者が一体あれは何者だと云う騒ぎになったものだから、『まあお上り』とも云う訳に行かず、さすがの熊谷も弱っちゃったと云っていました」

「ふうん、それから？」

「それで仕方がないもんだから、荷物だけを熊谷の部屋に隠して、二人でともかくも戸外へ出て、それから何でも怪しげな旅館へ行つたと云うんですが、しかもその旅館が、この大森のお宅の近所の何とか楼とか云う家で、その日の朝もそこで出会ってあなたに見付かった場所だと云うから、実に大胆じゃありませんか」

「それじゃ、あの日に又彼処あそこへ行つたんですか」

「ええ、そうだって云うんですよ。それを熊谷が得意そうに、のろけ交りにしゃべり散らすんで、僕は聞いていて不愉快でした」

「するとその晩は、二人で彼処へ泊ったんですね？」

「ところがそうじゃないんです。夕方までは其処にいたけれど、それから一緒に銀座を散歩して、尾張町の四つ角で別れたんだそうです」

「けれども、それはおかしいな。熊谷の奴、嘘をついているんじゃないかな、——」

「いや、まあお聞きなさい、別れる時に熊谷が少し気の毒になったんで、『今夜は何処へ泊るんだい』ツてそう云うと、『泊る所なんか幾らもあるわよ。あたしこれから横浜へ行くわ』ツて、ちつともシヨゲてなんかいないで、そのままスタスタ新橋の方へ行くんだそうです。——」

「横浜と云うのは、誰の所なんです？」

「そいつが奇妙なんですよ、いくらナオミさんが顔が広いツて、横浜なんか泊る所はないだろうから、ああ云いながら多分大森へ帰ったんだろうと、そう熊谷が思っていると、明くる日の夕方電話が懸つて、『エルドラドオで待っているから直ぐ来ないか』と云う訳なんです。それで行つて見ると、ナオミさんが目の覚めるような夜会服を着て、孔雀の羽根の扇を持って、頸飾りだの腕環だのをガラガラさせて、西洋人だのいろんな男に囲まれながら、盛んにはしゃいでいるんだそうです」

浜田の話聞いているとあたかもビックリ箱のようで、「おやッ」と思うような事実がピョンピョン跳び出して来るのです。つまりナオミは、最初の晩は西洋人の所へ泊ったらしいのですが、その西洋人はウィリアム・マツカネルとか云う名前で、いつぞや私が始めてナオミとエルドラドオヘダンスに行った時、紹介もなしに傍へ寄つて来て、無理に彼女と一緒に踊った、あのずうずうしい、お白粉しろいを塗った、にやけた男がそれだったのです。ところが更に驚くことには、——これは熊谷の観察ですが、——ナオミはあの晩泊りに行くまで、そのマツカネルと云う男とは何もそれほど懇意な仲ではなかったのだと云うのです。尤もナオミも、前から内々あの男に思おもひ召めしがあつたらしい。何しろちよつと女好きのする顔だちで、すつきりとした、役者のような所があつて、ダンス仲間で「色魔の西洋人」と云う噂うわさがあつたばかりでなく、ナオミ自身も、「あの西洋人は横顔がいいわね、何処かジョン・バリに似てるじゃないの」——ジョン・バリと云うのは亜米利加アメリカの俳優で、活動写真でお馴染なじみのジョン・バリモアのことなのです。——と、そう云っていたくらいだから、確かにあれに眼を着けていたのだ。或はちよいちよい色眼ぐらいは使ったことがあるかも知れない。それでマツカネルの方でも、「此奴は己おれに気がある」と見て、からかったことがあるんだろう。だから友達と云うのでもなく、ほんのそれだけの縁故で

もって押しかけて行つたに違いないんだ。そして訪ねて行つて見ると、マツカネルの方じや面白い鳥が飛び込んだと思つて「あなた今晚私の家へ泊りませんか」「ええ、泊つても構わないわ」と云うようなことになつたんだろう。――

「何ぼ何でも、そいつは少し信じかねるな、始めての男の所へ行つて、その晩すぐに泊るなんて。――」

「だけど河合さん、ナオミさんはそう云うことは平氣でやと思いますね、マツカネルもいくらか不思議に感じたと見えて、『このお嬢さんは一体何処の人ですか』ツて、昨夜熊谷に聞いたそうです」

「何処の人だか分らない女を、泊める方も泊める方だな」

「泊めるどころか洋服を着せてやつたり、腕環や頸飾りを着けてやつたりしているんだから、なお振^{ふる}つてゐるじゃありませんか。そうしてあなた、たった一と晩ですっかり馴^なれ馴^なれしくなつちまつて、ナオミさんは其^{そいつ}奴^{やつ}のことを『ウイリー、ウイリー』ツて呼ぶんだそうです」

「じゃ、洋服や頸飾りも、その男に買わせたんでしょうか？」

「買わせたのもあるらしいし、西洋人のことだから、友達の女の衣裳^{いしやう}か何かを借りて来

て、そいつを一時間まに合わせたのもあるらしいッて云うことですよ。ナオミさんが『あたし洋服が着てみたいわ』ッて、甘ッたれたのが始まりで、とうとう男が御機嫌を取ることになっちまったんじゃないでしょうか。その洋服も出来合いのようなものじゃなくって、体にぴったりは箆はまつていて、靴なんかもフレンチ・ヒールのきゅッと踵かかとの高い奴で、総工ナメルの爪つまさき先のところに、多分新ダイヤか何かでしようが、細かい宝石が光ってるんです。まるで昨夜のナオミさんは、お伽とぎ噺ばなしのシンデレラと云う風でしたよ」

私は浜田にそう云われて、そのシンデレラのナオミの姿がどんなに美しかったかと思うと、はっと我知らず胸が躍って来るのでしたが、又その次の瞬間には、あまりな不行跡あきに呆あきれてしまつて、浅ましいような、情ないような、口惜くやしいような、何とも云えないイヤな気持ちになるのです。熊谷ならばまだしものこと、性の知れない西洋人の所へなんぞ出かけて行つて、ずるずるべつたりに泊り込んで、着物をこしらちぢえて貰うなんて、それが昨日まで仮りにも亭主を持っていた女のすべき業だろうか？ ああ、己が長年同棲どうせいしていたナオミと云うのは、そんな汚れた、売春婦のような女だったのか？ 己には彼女の正体が今の今まで分らないで、愚かな夢を見ていたのか？ ああ、成るほど浜田の云うように、己はどんなに恋しくつても、もうあの女はあきらめなければならぬのだ。己は見事に耻はじを搔か

された、男の面^{つら}へ泥を塗られた。…………

「浜田君、くどいようでももう一度念を押しますが、今の話は残らず事実なんですね？
熊谷が証明するばかりでなく、君も証明するんですね？」

浜田は私の眼の中に涙が湧^わいて来たのを見て、気の毒^{うなず}そうに頷^{うなず}きながら、

「そう云われると僕はあなたのお心持をお察^{さつ}して、云い辛^{づら}くなって来るんですが、現に
昨夜は僕もその場に居合わせたんだし、大体熊谷の云うことは本当だろうと思われるん
です。まだこの外にもお話すればいろいろな事が出て来るので、成る程とお思いになるで
しょうが、何卒^{どうぞ}そこまではお聞きにならずに、僕を信じて下さいませんか。僕が決して、面
白^{面白}半分に事実を誇張しているのではないと云うことを、——」

「ああ、有難う、そこまで伺えばもういいんです、もうそれ以上聞く必要は…………」
どうした加減か、こう云った拍子に私の言葉は喉^{のど}に詰まって、急にパラパラ大粒の涙が落
ちて来たので、「こりやいけない」と思った私は、突然浜田にひしと抱き着き、その肩の
上へ顔を突ツ伏してしまいました。そしてわあツと泣きながら、途轍^{とてつ}もない声で叫びまし
た。

「浜田君！ 僕は、僕は、…………もうあの女をキレイサッパリあきらめたんです！」

「御尤もです！　そう仰つしやるのは御尤もです！」

と、浜田も私に釣り込まれたのか、矢張濁声^{だみごえ}で云うのでした。

「僕は、ほんとうの事を云うと、ナオミさんには最早や望みがないと云うことを、今日はあなたに宣告する気で来たんですよ。そりやあの人のことですから、又いつ何時、あなたの所へ平気な顔で現れるかも知れませんが、今では事実、誰も真面目^{まじめ}でナオミさんを相手にする者はありません。熊谷なんぞに云わせると、まるでみんなが慰み物にしているんで、とても口には出来ないようなヒドイ仇名^{あだな}さえ附いているんです。あなたは今まで知らない間にどれほど耻を搔かされているか分りやしません。……」

嘗ては私と同じように熱烈にナオミを恋した浜田、そして私と同じように彼女に背かれてしまった浜田、——この少年の、悲憤^{えふ}に充ちた、心の底から私の為を思ってくれる言葉の節々は、鋭いメスで腐った肉を抉^{えぐ}り取るような効果がありました。みんなが慰みものになっている、口には出来ないヒドイ仇名^{おこり}が付いている、——この恐ろしいスツパ抜きは却^{かえ}つて気分をサバサバとさせ、私は瘡^{おこり}が取れたように一時に肩が軽くなって、涙さえ止まってしまうした。

二十三

「どうです河合さん、そう閉じ籠こもつてばかりいないで、気晴らしに散歩して見ませんか」と、浜田に元氣をつけられて、「それではちよつと待つて下さい」と、この二日間口も漱すすがず、髯ひげも剃そらずにいた私は、剃かみそり刀をあてて、顔を洗つて、セイセイとした心持になり、浜田と一緒に戸外へ出たのはかれこれ二時半頃でした。

「こう云う時いには、却つて郊外を散歩しましょう」と浜田が云うので、私もそれに賛成しましたが、

「それじゃ、此方へ行きましょうか」

と、池上いけがみの方へ歩き出したので、私はふいとイヤな氣がして立ち止まりました。

「あ、其方そっちはいけない、その方角は鬼門ですよ」

「へえ、どう云う訳で？」

「さつきの話の、曙あけぼのろう楼と云う家がその方角にあるんですよ」

「あ、そいつはいけない！　じゃあどうしましょう？　これからずっと海岸へ出て、川崎の方へ行つて見ましょうか」

「ええ、いいでしょう、それなら一番安全です」

すると浜田は、今度はグルリと反対を向いて、停車場の方へ歩き出しましたが、考えて見ると、その方角も満更危険でないことはない。ナオミが未だに曙楼へ行くのだとすれば、ちやうど今頃熊谷を連れて出て来ないとも限らないし、例の毛唐と京浜間を往復しないものでもないし、いずれにしても省線電車の停る所は禁物だと思ったので、

「今日は君には飛んだお手数をかけましたなあ」

と、私は何気なくそう云いながら、先へ立って、横丁を曲って、田圃路たんぼみちにある踏切を越えるようにしました。

「なあに、そんな事は構いません、どうせ一度はこう云う事がありやしないかと思つていたんです」

「ふむ、君から見たら、僕と云うものは随分滑稽こっけいに見えたでしょうね」

「けれども僕も、一時は滑稽だつたんだから、あなたを笑う資格はありません。僕はただ、自分の熱が冷めて見ると、あなたを非常にお気の毒だとは思いましたよ」

「しかし君は若いんだからまだいいですよ、僕のように三十幾つにもなって、こんな馬鹿ばかな目を見るなんて、話にも何もなりやしません。それも君に云われなければ、いつまで馬

鹿を続けていたか知れないんだから、………」

田圃へ出ると、晩秋の空はあたかも私を慰めるように、高く、爽やかに晴れていましたが、風がひゅうひゅう強く吹くので、泣いた跡の、脹れぼったい眼の縁がヒリヒリしました。そして遠くの線路の方には、あの禁物の省線電車が、畑の中をごうごう走って行くのでした。

「浜田君、君は昼飯をたべたんですか」

と、暫く無言で歩いてから、私は云いました。

「いや、実はまだですが、あなたは？」

「僕は一昨日から、酒は飲んだが飯は殆どたべないんで、今になったら非常に腹が減って来ました」

「そりやそうでしょう、そんな無茶をなさらない方がよござんすね、体を壊しちゃつまりませんから」

「いや、大丈夫、君のお蔭で悟りを開いちゃったから、もう無茶な事はしやしません。僕は明日から生れ変った人間になります。そうして会社へも出る積りです」

「ああ、その方が気が紛れますよ。僕も失恋した時分、どうかして忘れようと思って、一

生懸命音楽をやりましたっけ」

「音楽がやれると、そう云う時にはいいでしょうなあ。僕にはそんな芸はないから、会社の仕事をコツコツやるより仕方がないが。——しかしとにかく腹が減ったじやありませんか、何処か^{どこ}で飯でも喰いましょうよ」

二人はこんな風にしゃべりながら、六郷^{ろくごう}の方までぶらぶら歩いてしまいましたが、それから間もなく、川崎の町の或る牛肉屋^あへ上り込んで、ジクジク煮える鍋^{なべ}を囲みながら、また「松浅」の時のように杯^やの遣り取りを始めていました。

「君、君、どうです一杯」

「やあ、そう飲まされちゃ、空^すき腹だからこたえますなあ」

「まあいいでしょう、今夜は僕の厄落しだから、一つ祝杯を挙げて下さい。僕も明日から酒は止め^やます、その代り今夜は大いに酔って談じようじやありませんか」

「ああ、そうですか、それじやあなたの健康を祝します」

浜田の顔が真っ赤に火照^{ほて}って、満面に出来たニキビの頭^{あたま}が、あたかも牛肉が湯立ったようにぶつぶつ光り出した時分には、私も大分酔っ払って、悲しいのだから嬉^{うれ}しいのだから何も分らなくなっていました。

「ところで浜田君、僕は聞きたいことがあるんだ」

と、私は頃合を見計らって、一段と膝^{ひざ}を進めながら、

「ヒドイ仇名がナオミに附いていると云うのは、一体どんな仇名ですか？」

「いや、そりや云えません、そりやあとてもヒドイんですから」

「ヒドクったって構わんじやありませんか。もうあの女は僕とはあかの他人だから、遠慮することはないじやないですか。え、何と云うんだか教えて下さいよ。却ってそいつを聞かされた方が、僕は氣持がサツパリするんだ」

「あなたはそうかも知れませんが、僕には到底、云うに堪えないことなんだから堪^{かん}忍^{にん}して下さい。とにかくヒドイ仇名だと思つて、想像なすつたら分るんですよ。尤^{もつと}もそう云う仇名が附いた、由来だけならお話してもよござんすがね」

「じゃあその由来を聞かして下さい」

「しかし河合さん、……困つちやったなあ」

と云つて、浜田は頭を搔^かきながら、

「それも随分ヒドイんですよ、お聞きになつたらいくら何でも、きつと氣持を悪くしますよ」

「いいです、いいです、構わないから云つて下さい！　僕は今じや純然たる好奇心から、あの女の秘密を知りたいんです」

「じゃあその秘密を少々ばかり云いましょうか、——あなたは一体、この夏鎌倉にいらした時分、ナオミさんに幾人男があつたと思います？」

「さあ、僕の知っている限りでは、君と熊谷だけだけれど、まだその外にもあつたんですか？」

「河合さん、あなた驚いちやいけませんよ、——関も中村もそうだったんですよ」

私は酔つてはいましたけれど、ビリリと体に電気が来たような気がしました。そして思わず、眼の前にあつた杯をガブガブ五六杯引つかけてから、始めて口を利ききました。

「するとあの時の連中は、一人残らず？——」

「ええ、そうですよ、そうしてあなた、何処で会つていたと思うんです？」

「あの大久保の別荘ですか？」

「あなたの借りていらした、植木屋の離れ座敷ですよ」

「ふうむ、……………」

と云つたなり、まるで息でも詰まったようにしんと沈んでしまった私は、

「ふうむ、そうか、実際驚きましたなあ」

と、やっと呻^{うな}るような声を出しました。

「だからあの時分、恐らく一番迷惑したのは植木屋のかみさんだったでしょうよ。熊谷の義理があるもんだから、出てくれるとも云う訳に行かず、そうかと云って自分の家が一種の魔窟^{まくつ}になってしまつて、いろんな男がしつきりなしに出入りするんで、近所隣りには体裁が悪いし、それに万一、あなたに知れたら大変だと思ふもんだから、ハラハラしていたようでしたよ」

「ははあ、成る程、そう云われりやあ、いつだか僕がナオミのことを尋ねると、かみさんがひどく面喰つて、オドオドしていたようでしたが、そう云う訳があつたんですか。大森の家は君の密会所にされるし、植木屋の離れは魔窟になるし、それを知らずにいたなんて、イヤハヤどうも、散々な目に遭つてたんだな」

「あ、河合さん、大森のことは云いッこなし！ それを云われると詫^{あや}まります」

「あはははは、なあにいいですよ、もう何もかも一切過去の出来事だから、差^さ支^しえ^{つか}ないじゃありませんか。しかしそれ程ナオミの奴^{やつ}に巧^{うま}く欺^{だま}されていたのかと思うと、寧^{むし}ろ欺されても痛快ですな。あんまり技がキレイなんで、唯^{ただ}あッと云つて感心しちまうばかりです

な」

「まるで相撲の手か何かで、スポリと背負い投げを喰わされたようなものですからね」

「同感々々、全くお説の通りですよ。——それで何ですか、その連中はみんなナオミにほんろう翻弄されて、互に知らずにいたんですか？」

「いや、知ってましたさ、どうかすると一度に二人がカチ合うことがあったくらいです」

「それで喧嘩けんかにもならないんですか？」

「奴等は互に、暗黙のうちに同盟を作つて、ナオミさんを共有物にしていたんです。つまりそれからヒドイ仇名が附いちやつたんで、蔭じゃあみんな、仇名でばかり呼んでましたよ。あなたはそれを御存じないから、却つて幸福だったけれど、僕はつくづく浅ましい気がして、どうかしてナオミさんを救い出そうと思つたんですが、意見をするつとんと怒つて、あべこべに僕を馬鹿にするんで、手の付けようがなかったんです」

浜田もさすがにあの時分のことを想い出おもしたのか、感傷的な口調になって、

「ねえ河合さん、僕はいつぞや『松浅』でお目に懸つた時、こんなことまではあなたに云わなかったでしょう。——」

「あの時の君の話だと、ナオミを自由にしているものは熊谷だと云う——」

「ええ、そうでした、僕はあの時そう云いました。尤もそれは嘘じやないので、ナオミさんと熊谷とはガサツな所が性に合つたのか、一番仲よくしていました。だから誰よりも熊谷が巨魁だ。悪いことはみんな彼奴が教えるんだと思つたので、ああ云う風に云つたのですが、まさかそれ以上は、あなたに云えなかつたんですよ。まだあの時は、あなたがナオミさんを捨てないように、そして善良な方面へ導いておやりになるようにと、祈つていたのですから」

「それが導くどころじやない、却つて此方が引き摺られて行つちまつたんだから、——」

「ナオミさんに懸つた日には、どんな男でもそうなりませう」

「あの女には不思議な魔力があるんですな」

「確かにあれは魔力ですなあ！ 僕もそれを感じたから、もうあの人には近寄るべからず、近寄つたらば、此方が危いと悟つたんです。——」

ナオミ、ナオミ、——互の間にその名が幾度繰り返されたか知れませんでした。二人はその名を酒の肴にして飲みました。その滑かな発音を、牛肉よりも一層旨い食物のように、舌で味わい、唾液で舐り、そして唇に上せました。

「だがいいですよ、まあ一遍はああ云う女に欺されて見るのも」

と、私は感慨無量の体でそう云いました。

「そりやそうですとも！ 僕はとにかくあの人のお蔭で初恋の味を知ったんですもの。たとい僅かわずの間でも美しい夢を見せて貰もらった、それを思えば感謝しなけりやなりませんよ」

「だけでも今にどうなるでしょう、あの女の身の行く末は？」

「さあ、これからどんな墮落して行くばかりでしょうね。熊谷の話じゃ、マツカネルの所にだつて長く居られる筈はずはないから、二三日したら又何処かへ行くだろう、己おれんところにも荷物があるから来るかも知れないツて云っていましたが、全体ナオミさんは、自分の家がないんでしょうか？」

「家は浅草の銘酒屋なんですよ、——彼奴に可哀かわいそうだと思つて、今まで誰にも云つたことはありませんがね」

「ああ、そうですか、やつぱり育ちと云うものは争われないもんですなあ」

「ナオミに云わせると、もとは旗本の侍で、自分が生れた時は下二番町の立派な邸やしきに住んでいた。『奈緒美』と云う名はお祖母ばあさんが附けてくれたんで、そのお祖母さんは鹿鳴ろくめい館かん時代にダンスをやったハイカラな人だったと云うんですが、何処まで本当だか分りやしません。何しろ家庭が悪かつたんです、僕も今になって、しみじみそれを思いますよ」

「そう聞くと、尚なおさら更恐ろしくなりますなあ、ナオミさんには生れつき淫蕩いんとうの血が流れていたんで、ああなる運命を持つていたんですね、折角あなたに拾い上げて貰いながら、

——」

二人はそこで三時間ばかりしゃべりつづけて、戸外へ出たのは夜の七時過ぎでしたが、いつまで立っても話は尽きませんでした。

「浜田君、君は省線で帰りますか？」

と、川崎の町を歩きながら、私は云いました。

「さあ、これから歩くのは大変ですから、——」

「それはそうだが、僕は京浜電車にしますよ、彼奴が横浜にいるんだとすると、省線の方は危険のような気がするから」

「それじゃ僕も京浜にしましょう。————だけでもいずれ、ナオミさんはああ云う風の方八方飛び廻まわっているんだから、きつと何処かで打ぶつかりますよ」

「そうなつて来ると、うっかり戸外も歩けませんね」

「盛んにダンス場へ出入りしているに違いないから、銀座あたりは最も危険区域ですね」

「大森だつて危険区域でないこともない、横浜があるし、花月園があるし、例の曙楼があ

るし、……事に依つたら、僕はあの家を畳んでしまつて下宿生活をするかも知れません。当分の間、このホトボリが冷めるまでは彼奴の顔を見たくないから」

私は浜田に京浜電車を附き合つて貰つて、大森で彼と別れました。

二十四

私がこう云う孤独と共に失恋に苦しめられている際に、又もう一つ悲しい事件が起りました。と云うのは外でもなく、郷里の母が脳溢血のういつけつで突然逝いつてしまったことです。危篤きとくだと云う電報が来たのは、浜田に会つた翌々日の朝のことで、私はそれを会社で受け取ると、すぐその足で上野へ駈かけつけ、日の暮れ方に田舎の家へ着きましたが、もうその時は、母は意識を失つていて、私を見ても分らないらしく、それから二三時間の後に息を引き取つてしまいました。

幼い折に父を失い、母の手一つで育つた私は、「親を失う悲しみ」と云うものを始めて経験した訳です。況いんや母と私の仲は世間普通の親子以上であつたのですから。私は過去を回想しても、自分が母に反抗したことや、母が私を叱しかつたことや、そう云う記憶を何一つ

として持つていません。それは私が彼女を尊敬していたせいもあるでしょうが、寧ろそれより、母が非常に思いやりがあり、慈愛に富んでいたからです。よく世間では、息子がだんだん大きくなり、郷里を捨てて都会へ出るようになってしまうと、親は何かと心配したり、その子の素行を疑ったり、或はそれが原因で疎遠になったりするものですが、私の母は、私が東京へ行つてから後も、私を信じ、私の心持を理解し、私の為めを思ってくれました。私の下に二人の妹があるだけで、総領息子を手放すことは、女親としては淋しくもあり心細くもあつたでしょうに、母は一度も愚痴をこぼしたことはなく、常に私の立身出世を祈つていました。それ故私は、彼女の膝下にいた時よりも遠く離れてしまった時に、一層強く、彼女の慈愛のいかに深いかを感じたものです。殊にナオミとの結婚前後、それに引き続いていろいろの我が儘を、母が快く聴いてくれる度毎に、その温情を涙ぐましく思わないことはなかつたのです。

その母親にこうも急激に、思いがけなく死なれた私は、亡骸の傍に侍りながら夢に夢見る心地でした。つい昨日まではナオミの色香に身も魂も狂つていた私、そして今では私の前に跪いて線香を手向けている私、この二つの「私」の世界は、どう考えても連絡がないような気がしました。昨日の私がほんとうの私か、今日の私がほんとうの私か？——嘆

き、悲しみ、愕おどろきの涙に暮れつつも、自分で自分を省ると、何処どこからともなくそう云う声が聞えます。「お前の母が今死んだのは、偶然ではないのだ。母はお前を戒めるのだ、教訓を垂れて下すつたのだ」と、又一方からそんな囁ささやきも聞えて来ます。すると私は、今更のように在りし日の母の倂おもかげの偲しのび、済まない事をしたのを感じて、再び悔恨の涙が堰せきあえず、あまり泣くので極きまりが悪いので、そつとうしろの裏山へ登って、少年時代の思い出に充みちた森や、野路のじや、畑の景色を瞰みおろしながら、そこでさめざめと泣きつづけたりするのです。

この大いなる悲しみが、何か私を玲瓏れいろうたるものに浄化してくれ、心と体に堆積たいせきしていた不潔な分子を、洗い清めてくれたことは云うまでもありません。この悲しみがなかったなら、私は或は、まだ今頃はあの汚けがらわしい淫婦のことが忘れられず、失恋の痛手に悩んでいたでしょう。それを思うと母が死んだのは矢張無意義ではないのでした。いや、少くとも、私はその死を無意義にしてはならないのでした。で、その時の私の考では、自分は最早や都会の空気が厭いやになつた、立身出世と云うけれども、東京に出て唯徒ただたずらに輕佻けいちよう浮華かな生活するのが立身でもなし、出世でもない。自分のような田舎者には結局田舎が適あっているのだ。自分はこのまま国に引つ込んで、故郷の土に親しもう。そして母親の墓

守をしながら、村の人々を相手にして、先祖代々の百姓になろう。と、そんな氣持にさえなつたのですが、叔父や、妹や、親類の人々の意見では、「それもあんまり急な話だ、今お前さんが力を落すのも無理はないが、さればと云つて男一匹が、母の死のために大事な未来をむぎむぎ埋めてしまふでもなからう。誰でも親に死に別れると一時は失望するものだけれど、月日が立てばその悲しみも薄らいで来る。だからお前さんも、そうするならばそうするで、もつとゆつくり考えてからにしたらよからう。それに第一、突然罷めてしまつたんでは会社の方へも悪いだらうから」と云うのでした。私は「実はそれだけではない、まだみんなに云わなかつたが、女房の奴に逃げられてしまつて、………」と、つい口もとまで出ましたけれど、大勢の前で耻はづかしくもあり、ごたごたしている最中なので、それは云わずにしまいました。（ナオミが田舎へ顔を見せないことに就いては、病氣だと云つて取り繕つて置いたのです）そして初七日の法要が済むと、後々の事は、私の代理人として財産を管理してしてくれた叔父夫婦に頼み、とにかくみんなの云う言を聴いて一ひと先まず東京へ出て来ました。

が、会社へ行つても一向面白くありません。それに社内での私の氣受けも、前ほど良くありません。精せい励れい恪かつ勤きん、品行方正で「君子」の仇名あだなを取つた私も、ナオミのことですつ

かり味噌みそを附けてしまつて、重役にも同僚にも信用がなく、甚だしきは今度の母の死去に就いても、それを口実に休むのだらうと、冷やかす者さえあるのです。そんなこんなで私は愈 《いよいよ》イヤ氣がさして、二七日の日に一と晩泊りで帰省した折、「そのうち会社を罷めるかも知れない」と、叔父に洩もらしたくらいでした。叔父は「まあまあ」と云つて、深くも取り上げてくれないので、又明るる日から渋谷会社へ出ましたけれど、会社にいる間はまだいいとして、夕方から夜の時間が、どうにも私には過しうがありません。それと云うのが、田舎へ引つ込むか、断然東京に踏み止ふとどまるか、その決心がつきませんから、私は未だいまに下宿住まいをするのでもなく、ガランとした大森の家に独りで寝泊りをしていたのです。

会社が済むと、私は矢張ナオミに遇あうのが厭いとでしたから、賑やかな場所は避けるようにし、京浜電車で直すぐ大森へ帰ります。そして近所の一品料理か、そばかうどんで型ばかりの晩飯をたべると、もうそれからは何もする事がありません。仕方がないから寢室へ上つて布団ふとんを被かぶつてしまいましたが、そのままやすや寢られることはめつたになく、二時間も三時間も眼が冴さえています。寢室と云うのは、例の屋根裏の部屋のこと、そこには今でも彼女の荷物が置いてあり、過去五年間の不秩序、放埒ほうちやう、荒色の匂においが、壁にも柱にも滲し

み着いています。その匂とはつまり彼女の肌の臭においで、不精な彼女は汚れ物などを洗濯もせず、丸めて突っ込んで置くものですから、それが今では風通しの悪い室内に籠こもってしまっているのです。私はこれではたまらないと思つて、後にはアトリエのソファに寝ましたが、そこでも容易に寝つかれないことは同じでした。

母が死んでから三週間過ぎて、その年の十二月に這入はいつてから、私は遂ついに辞職の決心を固めました。そして会社の都合上、今年一杯で罷めると云うことに極まりました。尤もこれもつとは誰にも予め相談あらかじをせず、独りで運んでしまったので、国の方ではまだ知らないでいたのですが、そうなつて見ると後一と月の辛抱ですから、私は少し落ち着きました。いくらか心にも余裕が出来、暇な時には読書するとか、散歩するとかしましたけれど、しかしそれでも危険区域には、決して近寄りませんでした。或ある晩あまり退屈なので品川の方まで歩いて行つた時、時間つぶしに松之助の映画を見る気になって活動小屋に這入つたところが、ちようどロイドの喜劇を映していて、若い亜米利加アメリカの女優たちが現れて来ると、矢張りいろいろ考え出されてイケませんでした。「もう西洋の活動写真は見ないことだ」と、私はその時思いました。

すると、十二月の半ばの、或る日曜の朝でした。私が二階に寝ていると、（私はその頃、

アトリエでは寒くなつて来たので再び屋根裏へ引つ越していました。階下で何かがさがさと云う物音がして、人のけはいがするのです。ハテ、おかしいな、表は戸締まりがしてある筈だが、……と、そう思っているうちに、やがて聞き覚えのある足音がして、それがずかずか階段を上つて、私が胸をヒヤリとさせる暇もなく、

「今日はア」

と、晴れやかな声で云いながら、いきなり鼻先のドアを開けて、ナオミが私の眼の前に立ちました。

「今日はア」

と、彼女はもう一度そう云つて、キョトンとした顔で私を見ました。

「何しに来た？」

私は寢床から起きようとししないで、静かに、冷淡にそう云いました。よくもずうずうしく来られたものだ。と心のうちでは呆れながら。^{あき}——

「あたし？——荷物を取りに来たのよ」

「荷物は持つて行つてもいいが、お前、何処から這入つて来たんだ」

「表の戸から。——あたしん所に鍵^{かぎ}があつたの」

「じゃあその鍵を置いて行っておくれ」

「ええ、置いて行くわ」

それから私は、ぐるりと彼女に背中を向けて黙っていました。暫くの間、彼女は私の枕もとでばたンばたン云わせながら、風呂敷包みを拵えているのでしたが、そのうちにきゅツと帯を解くような音がしたので、気が付いて見ると、彼女は部屋の隅の方の、しかも私の視線の届く場所へやって来て、後向きになって、着物を着換えているのです。私はさつき、彼女が此処へ這入って来た時、早くも彼女の服装に注意したのですが、それは見覚えのない銘仙の衣類で、しかも毎日そればかり着ていたものか、襟垢が附いて、膝が出て、よれよれになっていたのでした。彼女は帯を解いてしまうと、その薄汚い銘仙を脱いで、これも汚いメリンスの長襦袢一つになりました。それから、今引き出した金紗縮緬の長襦袢を取って、それをふわりと肩に纏って、体中をもくもくさせながら、下に着ていたメリンスの方を、するすると殻を脱ぐように畳の上へ落します。そしてその上へ、好きな衣裳の一つであった亀甲緋の大島を着て、紅と白との市松格子の伊達巻を巻いてぎゅうツと胴がくびれるくらい固く締め上げ、今度は帯の番かと思うと、私の方を向き直って、そこにしゃがんで、足袋を穿き換えるのでした。

私は何より、彼女の素足を見せられるのが一番強い誘惑なので、成るべく其方そっちを見ないようにはしましたけれど、それでもちよいちよい眼を向けないではいられませんでした。彼女も無論それを意識してやっているのです、わざとその足を鰭ひれのようにくねくねさせながら、時々探りを入れるように、私の眼つきにそつと注意を配りました。が、穿き換えてしまうと、脱ぎ捨てた着物をさつさと始末して、

「さよならア」

と云いながら、戸口の方へ風呂敷包みを引き摺ひずつて行きました。

「おい、鍵を置いて行かないか」

と、私はその時始めて声をかけました。

「あ、そうそう」

と彼女は云つて、手提袋から鍵を出して、

「じゃ、此処へ置いて行くわよ。——だけでもあたし、とても一遍じゃ荷物が運びきれないから、もう一度来るかも知れないわよ」

「来ないでもいい、己おれの方から浅草の家へ届けてやるから」

「浅草へ届けられちゃ困るわ、少し都合があるんだから。——」

「そんなら何処へ届けたらいいんだ」

「何処ツてあたし、まだ極まつちやあいないんだけれど、………」

「今月中に取りに來なけりや、己は構わず浅草の方へ届けるからな、———そういつまでもお前の物を置いとく訳には行かないんだから」

「ええ、いいわ、直き取りに來るわ」

「それから、断つて置くけれど、一遍で運びきれるように車でも持つて、使の者を寄越しておくれ、お前自身で取りに來ないで」

「そう、———じゃ、そうします」

そして彼女は出て行きました。

これで安心と思つてしていると、二三日過ぎた晩の九時頃、私がアトリエで夕刊を読んでいる時、又ガタリと云う音がして、表のドアへ誰かが鍵を挿し込みました。

二十五

「誰？」

「あたしよ」

云うと同時にバタンと戸が開いて、黒い、大きな、熊くまのような物体が戸外の闇やみから部屋へ
闖ちん入にゆうして来ましたが、忽たちまちぱつとその黒い物を脱ぎ捨てると、今度は狐きつねのように白い
肩だの腕だのを露あらわにした、うすい水色の仏蘭西フランスちりめんのドレスを纏まとった、一人の見馴みな
れない若い西洋の婦人でした。肉づきのいい項うなじには虹にじのようにキラキラ光る水晶の頸飾くびかざり
りをして、眼深まぶかに被まぶつた黒天鵝絨びろうどの帽子の下には、一種神秘な感じがするほど恐ろしく白
い鼻せんだんの尖端せんたんと頤あごの先が見え、生々しい朱の色をした唇が際立きわだっていました。

「今晚はア」

と、そう云う声をして、その西洋人が帽子を取った時、私は始めて「おや、この女は？——
——」とそう思い、それからしみじみ顔を眺めているうちに、漸ようやく彼女がナオミであるこ
とに気がつきました。こう云うと不思議なようですけれども、事実それほどナオミの姿は
いつもと変っていたのです。いや、姿だけならいくら変っても見違える筈はずはありませんが、
何よりも先まず私の瞳ひとみを欺あざむいたものはその顔でした。どう云う魔法を施したのか、顔がす
っかり、皮膚の色から、眼の表情から、輪廓りんかくまでが変っているの、私はその声を聞か
なかったら、帽子を脱いだ今になっても、まだこの女は何処かの知らない西洋人だと思っ

ていたかも知りません。次には前にも云う通り、その肌の色の恐ろしい白さです。洋服の外へはみ出している豊かな肉体のあらゆる部分が、林檎りんごの实のように白いことです。ナオミも日本の女としては黒い方ではありませんでしたが、しかしこんなに白い筈はない。現に殆どほとん肩の方まで露出している両腕を見ると、それがどうしても日本人の腕とは信じられない。いつぞや帝劇でバンドマンのオペラがあつた時、私は若い西洋の女優の腕の白さに見惚みほれたことがありましたつけが、ちょうどこの腕があれに似ている、いや、あれよりも白いくらいな感じでした。

するとナオミは、その水色の柔かい衣と頸飾りとをゆらりとさせて、踵かかとの高い、新ダイヤの石を飾つたパテントレザー靴の爪つまさき先でチョコチョコと歩いて、——ああ、これがこの間浜田の話したシンデレラの靴なんだなど、私はその時思いました。——片手あせんを腰にあてて、肘ひじを張つて、さも得意そうに胸をひねつて奇妙なしなを作りながら、啞然あぜんとしている私の鼻先へ、いきなり無遠慮に寄つて来たものです。

「讓治さん、あたし荷物を取りに来たのよ」

「お前が取りに来ないでもいい、使を寄越せと云つたじゃないか」

「だつてあたし、使を頼む人がなかつたんだもの」

そう云う間も、ナオミは始終、体をじつとしてはいませんでした。顔はむずかしく、真面目腐った風をしながら、脚をぴたりと喰つ着けて立つて見るとか、片足を一步蹈み出して見るとか、踵でコツンと床板を叩いて見るとか、その度毎に手の位置を換え、肩を聳やかし、全身の筋肉を針線のように緊張させ、総べての部分に運動神経を働かせていました。すると私の視覚神経もそれに従つて緊張し出して、彼女の一挙手、一投足、その体中の一寸々々を、残る隈なく見て取らないではいられませんでした、よくよくその顔に注意すると、成るほど面変りをしたのも道理、彼女は生え際の髪の毛を、二三寸ぐらいに短く切つて、一本々々毛の先を綺麗に揃えて、支那の少女がするように、額の方へ暖簾の如く垂れ下げているのです。そして残りの毛髪を一つに纏めて、円く、平に、顱頂部から耳朶の上へ被らせているのが、大黒様の帽子のようです。これは彼女の今までにない結髪法で、顔の輪廓が別人のようになっていたのは、このせいに違いありません。それから尚氣を付けて見ると、眉の恰好が又いつもとは異つています。彼女の眉毛は生れつき太く、クツキリとして濃い方であるのに、それが今夜は、細長い、ぼうツと霞んだ弧を描いて、その弧の周囲は青々と剃つてあるのです。これだけの細工がしてあることは直ぐと私に分りましたが、魔法の種が分らないのは、その眼と、唇と、肌の色でした。眼玉がこんなに

西洋人臭く見えているのは、眉毛のせいもあるけれども、まだその外にも何か仕掛けがしてあるらしい。それは大方眼瞼まぶたと睫毛まつげだ、あすこに何か秘密があるのだ、と、そうは思つても、それがどう云う仕掛けであるか判然しません。唇なども、上唇の真ん中のところが、ちょうど桜の花弁のように、いやにカッキリと二つに割れていて、しかもその紅あかさは、普通の口紅をさしたのとは違った、生き生きとした自然のつやがある。肌の白さに至つては、いくら視詰みづめても全く生地しういの皮膚のようで、お白粉あじらしい痕あとがありません。それに白いの顔ばかりでなく、肩から、腕から、指の先までがそうなのですから、もしお白粉あやを塗つたとすれば全身へ塗つていなければならぬ。で、この不可解なえたいの分らぬ妖あやしい少女、——それはナオミであると云うよりも、ナオミの魂が何かの作用で、或る理想的な美しさを持つ幽霊になつたのじゃないかしらん？ と、私はそんな気さえました。

「ねえ、いいでしょう、二階へ荷物を取りに行つても？——」

と、ナオミの幽霊はそう云いました、が、その声を聞くと矢張いつものナオミであつて、確かに幽霊ではありません。

「うん、それはいい、……それはいいが、……」

と、私は明かに慌あわてていたので、少し上ずつた口調で云いました。

「…………お前、どうして表の戸を開けたんだ？」

「どうしてツて、鍵で開けたわ」

「鍵はこの前、此処へ置いて行つたじゃないか」

「鍵なんかあたし、幾つもあるわよ、一つツきりじゃないことよ」

その時始めて、彼女の紅い唇が突然微笑を浮かべたかと思うと、媚^こびるような、嘲^{あざけ}るような眼つきをしました。

「あたし、今だから云うけれど、合鍵を沢山^{こしら}拵えて置いたの、だから一つぐらい取られたつて困りやしないわ」

「けれども己の方が困るよ、そう度々やつて来られちゃ」

「大丈夫よ、荷物さえすつかり運んでしまえば、来いと云つたつて来やしないわよ」

そして彼女は、踵でクルリと身を翻^{ひるがえ}して、トン、トン、トンと階段を昇つて、屋根裏の部屋へ駈^かけ込みました。…………

…………それから一体、何分ぐらい立つたでしょうか？ 私^{わたし}がアトリエのソファに靠^{もた}れて、彼女が二階から降りて来るのをぼんやり待つていた間、…………それは五分とは立たない程の間だったか、或^{あるい}は半時間、一時間ぐらいもそうしていたのか？…………私にはどうもこの

間の「時の長さ」と云うものがハッキリしません。私の胸にはただ今夜のナオミの姿が、
 或る美しい音楽を聴いた後のように、恍惚こうこつとした快感となつて尾を曳ひいているだけでし
 た。その音楽は非常に高い、非常に浄きよらかな、この世の外の聖なる境から響いて来るよう
 なソプラノの唄うたです。もうそうになると情じょうよく慾もなく恋愛もあります、……私の心に
 感じたものは、そう云うものとは凡そ最も縁の遠い漂ひょう渺びようとした陶醉でした。私は幾度
 も考えて見ましたが、今夜のナオミは、あの汚らわしい淫婦いんぷのナオミ、多くの男にヒドイ
 仇名あだなを付けられている売春婦にも等しいナオミとは、全く両立し難いところの、そして私
 のような男はただその前に跪ひざまずき、崇拜するより以上のことは出来ないところの、貴い憧れあこが
 の的でした。もしも彼女の、あの真白な指の先がちよつとでも私に触れたとしたら、私は
 それを喜ぶどころか寧ろ戦慄せんりつするでしょう。この心持は何に譬たとえたら読者に了解して貰もら
 えるか、——まあ云つて見れば、田舎の親父おやじが東京へ出て、或る日偶然、幼い折に家出
 をした自分の娘と往来で遇あう。が、娘は立派な都会の婦人になつてしまつて、穢きたない田舎の
 百姓を見ても自分の親だとは気が付かず、親父の方ではそれと気が付いても、今では身分
 が違うために傍そばへも寄れない、これが自分の娘だったかと驚き呆あきれて、耻はかしさの余りコ
 ソコソ逃げて行つてしまふ。——その時の親父の、淋さびしいような、有難いような心持。

それではなければ許嫁いみなすけの女に捨てられた男が、五年も十年も立ってから、或る日横浜の埠頭ふとうに立つと、そこに一艘そうの商船が着いて、帰朝者の群が降りて来る。そして図らずもその群の中から彼女を見出すみいだ。さては彼女は洋行をして帰つて来たのかとそう思つても、男は最早や彼女に近づく勇氣もない。自分は昔に変わらない一介の貧書生、女はと見れば野暮臭い娘時代の倂おもかけはなく、巴里パリの生活、紐育ニューヨークの贅ぜいたく沢に馴れたハイカラな婦人、二人の間には既に千里の差が出来ている。——その時の書生の、捨てられた自分を我と我が身さげすで蔑むような、思いの外な彼女の出世をせめても己れの喜びとする心持。——こう云つてみても、矢張十分に説き尽してはいませんけれども、強しいて譬えればそう云つたようなものでしょうか。とにかく今までのナオミには、いくら拭ぬぐつても拭いきれない過去の汚点しがその肉体に滲しみ着いていた。然しかるに今夜のナオミを見るとそれらの汚点は天使のような純白な肌に消されてしまつて、思ひ出すさえ忌いまわしいような気がしたもの、今はあべこべに、その指先に触れるだけでも勿もつ体たいないような感じがする。——これは一体夢でしようか？　そうでなければナオミはどうして、何処どこからそんな魔法を授かり、妖術ようじゆつを覚えて来たのでしょうか？　二三日前にはあの薄汚い銘仙の着物を着ていた彼女が、……

トン、トン、トンと、再び威勢よく階段を降りる足音がして、その新ダイヤの靴の爪先が私の眼の前で止まりました。

「譲治さん、二三日うちに又来るわよ」

と、彼女は云うのです。……眼の前に立つてはいますけれども、顔と顔とは三尺ほどの間隔を保ち、風のように軽い衣の裾をも決して私に触れようとはしないで、……

「今夜はちよつと本を二三冊取りに來ただけなの。まさかあたしが、大きな荷物を一度に背負って行かれやしないわ。おまけにこんななりをしていて」

私の鼻は、その時何処かで嗅いだことのあるほのかな匂を感じました。ああこの匂、……海の方の国々や、世にも妙なる異国の花園を想い出させるような匂、……これはいつぞや、ダンスの教授のシユレムスカヤ伯爵夫人、……あの人の肌から匂った匂だ。ナオミはあれと同じ香水を着けているのだ。……

私はナオミが何と云つても、ただ「うんうん」と頷いただけでした。彼女の姿が再び夜の闇に消えてしまつても、まだ部屋の中に漂いつつ次第にうすれて行く匂を、幻を趁うように鋭い嗅覚で趁いかけながら。……

二十六

読者諸君、諸君は既に前回までのいきさつのうちに、私とナオミとが間もなく擦^よりを戻すようになることを、——それが不思議でも何でも無い、当然の成り行きであることを、予想されたでありましょう。そうして事実、結果は諸君の予想通りになったのですが、しかしそうなってしまうまでには思いの外に手数が懸^かつて、私はいろいろ馬鹿^{ばか}な目を見たり、無駄な骨折りをしたりしました。

私とナオミとは、あれから直きに馴^なれ馴^なれしく口を利^きくようにはなりました。と云^いうのは、あの明くる晩も、その次の晩も、あれからずっと、ナオミは毎晩何かしら荷物を取りに来ないことはなかったからです。来れば必ず二階へ上^あつて、包みを拵^{こま}えて降りて来ますが、それもほんの申^{ちりめん}訳の、縮^{くく}緬^{めん}の帛^{ふく}紗^さへ包まるくらいな細^{こま}々した物で、

「今夜は何を取りに来たんだい？」
と尋ねて見ても、

「これ？ これは何でも無いの、ちよつとした物なの」
と、曖^{あいまい}昧^{まい}に答えて、

「あたし、喉^{のど}が渴^{かわ}いているんだけど、お茶を一杯飲ましてくれない？」

などと云いながら、私の傍へ腰かけて、二三十分しゃべって行くと云う風でした。

「お前は何処かこの近所にいるのかね？」

と、私は或る晩、彼女とテーブルに向い合つて、紅茶を飲みながらそう云つたことがあります。

「なぜそんな事を聞きたがるの？」

「聞いたつて差^さ支^しえないじゃないか」

「だけでも、なぜよ。……聞いてどうする積りなのよ」

「どうすると云う積りはないさ、好奇心から聞いて見たのさ。——え、何処にいるんだよ？ 己^{おれ}に云つたつていいじゃないか」

「いや、云わないわ」

「なぜ云わない？」

「あたしは何も、讓治さんの好奇心を満足させる義務はないわよ。それほど知りたけりやあたしの跡をつけていらつしやい、秘密探偵は讓治さんのお得意だから」

「まさかそれほどにしたくはないがね、——しかしお前のいる所が何処か近所に違いな

いとは思っているんだ」

「へえ、どうして？」

「だって、毎晩やつて来て荷物を運んで行くじゃないか」

「毎晩来るから近所にいると限りやしないわ、電車もあれば自動車もあるわよ」

「じゃ、わざわざ遠くから出て来るのかい？」

「さあ、どうかしら、——」

そう云つて彼女はハグラカシてしまつて、

「——毎晩来ちゃあ悪いツて云うの？」

と、巧妙に話頭を転じました。

「悪いと云う訳じゃあないが、……来るなと云つても構わず押しかけて来るんだから、今更どうも仕方がないが、……」

「そりゃあそうよ、あたしは意地が悪いから、来るなと云えば尚来るわよ。——それとも来られるのが恐ろしいの？」

「うん、そりゃ、……いくらか恐ろしくもないこともない。……」

すると彼女は、仰向きになつて真つ白な頤あごを見せ、紅い口を一杯に開けて、俄にわかにきやッ

きやツと笑いこけました。

「でも大丈夫よ、そんな悪い事はしやしないわよ。それよりもあたし、昔のことは忘れてしまつて、これから後もただのお友達として、讓治さんと付き合いたいの。ねえ、いいでしょ？ それならちつとも差支えないでしょ？」

「それも何だか、妙なもんだよ」

「何が妙なの？ 昔夫婦でいた者が、友達になるのがなぜ可笑しいの？ それこそ旧式な、時勢後れの考じやなくつて？——ほんとうにあたし、以前のことなんかこれッぱかしも思つていないのよ。そりや今だつて、若し讓治さんを誘惑する気なら、此処で直ぐにもそうしてしまうのは訳なしだけれど、あたし誓つて、そんな事はきつとしないわ。折角讓治さんが決心したのに、それをグラツカせちや気の毒だから。……」

「じゃ、気の毒だと思つて憐れ^{あわ}んでやるから、友達になれと云う訳かね？」

「何もそう云う意味じやないわ。讓治さんだつて憐れまれたりしないように、シツカリしていればいいじやないの」

「ところがそれが怪しいんだよ、今シツカリしている積りだが、お前と付き合うとだんだんグラツキ出すかも知れんよ」

「馬鹿ね、讓治さんは。——それじゃ友達になるのはいや？」

「ああ、まあいやだね」

「いやならあたし、誘惑するわよ。——讓治さんの決心を踏み躪^ふつて、滅茶苦茶にしてやるわよ」

ナオミはそう云つて、冗談ともつかず、真面目^{まじめ}ともつかず、変な眼つきでニヤニヤしました。

「友達として清く附き合うのと、誘惑されて又ヒドイ目に遭わされると、孰方^{どっち}がよくつて？——あたし今夜は讓治さんを脅迫するのよ」

一体この女は、どんな積りで己と友達になろうと云うのかと、私はその時考えました。彼女が毎晩訪ねて来るのは、単に私をからかうだけの興味ではなく、まだ何かしらもくろみがあるに違いありません。先^まず友達になつて置いて、それから次第に丸め込んで、自分の方から降参をする形式でなく再び夫婦になろうと云うのか？ 彼女の真意がそうであるなら、そんな面倒な策略を弄^{ろう}してくれないでも、私は訳なく同意したでしょう。なぜなら私の胸の中には、彼女と夫婦になれるのであつたら決して「いや」とは云えない気持が、もういつの間にかムラムラと燃えていたのですから。

「ねえ、ナオミや、ただの友達になつたつて無意味じゃないか。そのくらいならいつそ元通り夫婦になつてくれないかね」

と、私は時と場合に依つては、自分の方からそう切り出してもいいのでした。けれども今夜のナオミの様子では、私が真面目に心を打ち明けて頼んだところで、手輕に「うん」とは云いそうもない。

「そんなことは真つ平御免よ、ただの友達でなければいやよ」

と、此方こちらの腹が見えたとなると、いよいよ図に乗つて茶化すかも知れない。私の折角の心持がそんな扱いを受けるようではつまらないし、それに第一、ナオミの真意が夫婦になると云うのではなく、自分は何処までも自由の立場にいて、いろいろの男を手玉に取ろう、そして私を手玉の一つに加えてやろうと、そう云う魂胆だとすれば、尚なおさら更迂闊うかつなことは云えない。現に彼女はその住所をさえハッキリ云わないくらいだから、今でも誰か男があると思わなければならぬし、それをそのままずるずるべつたりに妻に持ったら、私は又しても憂うれき目を見るのだ。

そこで私は咄嗟とつぎの間に思案をめぐらして、

「では友達になつてもいいよ、脅迫されちゃたまらないから」

と、此方もニヤニヤ笑いながらそう云いました。と云うのは、友達として付き合っていてくれれば、追い追い彼女の真意が分つて来るだろう。そして彼女にまだ少しでも真面目なところが残っていたら、その時始めて此方の胸を打ち明けて、夫婦になるようにと説きつける機会もあるだろうし、今より有利な条件で妻にすることが出来るでもあらうと、私は私で腹に一物あつたからです。

「じゃあ承知してくれたのね？」

ナオミはそう云つて、^{くす}擦ぐつたそうに私の顔を^{のぞ}覗き込んで、

「だけど讓治さん、ほんとうにただの友達よ」

「ああ、^{もちろん}勿論さ」

「イヤらしいことなんか、もうお互に考えないのよ」

「分つているとも。——それでなけりや己も困るよ」

「ふん」

と云つて、ナオミは例の鼻の先で笑いました。

こんな事があつてから後、彼女はますます足^{あし}繁^{しげ}く出入するようになりました。夕方会社から帰つて来ると、

「讓治さん」

と、いきなり彼女が燕つばめのように飛び込んで来て、

「今夜晩飯を御馳走ちそうしない？ 友達ならばそのくらいの事はしてもいいでしょ」

と、西洋料理を奢おごらせて、たらふく喰たべて帰ったり、そうかと思うと雨の降る晩に遅くやつて来て、寢室の戸をトントンと叩たたいて、

「今晚は、もう寝ちまったの？——寝ちまったらば起きないでもいいわ。あたし今夜は泊る積りでやって来たのよ」

と、勝手に隣りの部屋へ這入はいって、床を敷いて寝てしまったり、或ある時などは朝起きて見ると、彼女がちゃんと泊り込んでいて、ぐうぐう眠っていたりすることもありました。そして彼女は二た言目には、「友達だから仕方がないわよ」と云うのでした。

私はその時分、彼女をつくづく天稟てんぴんの淫婦いんぶであると感じたことがありました、それはどう云う点かと云うと、彼女はもともと多情な性質で、多くの男に肌を見せるのを屁へとも思わない女でありながら、それだけ又、平素は非常にその肌を秘密にすることを知っていて、たとい僅わずかな部分をでも、決して無意味に男の眼には触れさせないようにしていたことです。誰にでも許す肌であるものを、不断は秘し隠しに隠そうとする、——これは私

に云わせると、確かに淫婦が本能的に自己を保護する心理なのです。なぜなら淫婦の肌と云うものは、彼女に取って何より大切な「売り物」であり、「商品」であるから、場合に依つては貞女が肌を守るよりも、一層嚴重にそれを守らねばならない訳で、そうしなければ、「売り物」の値打ちはだんだん下落してしまいます。ナオミは実にこの間の機微を心得ていて、嘗て彼女の夫であつた私の前では、尚更その肌を押し包むようにするのでした。が、では絶対に慎しみ深くするのかと云うと、それが必ずしもそうではなく、私がいるとわざと着物を着換えたり、着換える拍子にずるりと襦袢じゆばんを滑り落して、

「あら」

と云いながら、両手で裸体の肩を隠して隣りの部屋へ逃げ込んだり、一と風呂浴びて帰つて来て、鏡台の前で肌を脱ぎかけ、そして始めて気が付いたように、

「あら、讓治さん、そんな所にいちやいけないわ、彼方あつちへ行つてらっしゃいよ」と、私を追い立てたりするのでした。

こう云う風にして見せるともなく折々ちらと見せられるナオミの肌の僅かな部分は、たとえば頸くびの周りとか、肘ひじとか、脛はぎとか、踵かかととか云う程の、ほんのちよつとした片鱗へんりんだけではありましたが、彼女の体が前よりも尚つややかに、憎いくらいに美しさを増して

いることは、私の眼には決して見逃せませんでした。私はしばしば想像の世界で、彼女の全身の衣を剥ぎ取り、その曲線を飽かずに眺め入ることを余儀なくされました。

「讓治さん、何をそんなに見ているの？」

と、彼女は或る時、私の方へ背中を向けて着換えながら云いました。

「お前の体つきを見ているんだよ、何だかこう、先せんより水々しくなったようだね」

「まあ、いやだ、——レディーの体を見るもんじゃないわよ」

「見やしないけれど、着物の上からでも大概分るさ。先でから出ツ臀ちりだったけれど、この頃は又膨れて来たね」

「ええ、膨れたわ、だんだんお臀しりが大きくなるわ。けども脚はすつきりして、大根のようじゃなくなつてよ」

「うん、脚は子供の時分から真つ直ぐだったね。立つとピタリと喰つ着いたけれど、今でもそうかね」

「ええ、喰つ着くわ」

そう云つて彼女は、着物で体を囲いながらピンと立って見て、

「ほら、ちゃんと着くわよ」

その時私の頭の中には、何かの写真で覚えのあるロダンの彫刻が浮かびました。

「讓治さん、あなたあたしの体が見たいの？」

「見たければ見せてくれるのかい？」

「そんな訳には行かないわよ、あなたとあたしは友達じゃないの。——さ、着換えてしまふまでちよいと彼方へ行つてらっしゃい」

そして彼女は、私の背中へ叩きつけるようにぴしんとドアを締めました。

こんな調子で、ナオミはいつも私の情慾じょうよくを募らせるようにばかり仕向ける、そして際きわどい所までおびき寄せて置きながら、それから先へは嚴重な関を設けて、一步も這入らせないので。私とナオミとの間にはガラスの壁が立っていて、どんなに接近したように見えても、実は到底踰こえることの出来ない隔へだたりがある。ウツカリ手出しをしようものなら必ずその壁に突き当って、いくら懊しれても彼女の肌には触れる訳に行かないのです。時にはナオミはヒョイとその壁を除のけそうにするので、「おや、いいのかな」と思ったりしますが、近寄って行けば矢張元通り締しまつてしまします。

「讓治さん、あなた好いい児こね、一つ接吻せつぶんして上げるわ」

と、彼女はからかい半分によくそんなことを云つたものです。からかわれるとは知ってい

ながら、彼女が唇を向けて来るので私もそれを吸うようにすると、アワヤと云う時その唇は逃げてしまつて、はッと二三寸離れた所から私の口へ息を吹っかけ、

「これが友達の接吻よ」

と、そう云つて彼女はニヤリと笑います。

この「友達の接吻」と云う風変りな挨あい拶さつの仕方、——女の唇を吸う代りに、息を吸うだけで満足しなければならぬところの不思議な接吻、——これはその後習慣のようになつてしまつて、別れ際などに、

「じゃ左様なら、又来るわよ」

と、彼女が唇をさし向けると、私はその前へ顔を突き出して、あたかも吸入器に向つたようにポカンと口を開きます。その口の中へ彼女がはッと息を吹き込む、私がそれをすうツと深く、眼を潰つぶつて、おいしそうに胸の底に嚙くはみ下します。彼女の息は湿り気を帯びて生温かく、人間の肺から出たとは思えない、甘い花のような薰かおりがします。——彼女は私を迷わせるように、そつと唇へ香水を塗つていたのだそうですが、そう云う仕掛けがしてあることを無論その頃は知りませんでした。——私はこう、彼女のような妖婦ようふになると、内臓までも普通の女と違つているのじやないか知らん、だから彼女の体内を通して、その

口腔こうこうに含まれた空気は、こんななまめかしい匂におがするのじやないか知らん、と、よく思う思い思いました。

私の頭はこうして次第に惑乱され、彼女の思う存分に掻かき撈むしられて行きました。私は今では、正式な結婚でなければ厭いやだの、手玉に取られるだけでは困るのと、もうそんなことを云っている余裕はなくなりました。いや、正直を云うとこうなることは始めから分つていた筈はずなので、若もしほんとうに彼女の誘惑を恐れるなら、附き合わなければいいものを、彼女の真意を探るためとか、有利な機会を窺うかがうためとか云つたのは、自分で自分を欺あざむくこととする口実に過ぎなかつたのです。私は誘惑が恐こい恐わいと云いながら、本音を吐けばその誘惑を心待ちにしていたのです。ところが彼女はいつまで立ってもそのつまらない友達ごとくを繰り返すばかりで、決してそれ以上は誘惑しません。これは彼女がいやが上にも私を慍いらす計略だろう、慍いらして慍いらし抜いて、「時分はよし」と見た頃に突然「友達」の仮面を脱ぎ、得意の魔の手を伸ばすであろう、今に彼女はきつと手を出す、出さないで済ます女ではない、此方はせいぜい彼女の計略に載せられてやって「ちんちん」と云えば「ちんちん」をする、「お預け」と云えば「お預け」をする、何でも彼女の注文通りに芸当をやつていれば、しまいには獲物に有りつけるだろうと、毎日々々、鼻をうごめかして

いましたが、私の予想は容易に実現されそうもなく、今日はいよいよ仮面を脱ぐか、明日は魔の手が飛び出すかと思つても、その日になると危機一髪と云うところでスルリと逃げられてしまうのです。

そうなる私は、今度はほんとうに慄れ出しました。「^{おれ}己はこの通り待ちかねているんだ、誘惑するなら早くしてくれ」と云わぬばかりに、体中に隙^{すき}を見せたり、弱点をさらけ出したりして、果ては此方からあべこべに誘いかけてりました。しかし彼女は一向取り上げてくれないで、

「何よ譲治さん！ それじゃ約束が違うじゃないの」
と、子供をたしなめるような眠つきで、私を叱^{しか}りつけるのです。

「約束なんかどうだっていい、己はもう……………」

「駄目、駄目！ あたしたちはお友達よ！」

「ねえ、ナオミ、……………そんなことを云わないで、……………お願いだから、……………」

「まあ、うるさいわね！ 駄目だったら……………き、その代りキッスして上げるわ」

そして彼女は、例のはツと云う息を浴びせて、

「ね、いいでしょ？ これで我慢しなけりや駄目よ、これだけだって友達以上かも知れな

いけれど、讓治さんだから特別にして上げるんだわ」

が、この「特別」な愛撫あいぶの手段は、却かえって私の神経を異常に刺戟しげきする力はあっても、決して静めてはくれません。

「畜生！ 今日も駄目だったか」

と、私はますます苛いらだ立つて来ます。彼女がふいと風のように出て行ってしまうと、暫しばらくの間は何事も手に著つかず、自分で自分に腹を立てて、檻おりに入れられた猛獣べつとの如く部屋の中をウロウロしながら、そこらじゅうの物を八つ中あたりに叩きつけたり、破いたりします。

私は実に、この氣違いじみた、男のヒステリーとも云うべき発作に悩まされたものですが、彼女の来るのが毎日であるので、発作の方も極きまって一日に一遍ずつは起るのでした。おまけに私のヒステリーは普通のそれと性質が違い、発作が止やんでしまっても、後でケロリと氣が軽くなりはしませんでした。寧むしろ氣分が落ち着いて来ると、今度は前よりも一層明め瞭りように、一層執拗しつように、ナオミの肉体の細々こまこました部分がじーツと思い出されました。

着換えをした時にちよいと着物の裾すそから洩もれた足であるとか、息を吹つけてくれた時につい二三寸傍まで寄って来た唇であるとか、そう云うものがそれらを実際に見せられた時より、却って後になって一ひと入しおまざまざと眼の前に浮かび、その唇や足の線を伝わって次

第に空想をひろげて行くと、不思議や実際には見えなかった部分までも、あたかも種板を現像するようにだんだん見え出して、遂には全く大理石のヴィナスの像にも似たものが、心の闇の底に忽然と姿を現わすのです。私の頭は天鵝絨の帷で囲まれた舞台であつて、そこに「ナオミ」と云う一人の女優が登場します。八方から注がれる舞台の照明は真暗な中に揺らいでいる彼女の白い体だけを、カッキリと強い円光を以て包みます。私が一心に視詰めていると、彼女の肌に燃える光りはいよいよ明るさを増して来る、時には私の眉を灼きそうに迫つて来る。活動写真の「大映し」のように、部分々々が非常に鮮やかに拡大される、……その幻影が実感を以て私の官能を脅やかす程度は、本物と少しも変りはなく、物足りないのは手で触れることが出来ないと言う一点だけで、その他の点では本物以上に生き生きとしている。あんまりそれを視詰めると、私はしまいにグラグラと眩暈がするような心地を覚えて、体中の血が一度にかアツと顔の方へ上つて来て、ひとりでに動悸が激しくなります。すると再びヒステリーの発作が起つて、椅子を蹴飛ばしたり、カーテンを引きちぎつたり、花瓶を打つ壊したりします。

私の妄想は日増しに狂暴になつて行き、眼を潰りさえすればいつでも暗い眼瞼の蔭にナオミがいました。私はよく、彼女の芳わしい息の匂を想い出して、虚空に向つて口を開け、

はツとその辺の空気を吸いました。往来を歩いている時でも、部屋に蟄居ちつきよしている時でも、彼女の唇が恋しくなると、私はいきなり天を仰いで、はツはツとやりました。私の眼には到いたる所にナオミの紅あかい唇が見え、そこらじゅうにある空気と云う空気が、みんなナオミのいぶきであるかと思われました。つまりナオミは天地の間に充満して、私を取り巻き、私を苦しめ、私の呻うめきを聞きながら、それを笑って眺めている悪あく霊くりようのようなものでした。

「讓治さんはこの頃變よ、少うしどうかしているわよ」
と、ナオミは或る晩やつて来て、そう云いました。

「そりやあどうかしているだろうさ、こんなにお前に懊あらされりやあ、……………」

「ふん、……………」

「何がふんだい？」

「あたし、約束は嚴重に守る積りよ」

「いつまで守る積りなんだい？」

「永久に」

「冗談じゃない、こうしていると己はだんだん氣が變になるよ」

「じゃ、いいことを教えて上げるわ、水道の水を頭からザッと打っかけるといいわ」

「おい、ほんとうにお前……」

「又始まった！ 譲治さんがそんな眼つきをするから、あたし尚なおさら更からかってやりたくなるんだわ。そんなに傍へ寄って来ないで、もつと離れていらつしやいよ、指一本でも触らないようにして頂ちようだい戴よ」

「じゃあ仕方がない、友達のキツスでもしておくれよ」

「大人しくしていればして上げるわ、だけでも後で気が変になりやしなくって？」

「なつてもいいよ、もうそんな事を構ってなんかいられないんだ」

二十七

その晩ナオミは、「指一本でも触らないように」私をテーブルの向う側にかけさせ、ヤキモキしている私の顔を面白そうに眺めながら、夜遅くまで無駄口を叩たたいていましたが、十二時が鳴ると、

「譲治さん、今夜は泊めて貰もらうわよ」

と、又しても人をからかうような口調で云いました。

「ああ、お泊り、明日は日曜で己も一日内にいるから」

「だけでも何よ。泊ったからって、譲治さんの注文通りにはならないわよ」

「いや、御念には及ばないよ、注文通りになるような女でもないからな」

「なれば都合が好いと思っっているんじゃないの」

そう云つて彼女は、クスクスと鼻を鳴らして、

「さ、あなたから先へお休みなさい、寢語を云わないようにして」

と、私を二階へ追い立てて置いて、それから隣りの部屋へ這入^{はい}つて、ガチンと鍵^{かぎ}をかけました。

私は勿論^{もちろん}、隣りの部屋が気にかかつて容易に寝つかれませんでした。以前、夫婦でいた

時分にはこんな馬鹿^{ばか}なことはなかったんだ、己がこうして寝ている傍に彼女もいたんだ、

そう思うと、私は無上に口惜^{くや}しくてなりませんでした。壁一重の向うでは、ナオミが頻^{しき}りに、

——或^{ある}はわざとそうするのか、——ドタンバタンと、床に地響きをさせながら、

布団^{ふとん}を敷いたり、枕^{まくら}を出したり、寢支度をしています。あ、今髪を解かしているな、着物

を脱いで寝間着に着換えているところだなと、それらの様子が手に取るように分ります。

それからぱつと夜具をまくったけはいがして、続いてどしんと、彼女の体が布団の上へ打つ倒れる音が聞えました。

「えらい音をさせるなあ」

と、私は半ば独り言のように、半ば彼女に聞えるように云いました。

「まだ起きているの？ 寝られないの？」

と、壁の向うから直ぐとナオミが応じました。

「ああ、なかなか寝られそうもないよ、——己はいろいろ考え事をしているんだ」

「うふふふ、讓治さんの考え事なら、聞かないでも大概分っているわ」

「だけでも、実に妙なもんだよ。現在お前がこの壁の向うに寝ているのに、どうすることも出来ないなんて」

「ちつとも妙なことはないわよ。ずっと昔はそうだったじゃないの、あたしが始めて讓治さんの所へ来た時分は。——あの時分には今夜のようにして寝たじゃないの」

私はナオミにそう云われると、ああそうだったか、そんな時代もあったんだっけ、あの時分にはお互に純なものだつたのにと、ホロリとするような気になりましたが、これは少しも今の私の愛慾あいよくを静めてはくれませんでした。却って私は、二人がいかに深い因縁で結

び着けられているかと思い、到底彼女と離れられない心持を、痛切に感じるばかりでした。

「あの時分にはお前は無邪気なもんだったがね」

「今だつてあたしは至極無邪気よ、有邪気なのは譲治さんだわ」

「何とでも勝手に云うがいいさ、己はお前を何処までも追つ駈け廻す積りだから」

「うふふふ」

「おい！」

私はそう云つて、壁をどんと打ちました。

「あら、何をするのよ、此処は野中の一軒家じゃあないことよ。何卒お静かに願います」

「この壁が邪魔だ、この壁を打つ壊してやりたいもんだ」

「まあ騒々しい。今夜はひどく鼠が暴れる」

「そりや暴れるとも。この鼠はヒステリーになつてゐるんだ」

「あたしはそんなお爺さんの鼠は嫌いよ」

「馬鹿を云え、己はじいじやないぞ、まだやつと三十二だぞ」

「あたしは十九よ、十九から見れば三十二の人はお爺さんよ。悪いことは云わないから、外に奥さんをお貰いなさいよ、そうしたらヒステリーが直るかも知れないから」

ナオミは私が何を云つても、しまいにはもう、うふうふ笑うだけでした。そして間もなく、
「もう寝るわよ」

と、ぐうぐう空そらいびき 軒をかき出しましたが、やがてほんとうに寝入ったようでした。

明くる日の朝、眼を覚まして見ると、ナオミはしどけない寝間着姿で、私の枕もとに坐すわつています。

「どうした？ 讓治さん、昨夜は大変だったわね」

「うん、この頃己は、時々あんな風にヒステリーを起すんだよ。恐かったかい？」

「面白かったわ、又あんな風にさして見たいわ」

「もう大丈夫だ、今朝はすっかり治まっちゃった。——ああ、今日は好いい天気だなあ」

「好い天気だから起きたらどう？ もう十時過ぎよ。あたし一時間も前に起きて、今朝湯あさゆに行つて来たの」

私はそう云われて、寝ながら彼女の湯上り姿を見上げました。一体女の「湯上り姿」と云うものは、——その真の美しさは、風呂ふろから上ったばかりの時よりも、十五分なり二十分なり、多少時間を置いてからがいい。風呂に漬かるとどんなに皮膚きんの綺麗きれいな女でも、一時は肌が茹ゆり過ぎて、指の先などが赤くふやけるものですが、やがて体が適当な温度に

冷やされると、始めて蟬せみが固こまったように透とき徹とつて来る。ナオミは今しも、風呂の歸りに戸外の風に吹かれて来たので、湯上り姿の最も美しい瞬間にいました。その脆ぜい弱じやくな、うすい皮膚は、まだ水蒸氣を含みながらも真つ白に冴さえ、着物の襟えりに隠れている胸のあたりには、水彩画の絵の具のような紫色の影があります。顔はつやつやと、ゼラチンの膜を張ったかの如く光沢を帯び、ただ眉毛だけがじつとりと濡ぬれていて、その上にはカラリと晴れた冬の空が、窓を透してほんのり青く映っています。

「どうしたんだい、朝ッぱらから湯になんぞ這入って」

「どうしたって大きなお世話よ。——ああ、いい氣持だった」

と、彼女は鼻の両側を平手でハタハタと軽く叩いて、それからぬうツと、顔を私の眼の前へ突き出しました。

「ちよいと！ よく見て頂戴、髭ひげが生えてる？」

「ああ、生えてるよ」

「ついでにあたし、床屋へ寄って顔を剃そって来ればよかったつけ」

「だってお前は剃るのが嫌いだったじゃないか。西洋の女は決して顔を剃らないと云って。」

「だけどこの頃は、亜米利加^{アメリカ}なんかじゃ顔を剃るのが流行^{はや}っているのよ。ね、あたしの眉毛を御覧なさい、亜米利加の女はこんな工合にみんな眉毛を剃っているから」

「ははあ、そうか、お前の顔がこの間から面変りがして、眉の形まで違っちまったのは、そこをそんな風に剃っているせいかな」

「ええ、そうよ、今頃になつて気が付くなんて、時勢後れね」

ナオミはそう云つて、何か別な事を考えている様子でしたが、

「讓治さん、もうヒステリーはほんとうに直つて？」

と、ふいとそんなことを尋ねました。

「うん、直つたよ。なぜ？」

「直つたら讓治さんをお願いがあるの。——これから床屋へ出かけて行くのは大儀だから、あたしの顔を剃つてくれない？」

「そんな事を云つて、又ヒステリーを起させようツて気なんだろう」

「あら、そうじゃないわよ、ほんとに真面目^{まじめ}で頼むんだから、そのくらいな親切があつてもいいでしょ？ 尤も^{もっと}ヒステリーを起されて、怪我^{けが}でもさせられちゃ大変だけれど」

「安全剃刀^{かみそり}を貸してやるから、自分で剃つたらいいじゃないか」

「ところがそうは行かないの。顔だけならいいけれど、頸くびの周りから、ずうツと肩のうしろの方まで剃るんだから」

「へえ、どうしてそんな所まで剃るんだ？」

「だってそうでしょ、夜会服を着れば肩の方ですっかり出るでしょ。——」

そしてわざわざ、肩の肉をちよつとばかり出して見せて、

「ほら、ここいらまで剃るのよ、だから自分じゃ出来やしないわ」

そう云つてから、彼女は慌あわてて又その肩をスポリと引つ込めてしまいました。が、毎度してやられる手ではありながら、それが私には矢張抵抗し難いところの誘惑でした。ナオミの奴やつ、顔が剃りたいのでも何でもないんだ、己おれを翻ほんろう弄するつもりで湯にまで這入って来やがったんだ。——と、そう分つてはいましたけれども、とにかく肌を剃らせると云うのは、今までにない一つの新しい挑戦でした。今日こそうんと近くへ寄つて、あの皮膚をしみじみと見られる、もちろん触つてみることも出来る。そう考えただけでも私は、とても彼女の申出もつしでを断る勇氣はありませんでした。

ナオミは私が、彼女のために瓦斯ガス焔こん炉で湯を沸かしたり、それを金かな盥だらへ取つてやつたり、ジレットの刃を付け換えたり、いろいろ支度をしてやっている間に、窓のところへ机

を持ち出してその上に小さな鏡を立て、両足の間へ臀^{しり}をぴたんこに落して据わって、次には白い大きなタオルを襟の周りへ巻き着けました。が、私が彼女のうしろへ廻って、コールゲートのシャボンの棒を水に塗らして、いよいよ剃ろうとするとたんに、

「譲治さん、剃ってくれるのはいいけれど、一つの条件があることよ」と、云い出しました。

「条件？」

「ええ、そう。別にむずかしい事じゃないの」

「どんな事さ？」

「剃るなんて云ってゴマカして、指で方々摘まんだりしちゃ厭^{いや}だわよ、ちつとも肌に触らないようにして、剃ってくれなけりや」

「だってお前、——」

「何が『だって』よ、触らないように剃れるじゃないの、シャボンはブラシで塗ればいいんだし、剃刀はジレットを使うんだし、……床屋へ行っても上手な職人は触りやしないわ」

「床屋の職人と一緒にされちゃあ遣^やり切れないな」

「生意氣云つてらあ、実は剃らして貰いたい癖に！——それがイヤなら、何も無理には頼まないわよ」

「イヤじゃあないよ。そう云わないで剃らしておくれよ、折角支度までしちゃったんだから」

私はナオミの、抜き衣紋えもんにした長い襟足を視詰みつめると、そう云うより外はありませんでした。

「じゃ、条件通りにする？」

「うん、する」

「絶対に触っちゃいけないわよ」

「うん、触らない」

「もしちよつとでも触ったら、その時直ぐに止めやにするわよ。その左の手をちゃんと膝ひざの上に載せていらつしやい」

私は云われる通りにしました。そして右の方の手だけを使って、彼女の口の周りから剃って行きました。

彼女はうつとりと、剃刀の刃で撫なでられて行く快感を味わっているかのように、瞳ひとみを鏡の

前に据えて、大人しく私に剃らせていました。私の耳には、すうすうと引く睡ねむいような呼吸が聞え、私の眼には、その頤あごの下でピクピクしている頸動脈けいどうみやくが見えています。私は今や、睫毛まつげの先で刺されるくらい彼女の顔に接近しました。窓の外には乾燥し切った空気の中に、朝の光が朗かに照り、一つ一つの毛孔けあなが数えられるほど明るい。私はこんな明るい所で、こんなにいつまでも、そしてこんなにも精細に、自分の愛する女の目鼻を凝視したことはありません。こうして見るとその美しさは巨人のような偉大さを持ち、容積を持つて迫って来ます。その恐ろしく長く切れた眼、立派な建築物のように秀ひびでた鼻、鼻から口へつながっている突兀とっこつとした二本の線、その線の下に、たつぷり深く刻まれた紅あかい唇。ああ、これが「ナオミの顔」と云う一つの靈妙な物質なのか、この物質が己の煩悩ぼんのうの種となるのか。……そう考えると実に不思議になって来ます。私は思わずブラシを取って、その物質の表面へ、ヤケにシャボンの泡を立てます。が、いくらブラシで掻かき廻しても、それは静かに、無抵抗に、ただ柔かな弾力を以て動くのみです。……

……私の手にある剃刀は、銀色の虫が這うようにしてなだらかな肌を這い下り、その項うなじから肩の方へ移って行きました。かつぶくのいい彼女の背中が、真っ白な牛乳のように、広く、堆うずたかく、私の視野に這入って来ました。一体彼女は、自分の顔は見ているだろうが、

背中がこんなに美しいことを知っているだろうか？ 彼女自身は恐らくは知るまい。それを一番よく知っているのは私だ、私は嘗てこの背中を、毎日湯に入れて流してやったのだ。あの時もちょうど今のようにシャボンの泡を掻き立てながら。……これは私の恋の古蹟だ。私の手が、私の指が、この凄艶な雪の上に嬉々として戯れ、此処を自由に、楽しく蹈んだことがあるのだ。今でも何処かに痕が残っているかも知れない。……

「讓治さん、手が顫えるわよ、もつとシツカリやつて頂戴。………」

突然ナオミの云う声がありました。私は頭がガンガンして、口の中が干涸らびて、奇態に体が顫えるのが自分でも分りました。はッと思つて、「氣が違ったな」と感じました。それを一生懸命に堪えると、急に顔が熱くなったり、冷めなくなったりしました。しかしナオミのいたずらは、まだこれだけでは止まないのでした。肩がすっかり剃れてしまうと、袂をまくつて、肘を高くさし上げて、

「さ、今度は腋の下」と云うのでした。

「え、腋の下？」

「ええ、そう、——洋服を着るには腋の下を剃るもんよ、此処が見えたら失礼じゃない

の」

「意地悪！」

「どうして意地悪よ、可笑^{おか}しな人ね。——あたし湯冷めがして来たから早くして頂戴」
 その一刹那^{せつな}、私はいきなり剃刀を捨てて、彼女の肘へ飛び着きました、——飛び着くと云うよりは噛^かみ着きました。と、ナオミはちゃんとそれを予期していたかの如く、直ぐその肘で私をグンと撥ね返しましたが、私の指はそれでも何処かに触つたと見え、シャボンでツルリと滑りました。彼女はもう一度、力一杯私を壁の方へ突き除けるや否^{いな}や、

「何をするのよ！」

と、鋭く叫んで立ち上りました。見るとその顔は、——私の顔が真つ青だったからでしょうが、彼女の顔も——冗談ではなく、真つ青でした。

「ナオミ！ ナオミ！ もうからかうのは好^いい加減にしてくれ！ よ！ 何でもお前の云うことは聴く！」

何を云ったか全く前後不覚でした、ただセツカチに、早口に、さながら熱に浮かされた如くしゃべりました。それをナオミは、黙つて、まじまじと、棒のように突っ立ったまま、呆れ返つたと云う風に睨^{にら}みつけているだけでした。

私は彼女の足下に身を投げ、ひざまず跪いて云いました。

「よ、なぜ黙っている！ 何とか云つてくれ！ 否いやなら己を殺してくれ！」

「氣違い！」

「氣違いで悪いか」

「誰がそんな氣違いを、相手になんかしてやるもんか」

「じゃあ己を馬にしてくれ、いつかのように己の背中へ乗つかつてくれ、どうしても否ならそれだけでもいい！」

私はそう云つて、そこへ四つん這ばいになりました。

一瞬間、ナオミは私が事実発狂したかと思つたようでした。彼女の顔はその時一層、どす黒いまでに真つ青になり、瞳を据えて私を見ている眼の中には、殆ど恐怖に近いものがありました。が、忽ち彼女たちまは猛然として、図太い、大胆な表情を湛たたえ、どしんと私の背中の上へ跨またがりながら、

「さ、これでいいか」

と、男のような口調で云いました。

「うん、それでいい」

「これから何でも云うことを聴くか」

「うん、聴く」

「あたしが要るだけ、いくらでもお金を出すか」

「出す」

「あたしに好きな事をさせるか、一々干渉なんかしないか」

「しない」

「あたしのことを『ナオミ』なんて呼びつけにしないで、『ナオミさん』と呼ぶか」

「呼ぶ」

「きつとか」

「きつと」

「よし、じゃあ馬でなく、人間扱いにして上げる、可哀かわいそうだから。――」

そして私とナオミとは、シャボンだらけになりました。……

「……………これで漸ようやく夫婦になれた、もう今度こそ逃のががさないよ」

と、私は云いました。

「あたしに逃げられてそんなに困った？」

「ああ、困ったよ、一時はとても帰つて来てはくれないかと思つたよ」

「どう？　あたしの恐ろしいことが分つた？」

「分つた、分り過ぎるほど分つたよ」

「じゃ、さつき云つたことは忘れないわね、何でも好きにさせてくれるわね。——夫婦

と云つても、堅ッ苦しい夫婦はイヤよ、でないとあたし、又逃げ出すわよ」

「これから又、『ナオミさん』に『譲治さん』で行くんだね」

「ときどきダンスに行かしてくれる？」

「うん」

「いろいろなお友達と付き合つてもいい？　もう先のように文句を云わない？」

「うん」

「尤もあたし、まアちゃんとは絶交したのよ。——」

「へえ、熊谷と絶交した？」

「ええ、した、あんなイヤな奴はありやしないわ。——これから成るべく西洋人と付き

合うの、日本人より面白いわ」

「その横浜の、マツカネルと云う男かね？」

「西洋人のお友達なら大勢あるわ。マツカネルだって、別に怪しい訳じゃないのよ」

「ふん、どうだか、——」

「それ、そう人を疑ぐるからいけないのよ、あたしがこうと云ったならば、ちゃんとそれをお信じなさい。よくって？ さあ！ 信じるか、信じないか？」

「信じる！」

「まだその外にも注文があるわよ、——讓治さんは会社を罷めてどうする積り？」

「お前に捨てられちまつたら、田舎へ引つ込もうと思つたんだが、もうこうなれば引つ込まないよ。田舎の財産を整理して、現金にして持つてくるよ」

「現金にしたらどのくらいある？」

「さあ、此方こつちへ持つて来られるのは、二三十万はあるだろう」

「それッぽつち？」

「それだけあれば、お前と己われと二人ツきりなら沢山じゃないか」

「贅ぜいたく沢をして遊んで行かれる？」

「そりゃ、遊んじやあ行かれないよ。——お前は遊んでもいいけれど、己は何か事務所

でも開いて、独立して仕事をやる積りだ」

「仕事の方へみんなお金を注ぎ込んじゃいまつちやイヤだわよ、あたしに贅沢をさせるお金を、別にして置いてくれなけりや。いい？」

「ああ、いい」

「じゃ、半分別にして置いてくれる？——三十万円なら十五万円、二十万円なら十万円、

——」

「大分細かく念を押すんだね」

「そりやあそうよ、初めに条件を極めて置くのよ。——どう？ 承知した？ そんなにまでしてあたしを奥さんに持つのはイヤ？」

「イヤじゃないッたら、——」

「イヤならイヤと仰おつしやいよ、今のうちならどうでもなるわよ」

「大丈夫だつてば、—— 承知したつてば、——」

「それからまだよ、—— もうそうなつたらこんな家にはいられないから、もつと立派な、ハイカラな家へ引越して頂戴」

「無論そうする」

「あたし、西洋人のいる街で、西洋館に住みたいの、綺麗な寝室や食堂のある家へ這入ってコックだのボーイを使つて、——」

「そんな家が東京にあるかね？」

「東京にはないけれど、横浜にはあるわよ。横浜の山手にそう云う借家がちょうど一軒空いているのよ、この間ちゃんを見て置いたの」

私は始めて彼女に深いたくらみがあつたのを知りました。ナオミは最初からそうする積りで、計画を立てて、私を釣つていたのでした。

二十八

さて、話はこれから三四年の後のことになります。

私たちは、あれから横浜へ引き移つて、かねてナオミの見つけて置いた山手の洋館を借りましたけれども、だんだん贅沢が身に沁みるに従い、やがてその家も手狭だと云うので、間もなく本牧の、前に瑞西人の家族が住んでいた家を、家具ぐるみ買つて、そこへ這入るようになりました。あの大地震で山手の方は残らず焼けてしまいましたが、本牧は助か

った所が多く、私の家も壁に亀裂きれつが出来たぐらいで、殆どこれと云う損害もなしに済んだのは、全く何が仕合わせになるか分りません。ですから私たちは、今でもずっとこの家に住んでいる訳なのです。

私はその後、計画通り大井町の会社の方は辞職をし、田舎の財産は整理してしまつて、学校時代の二三の同窓と、電気機械の製作販売を目的とする合資会社を始めました。この会社は、私が一番の出資者である代りに、実際の仕事は友達がやってくれているので、毎日事務所へ出る必要はないのですが、どう云う訳か、私が一日家にいるのをナオミが好まないものですから、イヤイヤながら日に一遍は見廻ることにしてあります。私は朝の十一時頃に、横浜から東京に行き、京橋の事務所へ一二時間顔を出して、大概夕方の四時頃には歸つて来ます。

昔は非常な勤勉家で、朝は早起きの方でしたけれども、この頃の私は、九時半か十時でなければ起きません。起きると直ぐに、寝間着のまま、そつと爪つまさき先で歩きながら、ナオミの寢室の前へ行つて、静かに扉をノックします。しかしナオミは私以上に寢坊ですから、まだその時分は夢ゆめうつ現で、

「ふん」

と、微かに答える時もあり、知らずに寝ている時もあります。答があれば私は部屋へ這入って行つて挨拶をし、答がなければ扉の前から引き返して、そのまま事務所へ出かけるのです。

こう云う風に、私たち夫婦はいつの間にか、別々の部屋に寝るようになっていたのですが、もとはと云うと、これはナオミの発案でした。婦人の閨房は神聖なものである、夫といえども妄りに犯すことはならない、——と、彼女は云つて、広い方の部屋を自分が取り、その隣りにある狭い方を私の部屋にあてがいました。そうして隣り同士とは云つても、二つの部屋は直接つながつてはいないのでした。その間に夫婦専用の浴室と便所が挟まれている、つまりそれだけ、互に隔たっている訳で、一方の室から一方へ行くには、そこを通り抜けなければなりません。

ナオミは毎朝十一時過ぎまで、起きるでもなく睡るでもなく、寢床の中でうつらうつらと、煙草を吸つたり新聞を読んだりしています。煙草はデIMITリノの細巻、新聞は都新聞、それから雑誌のクラシックやヴォーグを読みます。いや読むのではなく、中の写真を、——主に洋服の意匠や流行を、——一枚々々丁寧に眺めています。その部屋は東と南が開いて、ヴェランダの下に直ぐ本牧の海を控え、朝は早くから明るくなります。ナオミの

寢台は、日本間ならば二十畳も敷けるくらいな、広い室^{へや}の中央に据えてあるのですが、それも普通の安い寢台ではありません。或^ある東京の大使館から売り物に出た、天蓋^{てんがい}の附いた、白い、紗^{しゃ}のような帳^{とばり}の垂^たれている寢台で、これを買ってから、ナオミは一層寢心地がよいのか、前よりもなお床離れが悪くなりました。

彼女は顔を洗う前に、寢床で紅茶とミルクを飲みます。その間にアマが風呂場^{ふろば}の用意をします。彼女は起きて、真つ先に風呂へ這入り、湯上りの体を又暫^{しばら}く横たえながら、マツサージをさせます。それから髪を結い、爪^{つめ}を研^{みが}ぎ、七つ道具と云いますが中々七つどころではない、何十種とある薬や器具で顔じゅうをいじくり廻し、着物を着るのにあれかこれかと迷った上で、食堂へ出るのが大概一時半になります。

午飯^{ひる}をたべてしまつてから、晩まで殆ど用はありません。晩にはお客に呼ばれるか、或^{ある}は呼ぶか、それでなければホテルへダンスに出かけるか、何かしないことはないのですから、その時分になると、彼女はもう一度お化粧をし、着物を取り換えます。夜会がある時は殊^{こと}に大變で、風呂場へ行つて、アマに手伝わせて、体じゅうへお白粉^{しろい}を塗ります。

ナオミの友達をよく変りました。浜田や熊谷はあれからふツつり出入りをしなくなつてしまつて、一と頃は例のマツカネルがお氣に入りのようでしたが、間もなく彼に代つた者は、

デュガンと云う男でした。デュガンの次には、ユスタスと云う友達が出来ました。このユスタスと云う男は、マツカネル以上に不愉快な奴で、ナオミの御機嫌を取ることが実に上手で、一度私は、腹立ち紛れに、舞ぶとう踏か会の時此奴こいつを打ぶん殴なぐったことがあります。すると大変な騒さわぎになつて、ナオミはユスタスの加勢をして「氣違い！」と云つて私のしを罵ののしる。私はいよいよ猛たけり狂くるつて、ユスタスを追ひ廻めぐす。みんなが私を抱かき止めて「ジョージ！ ジョージ！」と大声で叫こゑぶ。——私の名前は讓治ですが、西洋人はGedgeの積りで「ジョージ」「ジョージ」と呼ぶのです。——そんなことから、結局ユスタスは私の家へ来ないようになりましたが、同時に私も、又ナオミから新しい条件を持ち出され、それに服従することになってしまいました。

ユスタスの後にも、第二第三のユスタスが出来たことは勿もちろん論ですが、今では私は、我ながら不思議に思うくらい大人しいものです。人間と云うものは一遍恐ろしい目に会つと、それが強迫観念になつて、いつまでも頭に残つていると見え、私は未いまだに、嘗かつてナオミに逃げられた時の、あの恐ろしい経験けんを忘れることが出来ないのです。「あたしの恐ろしいことが分つたか」と、そう云つた彼女の言葉が、今でも耳にこびり着くいているのです。彼女の浮気と我が儘まとは昔から分つていたことで、その欠点を取つてしまえば彼女の値打ち

もなくなってしまう。浮気な奴だ、我が儘な奴だと思えば思うほど、一層可愛さが増して来て、彼女の罠に陥ってしまう。ですから私は、怒れば尚更自分の負けになることを悟っているのです。

自信がなくなると仕方がないので、目下の私は、英語などでも到底彼女には及びません。実地に付き合っているうちに自然と上達したのでしょうか、夜会の席で婦人や紳士に愛嬌を振りまきながら、彼女がぺらぺらまくし立てるのを聞いていると、何しろ発音は昔から巧かったのですから、変に西洋人臭くって、私には聞きとれないことがよくあります。そうして彼女は、ときどき私を西洋流に「ジョージ」と呼びます。

これで私たち夫婦の記録は終りとします。これを読んで、馬鹿々々しいと思う人は笑って下さい。教訓になると思う人は、いい見せしめにして下さい。私自身は、ナオミに惚れているのですから、どう思われても仕方がありません。

ナオミは今年二十三で私は三十六になります。

青空文庫情報

底本：「痴人の愛」新潮文庫、新潮社

1947（昭和22）年11月10日発行

2003（平成15）年6月10日16刷改版

2011（平成23）年2月10日126刷

初出：「大阪朝日新聞」

1924（大正13）年3月～5月

「女性」

1924（大正13）年11月～1925（大正14）年7月

※底本巻末の細江光氏による注解は省略しました。

入力：daikichi

校正：悠悠自炊

2017年6月25日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

痴人の愛

谷崎潤一郎

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>